

# 折葉坂の 幻燈館・上

折葉坂  
三番地  
總集編



# 概要

---

折葉坂三番地総集編・上巻。

2009年～2015年までに折本やBlog等で発表した短編・掌編作品の中から秘封、阿求&人里、天狗&守矢神社、普通の魔法使いなどを中心に17編21作品を収録。

折葉坂の  
幻燈館上





## 目次

儚月を臨むブルー・マーブル .....	4
鉱石ラヂヲに天狗は奔る .....	16
# 1  幽波放送 .....	16
# 2  鉱石ラヂヲに天狗は奔る .....	26
# 3  錆びたる天地の電波塔 .....	37
# 4  幻想ラジオ倶楽部 .....	46
幻想科学ティータイム .....	54
# 1  秋の夜長の不思議な縁 .....	54
# 2  華胥の国にて夢に餓え .....	73
冥土の旅の一里塚 .....	86
地に満つ光はすべて星 .....	94
捕らぬ狸のアペンディクス .....	100
判読不明のコデックス .....	114
朝起きたらうちの神様がロボでした。 .....	124
夏の蓮の葉商い .....	148
鼠は社に憑りて貴し .....	158
おおぞらをとぶ .....	174
神様のつくりかた .....	206
比翼連理のクウィルペン .....	236
森の魔法使いと山の河童と、 時間を停めた星の琥珀 .....	252
星屑カウンの箒乗り .....	302
くろがねの星乙女 .....	336
老いたる徴と風の分岐 .....	350

## 夢月を臨むブルー・マープル

Here men from the planet earth first set foot upon  
the Moon July 1969 AD.

We came in peace for all mankind.

「西暦1969年7月、我等惑星地球より来たれり。  
全人類の平和を希求してここに来たれり。」

——アポロ11号月着陸船、船体のメッセージ



暦の上でも燕は南に帰り、そろそろ暑さもしのぎや  
すくなるこの季節。講義をサボって静かにそよぐ風を

堪能しながら、薄く汗をかいたグラスにからんと氷が  
揺れるのを眺めるのも、私の中ではひとつの風物詩。

「夢を見たのよ」

いつもの通り学内のレトロ・カフェテリアに向かい  
合わせに座って、ホーキングフレイバーのミルクティ  
ーを前に、メリーはそう切り出した。

私の友人であるマエリベリー・ハーン——通称メリ  
ーが、夢の中で『ここではないどこか』を訪れている  
のは、二人の間ではすでに公知の事実。

物事の結界のほつれを見つけるといふ彼女の異能の  
目が、夢の中ではより幻想的に働いているのではない  
かと私は推測しているのだが、真実は定かではない。

「またいつもの神社？」

「そうじゃないのよ。だからちよつと気になって」

夢の中のメリーの冒険の記録はすでにノート数冊  
分に及んでいて、秘封倶楽部の重要な活動のひとつだ  
った。聞き手としてではあるものの、私もその冒険を  
楽しみにしている。

「なるほど。それでわざわざ講義抜け出してまで会いに来てくれたわけね」

「……もう。蓮子だって人のこと言えないじゃないの」  
小さく膨れてみせるメリー。これがまた実に可愛くて、まあなんというか最近はこの顔が見たくてサークルしてるんじゃないかなあ、と思うときがあったりなかったりするのだ。

……閑話休題。

これまでメリーが夢の中で訪れた事があるのは、確認できる限り幻想郷と呼ばれる場所に限られていた。けれど昨夜メリーが見た夢は、どうもそうではないものだったらしい。

夢の舞台は、深夜の古びた廃線の駅。

一面のススキに囲まれ、時代からも取り残されたようなそこで、メリーがまどろみの中ベンチに腰掛け、来るはずのない列車を待っていた所から始まる。

彼女は、そこで喋るウサギと出会い、話をしたのだそう。

「へえ……確かにちょっと幻想郷っぽくないわね」

「わからないわ。場所がいつもの雰囲気じゃなかったって言うだけで、出てきたのは立って歩いて喋るウサギだもの。十分に幻想的よ」

そう言うのと、メリーは頭の上に広げた手のひらをちよこんと乗せる。ウサギ耳のつもりなのだろう。

それにしても、駅に線路なんて、これまでの夢には見られない要素だ。手帳を開いてメリーの気分をそがない程度にメモをとりつつ、先を促す。

「で？ ウサギってくらいだから、お餅をつく杵は持ってた？」

「いいえ。なんていうのかしら、制服みたいな恰好だったわ。それで懐中時計をこう、首から掛けてて……」

「ルイス・キャロルねえ」

暗黒物質ダークマターのように黒い髪、石榴石ガーネットみたいに赤い眼をして、頭に白くて特徴的な耳をくつつけて。

彼女(?)は、錆びついた時刻表を眺めながらメリーに話しはじめた。

なんでもそのウサギさんは、月の生まれであるのだという。

月にははるかな昔に地上の穢れを厭い、移り住んだ者たちが暮らしていて、彼女もまたそんな月の住人である玉兎タマウの一人だということらしかった。

「それでその子たちはね、月から来た秘密工作部隊の生き残りだって言うのよ。ずっと昔に起きた地上と月の戦争の時に、地上に降りて来たんだって」

「……ふむ。戦争ねえ」

どうも、あまり穏やかではない話のようだ。

「よく知らないけど、人が月に行ったのって、昔のアポロ計画のことでしょう？ 戦争ってこととは違うように思うけど、そういうもののなの？」

言葉を切つて、ミルクティーに口をつけるメリー。

「……ええと、有人飛行ってことなら有名なのはアポロだけだね。他にもあるのよ」

さてどう説明したものか、と私はメモをとっていた手帳に視線を落とした。次のページをめくりながら、

記憶を思い起こす。

「まあ、すごく乱暴に言えば宇宙開発の歴史って、星を標的にしたロケットの射的競争よ。少なくとも単純に、科学的見地と知的興味だけに基づいたプロジェクトじゃなかったはずね。

イデオロギーの対立とか、政治的な思惑とか、そのへんの話をし出すとキリがないけど……誰が少しでも早く、月に近づくか、最初に月にたどり着くか。たくさんさんの国が威信をかけて、そのために邁進してた時代があったの」

“——世界の目から見れば、宇宙での一番乗りはすべてにおいて一番ということだ。宇宙での二番乗りは、何事においても二番手ということなのだ。”

当時、宇宙開発を積極的に推進したある政治家の演説の中にこのような一節がある。その頃の世相を実によく表現した言葉だろう。

「だからアポロの他にも月を目指して行われた計画は山ほどあったわ。失敗したもの、計画だけで実施されなかったもの、そもそも実現不可能だったもの、大小含めればそれこそ星の数ほどね。本気で先に月に着陸した国がそこを征服できるって思ってた人も、決して少なくはなかったみたい」

それまでお互いに向け合っていたミサイルを、ロケットと名前を変えて空に向けた。20世紀後半の宇宙開発はそれだけのことだったのだとも言われている。当時の国家予算の少なくない割合をも占めていた計画費用は、軍事分野への転用を意図して振り分けられたものでもあったのだろう。

「そもそも、月に向けて打ち上げるロケットの名前に、太陽の神様の名前を付けたりするんだもの。侵略の意図がまるっきりなかったとは思えないわ」

「――そうなんだ。本当に戦争だったのね」  
空になったミルクティーのカップをテーブルに戻して、メリーは頷いた。

「で、夢の話だけど」

「ええ。その子たちは、地上の侵略から、月の幻想を守るために戦ったんだって言っていたわ」

「侵略かあ……」

人類として初めて月に降り立ち、偉大で小さな一步を刻んだ宇宙飛行士たちは、月面に彼らの国の旗を立てた。それは確かに、地上から月への領有宣言に見えたのかもしれない。

その旗を見て月に住む者たちは恐怖し、驚愕したそう。

幻想にとつての月は、人間にとつての太陽のようなものであるらしい。神話や伝承に語られる幻想の聖地へ、星条旗を掲げて踏み込んだ地上の人間達に、彼等は徹底抗戦を決意した。

月の都で決戦に向けた準備が進められる一方で、月のウサギたちの中からは精鋭が選ばれ、妨害工作のため地上へと派遣されることになった。

決死隊となった彼女達は、幻想を保つ結界の外へ踏

み出し、帰還する月着陸船にこっそりと潜り込んで地上にやってきたのだそうだ。

「宇宙開発が蓮子の言うとおりのものだったなら、きっと、あの子たちも驚いたでしょうね」

「そうね。地上の代理戦争を月でやってるようなものだもん」

完全なとぼちりりで自分たちの故郷がロケットの的にされ、挙句には無惨に踏み荒らされていたという事実を、彼女達はどう思ったのだろう。

ともかく。地上の国々が一枚岩でないことを知った彼女達は、そこに付け込んでそれぞれの陣営の対立をあり、仲たがいをさせ、秘密工作に暗躍した。有名なアポロ13号の事故をはじめとして、月探査計画にまつわるトラブルのうちの何割かは、彼女達月のウサギの工作員が起したものののだそうだ。

……けれどそんな妨害ものともせず、次々とロケットは打ち上げられた。その頃の月到達計画は、すでに人類の悲願と位置づけられていたから。

人類の侵攻は圧倒的だったという。

次々と飛来する観測衛星、一年と開けずに降下する着陸船、月の砂漠を疾走する月面車。人類の『科学の進歩』が踏み荒らした月からは幻想が失われ、月の住人達はほとんど月の裏側に追いやられていった……らしい。

月を目指す宇宙開発は、国と国との代理戦争であっただけでなく、科学と幻想の戦争でもあったということだろう。

アポロ計画で人類は宇宙人と巡り合うことはなかったが、もし月面で彼等と遭遇することになっていたら、後年の歴史にはどう記されただろうか。

「……確かに、怖がられても嫌われても仕方ないのかしらね」

なんとも微妙な気分のため息をつく私に、メリーは小さく首を振る。

「そうじゃないのよ蓮子。その子たちが本当に恐れたのは、もっと別のことなの」

「別のって、どういうこと？」

「……その子たちは、月がなくなってしまうと思ったらしいの」

意味が分からず、メリーの言葉に瞬きする私。

「月が？」

「人間が、月を残らず地上に持ち帰ってしまうんじゃないかって、恐れていたのよ」

長い耳を夜空に向けて精一杯伸ばし、赤い眼を涙に濡らし、空に輝く月を見上げて。夢の中で、月のウサギはメリーにそう語った。

月を、我が物に。

月の住人たちは、人間達が比喩抜きでそうしようとしているのではないかと危惧していたらしい。

アポロが地上に持ち帰った月の石は、6回の着陸で総計およそ400 kg 弱。他にも各国が無人探査船を含む月探査計画を実行し、月の砂を持ち帰ることに成功している。

月面車を走らせ、研究のために地面を削り岩を砕い

て持ち帰るその姿を見て、月のウサギたちは震え上がった。傲慢で強欲な地上人たちは、やがて何十、何百基というロケットで大編隊を組んでやってきて、月を粉々に砕いて地上に持ち帰ってしまうのだろうと。

「……それは、なんとも壮大ね。できるものならジャイアントインパクト以来の大事業じゃない」

38万4000キロを隔てた四十億年越しの懐旧。年毎に3.8センチ遠ざかる月までの距離を、地上人は必死に繋ぎ留めんと焦がれているのだ――。

……うん。その発想は、どうしようもなく幻想的だ。

「ねえ蓮子。アポロ計画ってたしか途中で終わってるのよね。いつ中止になったの？」

「公式には1972年12月。もともとあった計画のうち、3回の月着陸ロケットが発射されなかったわ」「なら、あの子たちの努力は無駄じゃなかったのね」「どうかなあ……確かに月の有人探査は中止になりましたけど。実際はその後宇宙開発って凍結されてたわけじゃないしね」

それで果たして、実を結んだといえるのか。

いずれにせよ。それと前後して世界構造の変動と共に宇宙開発は大きく減退し、以後数十年にわたって、月は再び未踏の地となる。

「結局、アポロ計画で月を歩いた人類は都合6回の着陸船で12人だけ。大山鳴動して鼠一匹……にしちゃちよっと大きすぎるけど、月のウサギにしてみたらいい迷惑だったのかもね」

いつの間にか氷のなくなっていたアイスコーヒーを、一息に啜る。空になったグラスをテーブルの脇に追いやって、私はメリーに先を促した。

「で、その子ってのはなんでメリーの夢の中に出てきたわけ？ 歴史の補講でもしに来てくれたのかしら」

「違うわよ。だったら蓮子のほうに行って貰うようにお願いしてるもの」

「……そんな魅力なお話なら歓迎したいけどね」

思わず苦笑。

いやまあ、物理屋にとって興味のあるところ以外の

歴史年表などはあまり意味がない……というのが個人的な心情ではあるけれど。

「その子ね、お友達を探してるって言っていたの。同じように月から地上にやってきて、離れ離れになった仲間たちに、一目でもいいから逢いたいって」

「……そっか。寂しいと死んじゃうのは月のウサギさんもおんなじか」

「そうね、蓮子みたい」

「っ、わ、私はそんなことないわよ!？」

まったくの不意打ちで微笑みかけられ、私は椅子を蹴飛ばして立ち上がってしまう。慌てて否定したもののどうにも締まらず、さらにメリーの笑いを誘う羽目になった。

ばつの悪さに帽子を引き下げ、メリーから視線を遮って空っぽのストローをくわえる。

「そうじゃないのよ蓮子。もっと、……切実だったの」  
帽子で塞がれた真つ暗な視界の向こうから、硬い、メリーの声音が響く。



「月のウサギはね、確かには月に住んではいるけど、普通の方法では私達の住んでる地上には降りられないそうなの。幻想で繋がれた場所同士なら、月の——羽衣っていうのかしら？　そういう宝物を使つて行き来ができるそうんだけど、そこに私達はいないでしよう？」

だから、ロケットを飛ばす地上人のところにやってくるには、同じようにロケットに乗つてやってくるしかなかったそうよ。……でも、それからずっと、人類は月に人を乗せたロケットを飛ばさなかったから」

「ああ——」

そうか。

単純な、ことだ。

彼女達は、『決死隊』として、地上にやってきた。それは要するに、もう故郷の月に戻つてこれないという意味だったわけだ。

「その子たちが地上に降りてから、もう何十年も経つていて、仲間たちとはもう連絡も取れないんだって。

探してるっていう友達の子も、とっても寂しがりで、怖がりのウサギだったらしいわ。私と話したウサギさんはその子と一緒に地上に降りるはずだったそうなんだけど、その友達の子は作戦の前に逃げ出しちゃったらしいの。それ以来、その子はずっと行方不明だそうよ。

きつと今もその事で自分を責めてるだろうから、気にしないでいいって言つてあげたいって。……月に帰れなくてもいいから、せめてもう一度会いたいって、そう言っていたわ」

月の六倍の重力に引かれて自由に空に飛び上がることもできず、耳を精一杯そばだてて、ノイズだらけの通信の中に、月から響く仲間の声を探し。

38万キロの距離を隔てた故郷を見上げ、目を真っ赤に泣き腫らして、懸命に、何度も何度もウサギは跳ねる。

逢いたい、逢いたい、帰りたい。

そう訴え続ける彼女の涙を最後に——

「……そこで、目が覚めたの」

「なるほど、ね」

なんとなくかき上げた前髪をくしゃくしゃといじり、吐息。

中途のままのメモを放って、私は手帳を閉じた。メリーの夢はいろいろと興味深いのでこうして記録を取っているが、今日の話はやはりいつもの夢とは毛色が違う。

「なんていうか、重いわね」

「ええ……」

わざわざ講義まですっぽかして、メリーが私を呼び出した理由も、きっとこれだ。

自分たちの故郷を守るために、地上に取り残された月のウサギ。——そこにメリーが呼ばれたのは、せめてもの抗議だったのかもしれない。

「……ありがとう蓮子。聞いてくれて」

「ん、そんな、お礼言われることじゃないわよ。聞かせてくれて言ってるの私の方だしさ」

メリーの表情が少し和らいだので、私も安堵しつつ小さく深呼吸。

「月のウサギか……」

メリーが夢の中で喋るウサギと出会うのはこれが初めてではない。確か前にも、迷路のような竹林で、同じように白兎と追いかけたり追いかけられたりしたことがあったはずだ。

「ひょっとして、その時の関係なのかもね」

「そうね。……もう少し詳しいことが分かれば、教えてあげられたのかもしれないわ」

メリーは随分気落ちしているようだった。

「ねえ蓮子。あの子たちのしたことって、やっぱり無駄だったのかしら」

「……………」

アポロ計画が終了し、月面の開発こそ一度は途切れたものの、天の星々を観測する活動は地道に続いている。

そして今世紀初頭には操作重力子の発見により、お

よそ四〇年を経て人類は再び月の地を踏んだのである。現在では民間の宇宙旅行も実現しており、もはや月は未踏の場所ではない。

彼女達が必死に守ろうとした月の幻想は、泡沫のように失われてしまったのだろうか。

「……私はそうは思わないわ」

何となくではあるけれど、妙な確信があった。

ゆっくりと首を振り、私は自分の眼を指差す。

「だってメリー、私達には常識でしょ？」

「え？」

星を見て現在の時刻が、月を見て現在の位置がわかる私の眼。

それは、月なくして存在しえない異能だ。

「月の幻想って、そんなにヤワじゃなかったんじゃないかしら。月のウサギたちの努力をひっくり返して、ね」

「地球は青かった。見回してみても神はいない。」

——世界で初めて重力の支配を脱して、宇宙を飛んだ宇宙飛行士はそんな言葉を残したとも言われているけれど。

21世紀初頭からの月探査計画の再燃によって、月の裏側に天使の落書きがない、ということまでも暴露かれてなお、月は多くの人を魅了した。

「事実、宇宙飛行士の中には結構な割合で、メリーみたいに夢見がちになっちゃった人もいるみたいなのよ。当時の人たちにしてみれば、宇宙を飛ぶなんてすごいことだし、月に立つて地球を見上げるのは天地がひっくり返るようなことだったのかもね」

「……もう、わたしは別にそんなんじゃないわよ」

ちよつと膨れるメリー。ああ可愛いなあ。

「でも宇宙飛行士なんて、科学の最先端の極致みたいな職業よ？ オカルトとは一番縁の遠い人のはずなのに、公式の通信記録にも結構残ってるのよ、胡散臭い報告がね。」

宇宙人を見たとか、UFOと会ったとか、そういう

のならまあ分からなくもないんだけどね。

……全世界中継されてる通信でサンタクロースを見  
たって報告をしたり、地球に戻ってからノアの箱舟を  
探しに行っちゃったりした人までいるのよね」

古来、月は人を狂わせるとも言う。21世紀まで残  
り続けた月狂条例なんて言葉を引き合いに出すまでも  
なく、その幻想は生き残っていた。

ならば人類史上最も月に近づいた12人の中には、  
その魔力にあてられてしまった人も少なくないのかも  
しれない。

「そのせいかどうか分からないけど、前世紀のおしま  
いには人類が月に立ったことを本気で信じていない人  
たちもいたみたいね」

「そうなの？」

「ええ。アポロが月に着いてから何十年も経つのに、  
誰も月に行こうとしなかったから。人類の月到達は捏  
造だ、陰謀だって説があったみたい。著名な学者の中  
にも、結構本気で支持してる人がいたそうよ。」

……ひょっとしたら、それも月を幻想のものにして  
おきたいっていう、月のウサギのささやかな抵抗運動  
だったのかも」

そういう意味では、月の地を踏んだ12人は、まさ  
しく幻想となってしまったのだ。

月は妖怪、魔の象徴でもある。

私の眼のような力が、いまだに生き残っていること  
を考え合わせれば、人間の月侵略は阻止されたのだと  
いつてもいいのかも知れない。

「メリー、なんだったら見に行ってみましょうか」

「なにを？」

「月を、よ。うちの大学にもあるらしいじゃない、ア  
ポロが持つてきた月の砂。あなたの眼で境界が見える  
かもしれないわ」

「もう、蓮子ったら……それで今夜、また故郷を返し  
て、なんて泣きつかれたらどうするの？」

呆れ顔でそう言いながらも、メリーも満更ではなさ  
そうだった。

「よし、決まり。今日の秘封倶楽部の活動は、38万  
キロの彼方、月世界の境界探索よ！」

帽子をかぶり直し、椅子を引いて席を立つ私に、メ  
リーも立ち上がる。

ふと見上げた秋の空には、右半分の欠けた白い月が  
浮かんでいた。

(了)

## 夢月を臨むブルー・マーブル

初出: 月の宴 2 (2009/9/22)

「月の砂漠にはるばると-Antiquity mechanism-」収録

改稿: 科学世紀のカフェテラス (2011/2/20)

「ケイヴァーリットの多世界解釈」収録

珍しくビジュアル先行で作ったお話です。永夜抄オンラインへの参加のため、月をテーマにした短編集に書いた秘封倶楽部と月の兎の話。アポロに興味を持ったきっかけでもあります。このあたりから、秘封倶楽部の活動と幻想郷での日常を重ねるスタイルの基礎が見えるような。

作中に登場する玉兎の名前はコヨミといいまして、山下いくと先生の漫画「ダークウィスパー」に登場するの同名の少女（の、さらに原型となる月のウサギ）がモデルです。初版では彼女がメリーと喋るシーンがあったんですが、メリーの回想シーンが冗長になりすぎると思ってカットしました。

## 鉱石ラヂヲに天狗は奔る

### #1 幽波放送

それは前触れもなく始まったことだった。降り続く雪が麓までも覆い尽くした二月の初め。さりさりと、木屑を削るようなノイズが突如部屋の隅から響いたかと思うと、

『——よお、こちら GOCK,J.Walk. 悪ガキども、今日も聴いてるか?』

軽妙な音楽と共に飛び出した見知らぬ声。しかも草木も眠る丑三つ時という時刻である。すわ泥棒か幽霊か、枕元にご先祖でも総立ちで宴会でもしているのかと言わんばかり。

これですべて落ちて着いている事ができようか。……いや、使用人達を叩き起こしたのは決して驚いたからではなく、あくまでこの学術的に興味深い事実を一刻も早く検証したかったからに他ならないのである。断じてそれ以外の理由などない。ないっらない。『今日も放送を始めよう。馬鹿馬鹿しい毎日におさらばするために』

落ち着いて部屋を見回してみれば、声の元は部屋の片隅で埃を被っていたラジオの筐体だった。

このラジオ、もとはと言えば魔法の森の古道具屋で買ったものである。

数年前に人里での大々的に放送が企画された折に、興味を覚えた私が用意したものだったのだが、鳴り物入りで発表された第1回の試験放送が失敗に終わって以来、すっかり企画自体が立ち消えとなり、そのまま放置されていたものである。

邪魔になるし使い道もないしで処分も何度か考えはしたのだが、なんとなく捨てる気にもなれず、購入時

の価格がそこそこ高価だったことも手伝って、机の隅に放りっぱなしになっていたものであった。

『さて、次の曲は——』

一体どこの誰が話しているのだろうか、聞いたこともない曲に乗せて次々と語られる言葉は、万事がそんな調子。

わずかに受信状況が悪いのか、砂を擦るようなノイズの奥に聞こえる声は、恐らくは女性のものであることが分かった。耳慣れない単語や聞いたこともない表現も混じり、一体それが誰のものであるのかは判然としない。

しかし、講談でもするような語りの妙でしゃべり続けるその内容は、取るに足らないことをあれこれと樂しげに繰り返していた。

ラジオの向こうの語り手に、いつしか時を忘れて聞き入ってしまった——気付けば空が白み始めていたのだった。

「くあ……ふ」

欠伸とともに眠気を噛み殺し、濃い目の珈琲が舌を焦がすのを感じつつ、ゆっくりと伸びを一つ。

思わぬところで徹夜なんてしてしまった。

……さて、まだ買って五年と経たない品に喪が付くのも奇妙なこと。見たところまだ十年と使われていない品であり、道具屋の店主がそのあたりを誤魔化したとも考えにくい。

粗末に扱った覚えもないが触れもせずに動くとなれば、いよいよ阿礼乙女たる私にも、九代目を重ねて求聞時を超え靈感でも目覚めたかと一頻り考えてはみたものの、どうもそうした気配ではなく。

さらにノイズの中に聴こえて来た陽気な楽曲のリズムは、怪談のそれとはかけ離れたものであった。

寝不足の頭では上手く思考もまとまらず、どうにも得心がいかにぬま、欠伸混じりで出された朝餉を無理やり口に押し込んで、私は眠気覚ましに朝の里を散歩することにした。

陽は出ていてもまだシンと冷え込む辻を抜け、ブー

ツの底で薄く積もった新しい雪を踏んであれこれと首を捻りつつ歩いてみると、道のあちこちから、興奮気味に聞こえる噂話。

——なんと、すでに里中でこのラジオの怪異は噂になっていたのである。

私と同じように、以前の試験放送開始に先駆けてラジオを手に入れていた好事家はそれなりに居たらしい。埃を被っていた筐体たちが、物置の奥で、質蔵の中で、棚の隅で、昨夜一斉に音楽を奏で語り出したらしい。

もともと野良仕事もなく、精々が雪かき程度でしか外に出ることもなくなる冬の最中だ。夜中、独りで語り出すラジオの噂はすぐに広まったようだった。

行きつけのカフェ、幻燈館でもその噂で持ち切りだった。店の主人もラジオを手に入れていた一人であり、昨晩なれなれしく喋り出した受信機に腰を抜かさんばかりだったと言う。店はちよつとした混雑になっており、埃を落とされたばかりのラジオの筐体を囲んで、懐かしく試験放送当時の思い出話に花を咲かせる人々

の姿もあった。

そして——その日の夜。まさかまさかと思いながらも、筐体を取り囲み、固唾を飲んで見守る皆の前で、ラジオは当たり前のように再び喋り出したのである。

次の日の夜も、その次の日の夜も。同じように真夜中の時刻の丑三つ時。ラジオは独りでに話し出すようになった。

当初こそおどろおどろしい装飾を加えられて流れた噂は、すぐに娯楽性の高いものへと変わっていった。

得体の知れぬ誰かのものとは言え、一旦それが無害だと分かってしまったえば、娯楽に飢えた里の人々にとつては格好の話題なのだった。

中には一見——いや、一聞の価値はあると詰めかけるものまで出る始末。時ならぬ冬の百物語というわけだ。

とは言え良いことばかりではない。なにしろ時刻が真夜中、草木も眠る午前二時過ぎである。農閑期とは言え里中には寝不足と朝寝坊が続出し、目覚ましにと



珈琲が良く売れたため、私の好きな銘柄が切れるという事態にもなった。

そしてまた、ラジオなど早々各家に備えられている訳でもなく、毎日深夜に雪の降りしきる中、質屋や道具屋などは軒先に集まってくる彼らを客としても扱いかね、さりとて野次馬と追いつくこともできず、時ならぬ騒ぎに店主は要らぬ苦勞を強いられたという。

幻燈館を始め、ラジオを持っていたカフェでは夜に店を開けることにし、昼間は休むという臨時營業を開始した。

時ならぬ繁盛を見せたのは他でもない、魔法の森の境界に店を構える古道具屋、香霖堂。店主の森近氏は普段閑古鳥ばかりの店に詰めかける客人たちに、ラジオの入荷がしばらくないことを何遍も説明する羽目になったらしい。元々、店主が気まぐれで集めた品を並べているだけの、品揃えなどあつて無きがごとの古道具屋だ、さぞ苦勞したに違いない。

私の部屋も例外なく使用人たちの溜まり場となつて

しまったが、これまた頭痛の種であつた。この異変を記録するためには放送を聞いていなければならぬのだが、その間にも使用人たちがひっきりなしに様子を伺いに来る。じつに気が散つて仕方がない。

放送の数時間前からそわそわと廊下前や隣の部屋に集まり始める使用人たちに、仮眠を取っておくにも不自由し、すっかり寝不足が常となつてしまった。

仕方なしに、私はもう一台のラジオを買い求める羽目になつたのである。



かくして人里の話題をかっさらつた幽霊放送であるが、それがいったい誰の手によるものであるかと言うのは目下、全くの不明であつた。

ラジオというからにはなにがしかの放送を受信していることになる。が、それはつまり、どこかにこの放送を流している者がいるということなのだ。だがそん

な本格的な設備は人里はおろか、幻想郷のどこにあるのかも判然としない。

妖怪の山あたりでは河童や天狗がそうした技術を完成させている可能性はある。以前、地底探検に赴いた巫女と魔法使いが、通信のようなものを可能にした技術を持っていたのは確認するまでもなく事実として記録されている。

だが、今回に限ってはどうもその線も薄いようだ。それとなく探りを入れてみたものの、妖怪たちが動いている様子は確認できず、神様たちの関与も窺えない。

買出しに訪れた紅魔館の侍従長に確認してみたが、門番に大荷物を持たせた彼女はそもそも、ラジオの存在を認識していなかった。蒐集癖で知られる森の魔法使いも同様で、端末は持っているらしいが、彼女もラジオは箒に引っかけた飛ぶものであると思っただけだった。

一番怪しいと目していた守矢の神様たちに至っては、

聞くなりどこで放送しているのか、何時からなのかを喜色満面で飛び付いてくる始末。山の上は余程娯楽に欠けているのだろうと推測できた。

調べる限り、この放送の及ぶ範囲はどうも人里に限定されているようであった。

しかし、それを可能にできるような相手というのがほとんど思いつかない。心当たりがないとまでは言わないが、そうしたことが可能な相手に限って、こんな手間暇をかけたことをしないだろうという確信もあった。

また、かつての試験放送に使われるはずだったラジオ放送局の機材も、事故の後処理に売り払われたり撤去されたりで散逸し、残っている機器もロクに整備されておらず、まともに機能するものではないらしい。

では一体、夜毎に響くこの声の主は誰なのだろう？ ラジオが日常へ受け入れられていくにつれ、皆の興味はそこへと移っていったのだった。



「……はい、毎度ありがとうございます……って、え？  
違うの？ 薬じゃなくて？」

私が、里の往来で薬売りをしていた永遠亭の兎を捕  
まえたのはそんな折であった。

玉兎である彼女は、万物の波長を操り、見聞きでき  
る能力を持つという。幻想郷縁起の取材でそれは把握  
できていた。

彼女であれば夜毎、放送に用いられている電波を受  
信し、直接『視る』こともできるのではないかと、そ  
う考えたわけだ。

誰かが解らないなら、どこからかを突き止める方が  
早いだろうという訳である。

「成程。いいわ、いつてらっしゃい、ウドンゲ」

「そうそう。たまには役に立ってくるといいよ、鈴仙  
いい加減うちらも影薄くなつてばかりも困るからね」

「そ、そんなあつさり……」

我ながらなかなか良い発想だと思いつつ、彼女と彼  
女の師匠とにあれこれと交渉をして、その夜、彼女に  
は私の部屋でラジオの放送を聞いてもらう運びとなつ  
た。

人見知りらしいという彼女、一緒に過ごしてみると  
それはそれでなかなか興味深い経歴を持つており、第  
二次月面戦争にまつわる話も 聴けたのだが——それ  
は今回あまり関係がない。

かくして深夜。つい珈琲を飲み過ぎて3回も厠に立  
つはめになりながら、ついに時刻はその時を迎えた。  
いつものように、ノイズ混じりのラジオから聞き慣れ  
た語り口が聞こえてくる。息を飲み、私は期待を込め  
て彼女にこの電波の波長を見てもらったのだが——  
「ねえ、そんなもの、視えないけど？」

首を傾げて曰く、そんな返答。

彼女曰く。このラジオに流れ込んでいる特有の波長  
などというものは見当たらないらしい。玉兎の沽券に  
かけて、彼女はそれを断言した。つまり、これは電波

を經由した正しい放送ではない、ということになる。

成程、そうと判明したのは、確かに一つの成果ではある。

しかし、それですます話はややこしくなつてしまつたのだ。

ではいったい全体、毎夜聞こえてくるこの声は誰のものであり、電波を通じた放送をせずに、どうしてここにその声が届くというのだろうか？

私があればこれと頭を悩ませている間にも、夜毎の放送は続いていた。

毎日何時間と放送を聞いていれば、顔の見えない相手とて、次第に親密感もわく。

どうも、彼女はたった一人でこの放送を続けているらしいということは、徐々に分かつてきた。語り続けるラジオが直接それを口にした訳ではないが、些細な口調の変化、言い回し、それらが端々に、言葉の向この孤独を伝えている。

決して寂寥感を感じさせぬことのない、軽妙な語り

口——けれどそれは、何か、寄る辺を、縁よすがを求める、切なる訴えのように聞こえるのだ。

いつしか、私は受信機の嬌態の向こうに、語り手の姿を思い描くようになっていた。

聞くだけの私に何ができるといふ訳でもない。けれど、彼女をこのままにしておいてはいけないという強い思いが、芽生えているのを自覚しなければならなかつた。



転機は突然、訪れた。

間もなく2月も過ぎようという季節、すっかり習慣になつてしまつた朝寝坊のせいで、今日も朝餉を食べ損ね、空きつ腹をかかえて街中をあてもなく歩いてきた寒い朝のこと。

「ああ、久しいね、御阿礼の」

不意に背中から呼び止められ、振り向いて見れば。

茶店の軒先に、見慣れた赤毛の死神が分厚い外套を羽織り陣取っていた。

商売道具らしい大鎌をそこらに放り出して、椅子に堂々と腰かけて蒸し饅頭などにかぶり付いている。お茶のお代わりまで申し出る様は、小休憩と呼べそうもない、なかなか根つこの生えた様子である。街中でひょっこり彼女と出くわすというのは、それなりに肝の冷えるものであるのだが、当の彼女はそんな事お構いなしである。

「どしたい、こんな寒い中で……ん？ あたいかい？ あはは。最近じゃ近場で休憩してるとすぐに連れ戻されてねえ。流石にこの辺まで出てくりゃ、映姫さまもそうそう追っかけて来ないだろうって寸法さ」

どうあつてもサボっていれば最終的には上司に露呈し、お説教になるだろうことはそもそも考えの埒外であるらしい。

彼女が死神となる以前の出自は定かではないが、なるほど小野塚サボタージュの毒屋の名に恥じない納得の怠慢ぶりであ

る。

「ま、奢るからちよつと寄ってつたらいいよ、おばちゃん、饅頭追加で」

実に手際よく私をサボりの共犯に巻き込む。職務放棄の後ろめたさすら感じさせない堂に入った暢気さについてみることにした。

するとこの死神小町、きゆうにそわそわしだしたかと思うと、まだ半分は残っていた饅頭を無理やり口の中に押し込み始める。

饅頭を喉に詰まらせ、噎せた彼女にお茶を飲ませ、落ち着かせてみれば。

「まいったねえ……」

実にバツの悪そうな顔。どうやら当たりを引いたらしい。



死神が解っていることと言えば、人の寿命と迷える魂の在り処くらいである。

上司には秘密にしておいておくれよ、と念を押す彼女を説き伏せ、一体どうということかと問う私に、彼女は頬を掻きつつ教えてくれた。

「いやあ……簡単なことなのさ。勝手に鳴りだす楽器なんて言えば、騒霊と相場が決まってるじゃないか」

——つまりは。こういうことらしい。

無縁塚におちてきた品物の多くは基本的に外から迷い込んできた人間の所有物である。彼等の中にはそのまま命を落とす者も居り、そこに残る者たちの魂を運ぶのも死神の役目であるそう。

そして彼女、どうやら森近氏に頼まれて、無縁塚で見つけた品物に目星をつけ、古道具屋まで運ぶということをしていたらしい。

考えてみれば、かの古道具屋が取り扱っているものの大半は、森近氏があちこちを歩いて拾い集めてきた

ものである。氏素性のはっきりしないものが多々混じっている——というかそれらが大半であるのは、少し考えれば自明のことであり

「いやまあ、前に見つけたのが、その無縁塚のあたりに落ちてた仏サンなんだけどね、誘魂灯を持つてくるのを忘れててねえ、船着き場に来る前に逃げ出しちまったんだよ」

おそらくサボっていて気付かなかったというのが本当のところなのだろうけれど、余計な口は出さずにおく。

どうもこのラジオの向こうの彼、喋り足りなくて、亡霊——いや、騒霊になって、ラジオにとり憑いたと、まあ、そんなことらしい。

事情を聞いて、私は騒ぎの原因となった死神を連れ、自室へと急ぐことにした。私が死神を連れ帰ったことでヤエさんを始めた使用人たちは腰を抜き、ちよつとした騒ぎになったりもしたが——それはまあ別の話。

ラジオに向かった死神が、懷から小さな硝子の鈴を出して凜と鳴らす。すると、ラジオは一度震えて、観念したように喋り始めたのである。

彼の語った正体は、概ね死神小町の説明通りであった。かくして一件落着、夜毎の幽霊ラジオ放送は終焉を迎え、迷える幽霊は死神に連れられ、地獄の裁きを受け、冥界へと赴くこととなる――はず、だったのだが。

『今日もくだらない放送を始めよう、この世におさらばするために――』

どういう具合か、私の持っていたラジオだけは、冥界の彼と波長が合ってしまったらしい。

毎夜、深夜になると語り出すラジオは、今日も私の机の上から、冥界からのホットな話題を提供してくれていた

## #2 鉾石ラヂヲに天狗は奔る

今年の春の事になる。

長らく続いた幻想郷縁起改版の校正作業にもようやく目途が付き、あとは印刷を残すのみとなった三月某日。久方ぶりののんびりとした朝を迎えた私が穏やかな陽射しに暖をとりながら寝そべって午後の読書を楽しんでいた私の元に、一陣の風が吹いた。

突如現れた来訪者は、庭にびようと旋風が渦巻かせ、突風とともに障子を蹴散らして部屋の中へと飛び込んできた。

観音開きのように吹き飛んだ障子から慌てて湯呑みと茶菓子を避難させる私の前で、折角揃えていた幻想郷縁起改版の原稿が紙吹雪のように舞い、部屋中へと散乱してゆく。

旋風に黒い羽根を散らし現れたのは、一人の鴉天狗。

「阿求さんっ!!」

細い肩を怒らせ、彼女は背中の黒翼もそのままに私の肩を掴むように詰め寄ってくる。鼻筋の通った整った顔が近づき、深山の緑を思わせる穏やかな香りがふと鼻を掠めた。

里に最も近い天狗、射命丸文。

私とは旧知の間柄にして、同じ文筆をむねとするものとして少なからぬ共感のある友人の一人である。幻想郷最速を標榜する彼女が、天狗の中でも特に人里に近く、取材と称して自宅を訪れては、お茶などを催促することは珍しくはないが、今日の来訪は些か忙しくなくも騒々しすぎた。

「これは一体どういうことですか!?!」

「どう、と申されましても」

口角泡を飛ばさんばかりのその剣幕に、顔に張り付いた原稿の一枚を剥がしつつ応じる。

長じた妖怪の常として、いつも余裕を保ち、時に皮肉めいた言い回しを好む彼女には珍しく、冷静を欠い



ているようだった。背中の黒翼も仕舞い忘れたままだ。

「ご一緒にお茶でも、という雰囲気ではありませんね」

「惚けないでください、これのことですっ!!」

ぐつと突き出された手の平には、飴玉を包むような小さな油紙。その中には黄金色に輝く、小さな立方体が覗いていた。

一辺が一糎程の金属塊を二握り、一〇個ばかり握り締めて、文さんはきりと整った眉を吊り上げる。

「阿求さん、まさかあなたが知らないとは言わせませんよ! どういうことか説明していただけませんか!」

「はあ」

……ひとまず、概ねの事情は理解できた。

とは言え、滅多に見られない鴉天狗の取り乱し方にとりあえず私は空とぼけて彼女の差し出す金属片を覗き込み、はたと首をかしげて見せる

「……ふむ、文さんも鴉天狗だけに光りモノには目がないんでしょうか? 千年以上も生きていても、やは

り妖怪変化の性は業が深いということでしょうか。これは知りませんでしたね」

「そんなことで誤魔化そうったってそうはいきませんからね!? 何の裏付けもなしに私がここまで来るとでも思ってるんですか!?!」

文さんはさらに懷から取り出した数枚のチラシを、机の上にどばんと叩きつける。

——『幻想郷ラヂヲ放送局』近日開局!

色鮮やかなインクの匂いとともに、紙面にはそんな文字が踊っていた。

「なんなんですかこれは一体!」

文々。新聞特務記者、射命丸文の悲鳴が、邸内に響き渡った。



「一体どこの誰がこんな極悪非道なことを企んでいるんです!!」

「極悪非道で」

「極悪非道に決まってるでしょう!!」

正直に答えたらそのまま取って食らわんばかりの剣幕で、彼女は叫び——ばんばんと机を叩く。

まあ、いつかこうなるだろうと危惧していた事ではあり、概ね予想通りの展開といえた。

「悠長な事を言っている場合ですか!? これは幻想郷の文化を脅かす一大事ですよ?! まさか阿求さんがそれを黙って見過ごそうなんて、人里の責任役としてその態度を問われます!」

「——ちよつと落ち着いてください文さん」

顔に唾が飛びそうな程の剣幕でまくしたてる文さん。いつの間にか襖に背中が触れるくらいまで詰め寄られていた。息のかかるほどに近くなる彼女の顔を押しつけ、その場に座らせる。

土埃で割と台無しになった茶菓子の皿を（珍しい洋

風のケーキだったのだが、残念、心惜しくも卓の上に戻し、女中を呼び付けてお茶の用意を申しつける。

まだ何か言いたそうにしていた文さんも、さすがに年経た妖怪として余裕と礼儀を欠いていたことに気付いたか、ふうと深呼吸をして胸の中の重い空気を吐き出したようだった。

「……失礼、取り乱しました。お恥ずかしいところを」  
確かに滅多に見れない慌てようであつたと思う。

今なお、上辺は冷静を取り戻したように装っているが、なお彼女の背中では仕舞いきれていない羽根の先端がぱたぱたと忙しない。妖怪というのも大変だなあとまるきり他人事で思いながら、程なく用意された栗饅頭と熱い洪茶の前に、私は改めて卓に向う。

「少々要領を得ませんが、大体分かりました。お話を総合するに、文さんはこの」

チラシと、その上に並べられた金属塊——ラジオの受信端末に用いる黄鉄鉱の鉱石を指差し、

「ラジオ放送が人里に普及することで、新聞の売り上

げに影響が出ることを危惧している？」

「そ、そんな事は言っていないせん」

きっぱりと言い切り、形の良い顎を見せるようにふいと顔をそむける文さんだが、胸の内の焦躁は面白いくらいに見て取れた。基本、いつも人を食った態度の（性的な意味ではなく）文さんにしては珍しい。

山の妖怪が河童の技術による活版印刷を始めとした（別に洒落ではない）高度な技術を有し、鴉天狗がこぞって報道に身をやつし、新聞を作っては購読者の数で成績を競うなか、多くの天狗たちの新聞が妖怪の山社会の妖怪達だけを対象にしているのに対し、文さんの文々。新聞は人里でも配られる数少ない新聞だ。

記事の程度はどうあれ、執拗な勧誘に悪感情を抱いている人間ばかりではなく、月に二、三度の割合で配布される新聞をそれなりに楽しみにしている者もいるのだ。表立って口にする、もともと高い天狗の鼻が尚更高くなるので面と向かってそんな事をするものはいないのだが。

「ええ、無論ながらそんなものがどう広まろうと私にはまったく関係のないことです。関係のないことでもあります」

二度繰り返してから、文さんはわざとらしく咳払いをした。その上でちらちらとわざとらしくこちらに視線を送ってくる。

「しかしですね阿求さん。貴方もご存じとは思いますが、報道というのは非常に繊細かつ慎重な職務なので。日々、留まることなく変化し続ける情報を扱うことには極めて慎重かつ複雑な判断を要求されるものなのです。時に権力や政争の道具にされることも然り、誤報が原因で事態をより拗れさせる要因となることもあります。一時も休まることなく、幻想郷の在り方すら左右しかねない重要な立場なのですよ？ それを一朝一夕に、こんなにも軽々しく——ラジオだなんて」

まるで親の仇でも見るように（天狗に親がいるのかは鋭意調査中である）、チラシを睨みつけ、ばんとその上に白い手のひらを叩きつける。

「迂闊にこんなものに手を出して、もし何かの間違いがあつたらどうするつもりですか!!」

「ふむ。つまり、心配してくれているということの良いのでしょうか？」

本音が良く透けて見える言い分だったが、文さんはそうですそうですとばかりに勢い込んで頷く。

「まったくその通りです。阿求さんはもう少しご自分の立場を考えて頂きたいのですよ。だいたい、私にも気づかれないようにこっそり河童まで巻き込んで、よくもまあこんな大それたことを……!!」

「……随分とお耳の遅いことで。かなり前から企画は進んでいたのですけどねえ。そう言えば文さん、最近はずっかり地底の妖怪やら妖精戦争やらにご執心だったようですけれど」

「ぐっ……!?」

痛いところを突かれたか、口を噤む幻想郷最速のブン屋。

文さんとしても、ラジオ放送の内容について見落と

していたことには引け目を感じているらしかった。彼女がおもに騒動の種として追いかけているのは妖怪と一部の特殊な人間たちで、人里での事件はあまり見向きもしない傾向がある。

憤っている理由のいくらかは、ただの人間、と思っていた相手にしてやられたことへの苛立ちもあるのだろう。

「それに企むも何も、里の有志が企画したことですよ。最近、いい具合にたくさん部品が仕入れられたそうなので。香霖堂さんにも協力していただきましたが」

「既にそこまで手が回ってるなんて……!!」

ざり、と齒軋りする文さん。

なお、ラジオ局の開設にあたり、特段の緘口令が敷かれていた等ということは勿論ない。現にこうして広告を打っていることから分かる通り、人里では既に話題の最中である。

「見損ないましたよ阿求さん! 仮にも幻想郷のオピニオンリーダーともあろう貴方が、こんな俗悪な放送

に協力しているなんて！」

「オピニオンなんたらは置いておくとして……。一面に下着姿をスッパ抜くどこかの新聞よりは大分健康的だと思えますけどねえ」

「あれは不可抗力ですと前にも説明したでしょう!!

あくまで弾幕の美しさと躍動する少女たちの、かけがえのない一瞬を芸術的観点から切り取っただけのことで、そこにたまたま乙女の清純なる部位を覆う布切れが写り込んでいたことは、記者の意図するところではなく、そう言った側面から判断されるのは誠に遺憾である——」

「一々そういう言い訳してるから胡散臭く思われるんですよ」

「うぐっ」

天狗の常として涼しい顔をして風評をばら撒く割に、結構打たれ弱いところがあるのが文さんの可愛い所だろう（感想は個人なものである）。

「それと、誤解があるようなのであらかじめ言ってお

きますが、私を首謀者のように言われるのは心外です。確かに有志の方々のご協力は頂いていますが、このラジオは人里の皆で企画したものですからね」

「へ？」

それが今回のラジオ放送の目玉でもあるのだった。

ラジオ局の開設にあたって、支援者には稗田の家も名を連ねている。もっとも、そこには霧雨商會を始めとして他の里の有力者も軒並み顔を揃えているのだから、特に私だけを強く責められる理由にはならないはずだ。

「あの不慮の事故以来、長らく活動が続けてきた方たちの努力の帰結なのです」

数年前、河童の協力を得て始まろうとしていた幻想郷初のラジオ放送は、試験放送を目前にして不慮の火災によってアンテナが破損。貴重な機材を小火でダメにしてしまうという失態を犯し、完全に頓挫していた。それを一から作り直したのが、今回企画されている幻想ラジオ放送局なのである。

「しかし、文さんがそこまでムキになると、あのラジオ放送局の小火が天狗の仕業だったというのもあるが、ち与太話ではないのかもしれないね」

「な!? 失敬な!! 濡れ衣ですよ!!」

「ばん、と机を叩いて抗議する文さん。」

実際、根も葉もない風説の類ではあるものの、いまだにラジオ放送が話題になるとそのたびに語られる話でもある。実際にこうしてわざわざ私の元を訪れ、ラジオ放送開局に強い抗議と嫌悪感を示す文さんを見ると、それも決してただの噂の域には留まらないのではないかと思ってしまうのが困ったものだった。

なによりラジオ放送失敗の顛末は何を隠そう文さん自身の手によって、文々。新聞に面白可笑しく滑稽極まりない失敗談として書き立てられ、各地で話題をさらったのが尾を引いているのである。

……逆に言えば、あの新聞が無ければ放送委員会の奮起もなかったわけだ。

「そういう意味では、文さんが彼らの心に火を点けた

ということにもなりますね」

「ぐ……」

「ある意味、今回の一番の立役者とも言えます。という事で、開局の折には是非ゲストに来て頂いて、当時の思い出などをお話していただければと。あ、これ招待状です」

「そういう問題ですか!？」

差し出した招待状をぺいっと跳ねのけ、文さんは力強くテーブルを叩く。

「——読めましたよ、そういう魂胆ですね阿求さん。

私をそうやってラジオ局に取り込んでしまおうという算段ですね!? 断固としてお断りします! ええ、お断りですとも! 文々。新聞の記者として、私はこの職に誇りを持っているのですから!!」

「……下着を撮るのですか?」

胡乱な顔をしながら、袴の後ろを抑えて後ずさってみたり。

「ですから不可抗力だと言ってるじゃないですかっ

!?」

後半はほとんど悲鳴だった。いやはや、ここまで取り乱す彼女の素顔なんてなかなか見れないものだから、つい遊び過ぎたかも知れない。こほんと咳を挟み、私はお茶を口へと運ぶ。ほうと息を吐き、改めて文さんを見た。

「お話は分かりました。ですが文さん、随分とお急ぎでいたようですが、いったい私に何を訴えるつもりだったんです？ まさか、放送を取りやめるとでも？」

「……その、それは」

途端に口籠る文さん。

「このままでは何が起こるかわからないから、ラジオ放送局などを興すのはやめると、文々。新聞の射命丸文さんから抗議があったとでも、みなさんにお伝えすればよいのでしょうかね？」

「いや、その、そういう訳では、ないんですが」

「まさか天狗の方々が、人里のラジオ放送程度に負けるなどということを危惧されているわけではありませ

んよね？」

少し意地悪く微笑んで見せる。みるみる文さんの表情から余裕がなくなつてゆくのに、多少なりとも心苦しいものを感じたが——まあ、ある意味で自業自得であらう。

つまるところ、無線通信による情報の速度というものには、文さん色々と思うところがあるのだらう。幻想郷最速を標榜し、実際に無双の速度を誇る彼女としても、同時に二か所に居ることはできない。

取材を終えてから山へとって返し、記事を書きあげて出版に回し、刷り上がった号外を再び配るまでの時間がある以上、ラジオには情報の速さという点で一歩及ばない。

「それともまさか、先程の言葉は警告ということでしょうか？ このまま開局を諦めない限り、再び災いが起こるとでも——」

「そ、そんなわけないでしょう!? 堂々、受けて立とうじゃありませんか!!」

それは恐らく苦しまぎれの末に出てしまった言葉なのだろうが——残念なことに、それが王手となった。

「……だ、そうですよ、皆さん」

がらりと襖が開く。奥にはずらりと並んだしてやっ  
たりの顔。幻想郷放送局スタッフの一同である。

花屋を営む友人の麟や寺子屋の慧音先生、警備の小  
兎姫さん等々。見た顔もあれこれと含まれている。人  
里で何かを始めようとすれば、どうしても顔見知り  
が集まってしまうのは仕方のないことで、いまいち  
インパクトには欠けるが、こればかりは仕方がない。

襖の向こうにあったマイクを示し、私はにこりと  
どめの一言を押し込む。

「いまの一言、生放送で伝えさせていただきました」

「ひ、」

「卑怯者とは仰いけませんよね。まさか、天狗様が人間  
相手に」

ここで引き下がる様では、天狗とは言えない。予想  
通り、文さんはじっと見る一同の前にどうどう立ちは

だかり、威勢よく胸を張ってみせた。

「……………い、いいでしょう!! この射命丸文を見  
くびって頂いては困りますね!! 勝負ですよ阿求さ  
ん、たかだか人里のラジオごときに負けるような文々。  
新聞ではありません!! 幻想郷最速のニュースの価  
値を、この機会に存分に思い知らせてあげましょう」

——かくして。

人里と天狗、双方の威信を懸けた報道合戦の火蓋が  
切つて落とされることとなったのである。



そして一月余り。

結論として、我々は天狗のしたたかさを嫌と言うほ  
ど思い知らされる羽目になった。

「どうもー、文々。新聞でーす」

にこやかに投函される新聞を、人里の皆は競うよう  
にして手に取る。今季の文々。新聞の購読者数は、過



去の記録を大きく塗り替えて増倍していた。

「どうも、ご精が出ますね文さん」

「いえいえ。これも皆さんのお陰ですよ」

天狗に相応しい余裕たっぷりの表情で、文さんはばさりと手の葉団扇を振るう。風に乗って舞い飛ぶ新聞が、私の手元へも流れてくる。

いつも通りの大仰で人目を引く見出し——これまでとなんら変わることはない紙面づくり。けれど、今人里の人々を駆り立てるのはその記事の内容ではない。私はうんざりと新聞の裏面を捲る。そこには二色刷りで刷られた今週のラジオ放送の番組予定表が並んでいた。

確かに情報の速さで、新聞はラジオに勝てるものではない。それに対して文さんが取った対抗策が、ラジオの放送予定を新聞に乗せてしまおうというものであった。

いったいどここの情報筋から得たものか、文さんは内部でも三つのはずの今週の放送予定を見つけ出し、毎

週それを新聞に乗せているのである。

確かにラジオは四六時中鳴ってはいるが、人気の番組とそうでないものがあるのは仕方のないことだ。(慧音先生の放送寺子屋授業とか)。

お目当ての番組を聞きたいという者も多かるう。勿論、放送局でも無料の番組表を用意して刷る予定だったのだが——文さんはそれよりも二日も早く番組表を作りだして、新聞に載せているのだった。

「いやあ、すっかり人気の方ですなえ、ラジオというのなかなか侮れません」

どこからか仕入れてきたらしい携帯ラジオを首から下げ、にこにこ文さん。今日の部数はすっかり完売のようで、いい汗かいたとばかりに額をぬぐってみせる。

「ええ、まったくしてやられましたねえ」

ここまで堂々と開き直られると、もう苦笑いしか出てこない。

幻想郷ラジオの開局に、妖怪に寄らない人間主体の

情報経路を用意する、という側面があったことは確かなのだが――。それを見事に文さんに持って行かれた形だった。

「いえいえ。報道は持ちつ持たれつ、お互いに不足し合う部分を補って行われるべきものですよ。これから良い関係を築いていければ何よりです」

「……どの口が言いますか」

心底あきれ顔の私に、文さんは上機嫌で、買ったばかりの冷えた麦茶を飲んでいた。

---

#3 錆びたる天地の電波塔

昨日の雨が嘘のように、空は一面の青。夏の兆しを感じさせるかのように、原色の青空には折り重なった入道雲が覗く。

「ふうむ」

振り仰ぐだけで首が痛くなりそうな高さの塔を、私は溜息とともに見上げていた。四〇米<sup>メートル</sup>は楽にある櫓の上で、ようと手を上げる棟梁の甚五郎さんに手を振り返し、視線を地上へと引き戻す。

里の大通りの西の端。耕地にほど近い広場には、木組みの塔が立ち上がり、その周囲では忙しく放送局の皆が作業にいそしんでいる。

彼等の胸には皆、黄鉄鉱の結晶がぶら下がっていた。本来なら受信機の端末に使う部品なのだが（なお、精製に当たっては博麗神社の巫女に降ろされた金山彦様<sup>カネヤマビコ</sup>

のお力がある）、受信機の生産が間に合わないため今ではちよつと綺麗な石程度のものでしかない。

現状、人里のラジオ放送はカフェや集会場、食堂といった人の集まりやすい環境に受信機を設置し、放送を行っている。紙芝居のようなものだ。

ラジオ放送に賛同し、有形無形の協力を申し出てくれた者には優先してこの黄鉄鉱が配られることになっており、今ではラジオ放送に関わる者の身分証明のよう<sup>う</sup>に機能しているのだった。かく言う私も同じものを胸に留めている。

……結局のところ、幻想郷の住人たちはお祭り好きの宴会好きだ。今回のラジオ放送局は、近年珍しく人里が音頭を取って始めた、いわば異変のようなものである。

「稗田、今日も見回りか？」

今日の台本を抱えてやってきたのは慧音先生。ラジオの運用をいち早く賛同した人里の識者の一人だ。寺子屋に來れない子供たちのために、通信講座の番組を

始めたのだが——控えめに言っても聴取率が非常によろしくなく、最近ではそのことを嘆いているらしい。

……個人的には、慧音先生の授業はあの頭突きとセツトで功を成すものであるように思う。いや、わざわざ一撃喰らいたいものではないけれども。

「昨日の雨でアンテナが不調だと聞きまして」

「ああ。送電線がやられたらしい。風も強かったが、やはり雷がまずいようだな」

隣でアンテナを見上げる慧音先生。甚五郎さんの号令一過、男衆が地上からケーブルを引っ張り上げてゆく。なるほど、地上四〇米の櫓は、雷神様が目印にするには格好の的と言えるだろう。放送局開局の以前から懸念されていた事であり、アンテナの設置に当たっては十分に対策を用意したものの、天候ばかりはどうしようもない。

なお、今日の龍神様の石像の眼の色は白。天気予報は晴れを示しており、当面雨の心配はない模様。

「幸い、今回は里に被害は無かったが——あまり頻繁

にこういうことが起こるようだと、少し考えなければならなくなるぞ」

「防災の事も考えてここに建てましたが、やはり見通しが甘かったですかねえ」

実際、このアンテナは少々目立ちすぎるのだ。物見櫓と勘違いして戦でも起きるのかと寄つて来た妖怪もいたのだが、そのあたりは小鬼姫さんたち警備隊がきっちり追ひ払ったそう。

「でも、ここ以外でこんなに大きなアンテナを用意するのは骨じゃないかい？」

有志その二、河童の河城にとり嬢。ラジオ放送の一件を早々と聞き付けた彼女は、わざわざ変装までして里に入り浸り、整備に協力を申し出ていた。あまり直接的な交流を好まないと聞いていた河童だが、彼女は人間の技術は決して侮るなかれ、積極的に交流し学ぶべきであるというのが信条であるらしい。

実に勤勉に放送局の機材の補修や整備をこなす彼女に、最初は距離を置いていた人々も、徐々に親交を開

き機器の扱いを学ぶようになっていた。

「放送局が使ってる周波数を1500kHzとしたって、電波の波長は200m。アンテナはその半分から四分の一の長さが必要になるから、これでも最低限の高さなんだよ？ 余所に移したからって雷が落ちなくなるわけじゃないし、その分メンテナンスが大変になっちゃう」

ラジオの原理というものについて、私も一通り彼女から説明されていたが、正直言って何が何やら良く分からない。なんでもラジオの方式には2通りのものがあり、今の幻想郷放送局にはそのうちの片方、中波AM方式が使われているという。短波は機材が小さくて済む代わりに、受信にも送信にもより高度な技術が必要となるのだそうだ。なお、河城嬢の言葉借りれば、私の好む幺樂もFM音源というもので奏でられているらしい。そんな彼女は胸元の黄鉄鉱を摘み上げ、しみじみと吐息する。

「……凄いいんだよねえ、これ。この鉱石の結晶配列が、電波を読み込んで整流して、そのまま音に変える

って、外の人間はすごいこと考えるよねえ」

独り深々と頷き、口元を緩めて黄鉄鉱を愛でる河城嬢。河童に変わり者が多いというのは知っていたけれど、彼女もその例に漏れず奇人ではある様だった。どうにもその凄さが実感できない身としては、曖昧に同意せざるを得ない。

「そういうもんなのか？」

口を挟むのは有志のその三。自称、普通の魔法使いこと霧雨魔理沙さん。

ちよこちよこと私の家に出入りしているのが縁となり、彼女もいつの間にか放送局の一員として名前を連ねていた。番組の間に霧雨魔法店の宣伝を挟むように要求されているのだが、特にスポンサーとして出資をされている訳でもないのだから今のところそれは実現していない。

「ラジオってのは片方が喋ってることしか聞こえないんだろ？ この間借りた通信機の方がよっぽどすごい気がするけどな」

「そりや違うよ魔理沙」

まるつきり見物気分分の魔理沙さんに、河城嬢は分か  
つてないなあと言わんばかりに首を振った。

「あんな複雑なもの、力のある妖怪だってそうそう沢  
山は作れないよ？ それなのにこのラジオはこんなに  
簡単な仕組みで、霊力も使わずに遠隔地との情報がや  
り取りできる。何より凄いのね、魔理沙。この受信  
機の方に動力を必要としないってことなんだよ。何も  
特別な仕組みはいらないんだ。安価に、しかも使う側  
の条件を問わずに使えるなんて……やっぱりの世界  
は進んでるんだねえ」

このところ彼女のラジオに対する評はこれに尽きる。  
守矢の巫女がそれを聞いて何やら微妙な表情をしてい  
たが——ともあれ、普遍的な、誰にでも使える技術と  
いうのが、河城嬢の心をくすぐるキーワードであるら  
しい。

「しかし、話は戻るが、実際に影響が出ている以上、  
アンテナについてはこのままと言うわけにはいかない

だろう。何かしら対策を打たなければな」

「確かに、……これから夏になれば雷も増えます。予  
定にも差障りがありますしね」

慧音先生の言葉に、私はしばし腕を組んで、

「ひとつ、気になる場所がないではないんですが」

「ん？ なんだか知らんが面白そうじゃないか。なん  
だったら協力するぜ？」

「ふむ」

願ってもない申し出と、私は魔理沙さんの協力を受  
けることにした。ひとまずの依頼は、ちよつとした用  
心棒と移動手段。

「そこまで大袈裟な事になるとは思いませんが。あ  
まり強い妖怪が居るようなところではありませんし」

「どこだ？ 冥界か？ 地底か？ 三途の向こうはち  
よつと御免こうむりたいがな」

「私もまだあちらに行くつもりはありませんよ。魔理  
沙さんにご存知ですか？ ちょうど南の方に、鉄塔が  
出現したというニュースがありました」

「ああ」

あれか、と魔理沙さんはぽんと手を叩いた。



魔理沙さんの箒の後ろを借りてひと飛び。十分もかからずに私達は南の森の只中にいた。

「なる程。これがその電波塔ですか」

伝聞でその存在は知っていたものの、直接目にする  
とその威容はなかなかものだ。鋼材を組み合わせた、  
まるで骨組だけの櫓が天を衝くばかりに聳えているか  
のよう。あちこちに風に晒された歳月が染みつき、赤  
茶けた錆が浮いているものの、作りはまだまだ頑丈に  
見えた。

申し訳ないが、これと比較すると人里に組み上げた  
櫓は二回りも迫力がない。大きいことは良いことだ。

本来は異質なものであるうその姿は、いまや森の中  
にすっかり溶け込んでいた。塔のそこに蔭が絡み

付き、枝のように張った鋼材の上には猛禽が巣でも作  
ったらしく、羽音が聞こえてくる。

額に手をかざし、上空の慧音先生がざっとその周囲  
を見回す。

「見たところ、設備だけなら残っているようだな」

「な？」

魔理沙さんは何故だか得意顔。

この鉄塔、元々は外の世界のもので、そちらで不要  
とされた故に、結界を超えてここに現れたのだという  
ことらしい。外来の品は無縁塚あたりに流れ着くのが  
定番なのだが、この塔はなにか、ここに惹かれ合うも  
のがあったのだろうか。

「しかし、この奇天烈な飾りは一体？」

「前にな、妖精たちがここに棲み付いてた時期があっ  
たんだぜ」

自然の体現である妖精は周辺環境の影響を強く受け  
る。彼女たちにとって肉体はあつてないようなもので  
あり、精神状態が能力に直結するのである。

異変が起きた時に目にする事の多い向日葵妖精（花束を抱えているアレだ）などが最たるものだ。彼女達を普通の妖精と同じ感覚でからかおうとすると痛い目を見ることになる。

なお、紅魔館などでは妖精のこの性質を利用し、彼女達に給仕服を着せてメイドとして仕事をさせている。一種のコスプレであり、まず形から入ることで、普段はまったく役に立たない妖精達もいらないよりはマシくう屍妖精ゾンビフェアリーも、同じ理屈でゾンビ化しているため、『一回休み』の期間がえらく短いのである。

森を棲家とする妖精たちは、この電波塔自体の影響を受けたのだろう。

「遠く離れたところにも声が聞こえる御利益があるようにって、ご神体に仕立てていたな」

「——ああ、だいたいどこの誰か想像がつかしました」  
神社めいた真似事をする妖精なんて、他に心当たりがない。そのうち巫女服でも着てくるのではないかと

うんざりする。

「でも、それなら話は早いですね」

「稗田？」

疑問の声を上げる慧音先生を背中に、手近な木を見つくり、ぺたぺたと触れて手ごたえを確かめる。十分に育った樹齡の樹であること、病気などの兆候は見られず、虫が巢食していることもなく、立ち枯れを起こしていることもないのを確認し、

「せえの」

少々はしたないのを承知の上で、袴の裾を持ち上げ——体重を乗せて思い切り木の幹を蹴り飛ばした。

野歩き用に特注したブーツの厚底が、ほんと重い音を立てて木を揺らす。

「——もう一度」

具合を確かめ、先程よりもさらに力を込め、ざわざわと梢の揺れる音が騒がしくなる。

同時、

「あ痛ッ!？」



ずるずるどさりと落下してきた、それが悲鳴を上げる。  
茂みの中には目を回して折り重なった妖精が二匹。

その一人をひょいと持ち上げ、

「これに話を聞きましょう」

「――お前、妖精相手にはホント容赦しないのな」

「まあ、私情が入っていることは否定しませんけどね」  
それもこれも、全て彼女達の悪戯が宜しくないのだ。  
どうせ彼女達は完璧に忘れてしまっているものかもしれないが、こちとら忘れたくても忘れらんないんですよ  
コンチクショウ。

「やれやれだ。……ほれ、起きろ」

「……ふえ？」

息を吹き返した彼女に説明をする。案の定、妖精達は良く解らないという顔をするばかりだった。

「ですから、あの電波塔から余計な飾りを取っ払って  
も良いかという話です」

「えー？ 知らないけど、いいんじゃない？」

お互いに顔を見合わせ、ねえ？ と首を傾げ合う妖

精たち。そもそもあの電波塔自体に興味がない様子だった。

「……やっぱりもう飽きてたか」

半ば予想通りだったのだろう。魔理沙さんも苦笑い。  
ご神体などと言っている割にはあまり手入れがされている風でもなし、恐らくそんなところだろうと思っていたが。

妖精の興味は何をおいても一過性であり、基本的に物事には執着しない。子供の秘密基地のような感覚に近いということだろう。今なお彼女達がここに頻繁に出入りしているとすると、それなりに面倒な事になったかもしれないが（程度はどうあれ、妖精程度でも相性の良いのが3人揃っていると厄介には違いない）――それなら都合だろう。

「少々里から遠いのが難点ですが、それはおいおいなんとかしていきましよう」

「なんとも、随分大がかりな話になって来たな」

慧音先生が苦笑する。里の有志で始まったラジオ放

送だが、いつしかそれは幻想郷全体の流行となりつつある。

許容を超えて大きくなった物事は、その規模に応じて厄介事も招くものだ。慧音先生はそのあたりを心配しているらしい。

「いいじゃありませんか、お祭りのようなものですよ」「そうだな」

慧音先生に悪戯っぽく微笑んでみせる。踊る阿呆になんとやら、だ。



「——おや」

一週間後。

再び電波塔を訪れた私が眼にしたものは、ツナギに帽子、一端の作業着に身を固めて、螺子回しやスパナを手に取りまわっている妖精たちの姿であった。

彼女たち、人里の有志達に混じって電波塔の整備を

しようとしているらしい。走り回るたびに機材を壊したり狂わせたり、お世辞にも役に立っているとは言いが、その様子は先日野良妖精の姿とはかなり変わっていた。

「なんです、この騒ぎは？」

「なんだかよく分からんが、螺子だの金槌だのが気に入ったらしいんで、手伝ってもらってるぜ」

「……妖精が、ですか？」

「古い館に居付く屋敷しもべ妖精なんてのもいるからな。機械の妖精なんてのが出て来たっておかしくないだろ」

妖精は最も適応能力の高い生き物でもある。おそらく一過性のものではあるのだろうけれど、いよいよ本格的にラジオ放送が異変になりつつあるのかもしれない。

そのうち博麗の巫女に退治されてしまうのは時間の問題なのだろうか？ そんな事を考えていた折。

「いやはや、賑々しくなってきましたねえ」

「お、出たなバパラッチ天狗」

最初にその姿をとらえたのは魔理沙さんだった。ぱさり、黒い羽根を揺らし、現れた幻想郷最速のブン屋が近くの梢に足を止める。隣には不機嫌そうな顔の白狼天狗を一人、従えていた。

文さんは手にした葉団扇を揺らし、その先端で鉄塔をびしりと指し示す。

「ふむ、これは実に興味深い。この鉄塔が敵の牙城という訳ですね。樫、ちよいと乱入して一暴れしてきなさい」

「……拒否します。と言うか何が悲しくて私がそんなテロリストまがいのことをしなきゃいけないんですか」

「私がやったら私が犯人になっちゃうでしょう？」  
意外そうな顔で答える文さん。清々しいくらい下衆だった。

「その点、樫がやるなら私は痛い目を見ませんしね」  
「私が捕まった時点で、黒幕のことは洗いざらい喋りますよ」

「……おやおや」

牙を見せて唸る、樫と呼ばれた白狼天狗。今にも噛み付かんばかりの彼女の視線を跳ねのけ、文さんはひらりと身をひるがえす。彼女の直属の部下なのかは分からないが、あの分ではさぞ苦労していることだろう。

二人のやりとりを眺めていた私は呆れて肩を竦める。  
「冷やかしたら間に合っていますか」

「事件あるところに私あり、ですよ。何やら怪しげなことを阿求さん達が企んでいると聞いてやってきました。こんな巨大なアンテナまで持ち出して何をしようというんです？」

聞かれ、私達は揃って顔を見合わせた。気まずそうな慧音先生、口元に悪戯っぽく歯を覗かせる魔理沙さん。

「ちよっと、イケナイことですよ」

「はあ」

答える私に、文さんは不思議そうに首を捻った。

## #4 幻想ラジオ倶楽部

全天候型環境都市である京都の夏は去年と同様穏やかであった。網膜に投影された拡張現実<sup>A</sup>を通して、午後の気温と抗議の予定を確認、迫る課題の提出期限と、休講が入っていないことに溜息をつく。

「……なんで今日は夏休みじゃないのかしら」

「今が六月だからじゃない？」

「いまどき紙媒体で提出義務付けられるレポートなんて馬鹿馬鹿しいわよ。資源の無駄だしアナクロに過ぎるわ。レトロ趣味かなんだか知らないけど、岡崎教授も思い付きで余計なこと始めてくれるわよねえ……」

うんざりと、汗ばむ袖を摘まんで吐息。そろそろ夏物の衣替えをしなければならぬかと考えてアイスコヒーを啜った。年度の初めに学内に新設されたレトロな雰囲気のカフェテラスで向かい合って、我らが秘

封倶楽部はお昼の定期会合（平たく言えばお昼ごはん）を開いていた。

向かいに座るマエリベリー・ハーン、通称メリーはテーブルの上に伸びている私を見て苦笑し、ふと思いついたように手を叩いた。

「あ、そう言えば蓮子。紙媒体で思い出したんだけど——これ、見てくれる？」

「……何それ？」

「綺麗でしょ」

メリーは実に楽しそうににこにここと微笑むばかり。

私は怪訝な顔をしつつも、彼女の差し出した、きらきらと輝く正六面体を摘みあげた。

「……ふむ」

どの面も精確な正方形を描く、一分のズレもない立方体の金属鉱石。メリーが脈絡なく奇妙なものを持ち出す時、その出所は決まって、得体のしれないものと相場が決まっている。私の視線を疑念と感じたか、メリーはすぐに説明を始めてくれた。

「昨夜ね、いつもの夢を見たのよ」

メリーに、境界を見つける程度の能力が備わっているというのは、私達二人の間では公知の事実。それどころか彼女は、夜の夢という形で境界を飛び越えることがあった。かつては偶にであったその頻度が最近は頻繁なものへと変わりつつあるのは、あまり良くない傾向なのではないかと思ったりもするが——私もその恩恵を預かっている以上、あまり野暮な事は言えない。「それで、どこかの宝物庫にも忍びこんだのかしら、不思議の国のメリーさんは」

「もう、違うわよ」

ぶうと頬を膨らませて、メリーが拗ねる。彼女が時折覗かせるこんな子供っぽい仕草を見るのが好きで、ついからかってしまいたくなるのだが——

「貰ったのよ。放送局の開局記念だって言われてね。ほら、これを見て？」

口をとがらせながら、メリーは鞆の中から4つ折りにしたチラシを取り出した。

ざらざらと指に引つかかる質の悪い紙——再生紙とも違うその手触りに、藁半紙という呼称が出てくるまでにしばらく時間を要した。真新しいインクの香りをさせる紙面には、これまた古めかしい印字のレトロな字体で、良く分からない日付と「幻想郷ラジオついに開局！」の文字が一杯に踊っている。

この科学世紀にもはや絶滅寸前となった紙媒体の広告だった。手紙や重要書類こそ偽造防止の観点で需要はあるが、広告は今やすっかり電子媒体が専門である。資源や手間、コストの面からも紙媒体の広告なんて代物はまず見られない。

出生登録と同時にA Rへアクセスを可能にするテクノマンサー適応処置が取られるようになり、今では誰もが特段意識することなく、五感に次ぐ感覚として世界中に広がるネットスフィアの恩恵に預かっている。一昔前には眼鏡やコンタクトを介して網膜投影していたA Rに、人類は呼吸するように適応していた。「なんて言うのかしら、レトロモダン？ 素敵な感じ

のカフェとか、古いお店が並んでる石畳の通りでね、たくさん人がいたわ。中には人間じゃない人たちも居たみたいだけど——向こうから賑やかな行列が道を歩いてきてね、音楽を鳴らしながら、このチラシを配ってたのよ」

独りで音を奏でる楽器を演奏する楽団を先頭に、翼や角をもった、明らかに人ではない姿の混じる行列は、街の中を練り歩いていた。

盛んにこの幻想郷ラジオなるものを喧伝する一団は、雑踏の中から目ざとくメリーを見つけると、運がいいねえなどと言いながら押し付けるようにこの鉱石を手渡していったのだという。

「気が付いたら目が覚めてて……でも、ちゃんとそのチラシと鉱石は枕元にあったのよね」

状況から総合するに、メリーがまたあの異境の地、幻想郷に迷い込んでいたのは間違いないまい。わざわざメリーを選んだというのが少しひっかかるが、……それよりも。

「それで、これなんだけど……なんなのかしら。金？」  
「貸してくれる？」

私もメリーも少女の端くれである。貴金属には当然ながらそれなりの興味もあった。片目をつぶって鉱石を覗き込んでいるメリーに声をかけ、ARのログインをアカデミックモードに変更。いつも論文検索に使っているスプライトを叩き起こし、スレッドを編集し複合体を作成。大学のデータベースを歩かせるように指示する。

電子の海からは、すぐにヒットが帰ってきた。

「残念ながら金じゃないわ。硫酸<sup>H<sub>2</sub>SO<sub>4</sub></sup>五三、四%、鉄<sup>Fe</sup>四六、六%。比重五。〇一、モース硬度六、四五。FeS<sub>2</sub>の結晶。黄鉄鉱<sup>黄鉄鉱</sup>ね」

「……なんだ」

ある意味メリーの感想は正しい。かつて愚者の黄金などと呼ばれた正六面体の結晶は、磨き抜かれたように美しい結晶格子を持ち、一見高い価値を持つようにも見えた。

「でも、それとは別の意味で貴重かもよ、これは」

「どういうこと？」

簡易走査で確認しただけでも、手元の正六面体結晶の精度は並みならぬものであることが分かる。その純度は0が小数点以下に9つ並んでも表現できず、なお続く超高精度。果たして京大の実験室レベルでも再現できるかどうか。

「それにね、これ、ARタグが付いてないのよ」

チラシと金属塊をメリーに示す。

たとえ資材として使われる無垢な金属塊であっても、それが人の手によるものならば必ず電子タグ処置がなされ、その製造者や純度、製造日時、製造番号を示すタグが分子記号として埋め込まれているはずだ。今の社会はAR処置のされていないものには対応しておらず、歴史遺産や文化遺産、路傍の石にすら、様々な目的で位置情報や管理者を示すタグが配置されているはずなのである。

ふと気付いてARに囁かせている3つのフィルタを

解除する。途端、洪水のように極彩色の仮想現実の広告がどつと視界に溢れだした。アクティブなARスパムが何重にも展開して押し寄せ、メリーの顔すら見えなくなってしまう。

「……むむむ」

しかしそれでもなお、手の中の正六面体の結晶には何も表示されていなかった。

「参った、降参。……確かにこれ、普通じゃないわね」

「でしょ？」

勝ち誇ったように胸を張るメリー。本人は意図していないのだろうけれど、夏服でそんな事をするものだからやたらと胸が強調されていた。……ええい、悔しくないぞ。ないったらない。

「……純鉄だってまだコストがかかり過ぎて実用化は不可能なのに、こんな正確な結晶配列なんて、どうやったら作れるのかしら」

「神様を作ったって言いたいのか？」

「それくらい凄いものだってことよ」

少なくともこの黄鉄鉱の結晶は、ここ三〇年で作られたものではないか、意図的にタグを埋め込んでいなか削除したものであるということだ。

一気にレア度が増していた。まあ、流石にこの科学世紀でも野山に転がる意志の一つ一つ、地層に埋もれた石にまでタグを産めるようなことはないだろうが――メリーがわざわざ私を驚かせるためだけに都内を出て山を何時間も歩き、泥にまみれて鉱石を採取する理由にはならないだろう。第一、昨日の今日でメリーにそんな時間は無かったはずだ。

「ラジオ、ねえ」

よし、と一つ頷いて。私は残りのアイスコーヒーを氷ごと口の中に放りこみ、チラシを手に席を立った。

「今日の午後の予定はキャンセルよ、メリー」

「いいの？ 後で課題、増やされても知らないわよ？」  
「今できることをしなくちゃ、乙女の名折れつてもよ」



ぎい、と古めかしい蝶番が軋む。真鍮の錠を借りた鍵で開け、ドアの向こうの階段を上ってゆく。掃除は行き届いていても、長年積もった埃と黴の匂いは、折り重なった年月のように染み付いていた。

大学に併設された記念館は、科学世紀の時代から取り残されたかのような姿でそこにあった。存在すら忘れられたような木造の3階建て。耐震補強と劣化防止の措置はされているものの、木のおいに満ちた建物の中に、電子化すらされていない古い機械が並ぶ光景は、いつの間にか百年以上の昔に時間を飛び越えたような錯覚すら覚えてしまう。

この記念館、卒業生が寄贈したものだと言うが、遷都でも移転を免れたというから、前の戦争の以前からここに残っていることになる。

「3階って言うってたわよね」

壁の案内板に従って（これも信じられないことにA



R未対応だ）廊下に出、骨董めいた品々がぎっしりと詰め込まれた架台の中を進んでゆく。

記念館の管理を務める老齢の女性は、私達の急で不躰な申し出にも関わらず、快く頼みを了承してくれた。「まるで歴史の地層ね」

シンダーと発条を組み合わせた計算機、電球の様な真空管を並べた通信機。そこに積みあげられた品々に、メリーが感嘆の声を漏らす。展示品——というよりは、倉庫を眺めている気分だった。

確かに歴史的な価値はあるのだろうけれど、逆に言えばこれらの道具は丸ごと、今の時代に興味を示されることもなく、時代の地層として堆積しているようなものなのだ。地面の下に何があるのかなんて、普通に生活している限りまず気につかないことだろう。

通路を進むに従って、時代が遡ってゆく。二十世紀も初頭に差し掛かる年代になる頃になって、ようやくお目当ての区画が近づいてきた。ぎしぎしと軋む床を進み、架台の前に向かう。

赤い銅線を巻いた糸車と、鏡を組み合わせたような、不可解な姿をしたそれこそが、私達の探していたもの——鉱石ラジオだった。

「一五〇年前の最新情報ツールね」

「これ、本当に動くの？」

「大丈夫なはずよ。原理は単純だし。——ええと、まずは……」

何事にも好事家というものはいるらしく、二世紀近く昔のこのラジオを、今も愛用しているひとはいるらしい。ARで見つけた操作方法を読み出し、見よう見まねで受信装置の部分に鉱石を嵌めこむ。

慎重にダイヤルを操作し、チラシに記されていた周波数に針を合わせる。音声素子に3つの変換器を掛けて携帯端末に接続。流れてくるものがただの音とも限らないので、出力をARに直結させることはやめ、念のため近くの棚から拝借したスピーカーを経由させることにした。

「いくわね」

「ええ」

わずかな緊張に、私はそつと唾を飲み込む。

——ひよつとしたら。ずつと昔にこのラジオを聴いていた人も、こんな気持ちで放送を受信していたのかもしれない。

情報が光よりも早く世界を駆け巡り、調べるより先に世界中の知識が頭に流れ込んでくるこの時代——科学世紀の第一歩となったのは、きつとこの、ラジオが契機だ。

そんな事を考えながら、私は端子を黄鉄鉱の結晶表面に触れさせた。

わずかなノイズの後、少女のものと思われる声が、黄金色の鉱石を通じて鮮やかに溢れだす。

「こちら GOCK.AM1923KHz、幻想郷ラジオ放送局！  
ここからの提供は文々。新聞でお送りします！」

(了)

### 鉱石ラヂオに天狗は奔る

初出:コミックマーケット 82 (2012/8/11)

電源が無くても音声を取り取ることのできる鉱石ラジオと、三月精で幻想入りした電波塔を生かせないかと思って考えたお話。資料集めの過程で見つけたやる夫で学ぶ鉱石ラジオシリーズが面白くて読みふけた結果でもあります。

短編連作の体をとってますが、一つの大きな話にまとめきれなかったのでカット集として体裁を繕った感じ。

実は当初ラストの蓮子とメリーの出番は全く考えてなかったんですが、なんか締めが弱いなと思って製本前日に急遽書き下ろしたものです。

## 幻想科学ティータイム

### #1 秋の夜長の不思議な縁

障子の向こうは寒風吹く十一月。いつもは一人でその広さを持て余していた私の部屋に、いまは他に二人の姿がある。

彼女たちが我が家に顔を出すようになってはや三か月。いまや三人が机を囲むこの風景は、すっかり慣れ親しんだ日常となりつつあった。

「ねえメリー、蜜柑貰っていいかしら？」

「んー……？」

「はい、どうぞ」

「あ。さんきゅ、阿求ちゃん」

黒髪の彼女は宇佐見蓮子。やや切れ長の眼をした、凛々しい印象のある美人だ。

感情をよく現し、くるくると表情を変える一方で、興味のあることを前にすると驚くほど真剣な顔も見せる。そんな時の不敵な笑顔はなかなか様になっているかと思うが、いまは黄色くなった指でいそいそと三つ目の蜜柑を剥いているところ。

「ZZZ……」

もう一人はと言えば、私の右隣で炬燵の天板に頬を乗せ、幸せそうな顔で猫よろしく丸くなっていた。

こちらではあまり見ない、綺麗な金髪の彼女がマエリベリー・ハーン。初めて自己紹介された時には呼び辛い名だと思ったが、蓮子さん曰くメリーでいいわよとのこと。本人もその愛称で呼ばれ慣れているようなので、私もそれに倣うこととした。

のほほんとした気配と同時に、どこか触れたい気配も感じさせる彼女、猫は猫でも、気紛れで毛並みの良いシャム猫か何かが近いだろうか。

秘封倶楽部と名乗る彼女達二人は、聞けば『外の世界』の学生であり、趣味としてオカルトを研究してい

るといふ集まりなのだという。

……こちらで学舎と言えば精々が寺子屋程度で、彼女たちの年齢なら学問をもつて身を立てている者を除けばとつと卒業していてもおかしくない筈なのだが、幻想郷と外とは少々事情が違ふらしい。

オカルトというのは、胡散臭く信用のおけない物事であり、つまるところ魔法の森近くの古道具屋の店主が常々主張しているような与太話のことだろう。二人はそうした話を探してはあちらこちらと出掛け、お茶をしたりお酒を飲んだりするという、至極少女らしい会合を開いているのだとか。

そしていまはその会場に幻想郷が選ばれているというわけだ。

要するに、彼女達は与太話を肴に集まる根っからの暇人である。

……だからこうして、私がお茶のついでに付き合つてあげるといふのも悪いことではないのだろう。うん。「はー。……極楽極楽……。蜜柑は炬燵に限るわー」

年寄り臭い独り言とともに蜜柑を食べ終えて、蓮子さんはべたんと身体を伏せ、顎を炬燵の上に載せる。

なにやら感慨深げなその様子につられて、私も蜜柑を一つ手に取つた。皮を剥いて口に含めば、冷たい舌触りと甘酸っぱい果汁が口の中に広がり、喉を潤してゆく。

季節を感じる方法は数々あれど、冬の醍醐味の一つといえは確かにこれなのだろう。

「でも、こっちは冬が早いからねえ」

「そうですね？ 例年こんな感じですよ。確かに炬燵は色々と手放せませんけれど……表を出歩いているときはともかく、机に向かい続けだと冷え症が大敵ですからね」

まだ昼過ぎだというのに、障子を揺らす風は身を切るほどに冷たく、これでは炬燵に潜り込んで動く気もなくなるともいふものだった。

以前は暖房に火鉢を使っていたのだが、なにぶん無駄に広い部屋、傍にひとつたつ炭火があつた所でな

かなか暖は取れないものである。一度股火鉢をしてい  
る所をやエさんに見つかってお小言を頂戴して以来、  
他の方法を考えるべくあれこれ思案して、導入を決め  
たのがこの炬燵であつた。

もつとも、この炬燵というものの、一回入ってしまう  
となかなか出られないという難点もある。一昨年だか  
に永遠亭でも似たような経緯で炬燵を用意したところ、  
月の姫様がひと冬そこから離れなくなつてしまったと  
いう話を耳にした。

……しかしその結果、その冬は竹林での小火騒ぎが  
びたりとおさまつていたため、里の人たちからは歓迎  
されたというオチまで付いたのだけど。

快適さはかくも人を変えるのである。

「んー……」

もぞもぞと寝返りを打ち、メリーさんがうつすらと  
目を開けた。炬燵布団に肩までくるまった彼女は、心  
底幸せそうな笑顔でふわあと大きく欠伸をして、

「ねえ蓮子……私、こたつと結婚する……」

「夏にエアコンとしてなかったっけ？」

「……じゃあ愛人でもいい」

「はいはい。それも言つてたから」

聞くとところによれば、蓮子さんたちの身の回りには、  
炬燵というものが無いらしい。ストーブよりもさらに  
進歩した、ボタンひとつで温度を快適に保つような仕  
組みが街の至る所に仕掛けられているのだとか。その  
ためよほど遠出をしない限り、冬に表を出歩いても寒  
さに震えることはないという。なんとも壮大で贅沢な  
無駄遣いだ。

あるいはこの抗いがたい炬燵の魔力によつて、人が  
墮落しないようにと叡智を尽くしているのかもしれない。

そんな訳でこちらの寒さは二人には少々酷なもので  
あるらしい。特にメリーさんの方はかなり寒さに弱い  
ようで、ここしばらくはずっとこんな調子だった。

「あーあ、これじゃ動物ねえ。冬眠してるみたい」

「まったくですね」

苦笑とともに相槌を打つ。

実際のところそんなに的外れな評価でもない気もした。なんでも彼女の眼は特別製で、結界の裂け目を見つけることができるのだとか。

幻想郷は博麗の大結界と妖怪達を作った結界によって外界と隔てられているわけで、確かにその能力をもってすれば、こちらとの行き来も容易いことだろう。

外来の人間となると、今ではすっかりこちらの一員となった山の上の神社の巫女などがそうなのだが——神徳をもってこちらへの道を拓いた守矢の神社の面々とは違い、彼女たちはその眼によって自分の身一つでこちらへと渡ってくるのが可能なのだそうだ。

……一説によれば、伝言を残しながら遠方から少しずつ近づいてくるという彼女とおなじ名前の妖怪がいるそうだから、案外彼女も妖怪なのかもしれない。そうなければ稀人などとして、幻想郷縁起にも載せておく必要があるだろうか。

再び夢の中へと落ちて行ったメリーさんを見ながら

そんな事を考えていると、蓮子さんがちょうど机の端へと手を伸ばしたところだった。

「これ、例の改訂版？」

「ええ」

付箋をつけたままの幻想郷縁起改版の原稿を手に、蓮子さんがぱらぱらと頁をめくる。

私と彼女達を結びつけたのも、この本だった。

私が長年の疑問と共に載せた、竹林でのメモを手掛かりに、彼女たちは私の元を訪ねてきたのだ。

幻想郷が結界で外部と隔離されているとは言え、外界から道具が流れ着いたり、神隠しにあった人間が無縁塚で見つかることはそれなりにある話だ。しかし、外の世界からの来訪者に名指しで呼ばれたのは、長い稗田の歴史の中でも類を見ないことであった。

数百年の時間を経てきたはずのあの紙片が本当に彼女の手によるものなのか、まだ幾許かの疑問が残っているが——ともあれ、人の縁とはかくも数奇なものである。

「一度は完成させたつもりだったんですが、後から見返すといろいろと間違いやら誤字やらが大量にでてきまして。前の版も人気はありますし、しばらくは大々的に再販と言うことはないと思いますが」

「あー、あるある。私も良くレポートとかでやるわ。徹夜で書き上げたラブレターなんかも、翌日にもう一度冷めた目で読めとか言うわよね」

「……その喻えが合ってるのかどうかは知りませんが、それにここ最近、またいろいろと騒動もありましてね。本当に騒ぎには事欠かないですよ」

……ついでに迷惑までもあれこれ被っているというのが本音である。

稗田の家は人里の代表のような側面もあり、阿礼乙女という立場から妖怪やら魔法使い達との折衝に当たることもしばしばだ。最近では週に何度も出かける予定が入ったりして、なかなか原稿も進まない。

「昔は縁起をまとめて、転生の用意をしていれば後はなにもしなくてもいいくらいで、楽なものだったんで

すけどねえ」

はあと吐息をこぼし、同じく炬燵の上に突っ伏す。まあまあ、と苦笑しつつ応じてくれる蓮子さんに、少しだけ甘えてみる。

彼女たちと出会っての一番の収穫は、退屈な冬の日にかうして話し相手がいるのが決して悪くないのだということを知ったことだろう。

「……おや？」

ふと耳を澄ませば、ぱたぱたと早足の足音が聞こえる。それもどうやら、こちらに近づいてくる気配。

うちの使用人たちのなかで、あんなに騒々しくする者に覚えはない。とすればよほどの不法作者か、あるいは逼迫した事情があるということだ。どうにも不穏な気配を感じ顔をあげる。

そうしている間にも足音は部屋のすぐ前までやってきて、

「阿求ちゃん、いるっ?！」

声とともに襖を引き開け、姿を見せたのは見知った



顔。私の古馴染で、里の花屋を営む少女——冴月麟であつた。

「……うー……寒い……」

「メリー、よだれよだれ」

開け放たれた障子の隙間から吹き込む寒風に、メリーさんはむずがるように炬燵の中へもぐりこもうとする。眼を擦る彼女の頬が汚れているのを見て、蓮子さんが苦笑しつつハンカチで口元をぬぐってやつていた。「どうしました?」

街中では良く顔を合わせる麟だが、彼女の方から訪ねてくるということはあまりない。しかし麟は随分慌てた様子で、挨拶もなしに部屋へと入ってくなり、がつしと私の手を掴み——

「ひゃ!?!」

いきなりこちらの手首を掴んだ麟の手が、氷のように冷たくなつていて、私は思わず悲鳴を上げてしまった。

「ご、ごめんっ阿求ちゃんっ」

とは言え、突然手を振りはらわれ、麟も驚いたのは同じだったろう。しゅんとなる彼女に私のはかるく手をさすりつつ、

「……いえ、平気です。それよりそんなに急いて、一体何事ですか?」

「あ……そ、そう、大変なのよ阿求ちゃんっ!!」

ぶんぶんと握った手を上下に振り回して——麟は言つた。

「すぐに来て!! 畑が荒らされてるの!!」



慌てる麟にひとまずお茶を用意して落ち着かせ、手短かに話を聞いたところによると。

今朝——といつてももう昼に近い時間になるわけだが、里の畑の一つが荒らされているのを、野良仕事に出た村人たちが見つけたのだという。

「ああ、あの小麦の。それは不届き者もいたことです

ね。……しかし、それくらいのことです。ここまで慌てなくても」

「そうなんだけど、違うの!! あ、うん、そうじゃなくて、荒らされてたのはそうなんだけど、普通じゃないのよ!! うまく説明できないけど、変なふうに芽が倒れたり枯れたりして……柵も壊れてないし、足跡もないのに、あちこちでこんなふうだね?」

「ふーむ?」

身振り手振りを交えての熱弁だが、いまいち要領を得ない麟の説明に、腕組みを一つ。

要するに、獣や霜、風といった自然災害では、明らかに起こり得ないようなことが起きている、ということらしい。それがあまりに不可解なので、現場で混乱が起きているのだろう。

「それで阿求ちゃんにも来てもらえないかって——焦っちゃって……」

「だからあんなに血相変えてきたのね」

「うー。……お見苦しい所をお見せしました……」

蓮子さんの言葉に恥じ入るように俯く麟。普段はあんなに取り乱すような娘ではないのだけど、よほど焦っていたのだろう。

「しかし、そんなに妙だと言うなら私のところよりも先に行くべきところがあるような気がします」

「だって、巫女さんこの前から旅行中じゃない」

「……………あー……」

今更ながらに失念していたことに、思わずしかめっ面をしてしまう。自分でも不思議に思うが、物覚えの良さと度忘れは別物であるようだ。

「巫女って、博麗神社の?」

「ええまあ、他にも神社やら寺やら色々ありますのでそっちでもいいんですが……」

基本的に、異変となればその解決は巫女の役目だ。

畑が荒らされていたというのがどこまで異変になりうるのかは置いておくとして、頼っていけない筈がない。麟の口ぶりからするに、村人たちの間に混乱が起きているのは確かなのだから。

しかし、生憎と今はそうもいかない理由があった。

「先週から秋休暇とかで、こぞって地底に慰安旅行中なんですよ。新嘗祭も無事済んだからだそうで」

これは巫女一行に同行した魔法使いから聞いた話だった。温泉だ宴会だと、どちらかというところ報告というよりは自慢に來た気配であつたが。

確か來週まで戻らずに遊び倒すとか言っていた気がするのですが、少なくともそれまでは神社に巫女は不在になる。

「肝心な時にいないんですから。まったく困つたものです。……今から呼び戻すにしても、地底の事は不案内ですしね」

地上から放逐された妖怪達が住む場所であるということは聞いているが、私もまだ訪れたことがない所だ。そのうち実地検分も兼ねて向かおうと思つていたが、先延ばしにしていたのがいろいろと裏目に出たことになる。

妖怪たちなら連絡方法くらい知っているかもしれないな

いが、そもそもその妖怪たちに接触するのがまたひと手間である。

「分かりました、すぐに支度をしましょう。どこまで力になれるか分かりませんが」

「ありがとう、阿求ちゃんっ」

麟は顔を明るくするとこちらの手を取ってぶんぶん振る。なんとなく気恥ずかしくて目をそらしていると、そこで不敵な笑いが割り込んできた。

「ふふふ、阿求ちゃん、どなたかお忘れじゃありませんか？」

芝居がかつた仕草で帽子のつばを押さえ、立ち上がったのは蓮子さん。いつの間にか外套に着替え、すっかり出かける支度を終えている。

「水臭いなあ。不可思議不思議オカルトと聞いて、われらが秘封倶楽部が黙ってられるもんですか。私達も手伝うわよ！　ねえメリー？」

「えー……？　やめましょうよ。寒いし」

「ああもうっ、人が折角ノってるのにつ」

いまだ炬燵の中で眠そうな顔のメリーさんの柔らかな  
 そうな頬をひっぱりつつ、蓮子さんはふと表情を元に  
 戻した。

「ま、ぶっちゃけ大したことできないかもしれないけ  
 ど、手数はあったほうがいいんじゃない？」

「そうですね」

ウインクとともに告げられたのは、至極もつともな  
 意見でもあったので、私達はそろって屋敷を後にする  
 こととした。

「やだー。寒いー……」

「あーもうメリー、しゃっきりしなさいってばっ」

……若干の、抵抗があったことを付け加えておく。



被害があったというのは里からもほど近い耕地だっ  
 た。

この区画はもとは細々と豆などを作っていたのだが、

一昨年の間欠泉を伴う怨霊騒動以来、河童と山の神様  
 主導ではじまった温泉開発の一環として、地熱を利用  
 した冬小麦の栽培を試験的に行っている。

この、冬に麦を育てるという話。最初は突拍子もな  
 いものど一笑に伏されたが、導入を目指す者たちの粘  
 り強い説得と実証によつて徐々に支持者を増やし、つ  
 いには里一番の石頭と評判の大地主さんまでも説得し  
 て実現したという経緯がある。

それゆえ里の興味も引いていたのだろう。現場には  
 既に人だかりができており、おっかなびつくり半分、  
 好奇心半分の見物人たちが畑の周りに詰めかけていた。  
 「みんな、連れてきましたよー」

「おお。稗田様っ」

すっかり困った様子の農夫たちが取り囲んでくる。

御阿礼の子として注視を浴びることは慣れたものだが、  
 面と向かって頼られるとなると少々こそばゆい。

「とにかく現場を見せていただだけますか？」

「へえ、こちらです」

皆に先導されつつ、私達は畑の見える場所まで進む。そこにあつた光景は、私の想像を大きく超えるものだった。

「わー……」

「これはまた……見事なもので」

今月の頭に作付けも無事終わり、十日ほど前に様子を見に行つた時にはまるで芝生のように、青々と麦の芽が伸びていたのだが――

いまやその一面の緑にはいくつもの瑕疵ができていた。毛足の長い緑の絨毯を、巨人が無残に踏みつぶしたかのように。生え育つ最中の麦の芽が、直径数メートルにわたつて円を描いたように枯れている。

それも一か所ではない。大きさに差こそあつたが、枯死した麦の範囲は見えるだけでも十か所近くにも及んでいる。枯れた麦の白い円弧はいくつも連なり、重なり、まるで子供がけんけんぱを遊んだかのように、麦畑の中を横切っている。

荒らされた麦芽は四方八方に乱れて倒れ、背の高い

麦芽まで無残に踏みしだかれていた。

「うーん。思つてたより凄いわね、これは」

背伸びをしつつ遠くを見回す蓮子さん。

隣のメリーさんというと、防寒着で着ぶくれをしたまま、うつらうつらと舟を漕ぎつつ、寒そうに身体を丸めていた。

「……どうかしら。何か分かるの？」

「あ。これは失礼しました」

横からかかった声に振り向けば、鮮やかな秋の色を纏う姿が二つ。慌てて頭を下げ、不敬を詫びる。

秋の神様姉妹は、大層慌てている様子だった。

「いらしたんですか。てつきりもうお休みなのかと」

「こんな時に休んでなんかいられるもんですかっ！」

「……阿求ちゃん、知り合い？」

「ああ、そう言えば蓮子さん達は初めてでしたね。こちらは秋静葉様に秋穰子様。お二方とも秋の神様ですよ」

「……こんにちわ」

「はじめまして。よろしくね」

「……フランクな神様ねえ」

いきなり握手を求められ、蓮子さんもやや驚きながら自己紹介をする。外の世界ではあまり神様が歩いているのは一般的ではないらしいが、まあそれを差し引いても、仮にも神様が野良作業着姿で、村人たちに混じっているとは思わないだろう。

泥に汚れての畑仕事をやたらと似合って見えるのは彼女たちが秋の神様だからなのか、神徳ゆえなのか、他の理由なのかは——敢えて言うまい。

「穰子様は秋の収穫と豊饒を、静葉様は紅葉や落ち葉など、秋の静けさを司っておられます」

「へー。なんか凄そうね。じゃあ幻想郷だとこの二人が居ないと秋が来ないんだ？」

「いえ、そういうわけでも無いらしいですね。そういう意味では居ても居なくてもあまり変わりません。例年収穫祭が近くなってから思い出したように招待状が用意されるくらいですし」

「ちよい待てこら」

「そうよ、穰子ちゃんだって後ろめたいの我慢して頑張ってるのよ！ 私も毎日、一枚一枚葉っぱ千切って撒くの大変なんだから！」

「あれ手作業なの!？」

その労苦があるからこそ、秋の風景はどこか物悲しさに彩られているとかなんとか。

……与太話はさておき、秋の象徴であるお二人は、里の中でもっとも身近な神様だ。出番のない秋以外でも積極的に信仰を集めようと、率先して地域密着型の活動を続けているという。

見れば、畑の隅には小さな祠が建てられている。道祖神などと集合はされているが、立派に彼女たちへ信仰の証だった

「……もうなにがなんだかさっぱりなのよ。私も、お姉ちゃんもこんなの見たことないから、何か悪いことでもあるんじゃないかって気が気じゃなくて……。だって、今朝、様子を見に来たらいきなりこれでしょ？」

先程も少し触れたが、そもそも、この冬小麦の栽培を発案したのは何を隠そう穰子様である。その準備のために東奔西走してようやく実現に漕ぎ付けた矢先にこんなことが起き、穰子様はすっかり困惑している様子だった。

おろおろと畑と私の顔を見比べては訳が分からないというようにかぶりを振って、麦畑に捺された巨大な円印を示し、肩を落とす穰子様。その背中をそつと叩きながら、静葉様が言葉を継いだ。

「獣が荒らしたようにも見えないし。風にしても妙な倒れ方してるし……それに、もしそうだったら、私か穰子ちゃんが気付くと思うわ」

「確かに足跡……のように見えなくてもいいですが、こんな大きな足の生えた生き物が暴れていれば流石に誰かしの目には止まるでしょうね」

「ううう……そうよ、どうせ私なんか、満足に畑も守れない案山子以下なのよう……鴉天狗にも馬鹿にされて、写真も撮ったそばから捨てられそうになるくらい

だし……」

「そ、そんな事ないわよ、穰子ちゃんっ！」

放っておくとそのうち厄神にでもなりそうな気配の二人がやや気にはなつたが、とりあえず脇に置いておくことにして、私は村人たちに向き直った。

「まあ、これが何かはひとまず後回しにします。先に状況を確認しましょう。……今朝まで誰も気付かなかつたんですか？」

ざわざわと問い交わす村人たち。

程なくして、最後に畑で作業をしたのは一昨日の午後であるということが分かった。

「一昨日ですか。昨日は？」

「私が見回ってたの。天気も悪くなかったし、ざっと柵のほうだけ。このへんは見てなかったけど——」

後悔を滲ませ、口をつぐむ穰子様。

「ああ……なんで確認しなかったの私の馬鹿……っ。

ああ、もうなにもかも嫌……鬱だ死のう……」

「落ち着いて穰子ちゃんーっ!!」

「……ねえ、この子達いつもこんな感じなの？」

「大体は」

もともと季節をつかさどる神様ゆえ、秋以外は大概こんな感じではある。

親しまれている割に、一部を除けばいまいち知名度のないお二人だ。例年、収穫祭に呼ばれる度にバツの悪い思いをしていただけに、今回の件は応えたのだろう。

しかし、神様に頼られるのは悪い気はしないが、神様の他力本願というのもどうなのだろうか。

「人為的なものだとか仮定してですが、一昨日の午後——大体お昼過ぎくらいから、今日の朝早くまで、この畑をはつきり確認してる人はいないわけですね」

「……ふむ。アリバイは絞り込めなさそうね」

「もう芝居でも啖呬売でもいいわよ……」

落ち込むお二人が見ていられなくなったら、隣も不安げな顔をする。

「阿求ちゃん、どうかな？」

「ふむ。これだけですとなんとも言えませんが……」  
これまで読んだ文献などを思い返し、記憶を巡らせてみるが、困ったことにこの状況に重なるようなものに覚えはなかった。

私が黙ってしまったことで、その場の一同にはつきりと落胆があらわれる。野次馬の中にもさざ波のように不安が広がり、辺りには重い沈黙が落ちる。

これは余り良くない予兆だ。さてどうしたものかと思案を巡らせていたところで、蓮子さんがひよいと手を挙げた。

「阿求ちゃん。いい？ 私ちょっと心当たりあるんだけど——」

「『本当!?』」

「うわあ!? ちょ、落ち着いてっ」

「これが落ち着いてられますか!? なに? なんなの!? とつとつと白状しなさいっ」

「わかった、わかったから離してっ、首、首締まるから!!」



言うなり秋の神様姉妹に縋りつかれ蓮子さんはそのままべしゃんと押し倒されてしまった。二人に押し掛かれながら、蓮子さんは身体を起こしてお尻をさすりつつ、

「けほっ。……うー。あのね。これ、ミステリーサークルじゃない？ メリー」

「あふ。そうねえ……」

「それは推理小説ばかり読んでいる集まりか何かですか？」

聞きなれない言葉に首をひねれば、蓮子さんは違うと手を振ってみせ、

「んーとねえ、私も昔の文献で読んだだけなんだけど。分かりやすく言えば、こんな風に稲とか麦の穂が規則正しく倒れたりしてできた円陣サークルのことよ。クロップサークルとも言うんだっけ？ 海外だと特に有名で、UFOが降りた場所にできるとか、宇宙人の実験跡だとか、メッセージとか言われてたらしいわ。えっと……ほら、これ」

蓮子さんは胸のポケットからメモ帳を取り出し、頁をめくって示して見せた。そこには新聞の切り抜きと思しき古びた記事のスクラップがあり、私と一緒にあって覗き込んだ穰子様が声を上げる。

「これよこれ!! みんな見て! そっくりじゃない!!」

切り抜きの写真には、広い麦畑と思しき場所のなかにいくつも重なる規則的な円と線が映っていた。確かに今、目の前にある光景と良く似ているようにも思える。

「宇宙人と未確認飛行物体……ですか」

困ったことにどちらにも心当たりがある。とくに後者は、つい最近里を騒がせた正体不明の飛行物体として有名だった。

野次馬の中にもそう思った者がいたようで、場はにわかに騒然とし始める。

「じゃあ、これはそいつらがやったっていうの!？」  
「んー。それなんだけどさ」

蓮子さんはがりがりと後ろ頭を掻きつつ、次のページをめくる。そこには老年の男性を写した写真があった。

「ただね。これがそうだとしてよ？ 一つ問題があるの。ミステリーサークルって、一時は数百、数千って見つかるくらい有名だったんだけど……後になってから、大半が捏造だったのがわかったのよ。一番最初にこれを悪戯で作った人達がいて、それを真似した人がさらにたくさん模倣を広めたってわけ。一種の流行因子<sup>ムー</sup>よね」

つまり、ミステリーサークルの大半は、悪戯のような目的で作られたものだったのだ、と蓮子さんは語る。「だからこそ廃れて幻想になったとも解釈できるわ。その気になれば数人で、一晩もあれば作ることができるのよ。それこそつと大掛かりなものでも簡単にね」「成程。特別な能力がなくても、誰でもやろうと思えば可能ということですか。ややこしいですね」

つまり。外の世界において幻想になりつつも、ミス

テリーサークル自体は人為的なものでもある、という訳だ。

微妙に厄介な話だった。

「そうなっちゃうわ。でも、誰かの悪戯だとしても動機がねー。わざわざこんなこととして注目浴びたがる目立ちたがり屋なんているのかしら？」

「なんとも答えにくいですね。……里の人間の中に、そうしたものがいるのかと聞かれれば、ほぼその線はないでしょう」

農耕はなによりも生活に根差したものだ。里で育てば、畑や作物を悪戯半分に扱うことは一番してはならないことだと最初に教わる。

私も昔、それなりに——恥ずかしながら自分の生まれをあれこれと鼻をかけていた時期があつて、ついついかり畑の事を軽んじるような事を口にした折、慧音先生から激しい教育的指導を受けた覚えがある。

——寺子屋でのお仕置きの一発は、里の人間なら一度は食らったことがあるだろう。麟をはじめ、村人た

ちも顔を見合わせ、同じことを考えたようだった。

「じゃあやつぱり、妖怪の仕業なのね!？」

「そう考えるのが自然……ではありますが。人を不安がらせたり驚かせて腹を満たす妖怪ならそうした悪戯に手を染めるようなことはあるかもしれませんね」

とは言え確信はなく、私としてもいまいち齒切れの悪い応答をせざるを得ない

「あー、別にそうだって証拠がある訳じゃないんだけど……」

「いいえ、妖怪に決まってるわこんなの。よおし、そうと決まったら早速懲らしめに行つてやらなくちゃ!!」

蓮子さんも自信は持てていないようだった。しかし、既に穰子様は聞こえていないようで、立ち直った彼女を中心に、村人たちから声が上がる。

「とりあえず未確認飛行物体の方から当たりましょ!今はえつと……命蓮寺だっけ? あそこならすぐに行けるから——」

「……………」

なんとなくすつきりしないものを感じつつ、私が腕組みをしていると。

「んー。違うわよー?」

ふわあ、とまた大きな欠伸をしながら、皆の前に歩み出る姿があつた。

「むにゃ。名探偵さん、残念だけどの推理も今回はペケね。まあ蓮子の予想が外れるなんていつものことなんだけど」

「なんだとー!？」

「この犯人は、妖精よ」

微笑んで、メリーさんは大きく乱れた麦の根元から、何かを摘み上げる。

白い色をしたそれは——

「茸?」

スコッチ・ジョンネット  
「芝生。茸。これね、妖精の輪よ」

そう言つてメリーさんは麦の根元を示す。蓮子さんと共に覗き込んでみれば、枯れた麦芽の円弧に沿うよ

うに、白いキノコの傘がいくつも並んでいた。

「昔、お祖母ちゃんに教わったわ。秋になると、夜中の誰も見ていない時間を見計らって、妖精が輪になって踊るの。そこにこうやって茸が生えてくるのよ」

メリーさんの説明によれば、それを妖精の輪、あるいは魔女の輪とも呼ぶのだそう。その正体は、土壌の表面浅くに成長した菌糸——つまり茸の塊だということ。一番大きく育った例だと、直径数キロなんて記録も残ってるわ。世界最大の生物ね。……確か、円状に育った菌糸の先端で茸が生えてるのよ。ほら、蓮子」

「え、私？」

「いつも私ばかり肉体労働させられてるんだから、今日くらいは代わってくれてもいいんじゃないかしら？ それとも、私と貴女の眼を取り替えてみる？ 案外、似たような景色が見えてるだけかもしれないけどね」

そう言つて、メリーさんは手近にあつたスコップを示した。笑顔の迫力に押されつつ、蓮子さんは渋々と

それを受け取り、枯れ麦の円の中に踏み入ってゆく。

「……このへん？」

「そうね」

頷いたメリーさんに応え、蓮子さんは枯れた麦芽の散る地面にスコップを突き立てた。スコップの刃がざくりと深く土を掬うと、枯れた麦の根に混じって、白い帯状の層がある。

それは確かに、白く絡み合つた茸の糸の塊だった。

「ね？」

それを覗き込み、にこりと微笑むメリーさんに、周囲からおおっと歓声上がる。

遮るもののない、栄養の豊富な土壌に根を下ろした菌糸は、四方に——いや、正確に表現するならば、落下した地点を中心にして同心円状に成長してゆく。

茸の成長は麦などよりもはるかに早い。そのため、地面の栄養を吸われた麦は枯れてしまう。そうして出来上がったのが、この丸く切り取られたような円弧なのだ、ということだった。

「たまに、茸が傘を作るときに逆に草木の成長を高める成分をつくることもあるの。だからこんなふうに変に麦が伸びてるところもあるのよね」

荒れた麦の中、ひよろりと伸びた背の高い麦芽を摘まんで見せるメリーさん。驚いたことに、その麦にはすでに若穂がついていた。

かくして茸の仕業により、今回のような不思議な円ミステリーサークルが生じたのだと解説を終えて、メリーさんはもう一度小さく欠伸をした。

寝ぼけまなこの名推理に、なぜだか周りから拍手も起こる。……基本的に皆ノリがいいのはいつものことだ。

「でもこんな茸、見たことないわよ?」

そろって首を振る秋の神様姉妹。花屋として草木に広く通じる隣もそれに首肯する。私も生憎と知らない種類だった。

……もちろん専門家の三人に比べれば、茸にかけては素人目ではあるが。

「ふむ。とすると、外来の種類かもしれないね。メリーさんのお祖母様がご存じであると言うなら舶来のモノと考えるのが自然ですし。穰子様、静葉様もこの国にない茸のことまでは知らなくてもおかしくないですね」

ここまで来ると、犯人は自ずと絞り込める。人里にも顔を出し、茸を扱うと言ったら思い浮かぶのはたった一人だ。

……先日我が家を訪ねてきた白黒の魔法使いが、この近辺を通りかかったかどうか。その問いかけには、無論想像通りの答えが返ってきた。

案外、本当に妖精の悪戯ということもありうるが、それは後から考えればいいだろう。

「いずれにせよ、茸が要因であるというならこの土を除けてしまえばこれ以上は広がりませんか」

「よし、じゃあ早速やるわよ!! みんなも胞子が散らないように慎重にね!!」

腕まくりと共に、神様姉妹の号令に従って村人たち

が氣勢を上げる。

「え、私も!？」

「手数が多い方がいんでしょ？」

なし崩しに、スコップを持っていた蓮子さんもそれに巻き込まれていた。

そうして作業の始まった畑の端、メリーさんはつまんだ茸の傘を見て、ウインクをひとつ。

「折角だから食べちゃいましようか？ たしか芝生茸ってクッキーに使うと美味しいのよ」

「本当ですか？」

私の問いかけに、メリーさんはのんびりと頷いた。



——後日。地底旅行から戻った森の魔法使いのポケットから、芝生茸の胞子がみつかり、事件はめでたく解決の運びとなった。

彼女曰くわざわざ遠方から取り寄せ、苦勞して交配

させた種類であったという。どうも最近まで幻想郷にはない種類だったため、一気に繁殖が進んだのではないかということだった。

蓮子さん曰く、生命力や活動力で勝る外来種が在来の種を駆逐してしまうということは、外の世界でもたびたび問題になっているらしい。

容疑者は魔法の研究だと言い張ったものの、畑を台無しにしたことが帳消しになるわけもなく。神様直々のお説教は避けられなかったようだ。

……もともと、後にこの芝生茸の成分が麦の成長を助けることがわかり、結果的に怪我の功名となって、最終的には畑への被害は不問に処されたという。

かくして秋の終わりのミステリーサークル事件は一件落着と相成った。

芝生茸のクッキーは、ほんのりと甘く香ばしく、紅茶によく合ったことを最後に記しておく。

#2 華胥の国にて夢に餓え

よく晴れた穏やかな午後。高く澄んだ青空の下、我々秘封倶楽部はいつものように、幻想郷は稗田邸を訪問していた。

「こんにちはー阿求ちゃん」

「お邪魔しますー」

「おや」

筆を鼻下に挟み、腕組みをして難しい顔をして文机に向かっていた阿求ちゃんがふと顔を上げる。

「お仕事中だった？　なんかいつもごめんね。連絡もしなくてさー」

「いえ。今日明日にしなければならぬことというわけでもありませんし。一息入れることにしましょう」

幻想郷への日帰り旅行が日常になってはや三ヶ月。

このやり取りもいまやすっかり馴染んだもの。

メリーの眼を通じての移動が時間のずれを挟むため、私達の来訪が唐突なのは仕方のないことなのだが——まあ、最近はいふ問題なくこちらに来ることができるようになった。

「あ、これお土産。合成品だけど」

「いいえ。洋風の甘味は大歓迎ですよ」

ドライアイス入りのケーキの箱を掲げてみせると、阿求ちゃんはやったー、という笑顔を覗かせる。

普段は落ち着いた物腰の彼女でも、ふとした時に見せる年相応の反応はやっぱり微笑ましいというか、可愛いなあとと思う私でありました。

机の上を片付け始めた阿求ちゃんは、手元のペルをりと鳴らす。すぐにやつてきたメイドさん——いや、女中さんか——が、さっそくお茶の用意に走っていった。

「早速いただくとうれしい。紅茶でも用意させます。丁度いい葉が入ったところでした」

「お構いなく。阿求ちゃんに会えるだけで十分よ」

ほどなく机の上には洒落たティーセットと銀のフォークでお茶の準備が整い、私達はそろってお茶の時間を楽しむこととなった。

「ん……やっぱり天然の茶葉は違うわねえ」

淹れたての紅茶の香りをうっとりとして楽しむメリーさん。

「成分的には合成品も同じだって言うけど、とてもそうは思えないわ。そもそも新茶道じゃ紅茶なんて飲めないしね」

「私にはこのケーキに牛乳も小麦も、苺すら使っていないと言う方がよほど信じられません」

はむりとショートケーキの一切れを口に運び、阿求ちゃん。

科学世紀の時代を掲げて以来、多くの人々が口にする食物のほとんどは合成品だ。天然ものが皆無と言うわけでもないが、多くは嗜好品と位置づけられている。実際に生まれてから合成品しか口にしたことがないという人も珍しくはなく、天然ものの食材の強すぎる土

や血の味を受け付けない人も多い。

前世紀をはるか昔の出来事とした私達の世代では、多くの人々が食物連鎖からも抜け出し、生まれてから一度も他の生命を口にせず生きているのだ。

「食事は本来、輪廻と同様に生命の繋がりで。生物は自分の命のために他の命を食べることで業を負うものですが——お話を聞く限り、それから解放されたはずの世のほうが、なにやら却って罪深いような気がしますよ」

「閻魔様と顔馴染みの人から聞くと重いセリフよね」  
自然は人の手には及ばないものという常識はかつてのものだ。現実はいよいよヴァーチャルとの境目をなくし、自然と作り物の区別も曖昧になるばかり。

そうして人工物が自然を駆逐するたびに私は思うのだ。そもそも人間っていうのは、考える葦なんてヤワで繊細なイキモノではないんじゃないか、と。

私達が過ぎ去った時代の残る幻想郷に惹かれる理由のひとつも、そんなところにあるのかもしれない。



「まあ、お茶にお菓子が美味しければ乙女としては結構どっちでもいいことなだけどき」

「ふふ。違いありませんね」

もつとも、こうしてくすぐすとこぼれる笑みが、恐らくは一番の理由なのだろうけど。

「ふわあ……」

しばらく他愛ないお喋りが続いた後、私は込み上げてきた欠伸に背を伸ばした。目元に浮かんだ涙をぬぐい、小さく頭を振る。

「お疲れのようですね？」

「んー。昨日徹夜でレポート終わらせたからね……一応仮眠は取ったんだけど、なんか夢見悪くて。元氣健康が健全なサークル活動の第一歩なのに」

「あら。蓮子が夢を見るなんて珍しいわね」

「人を人形みたいに言わないで欲しいわ。……あふ」

「講義中に寝たりするからよ」

「……起きてたわよ9割くらいは。メリーだって普段から半分眠ってるみたいなものじゃない。私と話して

る時だって、ホントに目が覚めてるかも怪しいし」

「ひどい。私そんなに寝惚けたりしないわよ？」

「そうかなあ。この前パジャマのままキャンパス歩いてたのは覚えてないの？」

「え、何その話っ!？」

もちろん冗談なのだが、慌てるメリーが可愛いのでネタばらしは黙っておくことにする。

「夢見が悪いなら、いい薬があるそうですよ？」

そう言うと、阿求ちゃんは赤と黒の錠剤が詰まった瓶を取り出した。良い夢を見ることができるといふ触れ込みで兎の薬屋さんが置いていったという、胡蝶夢丸というものらしい。

「どうです？ 試しにお一つ」

「……ん。気持ちはありがたいけど遠慮しとくわ」

効能が本物ならさぞ価値のあるものかもしれないが、生憎と、それは私の主義じゃないのだ。

「夢見は良くても悪くてもダメなのよ。夢って、睡眠中に脳が記憶を整理するときの作用なんだから。覚え

てること自体が脳が休まってない証拠なんだし」

乱暴に言ってしまったえば、夢は脳のデフラグ中に見えるノイズのようなものだ。

だから基本、夢には自分の知り得ないこと、理解の及ぶもしないものは出現しない。多く、過去の記憶や体験——それがリアルであるかフィクションであるかは置いておいて——の入り混じったものとなる。

絡み合う蛇の夢を見てペンゼン環を見つけた話や、悪夢から吸血鬼を生みだした話など、夢が生んだ着想という話も枚挙に暇がない。——が、私にはあまりそれが良いこととは思えなかった。

夢日記は続け過ぎると気が触れるともいう。実際の体験ではないことを現実と取り違え、本当に起きたことを見失ってしまうからだ。

そんな事をとりとめもなく話していると、阿求ちゃん、ふむ、とどこか面白そうな顔をして、

「では、今日はまさに絶妙の機会だったかもしれないませぬね」

「なにが？」

「これから人と会う約束があったんですが、これで蓮子さんの悩みも解決できるかもしれませんよ？」

「……どういうこと？」

意味が分からず首を捻っていると、襖の向こうからお客様ですと声が掛かる。

「いえいえ。すぐにわかります。丁度いい具合に見えたようですしね。……お通ししてください」

阿求ちゃんはそう言って微笑んだのだった。



お客さんというのは、慧音さんだった。

上白沢慧音さんと私達は寺子屋の先生役を引き受けた時に知り合った仲だ。折り目正しい正座で、ぴしつと背中を伸ばして座る彼女に、思わずこちらも背筋が伸びる。

「貴方達も来ていたとは思わなかったよ。無作法で申

し訳ない。稗田も先客がいるなら、そうと知らせてくれていれば手ぶらでなど来なかったのに」

「ふふ。折角ですから、お二人にも見て頂こうかと思ひまして」

いまいち話が見えないままに、顔を見合わせるメリーと私に、慧音さんは改めて向き直り、深く頭を下げる。

「ともあれ、先日は色々世話になった。改めてお礼には伺うつもりだが、この通りだ」

「そんな。こちらこそ邪魔しちゃったみたいで」

「いやいや。あれはなかなか子供たちにも好評だったんだぞ？ もし良ければ今後も続けて欲しいという声もあつたくらいだ」

「あら。蓮子、大人気じゃない」

「……先生なんて柄じゃないわよ」

幻想郷ではあまり数学や物理といった学問では盛んではないらしく、不得手だと言う慧音さんに代わって教卓に立つことになったのである。

半分は社交辞令なのだと思うことにするが、こうまで持ち上げられると何ともむず痒い。

「さて、それじゃあ慧音先生」

「ああ」

慧音さんは、脇にあつた小さな藤の籠を机に置いた。

「これ？ 面白いのって」

「ええ」

阿求ちゃんに促され、何事かと見れば。

籠は小さくもぞもぞと動き、布でくるまれた中身がちよこんと顔をのぞかせた。

「わ、可愛いっ」

メリーがぱあつと顔を輝かせる。

白と黒の身体に、ユーモラスに伸びた鼻。つぶらな目をこちらへと向けるその生き物は――

「これって……」

「獺ばくですよ。つい最近、里に下りてきたのを捕まえましてね。これまでは滅多に見られなかったんですが――」

阿求ちゃんは傍らの書簡の中から一冊を引き抜いた。そこには目の前の生き物と同じ絵姿が記されている。

「おお。北斎画だな」

ふむ、と慧音さんは頷き、指を一本立てて、

「白楽天は『白氏文集』の『猿屏 賛並序』に曰く。

『猿者 象鼻犀目 牛尾虎足 生南方山谷中

寝其皮辟瘟 圖其形辟邪』。

「猿というもの、鼻は象、目は犀であり、牛の尾と

虎の足を持ち、南方の山谷に生息する獣である。その

毛皮は湿気を跳ね除け、その姿は邪気を払う。」

いかにも先生然としている雰囲気。慧音さんだったが、

そんな古典の一節がすらすらと出てくるところを見るに、やはりその見識は相当なものだ。流星はハク

タクの面目躍如と言うことなのだろう。

「手足が虎で尾は牛——まるで鶴ですね」

「それも近いな。秦国などでは猿は釈尊の乗騎として

も有名だが、そこでは猿はさまざまな動物を作った時

に余った材料から作られた生き物だともされている。

そのために『混ぜ物』などと呼ぶこともあるらしいな」

「へえ……」

猿の赤ちゃんは恐れる様子もなく、メリーの指先に、

目を細めて顔を擦りつける。人懐っこどこかのほん

とした表情は実に愛嬌があつて、なんとなくメリーの

雰囲気にも似ているような気もする。

「猿は麒麟や獅子と同じく、空想上の幻獣と同じ名前

を持つ実在の動物が居るのだが、そのふたつが良く似

ているという稀有な例だ。

いわゆる霊獣の麒麟や獅子は、同名の動物とは大き

く異なるが、猿の場合はどちらかと言うとまず実在の

動物が先にあって、そこから邪気を払うという属性

が付加され、霊獣となったのかもしれない」

慧音さんはそう言う、ティーカップに薄く口を付

けた。

「……この邪気を払う、という性質がさらに時代を下

るにつれて魔除けとして扱われるようになった。江戸

の中期にはすでに悪夢を払うための霊獣として、広く

版画や絵姿として親しまれていたようだ。麒麟や鳳凰などの四瑞獣に並ぶほどに信仰を集めていた記録もある。

他にも、<sup>ブラジル</sup>伯刺西爾などでは妖精を乗せ虹の橋を渡る靈獣だとされているらしい」

「ああ、それ聞いたことあるかも」

愛嬌のある獺の顔は、人の嫌なものを飲み込んでくれるという性質がびつたりに思えた。

獺が夢を食べてくれるということから、枕の下に獺の絵を入れるなんて風習があるのだとか。

「――『みし夢をばくの餌食となすからは、心も晴れしあけぼのの空』。悪夢払いのおまじないですね」

「じゃあこの子も、夢を食べてくれるの?」

「いい質問だ」

メリーの質問に、慧音さんは満面の笑顔。すっかり先生の顔になって、慧音さんは懷から小さな包みを取り出した。ちゃらり、と包みの中のものを手に乗せて、獺の鼻先にそっと差し出す。

慧音さんの手の上、鈍く光る黒い塊に、ふんふんと鼻を鳴らして。小さな獣はそのままそれに齧り付いた。

「……えーと。それ、なに?」

「<sup>やじり</sup>鏃だよ」

「鏃って……矢の?」

「ああ」

予想外の答えに呆気にとられる私達をよそに、獺の赤ちゃんは、ぱりぱりと小気味いい音を立てながら、矢を平らげてゆく。

「先程の「獺屏 賛並序」において『按山海經 此獸食鐵與銅 不是他物』とあってな。山海經――これは大陸古代の伝奇的地理書の中でも最も有名な書物のひとつだが――これはその引用のくだりだ。これによれば獺とは鉄を食い、それ以外のものを食べることはないとされている。

これはどうやら同じ白黒の動物である大熊貓<sup>パンダ</sup>と混同されているらしい。『爾雅』――これは大陸最古の類語・語釈辞典だが、その釈獸の項目の中に既に『獺』

の名を見つけることができる。……もつともこれは単に名前があるというだけだが、爾雅の解説本である晋・宋代の『爾雅注疏』卷十一 釈獸第十八には『獾』について『注似熊 黑白駁七 能舐食銅鐵及竹骨』と記述があるんだな。

「獾は熊に似ており、白黒まだらの身体を持ち、銅や鉄、竹を食べる」——と、まあこう記されているわけだ。私も驚いたのだが、事実こうしてこの子は獾を好む。

……実のところ、ここで言われている銅鉄と言うのは、『箭』。つまり弓矢のことだ。もともと古くの弓矢は竹（笹）で作られており、これを食べる動物として同じ白黒の動物である大熊猫がいた。そこから矢を食べる動物と言う話ができ、後に金属加工技術が進んで矢が鉄で作られるようになって、矢を食べるという性質は変わらず伝えられた。

そこから転じて鉄を食うものが獾である、となったのだらう。これも妖怪の生まれ方の一端を示している

のかもしれないな。

少し話は逸れるが、大権現を祀る野州の東照宮には、七十を超える数の獾の彫刻が居てな。これは魔払いの靈獣であるとともに、『鉄の武器を喰らう』という獾の性質をもって、軍備の縮小と泰平の世が長く続く事を願っているともされているのさ。つまり、ここから言えることはだ——」

「……慧音先生。」

「ん？ あ、……すまない」

半目になった阿求ちゃんに釘を刺され、慧音さんはこほんと顔を赤くして咳払いを一つ。いつの間にかうつらうつらとしていたメリーと私は慌てて姿勢を正す。「あ……ん。いかな、つい熱が入ってしまった。所構わず講義を始める癖は直せと良く言われているのだが、どうもこればかりは性分だね」

照れ笑いと共に言う慧音さんだが、さっきの様子では放っておけば一日でも二日でも話し続けていそうである。

……なんというか。彼女の授業を受けている子供たちというのは大変だろうなあと、他人事のように思う。「——んんつ。夢を食うという性質についてだったな。広く猯は墓を鎮護する靈獣であるとされる。先程も少し触れたが、『大典・祠部中職』等に見られるように、大陸では本邦よりもずっと古く、唐代には既に魔除けのための姿絵などに使われていたらしい。

これがどうして悪夢を食うのかという話になるが、もともと猯の邪気を払うという性質が、海を渡ってくる関係で他の妖怪と混同されて広まったもののようにだ。『酖中清話』などで推測されているが、夢を食べる莫奇なる神との混同があるのではないかと言う説が有力だな」

「ふえー……。さすが慧音先生、詳しいのね」

「……いやなに、白澤と猯は親戚のようなものだからな」

「魚心あれば水心ですかねえ」

阿求ちゃんの補足によれば、猯王像などいくつかの

例で、魔除けとして祀られる猯は人面牛身虎尾で額と腹の両側に各三個ずつ、計九個の眼をもち、白澤の特徴を備えているのだという。確かに言われてみれば、人を守る鎮護の靈獣として、猯とハクタクには共通点も多い。

「案外、この子も慧音先生のお子さんだったたりということはありませんか？」

「な、何を言い出すんだっ!? わ、私はその、そんな……」

「冗談ですよ。慧音先生にはもう大事な方がいらつしやいますものね？」

「ひ、稗田、からかうんじゃないっ」

「あら、こちらは本当のことですよ？」

「っ……………」

悪戯めいた表情で笑う阿求ちゃんに、慧音さんは顔を赤くしつつかを嚙んでしまう。

微笑ましい光景を見つつ、私はふと疑問を口にした。

「ねえ阿求ちゃん、さっきちょっと気になったんだけ

ど。今まで幻想郷に獺<sup>た</sup>っていなかったの？」

「……ええ。そのようです。記憶には少々自信はありますが、伝承などに名前を見ることはできても、実際に獺が確認されたことはないはずですね」

「なんで今になって見つかるようになったのかしら？」

「んー……」

答えに詰まった二人に代わって、口を開いたのは獺を撫でていたメリーだった。

「そうねえ、多分……夢と現実が同一視されるようになったからじゃないかしら」

そう。良く出来たヴァーチャルは、現実と等価である。いまや夢と現の境は取り払われ、魂と霊脈、意識の奥へと領分を広げた科学は、ひとの夢も侵略し始めている。

それはメリーの持論であつたし、私達の社会の主流でもある。

「……成る程。胡蝶の夢か」

慧音さんはそつと顎に手を当てて、

「歴史というものが広く人口に膾炙<sup>かいしや</sup>し、伝えられる広義的な過去の共通認識であるとするなら、夢は共有化されない個人の記憶だ。

人に喋らずに抱え込むことで、夢は正夢となるという話もある。それは他者からの干渉を受けないためのまじないなのだろうな」

夢は太古の昔から、あくまでも個人のものだった。眠っている時に見る夢も、起きている時に見る夢も、

突き詰めれば自身から生まれ、自己に帰結するものだ。

とすれば、多くの夢を現実として共有するようになった時代に、もう悪夢を食べてくれる獺は不要のものであるのだということなのかもしれない。

「然るに、外の世界では夢のない者が増えているというわけではないだろうか」

「……夢もキボーもありゃしないわね」

やるせない感想と共に肩をすくめてみる。慧音さんも重々しく頷いて、

「先程の「獺屏 賛並序」には、人間たちが戦争で武



器に鉄を使い、死者を吊う仏像を作るために銅を使ってしまうため、獺が食べるものを失ってしまい非常に困っているという一節もあつてな。

これは森林伐採による野生動物の被害を示しているとも取れなくもないわけだが――」

食べる夢を失くした獺は、かくして夢を追ひ求め幻想郷へとやってきた。そんなことなのかもしれない。

「つまり、夢を食べる一番の怪物は人間だつてことね」「オチにしても酷い話だな」

なんとも締めりのない話だが、多分そういうことなのだろう。

籠の中で獺の赤ちゃんは、まだぼりぼりと鏃の切れ端を齧っていた。

(了)

(参考文献)

「中国古文献中のパンダ」 荒木達雄

東京大学中国語中国文学研究室紀要 第9号

2006.4.pp.1・22

<http://hdl.handle.net/2261/6584>



## 幻想科学ティータイム

初出:境界から視えた外界(2010/11/28)

ジギザギさんの、当り前のように幻想郷に行き来して阿求と知り合いになってる秘封倶楽部というスタイルに感銘を受け、こういう二人も面白いんじゃないかと思って作ったお話。

順に阿求、蓮子の視点となっておりますが、実は同時に頒布した R18 作品の幻想科学スィートタイムがメリー視点でありました。こうして見るとメリーだけ謎めいてていい感じではないでしょうか(適当)。

調べてて知ったのですが、獺がパンダと混同されて鎌を食べるようになった、というのはなんとも面白いお話でありました。当面幻想郷に獺は出てこないだろうと思ってたんですが、なんとも月日の経つのは早いものです。

## 冥土の旅の一里塚

雁は北に郷い雪割りて麦伸びる睦月、日毎に池に張る氷も厚さを増す小寒の朝。冬至より一陽起こり益々冷える日が続いている。

朝食後のひと仕事を終え、日も昇って随分経つというのに、いっこうに寒さが緩む気配もない。火鉢の傍で頼杖を突いているのにも時間を持て余し、気分転換にと散歩に出かけることにした。

「阿求様。お出かけですか？」

「ええ。お昼は外で食べてきますので」

文机を片付け、新しく用意させた外套を羽織り雪沓を履いて、玄關へ。庭の手入れをしていたヤエさんに声をかけて門を出る。

「……ふむ」

ほうと吐いた息も白く凝り、手袋の上からも指先が

冷たく痺れる。一面の雪が里を覆っていた。

道の端に片付けられて積み上がり、曲がり角の塀の上には並んだ雪兔。辻には色とりどりの帽子を被った雪達磨が並んで通行人を見送っており、思わず口元が緩んでしまう。

袖を重ねてぶらぶらと、足の向くままに大通りへと進む。松の内も末となり、新年の色合いもだいぶ薄れる中ではあったが、屋台や茶店は初春の喜びを祝うように今日も店を開け、支度の煙を昇らせている。

あたりに満ちる湯気と良い匂いのなか、ふらふらとあちこちを覗いていると、なんとも珍しい顔に出くわした。

「おや、御阿礼の」

蒸かした饅頭を売る茶店の軒先。長椅子に腰をおろし浅葱の外套を羽織って、もふもふと蒸したての餡饅にかぶりつくその様は、まさに威風堂々。彼女がそこに居ることの違和感を微塵も感じさせない堂に入った姿である。

「……いやあ、今日も寒いねえ」

「ええ、全く」

彼岸の死神、小野塚小町は、商売道具の大鎌を傍らに、にこにこ手を上げていた。

どこで買いこんだか、徳利の甘酒までかるく引っ掛けて、くうーつ、と顔をほころばせる赤毛の死神小町。

まるで一仕事終えた夜勤明けのような素振りだが、転生の準備の閻魔様の手伝いで地獄の内情を知っている私は、いまの彼女が確実に勤務時間であることを知っている。

それでおこの素振りなのだから、いやはやサボタージュの泰斗の名に恥じぬ怠けぶりであろう。

「いいんですか、こんなところで油を売っていて」

「いやいや。息抜きだよ息抜き。ちよいと休憩さ」

傍らに積み上がる皿と杯を見れば、小休憩どころか明らかに小一時間は確実にここに居たのではないかと思えるのだが、彼女はそれで済ませてしまうつもりらしい。

大体、彼女の職場は中有の道の向こう、三途の川であるはずで、軽く休憩するにしても精々がそちらの茶店であろう。それをわざわざこんな時刻から人里まで出張って来ているということ自体が胡乱であり、そもそも今朝、真面目に職場に顔を出しているのかも甚だ怪しいと言わざるを得ない。

不真面目な死神を前に息を吐いて、腰に手をあてる。

「息抜きは結構ですが、松の内に死神が人里をうろついているというのは余りにも風文が悪くはありませんか。この時節、落語の中だつて顔出しは自重しますよ」

「あつはつは、生き死になんてのはそこらじゅうに転がってるもんさ。諸行無常の響きつてね、気付くか気付かないかぐらいの違いでしかないよ」

「……上手いこと言つたつもりですか」

街中を歩いていてはつたり死神に出くわす方の身にもなつて頂きたいものだ。顔見知りの私ですら、文字通り寿命が縮まる思いである。

彼女の上司の苦勞を思いながら、痛む額に手を当て

ていると、小町さんはまりと口元を緩めて、

「それに、そう言うならそっちにもおんなじこと言つてやりなよ」

「んにゃ？」

小町さんが指差した先には、隣の卓の上で熱そうに鯛焼きを頬張る少女の姿があった。

深い緑の衣装を纏い、三つ編みに編んだのは奇しくも同じ赤毛。リボンの下からは黒い獣の耳がピンと伸び、そわそわと周囲を窺っている。

火焰猫燐。一見して猫妖にも見えるが、その実は旧地獄の怨霊の管理も司る火車なのだ。不吉さで言えば右に出るものがない妖怪だった。

「……貴方まで」

がくりと肩を落とす私に、彼女はバツが悪そうに齧りかけの鯛焼きを背中に隠し、ちよいちよいと猫のよう丸めた手を振って見せる。

「あはは……つい誘惑に負けちゃってねえ。ほら、小町ねえさんも奢ってくれるって言うし」

「いえ、まあ、良いんですがね。……いやはや、今年は春から縁起が宜しくないようです」

「やれやれだ、嫌われたもんだねえ」

「しょうがないよ小町ねえさん、お互い因果な商売さ」

「……………」

言いたいことは山ほどあったが、大人しく飲み込んでおくことにする。

さりげなく傍に立てかけてある猫車に視線を送るが、幸いなことに今は空なようだった。年の初めから見たくもないものまで見ずに済んだことに、内心胸を撫で下ろす。

……それにしても。

「凄いきり合わせですね」

少なくとも町の茶店で揃うような顔ぶれではないだろう。呆れ半分でそう言う、燐さんは人懐こそうに眼を細めて、

「いやあ、小町ねえさんとはこれで3度目なんだけど、なんか意気投合しちゃってねえ」

「……だいたい出会いのきっかけは想像が付きませんが、商売敵みたいなものじゃないんですか、貴方達は」

火車と死神、共に人の死後に関わる存在ではあるが、輪廻と魂の転生のため死者の魂を導く死神と、無念や罪業に頓着なく死体を地の底へと持ち去る妖怪では、そもそもが相容れない筈だ。

死神にしてみればどんな極悪人だろうと死後の裁きは受けさせねばならないだろうし、火車にしたってその為に死者を丁重に弔われれば持つてゆく死体も失われてしまう。

一緒にお昼を食べるどころか、出会い頭に争っていてもおかしくないはずなのだが。

「そうでもないよ？ 小町ねえさんなら鬼籍きせきで人間の寿命はすぐにはわかるからね、あたしも効率よく死体ねんりづうを集められるってもんさ」

「無縁塚じゃあ、身元不明の仏サンなんかしょっちゅうだからねえ。あたしもお勤めだから魂は連れてかにならないうけど、亡骸の方は野晒しってんじゃ浮かば

れるもんも浮かばれないからね。

それであそこが殊更に不吉な場所だって言われちゃ、余計な罪業まで積もっちゃう。未練も不幸もどこかで断ち切らなきゃならないのさ。縁が無いからって無念まで募らさせるのは死神としても捨て置けないだろう？」

「……成程。そういう見方もある訳ですね。地獄の炉の焚き付けにされる側としては些か容認しがたい部分もあります」

名前繋がりで卒塔婆小町を氣どっているわけではないと思うが、痩せた犬の腹を満たすくらいであれば構わないということだろうか。死神が魂を連れてゆき、火車が残った死体を運んでゆく。それでお互いに良いのならば見事な共生関係と言えなくもない。

……地上と地底の区分なり、死者の死後の扱いなり、倫理的なあれこれについては問題が山ほどありそうな気がするが、それについては妖怪の賢者やら閻魔様の領分とも言える。彼女達が黙認しているというなら、

私が口を出すようなことでもないのかもしれない。

そんな事を考えていると、甘酒の杯を空にした小町さんにすかさず燐さんがお代りを注ぐ。

「でも、三途の川の渡しつてのは自由気ままそうで羨ましいねえ。魂を好きなだけ運んで、おまけに懷も暖まるっていうじゃないか。あたいもあやかりたいもんだ」

「あつはは。そんな褒められたもんじゃないさ。上司は厳しいしお小言ばかりだし、ゆっくりする暇もありやしない。神って文字は付いても嫌われるのは似たようなもんだよ?」

とは言いつつも満更でもなさそうな小町さん。そもそも妖怪が死神を見習っていいものなのかどうか。いや、人間の立場からすれば、死神も火車もせめて年の頭くらいは怠けて頂くに越したことはないのであるけれど。

「そうだ。小町ねえさん、今度旧都のほうにもおいだよ。良い店があるんだ」

「へえ。そりゃ面白そうだ。温泉も出てるんだっけか?」私が黙ってしまったのをいいことに、死神と火車はすっかり打ち解けた様子であれこれと宴会の予定に花を咲かせていた。

どうでも良いことだが、正体を隠す気もないこの二人を堂々と客に迎えているこの店の主人、中々に大物なのではなからうか。

「……んっ。いや、しかし冷えるねえ。こんな日は一日、あつたかくして美味しいもんでも食べてごろしりたいよ」

「そうだねえ、炬燵にでも入ってね。……地底と違って地上はやけにころろ熱くなったり寒くなったりでいけないよ。ねえ。そう思わないかい?」

「……そこで突然同意求められまして」

甘酒を酌み交わしながら、こちらを伺ってくる二人に、思わず後ずさってしまう。

と言うか現状、すでに半分以上その願いは達成されているんじゃないだろうか。



なんとなく警戒して距離を取ろうとしたつもりだったが、いつの間にか死神の手は私の方へと回っていた。「いいじゃないか、知らない仲じゃなし、ちよいと付き合いなよ。……おやっさん、もうひとつ追加で！」

「あいよ！」

威勢のいい主人の返事を聞いた頃には、私も一緒に長椅子に座らされていた。

……そう言えば彼女の特技は物事の距離を自在に操ることではなかったかと思ひ至るが、今更遅い。

「あと領収書も頼むね、是非曲直庁あてで」

明らかに公金横領っぽいフレーズも聞こえたが、こは敢えて無視を貫く。……せめて生きている間くらい、彼岸の経理事務で頭を悩ますのからは解放されたものである。

店の主人が返事をして、すぐに次の皿が運ばれてきた。

「来た来たっ♪」

耳を揺らして、新しい鯛焼きの山に手を伸ばした燐

さん。がぶりと噛み付いたものの、すぐに顔をしかめて口を離す。

やはり火を扱おうと外見通り猫は猫、熱いものは苦手のようなのだ。

「さ、遠慮せずに食べな」

「はあ」

こちらにも差し出される蒸かし饅頭。なんというか、黄泉の神饌のようで笑うに笑えない気分だった。それだけでなく死神と火車に囲まれてお昼と言うのも洒落にならない。

……まあそれは流石に考え過ぎにしても、要はこれ、サボりの共犯者の誘いなわけで、食べたなら閻魔様のお説教の巻き添えは必至なのではないだろうか。

などと思いはしたものの、結局小腹が空いていたのも確かであり、せつかくなので頂くことにした。

まあ、彼女たちとの心の距離が縮んだのだと、まあそういうことにしておく。

「あ。美味しい」

「だろう？ 寒い日はこういうのが一番温まるからねえ」

手にした中華饅から滲みだす肉汁に舌鼓をうちつつ、もふもふと口に運ぶ。

「どうだい、最近ば」

「むぐ……あむ。そうですね。すっかり平穩ですよ。秋の実りもいつも通り。少し雪が少ないのが気になります」

幻想郷において、異変というのは日常でもある。そういう意味で春先には妖精たちが戦争を起こしたというし、鴉天狗があちこちと写真を撮りまわったとか、有角の仙人があちこちに姿を見せてお節介のような忠言をして回ったとか、あれこれと騒動の種は尽きないが、概ねいつも通りという意味で平穩ではあった。

「鴉天狗だっけ、地底チチにも来たよ。白黒いのと黒っぱいのが」

「へえ。天狗って一匹だけじゃなかったのかい？」

熱そうに舌を出しつつ、鯛焼きの尻尾を抓む燐さん。

「一年も本当にあつという間ですよ、ついこの間、神社の例祭をしたばかりのような気がします。この分ではそちらにまたお邪魔するのもそう遠くないかもしれません」

「ははは。人間はちよつと見ないうちにすぐに年寄りになつちまうからねえ」

そんな事を言いながらも、小町さんの表情はどこか寂しげだった。

それこそ日常のように人の死に触れていながらも、けしてそれを当然とは思えない。だからこそ、彼女は死後の魂に最も近い、三途の船頭などを続けているのだろう。

ふうふうと餡饅を冷まししている燐さんの横、運ばれてきた番茶を啜りながら、死神は言う。

「さっきの話じゃないが、死神も嫌われてなんぼの商売さ。だからまあ、恋せよ乙女ってことかね。熱き血潮の冷えぬ間に。明日の月日はないものを、つてね」

「……ふむ」

いつの間にか、こちらが反省を促されている。なんだかんと言いつつも、彼女も面倒見のいいのは変わらずで、上司同様にお説教も嫌いではないのだ。

苦笑しつつ湯呑みに口を付け、一息。

「命短し恋せよ乙女。朱き唇褪せぬ間に。……それならいつそ私も追いつ返してみますかねえ。転生の準備もあれはあれで色々大変なんですよ」

「……おいおい、あんたが天人になられちゃ困るよ？今でさえあれこれ覚えてて手に負えないのに」

「そうだねえ。あたしも運んでみたいし」

死神に同意して、火車までも口を挟んでくる。

引く手数多——という事かも知れないが、ああもう

新年からなんと縁起の悪い。

「本人を前にしてまあよく言ってくれますね」

今日は枕を反対にして寝た方がいいのかもしれない。なんとなく背中に寒気など覚えつつも、そんな事を

心に留め置くことにした。

——  
ア  
ジ  
ヤ  
リ  
カ  
モ  
ク  
レ  
ン  
キ  
ユ  
ウ  
ラ  
イ  
サ  
イ  
阿  
舎  
利  
華  
木  
蓮  
求  
来  
斉。

## 地に満つ光はすべて星

東風も吹き始めんとする2月の頭。

真つ白なままの原稿を前に、私は頭を抱えていた。

「……はあ……」

鉛が入ったように重い筆を置き、書き損じた紙を丸めて屑籠に放り込む。今日までに草稿がまとまっていなければならぬというのに、原稿は一文字も進んでいなかった。

「安請け合いするんじゃない……」

吐息とともに卓に突つ伏す。先日、酔った勢いで引き受けた某所の寄稿文は、思いのほか難航していた。さして分量があるでもなく、ここ数カ月には差し迫った仕事もなく、すぐに仕上げる事ができるだろうとそう踏んでいたのだが——どうした具合かまいったく筆ののらぬまま、日にちばかりが過ぎてゆく。

壁にかけた暦を眺め、冷めきった紅茶を飲み干す。気付けば期限は目前に迫っていた。これが自著ならば、諦めて愚痴でも書き連ね、寢酒の一口もしながら布団に入ってしまったら済む話なのだが、今回ばかりはそうもいかない。どうにもこうにも煮詰まってあれこれと唸っているうちに、すっかり夜更けとなつてしまったのであった。

丑三つ時の窓の外は、ほのかな月明かりの他には動くものも見当たらない。春まだ遠い幻想郷の夜は、積もった雪のもたらす深い静寂に覆われていた。

仮眠でも取るべきかと思うけれど、紅茶の飲み過ぎか、まるで眠気を感じない。

「……仕方ない、すこし気分転換に出てきますか」

だから、その思いつきは実に分かりやすい現実逃避であつたと言えよう。

雪沓と外套、手袋に身を固め、胸元には懷炉を忍ばせて。

里をぐるりと一回りする程度のつもりで歩き出した

夜の散歩が、いつのまにか森を抜け、はるか郊外まで伸びてしまったのは、ここ数日の缶詰めでいい加減に気が塞いでいたこともあるのかもしれない。……あるいは、こっそりと夜歩きをすることへのちよつとした背徳感か。

普段、夜中は危険な妖怪への遭遇率が上がるため出歩くことのないようにと言っている私自身が、洋灯<sup>ラタナ</sup>ひとつでふらふらと深夜の郊外を彷徨っているのだからあまり笑えた話でもないのだけれど。

「夜は短し歩けよ乙女、ですかね」

ほうと吐いた白い息が、凍りついてきらきらと夜月の中に舞う。十七夜ほどの美しい月明かりの下、夜はまだ静謐に満ちていた。

洋灯の油が乏しくなりはじめる中、すっかり身体も暖まり、気分転換というには十分に歩いたのだけれど。なんだかこのまま帰るのが勿体なくて、もう少しもう少しと思っているうちに、いつしか大きく里を離れ、気付けば脚は妖精たちが住む湖畔にまで伸びていた。

「……ほう」

雪沓が薄く積もったばかりの新雪を踏みしめ、白い息の向こうに星空と一面の湖が見えた時は、少なからず感動も覚えていた。

夜更かし好きの妖精たちも、流石にすでに塙へと帰り、湖の主が姿を見せていることもなく。湖は湖面をしんと静まらせていた。

山の上に神社と主にやってきた湖は、この季節端まで凍り、一面を白くさせているというのだが、こちらの湖は全面凍結することはあまりない。いつも氷精が暴れているのに、不思議と言えば不思議なものだ。

しばし、鏡のような水面に見惚れ——外套の下で汗ばむ首筋に寒さを感じて、そろそろ戻ろうかと思った矢先。

湖畔の一角に、ぼうと点る灯りを見つけて、私の脚は自然、そちらへと向いていた。



「こんばんは」

「……へ？ あ」

まさか話しかけられるとは思っていなかったのだろうか。紅い屋敷の門前に屈みこんで、一心不乱に作業に没頭していた彼女は、呆けた顔でこちらを見上げる。

紅魔館の門番、姓に主と同じ紅の字を頂く妖怪——  
紅美鈴。

「阿求さん。どうしたんです、こんな遅くに」

「寝付けないもので散歩ですよ。そちらこそなんです  
か、この有様は」

彼女の周囲には、無数の雪灯が築かれていた。雪を  
固め、氷を硝子の代わりにして灯す、氷の灯籠である。

「いやあ……その、なんといいますが、夜の見張りは  
間が持たないと言いますか」

周りを見回し、美鈴さんは照れたように頬を赤くし  
て、罰が悪そうにがりと足元の雪を蹴る。

雪の白と氷に反射し、星のようにちらちらと瞬く光

の群れが、一斉に瞬いた。

「それで幻燈ですか？」

「ええ。そう言えばもう春節だなんて思いました」

「ああ」

「今日のお夜食が月餅だったんですよ。それでなんだ  
か、懐かしくなっちゃって——あの、できれば、サボ  
ったたのは咲夜さんには秘密にしていただけませんか  
ね？」

「そうですねえ」

私が渋ってみせると、彼女は帽子の下からまだ手をつ  
けていない月餅を二つ、取り出して私に押し付けて  
くる。せっかくの好意を無駄にしてはいけないので、  
ありがたくひとつ頂くことにした。

「まあ、考えておきます」

「……少々<sup>シヤンシヤ</sup>」

見た目もそうだが、とにかく彼女はこうした四季の  
機微に敏感だ。多く妖怪というものは、長命であるが  
故に人とは時間の捉え方が違う。自分に関係なければ

四季の巡りや年中の区切りなどには余り興味を持たない者も多い。無論個人差はあるのだが。

しかしこの門番は花壇の世話も仕事にしていることもあつてか、とかく人間臭いのであつた。

まだほんのりと温かい月餅を油紙から出して頬張りながら、あたりに揺れる雪洞の灯に目を向ける。

「……あちらの春節では花火に爆竹に、もつと賑やかで騒がしいんですが、門の前でやっちゃうと怒られちゃいますからねえ。せめて元宵節げんようせつということで、灯りでもと思ったら……ついつい楽しくなつてしまつて。百枝灯樹ひやくしでんじゆって訳にはいきませんけど、ま、これくらいは大目に見てもらおうかと」

深い雪夜に灯される幻燈の明かりはほの紅く周りを照らす。

夜筆の明かりにするには少々心許ないが、雪夜に灯す灯りとしては上等だろう。

ほのかに揺らめく炎からは、ほんのりと辺りに甘い香りが漂う。

「これは……」

「蜜蠟ミツロウです。本当は鯨脂でも手に入ればいいんですが」なるほど、どこで調達したのかと思えば蠟燭ろうそくも自作だったらしい。蜜蜂が巣を作る時に分泌する蠟ろうは、煤も少なく上等な明かりを作るのである。

かすかな蜂蜜の香りは、風のない冬の夜にも心地よく満ちてゆく。明るさの基準となる単位は「燭カンデラ」、つまり蠟燭ろうそくの明かりを基準にして作られているという。文字通りここは、灯の生まれる場所なのだろう。

私がゆつくりと月餅を味わう間、美鈴さんは自身の故郷に伝わる風習を教えてくれた。

元宵節は旧暦の元月げんげつの末となる十五日の宵に行われ、多くの幻燈を往来に灯して新年を祝うものであるのだという。軒先の行燈げんとうと言えば最近バロウインは万靈節バロウインが盛んだが、こちらの灯はそうした死者を悼むものではないらしい。当時の帝が反乱を平定し、それを祝ったのが始まりであり、それ以降、帝は毎年この日には宮殿を出て、民衆と共に祝賀を行ったそうだ。

「それが天官を祝うお祭りと一緒に、華やかに灯りを彩るようになったんですよ」

「ほほう」

「……まあ、幻想郷にはあんまり私と同郷の妖怪もいませんし、一人ではしゃぐのもどうかと思いますけどね」

「最近、大陸出身の邪仙さんがやってきたみたいです」

「ええ、青娥さんと芳香ちゃんですよね。先日、お嬢様を訪ねていらしたときに私もご挨拶させていたいたんですが——なんだか妙に嫌われてしまつて」

失礼があつたんですかねえ、と頬をかく美鈴さん。

とかく人当たりのいい彼女が一方的に嫌われることなんてあまりないように思うが、さてどういった理由なのだろうか。

「阿求さんもおひとついかがですか？」

言いながら、美鈴さんは見事な細工の蠟燭をひとつ、私に手渡してくれる。ひょっとして作りすぎて持て余

しているのではないかなとは思いましたが、折角なのでおとなしく頂いておくことにした。

(了)



## 冥土の旅の一里塚

初出: 求代目の紅茶会 & 科学世紀のカフェテラス(2012/2/20)

「PARALLEL DREAMERS

～the fantastic memorial fan books」収録

改稿: 御阿礼祭(2013/3/10)「捕らぬ狸のアペンディクス」収録

秘封&阿求オンリーイベントの開催にともない、合同誌に寄稿したお話。イベントには秘封の本を出していましたので、こちらでは阿求の話を書いておこうと思い立ちました。

ラストの「アジャリカモクレン～」は落語「死神」に出てくる死神を追ひ払う呪文の一部。漢字は完全に当て字であります。

## 地に満つ光はすべて星

初出: 御阿礼祭(2013/3/10)「捕らぬ狸のアペンディクス」収録

前述の「冥土の旅の一里塚」とともに書き上げたものの、あまり合同誌向けじゃないなと思ってそのままお蔵入りになっておりました。いまでこそ鈴奈庵や多くの二次創作ですっかりアクティブな印象のついた阿求ですが、書いた当時は短命設定による病弱イメージが強く、ほいほい出歩くようなことはないという二次創作が割と多かったように思います。

その印象を取り払ってくれたのが久幸繙文さんの阿求日記でして、冬のさなかにブーツをはいて雪道をざくざく進んでいく鮮烈な印象がつながっております。

真冬の雪洞は一度見てみたいものです。

## 捕らぬ狸のアペンディクス

草木萌ゆる啓蟄の候。一足早く里に訪れた春の陽気に、土も緩み、庭では白桃が花を広げている。あとひと月もしないうちに桜が開いて、里も賑わうことだろう。ふと見上げた空に思わず春告精の姿を探してしまうのも道理か。

「んっ……」

背筋を伸ばせばきはきぱきと、凝り固まった腰が音を立てた。猫が伸びをするように腕を伸ばして肩を回す。欠伸とともに浮かんた涙をぬぐい、重くなった眼頭を押し揉んでほうと息を吐く。

どうにも集中して机に向かうと姿勢が固まってよろしくない。寺子屋時代にもよく慧音先生に姿勢の悪さを正されたものだが、結局身についてはいないのである。小鈴にも勧められて眼鏡も作ってみたが、どうに

も煩わしくて使っていない。

教え子のためなら時に愛の鞭を振るうことも辞さない、慧音先生の熱意には感服しきりではあるけれど、記憶に残っているのはあの目から火が出るような頭突きの衝撃だけである。なんとも申し訳ないなと思いついて苦笑した。

「……一息入れましょうかね」

ううんと背中を反らして、なんとなく体操などしてみたり。

先頃、幻想郷縁起の改訂作業も済ませてからこの方、私の毎日は部屋の間で積みっぱなしとなっていた本を片端から読み耽ることで構成されていた。

寝床に入って夜更けまで頁を捲つては昼過ぎまで朝寝坊し、寝巻のままずると朝ご飯。誰が文句を差し挟む事もなく、実に優雅な毎日である。御阿礼の子という立場でもなければ中々許されないだろう自堕落な日々だが、流石にこれだけ続いていると少々気まづさもあった。

そもそも、うら若き乙女が毎日自室に閉じこもって読書三昧というのは、あまり褒められた事ではあるまい。

卓上のティーカップに手を伸ばしてみるが、生憎と中身は空だった。

「……ふむ」

縁側の障子をあけて見れば、空の色は午後から夕へと傾く薄朱。遠く命運寺の鐘の音がかすかに響く。これからお茶というには少し遅い時刻だった。

気付けば今日も一日、読書に熱中して過ごしてしまった。良い天気なのにちよつと勿体なかったなと思いつつも、夕空を見上げながらこれからの過ごし方を思案する。

「ちよつと出てきます。ご飯は食べてきますので」

荷物を桔梗が刺繍された巾着袋にまとめ、ヤエさんと言付けて邸を後にする。

こうして気まぐれで出かけることについては、彼女をはじめ使用人の一同からたまにお小言をいただくの

だが、いくら稗田の家で御阿礼の子として箸の上げ下げまで世話になっているとはいえ、うら若き乙女としてそれなりの自由は満喫したいものである。

編み上げのブーツに、春を先取りした萌葱の外套を一枚羽織って、里の通りへと出た。

春の足音が近づき、雪もすっかり消えたとあつてか、通りは賑やかなものだ。まっすぐ目的地を目指しても良いのだが、折角の気分の良い時間、ぶらぶらと散歩のつもりで遠回りを決める。

通りでは煉瓦積み目のモダンな喫茶店や蓄音器、鉱石ラヂオの並ぶ店の軒先を、ガス燈の赤い光が照らしていた。

「そう言えば、春から灯りをガスから電気に切り替えるんでしたっけね」

数年ぶりに再開されたラヂオの試験放送以来、里はちよつとした欧化ブームである。今更ながらの文明開化にかぶれた霧雨某氏が里に路面電車を走らせたいと言いつ出し、建築計画をぶち上げてあちこちで話題とな

った。

なにしろ单身、河童の集落に向かつて技術協力の直談判までやってのけたというから、その熱意は相当のものだろう。

……完成は5年後。里の端から端までを結ぶだけの短い路線というものの、果たしてどうなるものか、今から不安と興味が入り混じって噂となっていた。

——と。

「それじゃあの、失礼するよ」

呉服屋の軒先に、気になる顔を見つけて私は足を止めた。

チェック模様の襟巻を撒いた眼鏡の女性だった。長い髪を背中できくり、見事な羽織紐をあしらった袖には丸に一つ瓢。彼女は啞えた煙管からぷかりと煙を吐きだし、畏まって頭を下げる若旦那に、鷹揚に頷く。

「……ふむ」

若旦那に見送られた彼女が一人になったのを見計らって、私は彼女に声をかけた。

「こんにちわ」

「——おう？」

「ご精が出ますね」

驚いたように振り向く彼女に、私は飛びきりの笑顔を作ってにこりと微笑んで見せた。

「こりゃあ稗田のところのお嬢さんじゃないかの。なんぞご入り用ならいくらでも用立てさせて貰うが」

「……人を化かすのは狸の習性なのかもしれませんが、見境なく人を誑かすのは感心しませんね、二ッ岩明神さん」

「おや、ばれとったのか」

悪びれもせず答え、たと地面を跳ねた彼女は、宙でくると身を回す。すると、どろろんと噴き上がった煙の中から、まったく別の姿が現れた。

チェック模様のマフラーに丸眼鏡は変わらぬままだが、紋付袴に、癖のある短い髪から飛び出す丸い耳に、背中に揺れるふさふさの縞尻尾。

僅有絶無の外來妖怪、二ッ岩マミゾウ。聖徳王の復

活に伴い外界より招かれ、妖怪寺・命蓮寺に腰を落  
着けることになった化け狸である。

「……おぬしにはこの格好は見せておらんかったと思  
つとつたがのう」

「仕事柄、妖怪の方には多く接していますからね」

澄まして答える私に、彼女はほうと感嘆の声を上げ  
た。

「これはこれは、阿礼乙女の見識を見縊っておったか  
の。いやいや、すまなんだ」

……種を明かせば、教えてくれたのは魔理沙さんで  
ある。彼女が先日、里の近くで狸の宴会を開いていた  
という話を聞いてピンときたというだけの話だ。

「聞いてますよ、呉服屋の若旦那が二ツ岩明神さんに  
すっかりお熱だそうじゃないですか。旦那の止める  
のも聞かずに着物だ簪だつて贈り続けて、このままじ  
や身代を持ち崩すんじゃないかって噂になってるくら  
いですからね」

「かっかっか。ありゃあ、あの小僧が勝手に入れ込ん

でおるだけじゃよ。狐どもと一緒にされるのは心外じ  
やなあ」

言いながらも、本人も満更ではなさそうだ。こうい  
うのも若い燕と言うのだろうか。

「しかし、流石に稗田のお嬢さんじゃな。そこまで耳  
にしとるとは思わなかったぞ」

「二ツ岩明神さんの評判は黙っていても良く聞こえて  
きますからね」

「なに、慣れん土地で右往左往しとるのが面白おかし  
く聞こえてくるだけじゃろうて。……よつと」

再び宙に飛びあがり、元の人間の姿に化け直す彼女。  
謙遜してみせるが、彼女がすでに里に少なからぬ影  
響力を持っているのは揺るぎない事実だ。極めて良心  
的な――場合によっては無利子で金を貸すという金貸  
し、二ツ岩明神に窮地を救ってもらった商売人という  
話はこの所よく耳にする話だった。

彼女も積極的に里に顔を出し、経営相談やら建築や  
らと、あちこちに首を突っ込んでいる。

「とは言っても、小鈴にちよつかいをかけるのはあまり見過ごせませんが」

「儂はちよいと警告してやっただけなんじゃがなあ」

本居小鈴。貸本屋『鈴奈庵』を営む私の友人である。

最近ふとした事から能力に目覚めたばかりの彼女には、どうにも危なっかしいところが多い。

霊夢さんもそれを気にしていて、割合頻繁に顔を出すようにしているようだ。小鈴も随分懐いているようだが、博麗の巫女とて毎日彼女にだけ張り付いているわけにもいかないだろう。

そんな小鈴が最近すっかりお熱なのが、人に化けた彼女——里で噂の金貸し、二ッ岩明神なのである。

『そうなのよ、すっごく格好良かったんだから!』

ふらりと鈴奈庵を訪れ、小鈴が手にした妖魔本の危険性を指摘して、名も告げずに颯爽と去っていった正体不明の女性。小鈴は生憎とその正体を知らないらしいのだが——一度や二度ならばともかく、会うたびに繰り返されてはさすがに辟易するばかりだ。

思わずぼやく私に、マミゾウさんは苦笑い。

「しばらくあの近辺には顔を出せんなあ。……誤解のないように言っておくがの、誓って儂は、あの子をどうしようなんぞとは思っておらんぞ?」

「その割には、あなたのお仲間達は随分とあの本にご執心なようです」

「さて、何のことかのう?」

——いやはや、化生というのは油断するとすぐこれだ。

最近、里に出入りしている狸の数が増えたというのは、まことしやかに語られる噂である。人に化けてあれこれと悪戯をする狸たちの元締めが誰なのかというのは、考えるまでもないことであつた。

「いろいろと物騒なことがあつて難儀じゃなあ」

丸いレンズの向こうに表情を隠し、マミゾウさんは囁きながらぷかりと螺鈿細工の煙管で煙草をふかす。

煙草は狐や狸に化かされぬようにする方法の一つだ。獣は強い匂いを嫌うし、落ち着いて一服することで冷

静さを取り戻す役目があるからなのだが、彼女は自らその煙草を吹かしているのだから、まったく人を喰った話である。

なんとも分厚い面の皮に、私がしばし呆れていると――彼女はちらりと私の荷物に視線を走らせ、ぼんと手を叩く。

「ふむ。その様子、これから湯に行くんじゃない？ 一度良い、折角だから腹を割って話してみんか？」

「……はい？」

「裸の付き合いって言うじゃろ。ほれほれ、遠慮線が良いよ」

いつの間にか、私の肩にさりげなく手を回し、化け狸はそのまま来た道を急ぎ始めるのだった。



間欠泉騒動以来、幻想郷のあちこちに湧いた温泉は、特に枯れる様子もなく湧出を続けている。一時の爆発

的な噴出が収まり、時間当たりの湯量こそ減ったものの、安定した湯量はむしろ利用する側にとってみれば好都合だった。

地底の地獄鴉が守矢神社の主導する地熱エネルギーの管理のため、間欠泉センターで働くようになってなおその安定化は進んでいる。

里にも3カ所、あたらしく温泉が湧き、そのうちの一つがこうして日帰り湯として経営されている。その気になれば泊まる事もできるが、食事は自炊のうえ、自宅の眼と鼻の先で温泉旅行もないだろうと思う者が多いためか、ほとんどが銭湯気分での入浴であった。

それでも、まもなく夕食時となろうと言うこの時間、わざわざ湯に浸かりに行く物好きはそう多くないらしい。

入り口でわずかばかりの入湯料を払い、暖簾をくぐれば、そこには既に湯の熱気が籠っている。温泉と地熱を利用した暖房装置は、河童の手によるものであった。龍神様の像以来の人里での仕事に、彼等も存分に

腕を振るったようだ。

妖怪の作るものは大抵、人間には使いづらくけつたいな仕様になることが大半だが（似ているようでも彼等は別の種族である。河童にお湯に使って温まる習慣は無い）、その架け橋となったのは守矢神社の風祝であった。

妖怪の山で信仰を得た彼等は、人間達の理となるように妖怪達に仕事を任せるようになったのである。もともと人間に対しては好意的な河童たちだ。種族特有の引っ込み思案が是正されれば、距離が縮まるのは早かった。

湯気の立ちこめる岩作りの浴槽は、なみなみと透明な湯を湧き上がらせていた。

「ほほう、貸し切りじゃな。こいつは都合が良い」

手早く服を脱ぎ捨てたマミゾウさんは、元の姿に戻って桶を片手に満足げ。ふさふさの大きな尻尾を揺らし、左右の耳もびこびここと楽しげに跳ねる。

凹凸のはっきりした肢体を恥じる事もなく惜しげな

くさらし、肩に手拭いをひっかけて悠々と浴場へ歩み出てゆく。

実に羨ましい——ああいや、化け術の達人たる狸であれば、外見をいじるくらいのは自在にできるものなのだろうか。それはそれでもっと羨ましい。

私も湯船に近づき、桶に組んだお湯で足に掛け湯をする。寒さは緩んだと思っていたが、外を歩き回っていたせいか思っていたよりも身体は冷えていたようで、温泉の暑さはじんと爪先を痺れさせた。

「はあ……っ」

沁みるような熱さの湯船に、そろそろと身を沈めてゆくと、自然喉の奥から呻きが漏れた。

「阿求ちゃんは良く来るのかね？」

「たまに、ですな」

火照った頬を濡らしたタオルで拭い、答える。

ここのお湯は少々熱く、あまり長く首まで浸かるのは宜しくないのだが——疲れた後のこの爽快感はくせになる。



ぼたりと天井から落ちる雫が、湯船に波紋を描いた。  
「さてと」

化け狸はそうつぶやくと、頭の上に載せていた葉を手にとると、それをあつという間に酒と杯に変えた。否——もともと酒や杯だったものを、葉に変えて持ち込んだのだろう。

「一献どうかね? ——ああ、無論正真正銘、本物じゃよ。ちよつと外じゃ手に入らなくなった銘品じゃ」

「それでは」

こつそり眉に唾など付けつつ、応じる事にする。何事も用心が肝心である。

……受けた杯から、澄んだ酒精が喉を通って滑り落ちてゆく。すうと胃の腑まで通り抜ける風味は雑身を全く感じさせない。仕事柄、自分でも割合とお酒は嗜む方でいるつもりだが、この味は全く知らないものだった。

「ふは」

確かに言う通りの銘品だろう。温泉でお酒なんて、

なかなか出来ない贅沢だ。心地よく湯船の縁に身を預け、私もゆつくりと杯を傾ける。

「御馳走さまです」

「いやいや、お粗末じゃよ。……おぬしには礼を言っておかんといかんしなあ」

「良いんですよ、これまでに例が無かった訳ではありませんし」

彼女が人間に化け、人里で商売をしているということとを、私はあえて改版した幻想郷縁起の記述から削っている。それはマミゾウさんから申し出のあったことだ。

縁起は妖怪についての知識を人に広めるもので、その性格上、彼等の弱点や対処法を載せないわけにはいかない。それゆえ妖怪達にとっては非常に危険なものにもなりうるものだ。

その成立がそもそも、人間が妖怪に対抗するために出来たのだから当然とは言えるが、歴代の御阿礼の子が彼等に恨まれ、時に命すら落とす羽目になった事は

仕方のないことでもあろう。

……だからこそ、妖怪達は自衛のため、馬鹿正直に自分を晒すことをしなくなつた。例えば紅魔館の吸血鬼は、自分の弱点について隠そうともしないが――あれは明らかに、わかりやすい弱点を晒すことで、自分を成り立たせている例だ。

これは妖怪達にとつても利点のある話なのだ。なにも致命的な弱点を晒さずに済むと言うだけではない。人間達に「してやられる」手段を用意しておくことで、決定的な決裂を避けることができるのである。

妖怪と人との距離は時代と共に変わり、両者はその距離を模索してきた。それゆえの今、それゆえの縁起である。

大結界敷設以後、人と妖怪が新たな関係を築くようになった今の幻想郷において、お互いの対立を煽るようなものを出版するのは、私とて本意ではない。

「それに、妖怪の方から流儀を通してくるとなれば、無碍にはできませんよ」

「お前さんの立場でさらりとそれを言えるのもすごいと思うんじゃないか」

ぱしやりとお湯を掻き分け、マミゾウさんは洗い場へと出た。よいせと椅子に腰をおろし、頭の上に乘せていた葉を持ち上げて指を鳴らす。

「よ」

1枚が2枚、2枚が4枚。見る間に葉っぱその数を増し、さらにどろんと煙を立てて色とりどりの使い魔へと姿を変えた。人、鳥、犬、蛙。カラフルな落書きめいた輪郭の使い魔達が、泡立てたタオルを持って彼女の身体を洗いはじめた。

もこもこの尻尾をたっぷりと泡立てて、丹念に洗う彼女の姿に、つい見惚れてしまう。

「……それ、便利ですねえ」

「ん？ なんだったら洗いっこでもするかの？」

「……遠慮しておきます」

あの尻尾のは少々興味が尽きないが、迂闊なことを言ってしまうとどんな餌食にされたものか分かったも

のではない。自重自重と呟いて、私はそつと顔をぬぐった。



「……縁起と言えばですね」

「うん？」

頭を洗いながら——どこから取り出したかシャンプーハットなど被っているのがなかなかお茶目ではあったが——振り返りもせずにマミゾウさん。

「あなたと、ぬえさんについての事なんですが」

以前から気になっていた事ではあった。かつての平安京の夜を脅かした正体不明の大妖怪と、佐渡に本拠を持つ化け狸。どちらも高名な妖怪である事に違いないが、両者に接点がいまいち見当たらないのだ。

「聖徳王に対してあなたに頼ると言うのは、まあ分かんなくもないんですよ。十人の欲を同時に読むと言う彼女に対して、十人に自在に化けるあなたは対抗でき

ると。ただ、ぬえさんがどうしてあなたを呼ぶことが出来たのか、とか。あなたがどうやって結界を越えてきたのか、とか。気になる事は沢山ありますよ」

彼女は、独自に外の世界と通じるルートを保持しているのではないか、というのが私の推論である。これまた幻想郷縁起には書きようのない話だが。

「厳しいのう。ぷらいべーとな事はあまり話したくないんじゃが」

「折角の機会ですし、駄目もとで」

「……そうじゃなあ」

ざばりと頭からお湯を被り、ぶるぶると水気を振って散らす。ぴこぴここと丸い耳を揺らして、彼女はゆっくりと話し始めた。

「まず最初の質問じゃが、儂はこれでも外では神様と祭られておつてな。出入りくらいは自由にできるんじゃないな。」

——ほれ、妖怪の山のところの神様たちも、活動拠点こそここに移しはしたが、外界で完全皆無に忘れ

去られたかと言うとちよいと違うじやろう。あんな具合にな、ある程度の保険は外に残しておるよ」

土地に信仰を持たねばならない土着神は少し話が違うかもしれんがの、とマミゾウさん。博麗の大結界がそんなに目の粗いものだとは思ひ難いが、実際に外来妖怪である彼女が言うのだからそうなのだろうか。

「ということは、出入りは自由なんですか？」

「向こうに人を残してきた手前、あんまり軽々しく行ったり来たりはできんがの。こっちの生活も気に入っておるしな。……とまあ、ぬえが儂を呼び寄せたのも似た理屈じゃ」

「ふむ……」

思わず聞き入っていると、使い魔達がお代わりの杯を持ってやってくる。くいと杯の底に残ったお酒を干し、私は彼等の酌を受けた。

「さて、ぬえとの話じゃが……そもそも儂ら狸は、天智帝の御代以前より四国にその本拠を築き、純然たる勢力を保ってきたわけじゃが——四国八百八狸の総帥

たる隠神<sup>いぬがみぎやうぶ</sup>刑部は、常よりも人間達に興味を持っておつた。千年を遥かに超える昔より、やがては人間が妖怪を脅かし、駆逐するかもしれないことを見抜いておつたんじゃ。身内鼯鼠かもしれんがな」

本邦で狸が勢力を築いていたのは、戦国乱世の以前のことだ。当時の狸は神の使いであり、人を喰らう獣であつた。彼等は、やがてその立場を大陸からやってきた信仰と集合された狐にとって代わられる。

が、それでも四国は狸達の最後の聖域であり続けたらしい。

「時代が下つて平安、長らく続いた藤原摂関家が勢力を失い、院臣による専横、武士の世の興りと源平の対立と、世が激しい変動を見せる中、狸たちはますますその怖れを強くした。

屋島の禿狸こと太三郎、阿波の金長、淡路の芝右衛門、狸公方・船場山拜唐。名のある狸は多いが、彼等はみな刑部の意向を受け、人間達の社会に入り込み、多くの勢力に加担した者たちじゃ。かくいう儂もその

一人。佐渡で団三郎を名乗るようになる以前は、京で隠神刑部の名代として動いておった」

狸たちは、一つの勢力に加担し過ぎぬように各々の後ろ盾となつたが、それらの意志は総帥たる隠神刑部のもとで統一されていたという。

「儂は当時、飛ぶ鳥落とす勢いの平家に押されて失脚を続ける源氏の後ろ盾として活動をしておった。一方で相手の平家方には屋島の禿が付いて、平重盛とその一族を守り導いておったわけじゃがな。……その折にな、源氏を脅かす化け物を仕留める双生武竹の矢を探せと申しつけられたんじゃよ」

「双生武竹？」

「そうじゃ。こいつが滅多な場所には生えん竹でう。儂が佐渡に土地勘があつたこともあつて、たまたまそれが自生しとる場所を知つておつたんじゃが……それがそもそものはじまりじゃよ」

佐渡は流刑地であり、京を配流された者達が多く行き着く場所でもあつた。彼等は高い教養と文化を有し、

流された先でも独自の勢力を築いていたという。彼女はそうした佐渡の危険性を見越して、遙々海の向こうの島にも拠点を築いていたらしい。

「……とは言えぬえを拾つたのは半分偶然みたいなものじゃつたがなあ。源三位入道どのを失つて以降のぬえは見て居られんでな。」

……情にほだされて引き取つたのが運の尽きよ。千年越しで甘えられるとは思わんかつたが……一旦頼られると見捨てるわけにもいかんしのう」

「そんな経緯があつたんですか」

「あー、ちよいと話し過ぎたかのう。できればおふれこで頼むぞい。……ぬえに知られるといういろいろ煩いからの。あやつも正体不明のばぶりつくいめーじを保つのに苦労しとるんじゃよ」

「大変なんですねえ」

苦笑するマミゾウさんに、まるつきり他人事で領いておいた。

(了)

---

## 捕らぬ狸のアペンディクス

初出：御阿礼祭(2013/3/10)「捕らぬ狸のアペンディクス」収録  
短編集収録の表題作。タイトル付けてから鈴奈庵マミゾウさんの二つ名とかぶってることに気がつきました。この時期、ちょうど封獣ぬえ&源頼政の歴史長編を書いており、その影響が色濃く出たお話になっています。マミゾウさんの人里モードがカッコ良すぎて書いたお話ですが、同時に幻想郷縁起のどう見ても事実と異なるとしか思えない記述について、阿求の取材不足や誤解だけではなく、妖怪を保護するための視点もあるのではないかなと感じたことから作中の設定を作りました。

## 判読不明のCODEックス

日毎朝が遅くなり、お布団から出るのが億劫になる季節。新嘗祭もとうに過ぎ、里は冬景色に染まっていた。

障子の隙間から吹き込む風に背を丸め、隙間風を防ぐと立ち上がれば、庭の日陰に霜柱。年の瀬も押し迫った深まった事を感じながら、間もなく降り積むであろう雪を思いしばし筆を止めていると、来客を告げる声があった。

「こんにちは、阿求」

「小鈴。どうしたんです？」

本居小鈴。里にて貸本屋『鈴奈庵』を営む少女だ。

鈴奈庵は店舗こそは小規模だが、外来本や妖魔本の類まで取り揃えた品揃えで、里の好事家はおろか妖怪達の間でも名を知られた店である。彼女とは昔からの

馴染みであり、幻想郷縁起の出版、改版でも公私にわたって世話になった。

「里に用事があったからそのついでにね。この前のお礼と、見て欲しいものがあって」

店のエプロンを付けたままということは、仕入れか何かの帰りだろうか。彼女は多少勿体ぶりながら、手にした包み卓の上に広げる。袱紗の中から姿を見せたのは一冊の古惚けた書籍だった。

書題もない素気ない装丁は、古いがかなり丁寧な作り。ざっと見ただけでも数十年から百年近く前のもののようにだが、紙魚に食われた様子もなく綺麗なものだ。もっどおどろおどろしいものを想像していたところには拍子抜けだ。

「……さて、人皮の装丁なんてものでもないようですが」

「人皮なんて巷で言われてるほど良いものでもないよ？ 案外見た目も地味だし、保存には向いてないし、強度もいまいちだから妖怪も魔法使いも好まないし。



人間が書いた魔道書の箔付けに使われるくらいなものでもねえ、人間が人間の皮で綴るなんて、ありきたり過ぎると思わない？」

「……あ、はい」

同意もできず曖昧に頷いた。小鈴は、こと本に関しては少々度を逸しているくらいがある。だからこそ妖怪本なんて剣呑なものを集めていられるのだろうけれど——たまに友人として何か言ってやるべきなのかという思いに駆られる。自分の首を絞めることにもなるので結局口には出さないが。

「ともかく、貴方が持つてくるということとはそれなりに面倒な代物でしょう」

能力は別にしても、小鈴の本に対する興味は少々度を越している。大抵の本であればどれだけ難解でもまず読んでもしょうはずだった。それを敢えて私の元に持ち込むわけだから、真つ当な代物とは言い難い。

「酷いなあ。阿求だから言ってるのに」

「……信頼してくれたのだと思うことにします」

吐息と共に、書を手に取った。

「読んでも良いんですね？」

「うん」

にこりと笑顔。なんだか威圧されているような気がするが、気にすまい。再度念を押して書を開く。

一頁、二頁。順に頁を捲り——すぐにその事を理解した。

「……ふむ。これは？」

「やっぱり知らないんだ」

内容については、この際特筆すべきことはない。そんなものよりも重要なのは奥付だった。

——著…八代目阿礼乙女、稗田阿弥。

書いてあることをそのまま信じれば、間違いなく私——かつての私が書いたものだ。

御阿礼の子が全ての記憶を継承しているというのは誤りで、先代の記憶まで仔細漏らさず把握している訳

ではない。

けれど、幻想郷縁起を書くにあたつて、稗田に残された歴史には余すところなく目を通していたつもりだ。手慰みに書いたものならともかく、本の形にして残したものならばどんなものでも把握しているはずだった。「装丁とかを見る限りだと間違ひなく、ウチで刷つたものみたい。その裁断、お祖母ちゃんが使つた古い型の癖が残つてゐるの」

「……その口ぶりだと、小鈴も半信半疑なのね？」

「そりゃね。阿求みたいに昔の事まで全部覚えてるわけじゃないけど、商売だもの。その辺が曖昧じゃ困るじゃない」

小鈴の話では、鈴奈庵でもこれを刷つた記録はないという。私は吐息と共に改めて頁に視線を戻した。

「……………」

記憶にはない。が、そこに並ぶ文章は、見覚えがあり過ぎるくらいに私の（正確に言えばかつての私の）ものだった。

「これはなんとも面妖ですね」

「でしょ？」

にこりと笑う小鈴。ぱあと花が咲いたような笑顔は同性の目で見ても思わずどきりとするもので、この笑顔に参つて読めもしない貸本を求めて鈴奈庵に通い詰める男性客も多いと聞くが、むべなるかな。

……しかし肝心の彼女の興味は、残念ながらインクの匂いをさせる紙束にしか向いていないのだ。世は無常である。

さて、今はそれよりもこの本だ。腕組みをしつつ思案を巡らせる。

現時点で、これが私の手によるものであることは疑いようがない。では、敢えてかつての私が記録を残さずにいたのか。だとするならその理由は何だろう。いくつか推測が付かないわけではない。

「本であるということは、誰かに残そうとしたと考えるべきですね。それも、特定の相手ではなく不特定、複数の」

もし相手が決まっているのなら手紙になるだろうし、私自身が必要と思ひ書き残したのなら、それについてなんの記録もないのは妙だ。分量の問題は残るが、わざわざ製本する手間をかけてまで残す必要は無いはずだった。

「そう言えば、これはどこで？」

「いつもの仕入れ先だけ……今から行くの？」

「ええ。私の書いた覚えのない私の本なんて、こんな面白そうなこと放っておけるわけがありません。大体、小鈴もそれを期待して持ってきたんでしょ？」

「……ふふ、ばれた？」

外套を手に立ち上がる私に、小鈴はくすりと微笑む。何やら上手く乗せられた気がするなと思ひながらも、私は今日の予定を全てキャンセルし、この不思議本の探索に費やすことに決めていた。



「——ん、来たか。開いているぞ」

「ご無沙汰してます、慧音先生」

ぺこりと頭を下げる小鈴に続いて、私も門をくぐる。判読不明の書の正体を探るため、私達が最初に訪れたのは里の寺小屋。記録と歴史に関する事件の第一候補にして最有力者であるワーハクタク、慧音先生の元であった。

「急にすみません。先生もお忙しいのに」

「気にしなくて良いさ。この仕事は歳末は走り回るのが仕事のようなものだからな。それに、昔の教え子が訪ねてきてくれるというのは、これでなかなか楽しみでもある」

白状すれば私も小鈴も、寺子屋ではそこまで良い生徒と言う訳で無かった。小鈴は興味に任せて好きな本しか読まないし、当時の私は少々——その、見聞きしたことを忘れない、という自分の出自を鼻に掛けている事があって、黒歴史というかなんというか。

そんな扱いにくい生徒に対して、差別することも

なく区別することもなく、平等に接してくれた先生は、立派な教育者なのだろう。いまだに先生に無言になって目の前に立たれると、頭突きを警戒して身体が竦んでしまうけれど。

「さて、折り入って私に聞きたいことがあるそうだが？」

ほとんど間を置くことも無くお茶とお茶受けが卓に並ぶ。いつでも来訪者を歓迎できるように備えてあるらしい。

快く迎えてくれた慧音先生に対して、疑念を向けるのは少しばかり心苦しくはあったけれど——ここで黙っていては何のために来たのかもわからない。ちらりと小鈴と視線をかわし、覚悟を決めて話を切り出す。

「この、本についてなんですが——」

上等な座布団の上、なにやら居心地の悪さを感じつつも、一通り説明を終えるころには、慧音先生は難しい顔をして腕組みをしていた。

「成程。稗田の知らない稗田の本、という訳か。二人

揃ってきた理由も良く分かる。……しかし、ご期待に添えず残念だが、犯人は私ではないな」

バツサリと否定し、慧音先生はじろりと私達を睨む。思わず目をつぶってしまふ私の隣で、小鈴も頭を庇っていた。

そんな私達の反応に満足したように、先生は悪戯っぽく舌を出して見せた。

「まったく、無闇に人を疑うもんじゃない。……仮に、私が隠したというのが事実なら、それを馬鹿正直に明かす理由は無いだろう？ 第一、本当に隠しているつもりならそもそも、その本が本居の店で見つかりはしない」

そうなのだ。先生の歴史を隠す能力は、あった事になかった事にしてしまう。私が書いた歴史を隠されていたら、本も見つからない。私の記憶と本の実在、どちらかを遺すことは出来ないはずだ。

「それに、私が稗田の歴史に干渉できないのはお前が一番よく知っていると承知していたが」

「そうなんですよね……」

「解ってたんなら教えてよ、阿求……」

そこが個人的には一番引つかかっていたところだった。頷く私に、小鈴が恨みがましそうに口を尖らせる。ならばやはり、慧音先生は違うという結論になる。振り出しに戻った調査に、私と小鈴は顔を見合わせて吐息。

そこで慧音先生、何やら含み笑い。何なのかと問えば、

「なに、お前たちに教えてやれることがまだあつて、少し愉快なだけさ。稗田、本居、お前たちはとても優秀な生徒だった。だからこそ、自分の知識に囚われ過ぎる節があるな。謎を謎のまま解こうとするのは良くないことだ。こういうときは確かな事実だけを順に考えていけば、謎の本質がどこにあるのか分かるはずだぞ」

「……謎？」

意味が分からず首を傾げてしまう。この本は私が書

いたものであり、鈴奈庵の製本によるものだ。けれど私はその本を書いた記憶がない。私が書いたものであるならば、私が覚えていないはずだ。

「逆に考えればいい。有る筈のものが無くなっているのではなくて、無い筈のものが有るんだろう」

「……？ どういうことですか？」

「要するに、だ。その本を書いたのは、お前ではない誰かなのではないかな」

「そんな事が——」

できるはずが、と言いかけて。私はあることに思い至っていた。



里外れの枯れ井戸へ、息を止めて飛び込んで。

奇妙な浮遊感とともに辿りつくのは、地下に広がる広大な世界。嫌われた妖怪たちの住まう旧地獄の旧都である。いまだ地獄の残り火が燃えるここは、冬の地

上よりは余程暖かい。しつとりと湿った天蓋の下をはらはらと降り続く雪は、服の裾につく前から溶け消えてゆく。

そこそこに行き交う住人たちは皆、恐ろしげな妖怪達。旧地獄街道には地上の賑わいとはまた違った騒がしさがあつた。

「慣れてるねえ、阿求」

「前に取材で来たことがあるんですよ。入口までですけどね」

いかに地上との交流が始まったとはいえ、地底は危険度の高い妖怪たちの住む都であり、不用意に立ち入った人間たちの末路がどうなるかは明らかだ。旧都を抜けるなら、用心棒の一人も確保するべきところかもしれないが、今日はひとまずその必要はない。

ぞっとするほど美しい橋姫が不満げに道を譲る中、こちらに向けてしつと歩み寄ってくる小さな姿があつた、

一見すれば、私や小鈴とほとんど変わらない年頃に

思える。しかし彼女がゆつくりと歩みを進めるたび、屈強な妖怪たちが慌てて道を譲っていた。

「ようこそ、地底へ。お待ちしていました、稗田阿求さん、本居小鈴さん」

眠たげな眼をした少女——古明地さとりと名乗った覚り妖怪が、今回の事件の首謀者であつた。

「立ち話なんですので、どこかでお話ししましょうか」

そう言つて、彼女は街道沿いの小さな茶店へと私たちを案内する。席に着くなり主人が慌てたように飛び出してきて、平身低頭しながらお茶菓子を運んでくる。

「飲み屋は多いのですが、どこも鬼向けの強い酒精しか置いていませんので、ここは貴重な甘味処なのですよ。……ご心配なく、人間にも食べられるのです」

どちらかと言えば素材が何なのかについて聞きたくあつたけれど、藪を突く真似は避けるのが賢明だろうか。自己紹介を（彼女には無意味なことかもしれないが）済ませると、彼女は羊羹を切り分け、口へと運ぶ。

「そうです。それを書いたのは私です」

「……どういうこと？ 阿求の本なんでしょう？」

「彼女は人の心を読み、再現することができるんですよ」

難しく考えることはなかった。私に書いた覚えがないのだから、私ではない誰かが書いただけのこどである。

この本は、さとりさんが想起した八代目御阿礼の子、稗田阿弥の手によるものであったのだ。

「ええ。貴方の事は四季様に伺っていましたから。覚えていないかもしれませんが、地獄でお会いしたこともあります。——ああ、ご心配なく。かつての幻想郷縁起には私は関わっていませんよ」

成程、是非曲直序に強い繋がりを持ち、文筆に長けるという条件だけで、そもそも彼女以外にありえなかったのかもしれない。とんだゴーストライターも居たものだ。本人不在のところでありながら、ほぼ確実に本人であるなんて——

「どうしてこんなことを？」

問う私に、さとりさんはくすりと意地悪く微笑む。

「こうして、誰かを驚かせるのは、楽しいですからね」

「……なかなか良い性格をしてらっしゃいますね」

妖怪たちの中には、人間の恐怖心を食べる者たちがいる。覚りなんてその最たるものであるだろう。

「なるほど、これは警告だったってことだね」

小鈴が言う。恐らく、先代の私も地底に彼らが住んでいることを知っていたのだろう。しかし当時は地底との交流は禁じられていた。地底の妖怪たちは。幻想郷縁起の編纂にあたって自分たちの存在が公になることで要らぬトラブルを招くことを恐れたのだ。

その為に彼女は、有り得ない筈のものを書いて本にし、それを敢えて人目に付くように地上へと送り込んだ。それが巡り巡って今、私の手に届いたということになる。

「ところで」

ぽむと袖の手を打ち合わせ、小鈴が身を乗り出した。良く通る明るい声音は、商売用のとっておき。お日様

のような笑顔は稀観本を見つけた時のものだ。

「古明地さと子さん！ 私、あなたの書いた本っていうのに、とても興味があるんですけど、自費出版を考えたりはしていませんか？」

「……ふむ？」

「何冊か読ませてもらいましたが、とても面白かったです。地底だけの流通ではもったいないと思うんですよ。鈴奈庵では少数からの印刷、出版にも対応しています。湿気や温度変化にも耐性の強い特殊紙、特殊装丁にも対応しまして、現在こんなフェアも行ってるんですが——」

卓上にパンフレットを広げてゆく小鈴に、さとさんは満更でもなさそうに応じる。心を読む妖怪ということだが、案外、これで分かりやすい性格をしているのかもしれない。

「ねえ、小鈴？」

「なに？」

「——ひょっとして、私、いいように使われてない？」

「気のせいだよ」

さらりと答える彼女に、私は吐息とともに額を押さえた。

(了)



## 判読不明のコデックス

初出: 東方晴天祭(2012/12/23)

改稿: 御阿礼祭(2013/3/10)

鈴奈庵の連載開始とともに当日突発ペーパーとして書いたお話。初出の時は「さあ謎解きの始まり！」で終わっておりました。

これも掘り下げればかなり長編になりそうなネタなんですが完全に出落ち本です。妖魔本とさとりが小説書きであるという設定から、そのうち鈴奈庵でも触れられるかなとドキドキしておりましたが、2015 年現在いまだにその気配がなくてほっとしているような寂しいような。

## 朝起きたらうちの神様がロボでした。

「幻想郷は全てを受け入れるのよ。  
それはそれは残酷な話ですわ」

——八雲紫（東方萃夢想）



守矢神社の朝は早い。

幻想郷に来て、以前のように時計の針に縛られた慌しい朝こそなくなりはしたが、それでも正しい信仰は正しい生活習慣からとばかり、東風谷早苗は朝早くに布団を出て二人の神様の朝餉の支度を始める。

変わったところといえば——二柱と一人、いや三人が揃って食卓を囲み、そしてそれからゆっくりと食後

のお茶を愉しみながら、昨日あったこと、今日あることをあれこれと話すひとときができたことだろうか。

「神奈子ーっ、朝ご飯だつてば。起きてるー?」

今日はいつになく寝坊しているもうひと柱の神様を叩き起こすため、洩矢諏訪子は神奈子の部屋の障子を威勢良く開いた。

殺風景な部屋の中、珍しく布団に包まって出てこない相方に多少の違和感は覚えつつも、諏訪子はその傍に歩み寄る。

「ほら神奈子、何時まで寝てるのさ。いい加減起きな  
いと——」

掛け布団に手を掛けて引っぺがそうとしたところでふと違和感を覚え、諏訪子は首を傾げる。

……やけに、大きい。

もともと身長差があるのは承知の上だが、それにしてもこう、布団から手足がはみ出すほど、八坂神奈子は大きかった——否、巨きかっただろうか？

「えっと、神奈子?」

訝りながらそつと布団をまくり、諏訪子はそのまま絶句した。

お陽さまの匂いいっぱい、敷布団の上、鎮座ましますのは重厚な神徳を感じさせる、偉大な赤い塗装の複合重結晶蛇鱗装甲板。ぎらりと鈍い輝きを放つ四連装の128ミリオンバシラキャノン砲。背中に燦然と輝くは、日輪を思わせる電磁反応注連縄。

——それはもう、どこからどう見ても、まったく言い訳もきかないほどに。

「ロボだ————っ!?」

山じゅうに響き渡ったミジャグジ様の驚愕の声に、何事かと駆け寄ってくる足音ひとつ。

「どうしたんですか諏訪子さまっ!?」

「さ、早苗え!」

すぐるように諏訪子が降り返る先で、早苗も言葉を失う。

そりゃまあ、主神の布団でまるで涅槃仏のごとく威厳と慈愛に満ちたロボの御姿で横たわるこの威容を見て動揺するなというほうが無理というもの。

「なんですかこれっ!? ていうか神奈子さまっ!?」  
「か、神奈子、だよねえ……? いや、常識的に考えて違うと思うけど……」

それにしてもカラーリングといい、全体的なフォルムのデザインといい、共通点がありすぎる。

「……おい、神奈子?」

「か、神奈子さま……?」

疑問符をくつつけたまま、恐る恐る巨神合体オンバシラー（仮称）の名を呼ぶ二人。だが、眼前の鋼鉄のロボは鎮座したまま応答する気配を見せない。

「な、何があったんですか……?」

「そんなこと聞かれたって……」

顔を見合わせて遠巻きにオンバシラー（仮）を見守っていた二人の目の前で、いきなり機械音が響いたのはその時だった。

オン（略）の胸元、やたらに派手派手しくなった神鏡が飾られている部分が、かしゅん、と左右にスライドして開く。

— ひ  
あ  
!?  
」

反射的に抱き合つて、二人は射線から逃れるように部屋の隅にへたり込む。

「び、ビーム？　ビームですかっ!?　らめえビーム  
出ちゃうのお!？」

「おおお落ちていて早苗っ、違う、なんか違うっぽいよ!？」

展開した鏡の下、ロボの胸元の、一〇センチほどの細長い穴は、赤熱するでもなく青白いプラズマを散らせるでもなく、じじじ、と擦れるような低いうなりを上げて細かく振動するばかり。

しばしの時を経て、そこから白い紙テープが伸び始める。

『ロボ チガウ ロボ チガウ』

「ロボだこれ……っ!?」

畳の上に伸びる感熱性の紙テープにびっしりと印字された否定のカタカナ文字に、二人は渾身の叫びでも一度突っ込んだ。



「……はっ!? こ、こんなことしてる場合じゃないよ、なんとかしなきゃっ」

前代未聞の珍事を前にして、先に我に帰つたのは諷  
訪子のほうだった。すつくと立ち上がった彼女は張り  
詰めた表情で早苗に振り返り、

「早苗っ、ごめん借りるよっ」

「はい!？」

呆然となっている早苗のポケットから取り上げた装置を手にして、諏訪子は鮮やかなキータッチで操作を始める。

【鋼鉄の】朝起きたら嫁がロボでした。【伴侶】

1 名前: 主に名前のない程度の能力 投稿日: 明治 139/06/21(日) 10:09:37  
安価>10

「つて諏訪子様！ スレ立ててる場合じゃないでしょう!? てゆかそれ私の携帯ですっ!」

「いやだって他にどうしろつてのさ!?!」

「いえあの諏訪子さま落ち着いてるふりして実はものすつごく混乱してませんか? !?!」

「そ、そんなことは——」

3 名前: 主に名前のない程度の能力 投稿日: 明治 139/06/21(日) 10:11:44  
kwsk

4 名前: 主に名前のない程度の能力 投稿日: 明治 139/06/21(日) 10:11:51  
ksk

5 名前: 主に名前のない程度の能力 投稿日: 明治 139/06/21(日) 10:12:17

6 名前: 主に名前のない程度の能力 投稿日: 明治 139/06/21(日) 10:12:23  
ksk

7 名前: 主に名前のない程度の能力 投稿日: 明治 139/06/21(日) 10:12:47  
博識紳士なう

「うわksk早ッ!? ど、どうしよう早苗!?!」

「いえあのやったの諏訪子さまですよ!?! ですからなんでここで安価なんですか!?!」

「いやだってほらとりあえずやっとかないと!?!」

混乱の中、早苗の抗議をよそに、さりげなくtwitterと勘違いしてる誰かを交えたりもしつつ、液晶の中ではあつというまにレスが進みスレが伸びてゆく。

普段はいるかいにか分からなくとも、妖怪名無しさん達はこの時だけは抜群の呼吸を見せるのだった。

息の合った連携は瞬く間に指定安価へと近づき、

9 名前: 主に各前のない程度の能力 投稿日: 明治139/06/21(日) 10:13:04  
チャリで来た。

10 名前: 主に各前のない程度の能力 投稿日: 明治139/06/21(日) 10:13:28  
>>1 おっばいっp

「来たー!? さ、早苗どうしよう、おっばいうpだ  
って!?」

「ですから諏訪子さま、そんなのに答えてる場合じゃ  
なくてですねっ!?」

「どうしよう、こんな神奈子脱がしてもしようがない  
し、早苗脱ぐ!?」

「いえですから諏訪子さまっ!?」

「ああっ! でも幻想郷的にはいつそ私が脱いだほう  
が受けいいのかな? どう思う早苗?」

「ーッ!」

突っ込みつつも相当テンパっているのはこちらも同  
じか、早苗は諏訪子の手から携帯をぶん取ると青空め

がけて力いっぱい放り投げた。後で苦勞するのは自分  
なのだがそのあたりはすっかり頭から吹き飛んでいる  
ついでにその勢いを利用して御幣でスパーンと諏訪  
子の後頭部を一撃。

「落ち着いてくださーいっ!?」

「あうっ!?」

すっ転ぶケロちゃんと同時に、帽子の目玉ふたつも  
律儀に一緒になって(∨∧)のような表情を作っていた。  
このへんの芸の細かさ、神様マジ半端ない。

突如の風祝の暴挙に、涙目になって身体を起こし、ず  
れた帽子を直す諏訪子。

「突っ込んだ!? か、神様に突っ込んだよ今!?」

しかもかなりきついつい方法で!?」

「落ち着いてください諏訪子様、そんなことしてる場  
合じゃないと思いますっ!」

「でもほら早苗、どうせこれ文字だけなんだからちょ  
こっとう書いときゃ實際脱がなくなつて分らない  
ってば。どうせこのあたり予告編にも載ると思うから

それっぽいサービスシーンをね!」

このあたりはさすが神様、幻想郷にあっても信仰の得かたはよく心得てらっしゃる模様。

「ですからそういう危険な発言は控えてくださいってば!」

もう一発要りますか、と御幣を振り上げる早苗の目が大分据わっていることを把握したか、諏訪子もとりにあず手を上げてそれを制した。

「いや、うん、わかった、ごめん早苗、ちょっと待って落ち着くから」

「は、はい」

すう、はあ。すう、はあ。

四、五回ほど深呼吸をして、諏訪子はゆっくりと目を開く。

「……うん。ちょっと取り乱してたみたいだ。悪かったね早苗。心配かけて」

ちよつとで済む問題かなと早苗は思ったが、あえて突っ込まずに流すことにした。幻想郷だって時には常

識に囚われていたほうがいいこともある。

ひとまず落ち着いたところで、諏訪子はちらりと背後に横たわる相手の様子を窺って、小さく吐息。

「ええと……とりあえず、夢でもないし冗談でもなさそうだね」

「みたい、ですね……」

「うう、なんでこんな愉快な……じゃない、とんでもないことになっちゃったのさ、神奈子。そりゃ確かにあっちこっちでガンキャノンなんだって言われてたけどさあ」

「……確かに巨大ロボは期待してましたけど、さすがにこのデザインは……無いですよねえ」

声を潜めながら、鋼鉄の巨軀を見上げる二人。

「神奈子、まだ起動してな……こほん。眠ってるのかな? これって」

「ええ、気付いてないみたいですけど……」

「それにしても文字だけでホント良かった……挿絵とかあったら著作権やばいよねこれ」

「ええと、著作権は置いておくとしても、この状況で神奈子さまが気付いたら……その、多分」

「大騒ぎだろうなあ……」

先日 of 某所人氣投票の結果発表以来、神奈子が落ち込んでゐるのは二人ともよく知つてゐる。本人は努めて氣にしていなかつたばかり、普段どおりに振舞おうとしてゐるのだが、それがますます二人にはいたたまれないのである。

「それだけじゃない、天狗あたりに知られて新聞のネタなんかになつちゃうもんなら、それこそ神奈子、立ち直れなくなつちゃうよ」

「そうですね……」

注意深く付近の様子を窺う早苗。いまのところその心配はないようだが、早耳早目神出鬼没で知られる幻想郷最速ブン屋のこと、こんなにも珍妙かつ絶好のネタをいつまで放置しておくだろうか。

「うかうかしてらんないね。神奈子が目を覚ます前に手を打たなきゃ」

「はい……!」

諏訪子に答え、早苗も硬い決意とともにこぶしをぎゅっと握る。

そう、彼女とて不安だつた。この状態の神奈子が果たして神様として正氣を保つてゐるかどうか、考えれば考えるほど果てしなく疑問だ。

いくらロボとはいへ、今後ずうつと目とかピカピカ光らせながらカタコトのロボ語とかで話しかけられたら一生モノのトラウマかもしれない。

……というか現状、まともに神奈子の姿を見て話するのも結構辛い。

「っ……」

噴き出しそうになるのをなんとか堪えながら俯く早苗の肩に、そつと小さな、けれど暖かい手のひらが乗せられる。

こちらもしりげなく神奈子のほうから視線をそらしつつ、諏訪子は早苗にやさしく告げる。

「うん。ややこしく考えるからいけないんだ。これは



異変だよ早苗。原因究明、その解決。それは、幻想郷の巫女の仕事だろう?」

「……はい!」

信仰と、祈りと、なによりも平穩無事な日常のため。ふたりは強く誓い合うのだった。



神奈子の寢室の障子をしっかりと閉め、外から見えないようにして、隣の部屋で様子を窺ながら二人は今後の状況を話し合うことにした。

流石に目の前で騒いでいるという神奈子が起き出すとも限らない。かといって目を離すのもなにやら不穩に思えたため、ひとまずの折衷案である。

「まずはこうなった原因を考えようか。昨日まではごく普通の神奈子だったよね。なら、夜のうちに何かがあったんだよ」

「私が最後にお会いしたのは、お風呂の後にご挨拶を

したときなんですけど。諏訪子様は?」

「んー、昨日は早く寝ちゃったからなあ」

基本的には9時就寝の諏訪子様である。これは信仰を効率よく使うために健康的な生活を心がけているのであって、断じて外見相応に小学生レベルってわけではない。ないっらない。

「夕飯の時は早苗も一緒にいたしねえ。早苗が最後に見たとき神奈子、様子おかしかったりした?」

「いえ……まだ起きてらしたので、お風呂を勧めて……特に変わったところはなかったと思います。ちよつとオンバシラキャノン砲の照準調整のお手伝いをしたくらいですね。『ガガ、サナエ モ ハヤク ネナサイネ』とか言っていましたっけ」

「いや早苗それ思いつきりロボだよ!? そこでもう既に9割は確実にロボだよ!? なにさ照準調整つて!?!」

「ああつそう言えば確かに!? あんまりにも馴染んでてぜんぜん気付きませんでしたっ!?!」

ナチュラルに言つて驚く早苗に、ああこの子本当にこのままこの神社の風祝にしろといていいのかなあとやや不安になる諏訪子。

「早苗も気付こうよ……まったく。でもそうすると、夜じゃなくてもっと前からこうなっちゃう予兆はあったってことか。でもなあ、昨日の夕飯の時にはそんなに變でもなかった気がするんだけど……私も晩酌付き合つたし」

「そうですね、確か神奈子さま、とつておきのハイオクがあるからって一人で一斗缶まるまる空けちゃつて……」

「そうそう、あんなのどこに隠してたんだかね。なんか最近じゃ原油価格高騰だからで減多に飲めないってばやいてて……」

………。

「ロボだー……っ!?」

またもその単語にセンサーが反応したか、隣の部屋ではロボ神奈子の口からは『ロボ チガウ ロボ チガウ』の紙テープが吹き出しはじめる。テープの束こんもりと積み重なって、そろそろ布団が見えなくなりつつあった。

そんな悲惨な状況にはまるで気を回す余裕もなく、ふたりは頭を抱えるばかり。

「ロボだよ早苗!? 神奈子すでもうロボだよそれ!? なにさハイオクって、思いっきりガソリン飲んでるじゃない!? てゆか食事代わりに油飲むロボってどんだけレトロなのさこのご時世!? やばいよ幻想郷マジ半端ないよ!」

「な、なんで気付かないんですか諏訪子さまもっ!? 長いお付き合いなんですし!? ご自分だけ普通にお酒飲んで違和感とかなかったんですか!?」

「仕方ないじゃないさ気付かなかったんだから!」ケロちゃんちよつと逆切れ。

「あ、あの、諏訪子さま、とっても怖いことを思いついてしまったんですけど」

「あーうー、いい、やめて早苗。言わないで。なんとなく分かってるから。すごく怖い。マジで怖いからやめてお願い」

まさか、神代の頃から神奈子がずっとロボだったことに気付かなかった……などということになったりする。

最悪の想像に神格崩壊の危機を覚えつつ、諏訪子はこっそりとその問いかけに蓋をする。

棚上げ。というより神棚上げである。

……ともあれ、幻想郷に来て以来の記憶に残る神奈子との日々が、思い返してみればロボだらけであることに早苗と諏訪子は愕然としていた。

目を点滅させながらカタコトのカタカナ合成音声で喋り、感熱性の紙テープで信託を下す威厳たっぷりの巨神合体オンバシラー。その荘厳な姿に畏敬の念を抱き、ひれ伏す人々。

その事実を改めて認識してしまい、諏訪子は気が遠くなるのを感じながらふらふらと柱に寄りかかる。

「な、なにさこのロボのある日常ッぷり……まるつきり違和感なく馴染んでたよ……」

「全然気付きませんでした……」

さしもの神様も風祝も、守矢神社の主神がロボであることにまったく気付かずには接してきた日々を突きつけられて完全にグロッキー状態。

「うう、これは……いや、でも……」

否定したくとも、脳裏に鮮明に焼き付いた鋼の手足。巨大なオンバシラキャノン砲。これまで傍らにあったもう一柱の神の、記憶の中のあり得ない外見にいろいろと衝撃の事実を受け容れられず、諏訪子はふるふると頭を振るばかり。

そんな諏訪子の背中で、うあ、と小さなうめき声。

「え、ええと……諏訪子さま」

「ど、どうしたの、早苗!?」

なにごとかと振り返る先で、ノートを広げて俯く早

苗の姿がある。おそろおそろ覗き込んでみれば、それは神社の出納を記した家計簿兼用の帳面だった。幻想郷に来る時に新調したもので、もう半分以上のページが埋まっている。

その出費欄に記された項目が、残酷なまでに真実をつまびらかにしていた。

おおよそここ半年近くの間、当然のごとくに食費に加算されている、神奈子の燃料費（レギュラー）。

「……………」

「……………」

「……その、やっぱり内燃機関だったんですね、神奈子さま」

「……課題は、環境問題かな」

「そうですね。光子力とは言いせんから、せめてハイブリッドくらいには……」

もはやふたりとも魂が抜けきつての脊椎反射。何を話してるのかも良くわかっていない。

「あ、去年の冬にスタッドレスオンバシラに交換され

てます」

「……えつとさ、……ああ、いいやもう」

もはや諏訪子には突っ込む気力すら残っていないかった。

「うー、あー……もう!?　なんで、どーして気付かないかなこれ!?　半年前からふつーにガソリン飲んでるじゃん神奈子のやつ!?　というかいつからうちの相方は車になったんだっ!?」

ケロちゃんはバンバンとちゃぶ台を叩いてエキサイトする。自分への不甲斐なさを含め、昂ぶった感情は鎮まらない。

「普通神様に要るのってガソリンじゃないっしょ!?　信仰でしょ!?　それなのにもう、あーもうっ!?」

「……あの、それなんですけど諏訪子さま」

「なに?　もう大概の事じゃ驚かないよ?」

「ええと、その、これを……」

隣の部屋、いまだ横たわったままの神奈子の腰の裏あたりに屈みこんで、早苗が心底嫌そうな表情で指差

しつつ、悲痛なうめきを漏らす。

ひたすらに嫌な予感しかならないのを堪えながら、諏訪子は早苗の隣に歩み寄り、

【信仰】

満————中————空



……どうみても燃料メーターです。本当にありがとうございました。

「石油ストーブじゃ、ないんだからさ……」

熱い涙があとからあとから溢れて、前が見えない。「あ、最大容量16リットル信仰って書いてあります……」

「うん、燃費は、いいね……」

自分の信仰する神様がバイク並みの燃料タンクしか持っていないところにごくまで突っ込むべきかと思いつつも、早苗はそっとその上に毛布を掛けなおした。

というかもはや直視するのは辛い。

「ああそっか、忘れかけられてたんだもんなあ……そりゃ燃費もよくなきゃやってらんないよねえ、うふふ……」

「す、諏訪子さましつかりしてくださいっ!？」

諏訪子はすでに瞳からハイライトを失くして遠くを見つめだしていた。いまにも『中に誰もいませんよ?』とか言い出しそうな諏訪子に、早苗は慌てて飛びついてその肩を揺さぶる。

そろそろ本当に神格崩壊の危機らしい。

「あー、仕方ない。これだけはやりたくなかったんだけど……最後の手段だ」

「す、諏訪子様……?」

「ごめんね早苗、最初に謝っておく。……軽蔑してくれたっていいよ。でも、……他に方法がないの。だから——許して、とは言わない」

「あ、あの、いったい——」

「あのね……」

真剣な顔をして、諏訪子は唇を開く。



「ということで、洗いざらいぶっちゃけに来ました」

「お願いです助けてください霊夢さん」

「帰れ」

所変わって博麗神社の境内。涙を流しつつ深々と頭を下げる二人に、心底呆れながら霊夢は答えた。

「それで相談に来たってことか？ いやあ難儀だな」

うぶぶ、と笑いを堪えながらの白黒魔法使い。ほうつておけば今にも箒を引っつかんですっ飛んでいきそうな気配なので、こちらにも諏訪子がしっかりとらみを利用してはいる。

「……つくづく愉快な神様ね、あんたのとは」

霊夢は境内を掃いている手を止め、立てた竹箒の柄に手を重ねて顎を乗せ、呆れたように溜息をつく。いや、事実呆れているのかもしれないが。

「いろいろやってみたんですけど、どうしても元に戻らなくて……」

「その色々の内容に山ほど言いたいことはあるけど」  
守矢神社でのおおよそ2時間ほどの迷走を続けて後、ようやく諏訪子と早苗はここに至っている。

博麗の巫女はどうもそのあたりに突っ込みたいらしいが、いまさら過ぎ去った時は帰らないのであった。

「何にせよ、理由は単純なことじゃない」

「わ、分かるんですかつ!？」

知っているのか霊夢、とばかりやたら濃ゆい顔で詰め寄る早苗に、霊夢は暑苦しいなあもうと距離をとって、指を立てる。

「簡単なことよ。外の世界と、幻想郷での神様のあり方の違いね。まあ、私には外の世界のことは良くわからないけど」

「神様のあり方が違うって……た、確かに博麗神社にはかたちのある神様がいらっしやいませんか……まさか、幻想郷だと神様は消えてしまっただけですか？」

それとも神社が貧乏になると神様も消えちゃうとか！  
そんな、それじゃあ何のために――」

「ええい、だからひつつくな落ち着け！　あと貧乏巫女言うな」

青ざめてすがり付こうとしてくる早苗を、霊夢は鬱陶しげに払いのける。つんのめった早苗を慌てて支える諏訪子。

「そうじゃないってのに。私が言いたいのは、あつちとここじゃ事情が違うってことよ。あんたもよく言ってるじゃない、信仰よ、信仰」

「しんこう……？」

「ああもう、早苗、女の子がそんな顔しない」

涙でぐしゃぐしゃの早苗の顔を、諏訪子が袖でぬぐってやる。

なお、幻想郷で神様が消えてしまうなどということ  
は断じてありえないのは、あちこちに存在する厄神様  
や秋の神様姉妹などをみれば明らかなのだが。

「そもそもあなたたちが幻想郷にやってきたのは、外

の世界で忘れられかけた神様への信仰を得るためだったのよね？」

「はい……」

「信仰ってものは、ごくごく大雑把に言えば信じる対象、神様に対する人々の思いのカタチよ。ここに限らず神様は信仰のされ方でその形が変わるものなの。

ただの妖怪や災害も時には神様として奉られたり、もともとあった神様が他の神様と結び付けられてあたらしい側面をもったり、別のご利益を持つ別の神様として奉られることもあるわ。……ほら、大黒様なんかいい例じゃない？」

七福神で有名な福の神様だが、あのふくふくと太って丸々しい温厚そうな神様、元を辿っていけばヒンドウの破壊神の一面。滅法強くて好戦的で、相手の血肉まで喰らっちゃう闘いの神様である。

「まあ、そんなのは人が神になるとか言ってたあんたも知ってるでしょうけど。要するに、今回のそのロボ？騒ぎの原因もそれよ」

よく飲み込めていないのかきよんとしている早苗の目の前に、霊夢は溜息とともに立てた指をびしりと突きつける。

「つまり、あんたのこの神様が幻想郷にやってきて、こっちで得た信仰つてのがそういうものだったつてことよ！」

「な、なん（ry）」

誌面を見開きで埋めんばかりの勢いで驚く二人。（※なお文字にする则の無駄が半端ないので都合によりスキマ送りにされました。）

「そ、そんな……まさかつ」

「おお霊夢。なんかそうしてると巫女みたいだぜ」

「巫女なのよ、真正正銘」

からからと笑う魔理沙を軽く睨み、霊夢はいまだシヨックから立ち直れずにいる早苗と諏訪子に呆れつつ軽く後ろ頭を掻いた。

まさか神様とか風祝が揃ってそこに気付かないとは思つていなかったのだが。

「成程な、神奈子がそんな愉快なことになつてるのは、その新しい信仰のせいってことか」

「聞いている限り、これまで二人の神徳を保つてたのは、大半が早苗の信仰だったんでしょ？ あっち側でも完全に忘れ去られて立つて訳じゃないんだろうけど、それにしたつて早苗の仕えてた神社を通じての信仰なわけよ。『ここにはこんな神様がいます』つてことをしっかりと伝えた上での信仰が、共通認識としてあつたわけ」

ふう、と吐息を挟み、霊夢はふたりの顔を見回す。「縁起に由来、神社の信仰は歴史に深く根付いているから一朝一夕で決まるものじゃないし、そんなに急激に変化するものでもないわ。でも、こっちに來るにあつてその辺の多くをあなたたちは向こうに置いてきたつて話じゃない」

八坂神奈子、洩矢諏訪子。その二柱がもと何の神様であつたのか——それは、この幻想郷においては



あえて知ろうとしなければ知りえないものだ。

「だから、外の世界にあつた信仰と、幻想郷に来て得た信仰が同じものじゃなかったってことね。ましてあなたたちの場合、信仰の結構な割合が山の妖怪なわけだし。……人間と妖怪じゃ神様の受け止め方も違うのよ。まあ神様に限ったことじゃないんだけど」

「そ、そんな!? 神奈子はこっちじゃロボの神様ってこと!? いやそれはそれでお似合いって言うか笑えるけど、なにがどうなったらそうなるのさ!?」

さりげなく本音を漏らしつつ、諏訪子は崩れ落ちる早苗を抱きかかえながら声を上げた。

「どうって、自業自得でしょそんなの。あんたたちがこっち来てやったのって、博麗神社の地上げと核兵器の不法投棄。UFOの捕獲に巨大ロボの搜索。もうどこにも神様っぽさがないじゃない」

「あー、そりゃ河童あたりはそこら辺の神様だと思うわな」

「で、天狗がどう思ってるかはこのへん読めば一目瞭

然じゃない?」

取り出された某新聞の山が、なんとというか圧倒的な説得力を示していた。

もともとが風の神様と言っても、ソレらしいことをしていなければ当然、核融合でエネルギーと産業革命をもたらず神様か、新しい領土を占領する神様として認識される。

それぞれの乾と坤を操る程度の能力というのも、多く一般にはふたりの神様の個性に消されてしまっているのが現状だろう。

「その結果がそのロボ? なわけよ」

「いやあーっ!?」

頭を抱えてうずくまる早苗が、最後の悲鳴を上げた。ふるふるかぶりを振って、涙目になり、縮こまって動かなくなる。

「技術革新の意味で河童の、山岳信仰ってことで天狗の信仰も得たんだろうけど……ねえ、早苗? 知ってるかしら。妖怪はね、本来神様なんて要らないのよ。

今の信仰もどっちかと言えば興味本位。本来の信仰とはちょっと質が違うわ。

第一ね？ もし、もし妖怪がきちんと神様信仰するなら、私がこんなに苦勞してるはずないじゃないッ……！」

「おお、貧乏巫女が血の涙を流してるぜ」

文字通りの血を吐くような叫びが、空しく境内にこだまする。

「あつはは、苦勞するよねえ靈夢ー」

「だからあんたのことだつてのにっ！」

いつの間にか聞いていたらしい、赤ら顔の萃香に怒鳴り返す靈夢。が、当の鬼はどこ吹く風と、縁側で寝そべりつつ瓢箪を掲げてけらけらと笑っていた。

「その一端が自覚がないからもうね、もうっ……！」

妖怪の居ついてる妖怪退治の神社ってなによその説得力のなさは……ッ！」

「妖怪じゃないって鬼だつてー」

「世間様じゃだいたい一緒扱いなのよっ！」

ばん、と大きく足をふみならして叫ぶ靈夢。しばしののち博麗の巫女は、すう、はあ、と深呼吸をして気分を落ち着ける。

「ともかく。理由はそういうことよ」

「そんな……」

「このまま放置しとくともっと影響出るかもね」

靈夢の指摘に呆然となりながら、早苗はふと、『そういえば、最近河童がこの前のUFOを非想天則に組み込んで空を飛ばせようとしてるらしいですねっ♪』という数日前の夕ご飯の話題を思い出していた。

『ああっ!? 諏訪子様がいかにも2号って感じの重心低めかつ水中仕様なサポートメカに!?』

『じ、神社が発射台兼秘密基地にッ!?』

『博麗神社が悪の結社の大幹部の基地にっ!?』

『靈夢さんが悪の女幹部にッ!? でも胸が寂しいせいでボンテージ巫女服が全然似合っていない!?』

『サナエ トモニ ユコウ タタカオウ サア コク  
ビット ニ』

『それゆけ、いまこそ合体だオンバシラー!』

「そ、そんなのは嫌っ、断じて願ひ下げですっ! こんなデザインセンスの欠片もない巨大ロボなんて、非想天則のほうがかなりマシですよ!!」

「いやさらっとお前」

「……あとさ。なんかいまあんたものすごい失礼なこと考えてなかった?」

ジト目になる二人だが、早苗と諏訪子には残念なこととに届いていなかったらしい。

「地底の連中だって、そりゃそれなりに感謝はしてるだろうけどねー。サトリが神様信じるかって言うത്微妙だし、カラスやら猫やらがどれだけ神様を理解してるかって言うて怪しいね。」

ま、そもそも長年地底に引っ込んでるあいつらに正

しく外の神様を理解しろってほうが無理じゃないかなあ」

縁側で横になったまま萃香が補足する。

そもそも鬼が神様を説く時点でどうかと云いたい霊夢だったが、これ以上言っても苦しいのは自分だけなので黙る。

「こんなの困ります! ど、どうすれば治るんでしょうか……」

「そりゃあ、正しく理解してもらうのが一番の近道じゃない? あんたのところの神様が、どういう神様で、何のために祀られてるのか。それを伝えてあげればいいのよ。そういうの説明もせずに、単にご利益があるとか、すごい神様だとか、それだけじゃ伝わらないことはあると思うわね」

「……………」

霊夢の一言に、風祝は静かに両腕を垂らした。

「わたしは、間違ってたんでしょうか……」

「早苗……?」

うつむいたまま、ぼつりと言う早苗を、諏訪子が心配そうに見上げる。

「少しでもおふたりのお役に立ちたくて、幻想郷の信仰を集めようとして……でも私、神奈子様も諏訪子様のことも、なんにも知らなかった……おふたりの一番そばにいたはずの、私が……」

目元を擦りながら、早苗は小さく声を詰まらせる。「確かに、最近神奈子様の扱いってぶっちゃけ私のオプシオン担当っていうか、そもそも私自身が人にして神でもある現人神で、これはもう言ってみればほぼ神様なわけですから、だったらもう自動化もロクにしてもらえなそうない人気がない神様は後回しにしても、私に人気さえあればそれでもうだいたい神社の信仰とかって十分じゃないかなー、みたいに考えてたのは事実ですけど……」

「……あんたってたまに天井知らずに思いあがるわよね」

「はやくここの流儀に慣れようとして、挨拶のために

新しくスベルカードも作ったのに……」

「いやアレはどうかと思うけど正直」

「霊撃一発だしな」

「うわぁーんっ!？」

「さ、早苗おちついてっ!? 大丈夫、だいじょうぶだつてば!? ああ泣かないでーっ!? っていうかその巫女と白黒余計なこと言うなよもおー!?」

慰めるのと文句言うので大忙しの諏訪子。

「うう、ぐすつ……あ、あの、諏訪子様、ダメですか？ 五穀豊穡ライスシャワーとか……名前、イケてますよね？」

「いやその、それは、……」

「正直にお願いしますっ、す、諏訪子さまにまでそんな顔されたら、わたしもう本当に……馬鹿みたいじゃないですかあつ」

「……ぶっちゃけネーミングセンス的には全世界ナイトメアあたりのレベルかなーと」

「うわぁーんっ!？」

「あああごめん早苗っ!? でもほら正直に言えっというからっ!」

今頃どこかでカリスマ高ストッブ安の吸血鬼お嬢様もメイド長の胸で泣いていることだろう。

「あーあ、泣かしたー」

「大人げないぜ、神様のくせに」

「あんたらねええっ!?!」

「……諏訪子さま……」

「ええと、大丈夫? 早苗……?」

「……ぐすっ」

諏訪子の腕の中で、早苗は涙をこぼしながら、齒を噛み締める。

もともと、はじめからわかっていたことなのだ。

幻想郷へと旅立つ決断をした時点で、外の世界とのつながりは断たれることは明らかだった。そこには八坂神奈子、洩矢諏訪子を知る者は風祝たる己以外にはおらず、なればふたりが神としてのそのあり方を変え、することは避け得ないことだったのだ。

それが二柱と共にいる、自分の役であるというなら。それは、守矢神社の風祝、楽園のもう一人の巫女、東風谷早苗の矜持なのだ。

「っ、私、もつと頑張りますっ……私がおふたりのお力をしっかりと受け継いで、理解して、感じて、そのあり方を広めなきゃいけないかったです。いまみたいな間違ったかたちじゃなくて、ほんとうの、ちゃんとした姿で!」

たとえ拙くとも。共に、傍にいますかみさま」を知る自分が。それを果たさねばならない。

「私は、世界中の誰にも負けないように、お二人を想いますから!」

「早苗……」

感極まったように飛びつく諏訪子を受け止めて、早苗はその小さな体をぎゅっと抱きしめた。

「ですから、教えてください。おふたりに昔、何があったのか。どうして、ウチの神社にはふたりの神様がいるのか……!」

「……ん、そうだね」

——ああ、多分。

このために、私たちはこの幻想郷にやってきたのだ。言葉にはできぬおもいをそつと噛み締めて、諏訪子はそつと早苗の胸に顔をうずめる。

（なあ霊夢、早苗のやつ今さりげなく河童とかの信仰全否定したよな？）

（……まあ、いいんじゃない？ 本人たちの間でだけはいいい話っぽくまとまりそうだし）

なお、すっかり蚊帳の外のはきちんと空気を讀んだ。



後日——

早苗の尽力と諏訪子の奔走により、ほどなくして神奈子の姿は元に戻り、本人はまったく気付かないままにこの騒動——否、異変は終結する。

早苗は早速、八坂神奈子、洩矢諏訪子の二柱の神様の由来を示すための活動を始め、神社の境内には拙いながら、風祝直筆の縁起が記された。なお、この時ほど早苗は自分が習字を真面目に習っていないかったことを後悔したことはなかったという。

だが、徐々にではあるが二柱——あるいはふたりへの理解も進み、信仰も広まりだしている。

実に平穏な日々が——ゆっくりと流れ、春が過ぎ、夏が訪れようとしていた。

——かに、見えたのだが。

「お早うございます、神奈子さま、諏訪子さま！」

「お早うって、もう夕方——ぶはあ!？」

ロボの呪縛から解放され（といっても本人に自覚はないのだが）神の威厳たっぷりに杯に口をつけていた神奈子は、そのまま思いつきお神酒吹いた。

顔をびしょ濡れにされた向かいの諏訪子があうあう

と呻くのも放置し、げぼげほと咽ながら目を丸くする。

「さ、早苗ちよつと待つて、何、なにその格好は!？」

「はい?」

小首を傾げ、早苗はそのぼでくるうりと一回転。

白い袖以外に何も身につけない、ごくごくシンブルな姿。現代っ子の発育のよさ補正で麓の巫女よりはわずかに勝っているけれど、全体的に見ればいろいろ控えめな胸とか、ほんのりと色づいたその先端とか、やや硬めな鎖骨とか綺麗なカタチのおヘソとか、白くて柔らかなような太腿とか、それ以上に女の子としてちよつとくらいは恥じらいを持って罰の当たらない場所までもがもういろいろ遠慮会釈なくむき出しで。挙句ああもう見せられないよ!

「どうかしましたか?」

「ど、どうって!」

思わず目を逸らしながら叫ぶ神奈子。

諏訪子もとりあえず目を覆っているが、さりげなく指の隙間から念入りに早苗を観察中であった。ご先祖

として思うトコロはいろいろあるようだ。

もつともそれが『まるで成長していない……』なのか『大きくなつたねえ……』なのかはいろいろな議論がありそうだが。

「ま、まさか……」

そうなのだ。予想してしかるべきことだったのだ。

幻想郷に限らず、信仰によって神様のあり方が変わるなら、当然ながら現人神だって同じなのである。

訪れた異邦で、常識に囚われないことが大事、と常々口にしていた早苗が——ひとつの信仰として、人々の思いを集めているのもまた同じ。多くの人はその言葉を聴いて、なぜかそう思ったのだ。

これぞ“常識に囚われない”早苗さん。

さすがに人の身で、その姿かたちこそ極端に変わることはなかったのだが——

「じゃあ、ちよつと里にいつてきます」

「いや待て待ってちょっと待って早苗!?」

「お茶請けは戸棚にありますから」

「うわぁ待ってため早苗飛んじやだめ飛んじやうのらめえー!! ぜ、全部丸見えだからー!?」

……五分後。博麗神社。

ふたりの神様と、なぜか素っ裸の風祝の前に、靈夢は顔を覆って吐息をひとつ。隣で魔理沙がお茶を啜る。萃香は腹を抱えて爆笑中。

「……なあ、要するにお前らの言ってる信仰ってのはお約束のことか?」

「多く集まる人の心が、特定の結果を期待するわけだから、間違ってるわけじゃないと思うけど」

人口に膾炙する噂は、真実となる。事実そうやって生まれた妖怪というものもあるわけ。

幻想郷の懐の深さは半端ないのである。

「聞いてください、昨日、夢の中でお告げがあったん

ですっ! それで朝起きたら次作ではとうとう靈夢さんに代わっての単独自機でした! 神奈子様と諏訪子様の言うとおりですっ!」

「ほ、ほら落ち着いて、ね? 早苗ってばちよつと、錯乱してるだけだろう? ほら、深呼吸っ」

「お願いだよ早苗、正気に戻って! 謝るからっ、スベカ名とか馬鹿にしちゃってごめんってばーっ!」

「そんなことありません、確かに見たんです! わたしは皆さんとは違うんですっ!」

「早苗ーっ!」

袖だけで空を飛び力説する風祝が、広く幻想郷の名物となるのは、翌日のことであった。

……なあ、のちに正気に戻った早苗は一月ばかり引き籠ったという。

(了)



### 朝起きたらうちの神様がロボでした。

初出：東方崇敬祭(2009/6/21)

「三すくみには蛞蝓が足りない」収録

……えー、すごく時代を感じる内容となっております。神奈子様ガンキャノン説、早苗さん常識にとらわれない全裸ネタなど、結構な部分が流行に寄りかかっており、手を入れるかどうかかなり迷いましたが、当時はこんな話を書いていたという記録のためにもとそのままです。

ネタには走っておりますが、幻想郷に対しての外の世界……いわゆる我々がみる二次創作やキャラスレにおけるパブリックイメージというものは、幻想郷にいる本人たちにも影響を与えてるのではないかという疑念が根底にありまして。この考えは深秘録で一つの結論を見たようにも思います。

## 夏の蓮の葉商い

一昨日までの豪雨から一転し、梅雨の気配はどこへやら、空は晴れやかに一足早い夏の空。

このまま日が続けば、数日もせずに気の早い蟬でも鳴き出しそうな天気だった。いっそまたどこぞの天人がなにかを企んでいるのではと疑いたくなるほど。

神社裏手の縁側には、いつもの面々と、あまりここで揃っては見かけない顔が集い、思い思いに早い夏の陽射しを楽しんでいる。

「おお、いいねえこれ、なかなか素敵じゃないか」

「うちんところには池なんてないからねえ」

一面に蓮の葉を茂らせた神社裏手の池で佇むのは、山の上の神社の神様ふたり。特に諏訪子の方はいまにも飛び込んでいきそうな気配で、さらさらと水音を立てる澄んだ水面を覗き込んでいる。

「霊夢も普段は忘れてるぜ。多分、都合のいいときだけ思い出すんだ」

「失礼ね、手入れくらいしてるわよ」

「ええー、頑張ってるんの主に私じゃないかー」

答えたそばから舌足らずな抗議の声。木陰に寝そべって瓢箪をあおり、赤ら顔のまま萃香が口を尖らせていた。

今日も今日とて酔っ払っているが、いくら美味しくともあんなに毎日おんなじものを飲んでいて飽きないものかとたまに思う。

「ふつう、蓮があるのはお釈迦様に西方浄土だろう？ なんか謂れでもあるのかい？ ここ」

「昔からあるだけよ。どこから湧いてるのか知らないけど」

池から溢れた水は、裏手の沢に流れている。おかげで夏場は蚊が鬱陶しいが、それでもひと時の涼を取るのにはありがたい。寝苦しい夜にはそれなりに重宝しているのだ。

「なあ霊夢、それはそれとして腹が減ったぜ？　いつになったら宴会始まるんだ？」

「知らないわよ。宴会だなんて言った覚えもないし」  
今日、山の上から神様まで総出で出張つてきているのは、先日の異変解決のお礼という名目だった。

あの妙な騒動の何がどうなってオチがついたのかはさっぱりだが、どこからか聞きつけた魔理沙はちゃっかりここに同席している。

「そもそもあんたぜんぜん関係ないじゃないの」

「いや、霊夢もほとんどなんもしてなかったと思うが」  
そもそもアレを異変と呼んでいいのかどうかは議論の余地があるだろうが、ここはさて置く。

「大体ねえ、たまにはたかるばかりじゃなくて自分でも用意したらどうなの？」

「応、それじゃあ遠慮なく」

「んで、うちの戸棚を勝手に漁るのは用意って言わないのよ」

これ幸いと台所へ向かおうとする魔理沙の襟首を掴

んで制する。ぐえ!?　などと少女らしからぬ呻きが聞こえたが、自業自得というものだろう。

「れ、霊夢なにすんだ殺す気かつ!?」

「いいから黙って座ってなさい」

「あつはは。魔理沙は懲りないなあ」

ごくごく瓢箪をあおつて濡れた口元をぬぐい、萃香が笑う。それを目ざとく見つけ、魔理沙はそちらを振り向いた。

「……む。じゃあ酒でもいいか。一口もらうぜ？」

「うあ!?　ちよ、こら離せ、駄目だつてのにっ」

「いいだろ、減るもんじゃないだろうに」

「減らないけど減るんだいっ」

今度は瓢箪をめぐつて言い争いを始めるふたり。なんとも実にやかましいものだ。

取り合う気をなくしてお茶を啜っていると、もみ合う二人を引きはがすようにして、諏訪子が割って入った。

「あーあー、待ちなよ二人とも？　確かに、こんだけ揃つててなんにもなしじゃ詰まらないし、間も持たな

いよねえ。——ねえ靈夢」

「なによ？」

こちらを見た諏訪子は、ちょいちょいと池から伸びる蓮の葉を指さして言う。

「これ、少し貰ってもいいかな」

「いいけど。あとでお賽銭弾みなさいよね」

「あーうー、こっちの巫女はなんという蓮葉商はながしやいか。もうちよつと神に畏敬を持ってもバチは当たあたらないと思うけどなあ」

などと苦笑しつつ、諏訪子は蓮葉を茎から摘むと、とてとと木陰のほうへと戻り萃香の傍にちょこんと胡坐をかいて座った。

そのまま、杯のようにささげ持った蓮の葉を示し、

「ほれ鬼っ子。こいつならどうだい？」

「……ああ、碧筒杯へきとうはいか。——通だね、神様」

「ふふん。伊達に長くは生きてないよ？」

きよんとする魔理沙をよそに、萃香もすぐに意図を察したようで、腰の瓢箪を取り出して傾けた。諏訪

子は大きな蓮の葉でその酒を受け、葉の茎を折ってその端をくわえる。

蓮の葉は雨を弾くように、注がれた透き通る酒精を丸い珠にして転がす。その様はまるで瑠璃か玻璃か。そうやって碧の杯に満ちた酒を、諏訪子はくわえた茎でゆつくりと吸い上げていった。

小さなのをこくりと鳴らし、酒気に満足そうに頬を染めて、諏訪子にはまりと笑顔を浮かべた。

「どうかね鬼っ子。その博識に一献」

「お。神様にここまで誘われちゃ断れないなあ。靈夢、わたしも貰うよー」

萃香も慣れた手つきで蓮の葉を掲げた手元に萃め、諏訪子に做った。

大きな碧の杯をかたどる蓮の葉に、まるで宝石のよううにころころと転がる酒雫。きらきらと輝く雫をちゅう、と吸い上げ、飲み干して。二人は満足げに息を吐いた。

『西陽雜俎』卷之七、酒食篇に曰く、これ之名を碧筒杯

と為す。酒の味蓮氣に雜り、香りは氷に勝りて冷たし  
“——”

「流石、酒に関しちや専門家だねえ」

「知らなきや鬼の名折れてもんさ。ほら、もう一杯  
いきなよ神様」

からからと笑う萃香に、諏訪子も応じる。

鬼と神は、差し向かいに再度酒を注ぎ合つて、杯に  
見立てた蓮の葉を触れ合わせた。こんどは互いの杯に  
注がれた酒を仲良く茎で吸い合う。

これが碧筒酒、あるいは碧筒杯と呼ばれるのは、夏  
バテ防止の作用のある蓮の茎を筒にして酒を啜るから  
だという。また、その飲み方の様子から、象の水浴び  
に見立てて象鼻酒などと少々風情に欠ける呼び方もさ  
れるとか。

「へえ……荷葉に暑氣払いの薬効なんてあったのか？  
そいつは初耳だな。よし、私も貰うぜ」

「どれ、御相伴に預かるとしようか」

差し向かいで碧杯を掲げあう二人に触発されたか、

魔理沙に神奈子までがそろって池に向かう。

「——ちよつとちよつと、元気なまでの全部摘まない  
でよね？」

次々筆られてゆく蓮の葉に流石に黙っていられな  
かった。まだ花の開く音も聞いていないというのに、丸  
坊主にされてはたまつたものじゃない。

敢えて言つてはいないがあの池は神社の重要な食料源  
のひとつでもある。せめて蓮根が食べられるまでは自  
重してもらわないと困る。非常に困る。

「そう言わずに霊夢も呑みなよー？」

「ああもう。……いいわよ、勝手にして」

蒸し暑いのは確かで、心惹かれるものはないでもな  
かったが、涙を飲んでそう答えた。

「なんだよ、遠慮なんてらしくないぜ？」

「それはあんたが懐痛めてから言いなさい」  
早々と輪の中で茎をくわえている魔理沙にも釘を刺  
しておく。

「……それに、中身はどうあれ成りは若い娘がそろつ

て蓮っ葉に群がるのはあんまりよろしくないような気がするしね」

「おや不勉強だね巫女。天竺のほうじゃ、至上の女性を指して蓮女というそうだよ？」

「吉祥天ねえ……」

あれは、どっちかというといやらしい意味も含んでいた気がするが。

ちなみに一番格下は象に例えられるのかなんとか。

だとすると、蓮の茎をくわえて池に群がるコレは果たしてどちらなのだろうか。

そんなことを考えつつ、きやいきやいとかしましく酒盛りを始めた魔理沙たちをぼうつと眺める。

「なんだか楽しそうですね」

と、襖を開けて背後から気配がひとつ。

振り向けば、早苗が小さなお盆を抱えて戻ってくるころだった。

「台所、ありがとうございます」

「もういいの？」

「ええ」

畳んだ割烹着を脇に、隣に行儀良く腰を下ろす彼女は、庭先の騒ぎをみて小さく苦笑。

「なんだかご迷惑をかけます」

「いつもの事だから気にしてないわよ」

「霊夢さんはいいんですか？」

「まだ昼前よ。今から呑んでたら身が持たないわ」

幾分ぬるくなつたお茶を啜って答える。何がおかしいのか、早苗はまた笑いを堪えているようだった。

「では、こんなのはいかがですか？」

ことりと卓袱台に置かれた緑の深皿に目をやれば、鼻先をかすめる甘い焼き菓子の香り。火を通したばかりの丸い月餅が、山のように盛られていた。

「お、なんだ今度はこっちもか？ 美味そうじゃないか」

目ざとくこちらを見つけた魔理沙が、蓮の茎だけをくわえたまま、縁側から身を乗り出してくる。

「いやあ今日はいい日だなあ。なんか知らんが黙って

座ってると次々食い物がでてくるぜ?」

「少しは感謝して欲しいもんだけど」

「それで腹が膨れるならいくらでもするぜ」

茎をぶつと吹き捨てて、魔理沙は伸ばした左右の手に月餅をにひとつずつ確保。

「……太るわよ」

「お構いなくだぜ。蓮実の葉効は滋養強壮に鎮静、健胃だからな」

そういつて魔理沙は月餅にかぶりつき、幸せそうにもごもごと頬張りはじめる。

「花より団子……、月よりなんていうのかしら、こういうの」

「むぐ。見栄張るより頬張れだな」

「食べるか喋るかどっちかにしなさい」

「……むぐむぐむぐむぐ」

「食べるんかい」

「いや、本当に美味いぜこれ? なあ霊夢」

「あはは、ありがとうございます」

「なんだ、早苗の手作りなのか?」

「ええ。前に作り方教わったことがあって……この前、里のお店に行ったら蓮の実なんて頂いちゃったもので、やってみようかと思ったんです。上手くいくかどうかちよつと自信なかったんですけど」

「……へえ」

あまりにも美味しそうに食べる魔理沙につられ、こちらもひよいと手を伸ばして齧れば、抑えられた甘みに、しつとりと湿る餡。

蓮餡にしてはやや油が強いが、おなかを満たすにはちようどいい加減だろうか。

見れば、魔理沙はもう二つ目に取り掛かっていた。

「氣にいつていただけで嬉しいです。皆さんにいつて思いつてたんですけど……」

「あの分じゃしばらく呑んでるな」

「発端がよく言うわね」

「そいつは心外だな。異文化コミュニケーションのきつかけを作つてやったままだぜ?」

いつの間にか、車座になって呑み比べをはじめている神様ふたりと鬼。どうも、あれでなかなか気が合うらしい。

蓮の葉を傘にして飛び跳ねる諏訪子をちらりと見つ、むぐむぐと口の中に月餅を詰め込み、魔理沙は私の湯飲みからお茶をひとくち。

「……ん。よく考えてみりやそうだな、月見て跳ねるなんてのは兎ばかりじゃないわけか」

「まさか嫦娥じゃないでしょうけどね」

「はい？」

きょんととして早苗が聞き返す。

「昔は月にも蟪蛄が居たものなのよ。今じゃすっかり兎の天下だけだ」

「重力井戸の底ってな。知ってるのは大海か大宇宙かはさておき、このとおり蛇と蛙の巫女も、月の丸餅をつくるってわけだ」

「ああ……」

そうですね、と頷いて、早苗も月餅を手に取り、し

みじみと眺めてから口に運ぶ。

太陽には三本脚のヤタガラスがいるように、その対になる太陰である月には、蟾蜍ヒキガエルがいるとされる。夫を裏切って、不老不死の薬を独り占めして神になろうとした女が、その罪によってヒキガエルに変えられたのだとか。

「今になって思えば、地底騒ぎの黒幕がどれいかなんて、えらくわかりやすかったんだな」

「そうね、月に行ったときにでもついでに聞いてくれば良かったのかしらね」

「あ、あはは……」

冷や汗を浮かべつつ、早苗は泳いだままの目で月餅を盛った皿をこちらに押しやり、

「ええと、まだこれ、沢山ありますからどうぞ？」

「おお、悪いな」

全然悪気は感じていない様子で三つ目を食べ始める魔理沙。よく入るものだ。

「むぐ。しかし聞いてると里のほうでも人気なんだな



早苗んとは。どこぞの困窮巫女とはえらい違いだぜ。  
なあ霊夢？」

「何が言いたいのかしら」

「お前なんかが里に行っても店が片っ端から雨戸閉めて回るんだろ？」

「不名誉なこと言わないでくれる？」

「いうかそれは魔理沙の方に言つてやりたい。

「いやなに、蛇と蛙だけじゃ足りないからな。いつそお前んとこで余つた神様でも祀つてみたらどうかと思つてな？ 少なくとも今よりは賑わうぜ、きつと。…

…なにしろこれ以上寂れようがないからな」

「あのねえ……」

溜息と共に、残る月餅を口の中に押し込む。

「これ以上乗っ取られちゃたまらないわよ」

「今でもだいたい似たようなもんじゃないか」

「あ、あはは……」

乾いた笑いがますます深くなる早苗。

なお一説によれば三すくみの三匹目は蛞蝓ではなく

百足だとも言うらしいが、いずれにせよ、あまりイメー  
ジはよろしくないのは間違いない。

「さて、と」

「ん、なんだどこ行くんだ霊夢？」

ちゃぶ台に突つ伏して月餅を齧る魔理沙に、縁側の  
蓮の葉を指差した。

「いい加減杯代わりだけじゃ勿体無いから、荷葉飯かようはんでも作るわ。このままだと花まで全部食べつくされそう  
な気もするし」

「あ、お手伝いします」

「いいわ。これ以上世話になつてばかりじゃ面目立た  
ないもの」

立ち上がりかけた早苗を制し、魔理沙の手を掴む。

「ほら、あんたも手伝うのよ」

「……なんだよ、もう食えないぜー？」

どうももう酔つ払っているらしい。

「いいから来なさいっての」

「あー……」

たわ言を無視して、魔理沙の襟首を引きずりながら台所へ向かう。

その途中で、魔理沙はぼつりと呟いた。

「なんだな、どっちかって言うところや かたむり 蝸牛だな」

「それこそ3匹目は蛇足よ」

「違うないぜ」

つまりは。

……山の頂のかの神社の上では、千年来の二柱の争いなど所詮は角上のもの。些細なじゃれ合いでしかないのかもしれない。

久方の 雨も降らぬか 蓮葉に  
たまれる水の 玉に似たる見む

(新田部皇子)

## 夏の蓮の葉商い

初出：東方崇敬祭(2009/6/21)

「三すくみには蛞蝓が足りない」収録。

前作と一転してそこそこ真面目なお話。本のタイトルを回収するために蛞蝓と蝸牛のお話にもなっております。

当時は東方らしさの再現のために必ず一つお酒のネタを突っ込んでおり、碧筒杯というとても洒落たお酒の飲み方を知って作りました。涼しげなテーマでまとまり、いまでもお気に入りの一作。

## 鼠は社に憑りて貴し

Whenever man comes up with a better mousetrap,  
nature immediately comes up with a better mouse.

人間がより強力なネズミ捕りを考える度に、自然はより賢いネズミを創る。

—James Carswell



天高く晴れ澄む秋の空の下、今日も穏やかに、山の里の、人の妖怪の信仰を集める守矢神社。

その住まいを兼ねた社務所の台所で、風祝の小さな

悲鳴が響く。

「きゃっ」

驚いて飛びのいた早苗の足元で、小さな灰色の塊が甲高い鳴き声をあげ、素早い動きで部屋の隅へと走り抜けてゆく。疾走する小さな影は、戸棚と壁の隙間の奥へするりつと消えていった。

「びっくりした……。幻想郷にはやっぱりこういうのが居るんですね……」

壁に頬をくつつけて、ネズミの通り抜けていった狭い隙間を恐る恐る覗き込みながら、早苗はむうつと眉をひそめる。

「前は家の中でなんて見たことなかったのに。どこから入り込んできたのかしら」

守矢神社は、湖を含む土地まるごと幻想郷にやってきた。ということは少なくともネズミが入り込んだのは早苗たちが幻想郷にやって来てからだろう。

ゴミの処分や水道事情など、さまざまに状況が変わったとはいえ、はつきりその姿を目にしてしまうとあ

まり気持ちの良いものではない。

「新参……じゃなくて、ネズミホイホイみたいなのはこっちには売ってない……わよねえ」

早苗が溜息混じりに苦笑していると、廊下の方から小さな姿が台所の入口に顔を出す。

「どうしたんだい早苗？」

「あ、諏訪子様。ネズミが出たんですよネズミ。台所に出るなんて始めて見ました」

「あー、そうかいネズミか。ここ十何年か見てなかったけど、気をつけなきゃねえ」

「厄介そうに唇を真横に結ぶ諏訪子に、早苗はやや意外そうな表情になる。」

「気をつけるって諏訪子様。たかがネズミですよ？」

「ネズミを舐めちゃいけないよ早苗。あれで雑食、なんでも食べるし群れれば獷猛なんだから。赤ん坊の顔やら指やらも平気で齧るし、悪い病気も沢山持つてる。」

「油断していると痛い目を見るよ？」

「そうなんですか？　そういうえばこの前会ったネズミ

の妖怪もそんなこと言ってましたけど」

「あいつらは生命力旺盛だからねえ。二匹いれば一年後には二百七十六億匹に殖える。人間なんかあつという間に食べ尽くされちゃうよ？」

「うーん。ネコ型ロボットじゃあるまいし、そんなに過敏にならなくてもって気がしますけど……」

「あの妖怪、毘沙門天の使いなんだろう？　守矢神社の巫女とはそりゃ相性も悪いだろうさ」

「あ、神奈子」

ひよいと顔を覗かせたもうひと柱の神様が口を挟む。毘沙門天の化身と自称した戦国武将、上杉謙信のライバルの武田信玄は諏訪大社——建御名方信仰を保護していたことでも有名である。

「もう、茶化さないでってば。冗談で言ってるんじゃないんだけどなあ」

土着神の頂点として、諏訪子はネズミに対して別の見解を持っている。なにしろ南極以外の世界中に分布し、数千年にも渡って古く人と関わってきた獣だ。

外の世界ではそれでいいのかも知れないが、幻想郷での流儀はまた違う。早苗ももうそれは十分に思いつていると、諏訪子は思っていたのだが……

「うーん。気持ち悪いのは確かですね。でもそれならゴキブリのほうが嫌ですし。あ、そういえばこの前ゴキブリの妖怪も見たんですよ！ 大きくてカサカサしてて、気持ち悪かったですよ！」

「いや、早苗。あれって蛍の妖怪じゃなかったっけ？」  
ああ怒られないといいなあと思いつつフオローに回る諏訪子。

「ともかく。小さいからってあまり軽く見るのはよくないよ早苗。慢心していると足元をすくわれる」

「そんな、大丈夫ですよ諏訪子様。もう私もすっかりこっちにも慣れましたし」

任せてくださいとばかりに、早苗はほんと胸を叩いてみせる。

「前から言ってるようにですね、諏訪子様もあんまりあちこちふらふらせずに、ちゃんと神社で信仰を集め

ていてください」

「ん。早苗の言う通りだね。もうここは私だけの神社じゃない」

隣で神奈子がもつともらしく相槌を打った。

そう言えはいつの間にか二人で信仰を得るようになったなあ、と諏訪子は思いつつも、それに納得できるわけもない。

「えー。そんなのつまんないってば」

「そういうのがよくないんです。格好はともかく、もう少し神様の威厳をもたないと、信仰は集まりませんよ。崇めるのとかは私がやりますから！」

不満もあらわに頬を膨らませる諏訪子に、しかし早苗は御幣をひらひらと揺らし、自信たつぷりにこぶしを握る。

「いや、そうは言うけどね。神奈子もさ」

「あ、いけないもうこんな時間！ お買い物があるんですした！」

「あ、ちょっと早苗、話はまだ——」

「じゃあ神奈子様、諏訪子様、私ちょっと出てきますね！」

諏訪子が止める間もなく、早苗は慌ただしく勝手口に降りた。

「行ってきまーすっ」

「ああ、いつてらっしゃい」

とんとんと靴のかかとを直しながら、地を蹴って、風を纏い空に舞い上がる早苗。

「おっと、こっちもお呼びだね」

拝殿の方で鈴が鳴らされ、神奈子も参拝客に応えるため廊下の奥へと引っ込んでゆく。

取り残された諏訪子は、所在無げにばたばたと手を振るばかりだ。

「んー……。だいじょうぶかなあ……」

空の彼方に小さくなった風祝の背中を見送りながら、諏訪子はそうつぶやくのだった。



幻想郷では、遠出するか急いでいるときは、空を飛ぶものだ。それが当り前の日常になるまでには、人里まで買い物に行こうとする度についつい自転車を引き張り出してしまったりしたが、それももう懐かしい話だ。

みるみるうちに小さくなる山の上の神社から、高度を保ちつつ里へと進路をとる。本日は天気晴朗にして風穏やか。飛ぶには絶好の空模様だ。

巫女装束の袖をはためかせ、妖怪の山から落ちる河の大瀑布を右手に眺め、早苗は湖に注ぐ溪流に沿って飛んでゆく。

「~~~~~♪」

秋の陽射しは穏やかに、紅葉に染まる木々を揺らし、豊かな実りの気配を感じさせた。上機嫌で人里へ向かっていった早苗だったが――

「あれ？」

視界の端にちらりと移った、色づく秋の景色にはふ

さわしくない灰色の影に、早苗はふと眉をひそめる。

身の丈ほどのダウジングロッドを操り、低空で溪流の周辺を移動するその姿は、さっき話に出たばかりのいつぞや出会ったネズミ妖怪のものだ。

「……ふむ」

ダウザーの小さな大将、ナズーリン。

命蓮寺の聖に仕える彼女は、探し物を探し当てる程度の能力を持つ。先日の宝船騒動の時は、なにやら宝物を探しているという言い分で、身のほどもわきまえず早苗に襲い掛かってきたが――

「あれだけ徹底的にやっつけてあげたのに、性懲りもなくまた現れるなんて。ネズミのくせに不屈きですね」  
諷訪子はあることを言っていたが、相手はたかだかネズミの妖怪だ。遅れをとるはずがない、と早苗は思う。

それにここは守矢の神の治める神域。神様を信仰しているのならばともかく、そうではない妖怪の侵入をみだりに許していいわけがない。早苗は方向を変え、

彼女を追いつがるようにその前に回りこむ。

「ちょっと、そのあなた！」

急に現れた風祝に、ナズーリンは軽く驚いたように瞬きをしたが、すぐに不敵に目を細めてロッドを下ろした。

「なんだい君、急に呼び止めて。山の巫女が私になんの用かな？」

「それはこちらのセリフです。妖怪がこんなところになんの用ですか？」

「……ほほう。まるで何をするにもいちいち君にお伺いを立てなければならぬような口ぶりだね。」

幻想郷では妖怪が陽の下を歩いちゃいけないとは聞いていないけれどね。私は何もやましいことはしていないよ？」

「いいえ。問題大アリです。神を信仰しない妖怪は退治しなければなりません」

びし、と言い放った早苗に、ナズーリンはしばし呆然とした後、やれやれと肩をすくめた。



「……はあ、まったくなんでこう、人間というのは拘子定規かね。神様びいきもいいが、御幣持ちも大概にしてみらいたいのだ」

「やましいことがないならちゃんと説明できるはずでしょう。十二支の一位になりたいがためにちゃっかり牛に乗ってズルをするネズミは、何かよからぬことを企んでいるに決まっています」

早苗は取り出した御幣をくるくると回し、ナズーリンに向けて突きつけた。それに応じるように、風祝の周囲を巡る風が、より攻撃的に強く渦を巻く。

「妖怪退治は巫女のお仕事です。霊夢さんもこんなのを野放しにしておくから、信仰が集まらないのよ」

早苗の本気を感じ取ったか、ナズーリンもひゅん、と左右のロッドを交差させて構え直した。

「やれやれ。ネズミを舐めると死ぬよと言っていたはずだけど、まだよくわかっていないみたいだね」

「あら。反抗するんですね。やっぱりネズミには破滅願望とかあるのかしら？」

「なんだ君、まさかネズミの集団入水自殺なんてデマを信じてるのかい？」

「——この前のじゃ懲らしめ方が足りなかったみたいですね。いいでしょう、今度こそきちんと退治してあげます！」

弾幕勝負の口火を切ったのは早苗だった。風を纏って振り抜いた御幣に従い、弾幕が溪流の上にばら撒かれる。

溪流の水面を波打たせ、轟と吹き荒れる風の弾幕。

しかしそれを苦もなく避け、ナズーリンは先手必勝とばかりにスペルカードを宣言した。

「搜符『レアメタルデテクター』」

上下に構えたロッドから左右に放たれる二対の光線しかし早苗は、悠然とその間に滑り込み、余裕たつぷりに微笑んでみせた。

「あら、いいんですか？ あなたのスペルカードなんて、2枚くらいしかないじゃないですか。所詮はネズミなんですネ」

しかもこの『レアメタルディテクター』、もう一枚の『ナズーリンペンデュラム』、どちらも早苗は攻略済みだ。

早苗は高らかにスペルカードの使用を宣言する。

「開海『海の割れる日』!!」

押し寄せるのは潮の香り。水飛沫を上げ白波を立てて出現した『海』が、早苗の振りおろした御幣に従ってスペル名の通り真つ二つに裂けた。

怒涛のような大海嘯が爆音を轟かせ、左右に伸び砕けて粒状弾を散らせるナズーリンの光線を瞬く間に押し流す。

「ほら、ざっとこんなものです!」

「——いいのかな。そんな大技を緊急回避に使ってしまつて?」

「ご心配なく。私のスペカは5枚まであります!」

スペルカードの枚数自体では一対一交換での相殺だが、自機&5面BOSS 1面BOSS 妖怪早苗とナズーリンではそもそもデッキ手札の枚数からして圧倒的な戦力差がある。この程度で風祝

の優位は揺らがない。

「これで——決まりです!」

「いやはや、せっかちな巫女だ。仕方がない、本気で行くとうしようか」

迫る早苗の前に、ナズーリンは悠然とロッドを操る。

それはさながら指揮棒を振るうコンダクター。それに導かれ、二重三重に戦列を組んだ通常弾幕が出現し、まるで突き進むネズミの群れのように——次々と早苗に襲い掛かった。

「何かと思えばただの通常弾幕じゃないですか。大きなことを言ってもう息切れですか?」

叫ぶ早苗に、ナズーリンはあくまで余裕を崩さない。

「君のご指摘通り、私はさほどスペルカードを持ってるわけじゃないが、別に弾幕ごっこにそれしか使っちゃいけないわけではないだろう? だから、こちらでお相手するよ」

「馬鹿にしないでください、こんなの簡単に——」  
多少速度は速いが、真正面から飛んでくるだけの弾

幕だ。回避するのはわけない。

迂回軌道を取り、戦列を組んで迫る楔弾幕の隙間を抜ける早苗に、ナズーリンは口元をふと緩め、ロッドの先端を向けた。

「そうだね。だから二段階ほど難易度を上げさせてもらったよ？ 頼豪阿闍梨にあやかつて、鉄鼠が率いる、鉄の牙持つ八万四千匹の鼠の群れ。そうだね、高難度……いや、狂気というところかな？」

「あ、……え？」

小さな賢将の指揮に従い、さらに次々と撃ち出される弾幕の列が、幾重にも重なって出現。

先程までとは比べ物にならない速度で、楔弾は統制のとれた軍隊のように隊伍を組んで、続々と縦列突撃を敢行する。

「奇跡を起こす程度の能力を持って、自ら現人神と名乗るくらいの君だ。これくらいの弾に当たったところで、どの程度のダメージになるかわからないけれど。でも——だからといって、あまりネズミを甘く見る

と、死ぬよ」

早苗が振り仰ぐ先、正面は密集する高速楔弾の戦列。左右に隙間は——ある。そこを抜ければ——だが、（それじゃ間に合わない!?）

「だめ、当たる——」

目の前に迫る弾幕を前に、早苗は反射的に目を閉じた。

刹那——

大気が軋むように収束し、閉じた目蓋の上からも分かるほどの強い光が、ぼつ、と視界の端に灯る。

次の瞬間、轟音と共に閃光が周囲を埋め尽くした。

蛙符『手管の蝦蟇』。

炸裂する光は、攻撃ではなく防衛。緊急回避のためのものだ。

スペルカード宣言と共に現れた諏訪子は、早苗を庇うように、ナズーリンとの間に割って入った。

「諏訪子様!？」

どうして、と言いかけた早苗の唇を、すつ、と人差し指で触れて制する諏訪子。

「ちよつと力みすぎだよ早苗。一手先の目の前だけじゃなく、もつと周りにも注意を払わなくちゃ。ネズミには気をつけろって言い聞かせてたつもりだったのになあ」

「……………それは、っ」

諏訪子に指摘され、唇を噛む早苗。

「言いそびれてたけどさ。ネズミは大黒さまや毘沙門天の使いってだけじゃなく、十二神将の宮毘羅大将の化身としても描かれる。遡れば金毘羅様、つまり梵天様だ。決して神格で劣るような相手じゃないんだよ。

それにネズミは死を運ぶ凶獣でもある。お決まりの鼠毒<sup>そどく</sup>だけじゃない。ネズミ妖怪に噛まれれば猫だつて死ぬんだからね? 黒死病<sup>ペスト</sup>は、<sup>やまにたれにネズミ</sup>瘋<sup>やまにたれにネズミ</sup>。って書く

くらいなんだから」

そうして諏訪子は上空のナズーリンを見上げる。

「そつちもそつち。早苗が油断せず本気でやれば負けるとは思わないけど、いまのはごっこ遊びとは違うんじゃないかい？」

妖怪が人間を殺す気でやるようだったら、余所の巫女も黙っちゃいないだろうに」

諏訪子の指差した先では、楔弾のひとつが命中した一抱えもあるような大岩が綺麗に撃ち抜かれている。

改めて先程の弾幕の威力を思い知った早苗の背中を、冷たいものが滑り落ちる。

対するナズーリンは、諏訪子の神力に反応して振れるロッドを握り締め、やや緊張の面持ち。

「……あなたが山の上の神か。先日も力は感じられたが、姿を見るのはこれが初めてだね。思っていたのただいぶ違う」

「よく言われるねえ」

ケロケロと笑い、諏訪子はぴょん、と手近な大岩の

上に飛び乗った。

「子供の喧嘩に親が出るじゃあみつともないけど、相手が本気じゃ、私も黙っていられないかな」

「では、あなたが相手をしてくれると？」

「そんな、諏訪子様っ、私は——」

「ストツプ早苗。あまりネズミだからって馬鹿にしちゃいけないといったつもりだけど？」

正論を言われ、早苗は押し黙る。

「叱ってるんじゃないよ？ 一寸の虫にも五分の魂。

万物にも魂は宿る。どんな相手でも自分を高めることはできるからね。それはこんな遊び（遊戯）にだって言えることさ」

諏訪子はずっと袖中に手を隠し、ナズーリンを見上げた。

それを合図に、ナズーリンは無言のまま弾幕を再開する。たちまち視界を埋め尽くす榴弾の群れの中、諏訪子はにんまりと微笑み、

「遊びなんだから、どうやって楽しくなるのかを考え

るのも醍醐味だ。じゃあネズミを相手にしたときはどうすればいいか。やってみせるよ？」

とんと地面を蹴って宙に躍り上がった諏訪子は、ナズーリンの弾幕をするりと掻い潜り、手元にいくつかの光弾を並べた。

「たとえば、ネズミは壁際を通るのを好むからねえ。こう撃ったときはこう逃げる」

ナズーリンの視界を塞ぐ光条が放たれ、左手側に赤の混じった灰色の粒弾がはじけるように発生する。その弾の一群が、彼女の回避運動に反応してばらけ、散弾のようにその動きを制限する。

次の回避動作のためには高速で距離をとりたいナズーリンだが、ばらけた弾に阻まれてそれはうまく行かない。やむなく光線に沿って弾幕密度の薄い右手に逃げようとする。

「くっ!？」

そこに追い撃つように、光線が左から入り、大きく空間を薙いだ。

上下の逃げ道も塞がれ、ナズーリンは機動を急制御。手近な木の枝にロッドを引っ掛けて強引に急ブレーキをかけ、尻尾を翻しての切り返しを試みる。

「こうやって、驚かせたところに——こう、で済み「っ!?!」」

分裂する偶数弾が、狙いすましたかのごとくそのナズーリンを捕らえた。彼女の残るスペルカードは、まだ宣言を終えておらず、相殺には間に合わない。

掲げたロッドも囷の銀弾を捌くので精一杯。あえなく脇腹に被弾を許したダウザーの小さな大将は、水面にぶつかって大きな水柱をあげる。

「これで新スペルのアイディアが一丁上がり。

宝探しの大好きなネズミになぞらえれば、そうだね、——罫符『石見銀山ネコイラス』ってとこかな?」

「……………」

自分があれだけ追い詰められたナズーリンをあつかりと仕留めてみせた諏訪子に、早苗は思わず声を上げていた。

「で、でも諏訪子様! そんな特定の相手を狙いうつみたいなスペル、いいんですか?」

「ま、初見殺しってやつさ。別にネズミに限ったことじゃない、いまの反射は大抵の相手なら引っ掛かるよ? ねえ?」

「……………」

しぶとく溪流の水面ぎりぎりに踏みとどまっていたナズーリンを見下ろし、諏訪子は再度微笑む。

「じゃあネズミさん、もう一回行こうかな?」

「望むところだっ」

再度の諏訪子の宣言に応え、水柱を立たせ、ナズーリンは急角度で上昇。先ほどと同じ間合いで迫る諏訪子の拡散弾を真つ向迎え撃つ。

今度は回避機動をぎりぎりまで抑え、左右のロッドを慎重に操り、距離を測りながら低速で弾幕をひきつける。

「ここで落ち着いて——弾の拡散を防ぐ!」  
ダウザーの小さな大将は拡散弾を最小限の機動で突

破して、光線を掻い潜り、偶数弾の隙間を一気に突き抜けた。

同時、ロッドを回転させると共に戦列を組ませた弾幕で諏訪子の陣地に突破口をこじ開ける。

「そこだ!」

足並みを揃え突撃する狂気の弾幕が、諏訪子の身体を捉えた。

「諏訪子さま!?!」

が。ナズーリンの光弾が諏訪子の足を掠めたかに見えた瞬間、ぱん、と鋭い拍手が響く。

被弾を知らせる合図と共に、諏訪子は感心した様子で溪流の上に降りた。

「……いやいや、初見殺し狙いで組み立ててみたけど、まさか本当に2回目で破れるとは。やつぱりネズミは侮っちゃいけないね。さすが用心深い」

折角の新作スペルをあつさり打ち破られながら、あつけらかと笑う諏訪子に、ナズーリンは薄く汗を滲ませ、口元を震わせた。

「……ダメだな、まるで効いてる気がしない。すっかり遊ばれてる気分だ」

「いやいや、これで互いに被弾は一機ずつ。そっちはスペルカードを温存したまま早苗とも被弾一対一だ。いい勝負じゃないかな?」

「言ってくれるね。余力が残っているのは分かっているよ」

諏訪子の力量はナズーリンも理解したのだろう。幾分気圧されながらも、なお彼女は引く様子もなく、ロッドを低く構えて、勝負続行に応じる気配を見せた。

「心意気も大したもんだ。まあこのままだと勝負もはつきりしないし、決着をつけないとね」

とん、と水面を蹴って跳んだ諏訪子は、先刻ナズーリンが飛び乗った岩に再度足場を移し、早苗をさりげなく背中に庇う。背中越しに風祝に顔を向け、

「ネズミ<sup>初見殺し</sup>捕りは有効に使えば役に立つけど、種が割れちゃこんなものさ。何度も通じるわけじゃない。

……やつぱり最後にものを言うのは、ね」

帽子の下で黒く澱む瞳を見開き、諏訪子は言う。  
「――気合、さ」

――崇符『ミシヤグジさま』

――刹那、  
ざあ、と巻き上げられた河の水が雨になって降り注ぐ。スペルカードの応酬に溪流はすっかり姿を変え、流れもその向きを変えている。あとで河童が文句を言いに来ても言い逃れはできそうにない。

「……ふむ」

切り札のスペルが炸裂したその余波の中、対戦相手の気配が消えたことを確認し、諏訪子は上機嫌で腕組みをひとつ。

「あー、楽しかった。なかなか骨のある妖怪が居るもんだねえ」

「あの、諏訪子様……」

「なんだい早苗？」

『ミシヤグジさま』を避ける間もなく余波を受けて全身濡れねずみの早苗が、じつとりとした視線で諏訪子を睨んでいた。

「今のは諏訪子さまも十分おとなげないと思いますけど……」

「いやいや早苗。やっぱ博麗の人外巫女相手とかならともかく、神様がそうしよつちゅう負けるわけには行かないでしょ」

「ひょっとして、単に諏訪子さまが暴れたかっただけじゃないんですか？」



神様の意図を計りかねてそう訪ねる早苗だが、諏訪子はあえて聞き流したか、返事はなかった。



「――やれやれ」

早苗と諏訪子がそんなやり取りをしている中、溪流の遙か下流、ざばあつと岸に這い上がる濃灰の影ひとつ。

服のあちこちをぼろぼろにしたナズーリンは、文字通りの濡れネズミと化したさんたんたる有様の自分の格好を見下ろして溜息をこぼす。

「まったく付き合っていられないな。ネズミは互いの絆を試す実験動物じゃないというのに」

それにしても、ひどく時間を無駄遣いしたものだ――そう呟くと、小さなくしゃみと共に彼女は森の中に姿を消していった。

――後日。



博霊神社の境内にて、霊夢にびしりと御幣を突き付けて高らかに宣言する早苗の姿があった。

「さあ霊夢さん、勝負です！」

「……なんなのよ一体」

すでにテンション最高潮の早苗に対し、いつもどおり縁側でお茶を楽しんでいたところに脈絡なく勝負を挑まれた霊夢は面倒臭そうにあくびをしつつ、怪訝な顔で答える。

「勝負勝負って、あんたまで魔理沙の真似しなくてもいいじゃない」

「いえ！ 私は悟りました！ 相手が巫女だろうとネズミだろうとリグルだろうと、戦って全力を尽くします。それが神に相応しい力をつけるための一番の近道！ そう、獅子搏兔<sup>ししはくと</sup>です!!」

「……いや、まあいいけど」

言っても聞きそうにないしねと後ろ頭をかきつつ、  
霊夢は早苗の勝負に応じる。

「先手必勝、行きますっ！」

颯爽と風をなびかせ、早苗は早速諏訪子直伝の初見殺しを叩き込まんとスペルカードを宣言。弾幕を繰り出した。まずは前方に拡散弾を広げ、続いて退路を塞ぐ光線を配置。

「そう！　ここで右に追い詰めたところを——って、いつの間にひだり？」

初見必殺のはずのフェイントが、霊夢を追い詰めたかに見えた瞬間。彼女の姿は通り抜けられるはずもない弾の隙間を抜けて反側側にあつた。

早苗があれ？　と表情を変えると同時に、

「はい、これでおしまい」

スペル獲得の宣言とともに、高速で打ち込まれた追尾呪符がぱしーんっ、といい具合の音を立てて風祝のおでこに張り付いていた。

目を回しながら、ひるひるぼてり、と境内に落っこ

ちた早苗は、仰向けになって大の字に転がる。

「人の動きじゃなあい……」

「だから何しに來たのよあんた」

呆れ顔の霊夢は、ますます不可解な顔をして、常識をあさつてのほうに放り投げ始めた守矢神社の巫女に首を傾げるばかりだった。

(了)

## 鼠は社に憑りて貴し

初出:御射宮司祭(2009/10/25)

弾幕表現について友人の白味氏に協力いただき、実際にオリジナルスペルを考えてそれを文章で表現するという試みに挑戦したお話。ちょうどスランプに近い状態に陥っていた中の諏訪風神祭初参加ということで、制作時間が短い中でいろいろ努力の跡が垣間見えます。この時、この本片手に初めてご挨拶させていただいたサークルさんが結構ありまして、一つの起点になった思い出のあるお話でもあります。

## おおぞらをどぶ

ほんのりと陽の氣に満ちた空には、刷毛で描いたように薄く雲が伸び、傾きかけた日差しを彩っている。穏やかな風は春の暖かさとともに土の匂いを運び、遠く山の向こうへと吹き抜けてゆく。春告精の笑顔と共に、生命が芽生え育つ息づかいが幻想郷のあちこちから聞こえていた。

「……………」

祀られる風の人間、東風谷早苗は暖かな風を胸一杯に吸い込んで、新緑芽吹く春の空をゆく。

身体を傾ければ、頬に受ける風は転じ、視界が巡る。

少女の姿は蒼天にあった。伸ばした巫女服の袖は緩やかに波打ち、三六〇度の絶景の中、風祝は遮るもののない空を舞うように飛ぶ。

早苗が守矢神社の二柱とともに幻想郷にやってきて、

少なくない時間が過ぎていた。賑やかな無何有の郷での生活は騒がしくも慌ただしくもあり、苦勞もあったが得たものもまた多い。

そんな中でも、彼女が一番氣に入っているのは、このどこまでも続く空だった。

風祝の名の通り、少女の奇跡の力は強く、大氣、空に結びついている。元居た世界では自由に空を飛ぶこともできなかった早苗にとって、こうして空に身を躍らせることは、何よりも強い解放感を与えてくれるのだった。

「……と、いけないいけないっ」

いつのまにか、帰り道を大きく外れていたことに氣付き、早苗は慌てて進路を神社に向け直した。

今日は人里での用事の帰りだ。昼過ぎには戻るつもりだったのを途中あちこちで引き留められて、気づいたときにはお日様は天頂からだいぶん低くなっていた。

「信仰が集まるのはいいことなんだけど……」

帰りを待つ神様たちには里の分社を通じて連絡は入

れたものの、そろそろ夕方のお務めとご飯の支度を始めなければならぬ時刻だ。

少し急ごう、と早苗が速度を上げた時だった。

「ふっふっふ……」

ふと視界に射した影に、振り仰いだ早苗の眼前に、ぬうっと紫色の未確認飛行物体が姿を現す。

大きな目玉にべろんと揺れる真っ赤な舌。古びた茄子色の大きな傘が、ふわりふわりと空に漂いながら、大きな口を開いた。

「うらめしや〜」

精一杯つくったのであろう低い声を出しながら、傘の下から色違いの眼をした少女が顔をのぞかせる。

「……ああ、また出た」

「むーっ、なによ、その反応はっ!!」

早苗が呆れた顔を浮かべると、お化け唐傘の多々良小傘は不満そうに口をとがらせた。

早苗が彼女と初めて遭遇したのは、先日の宝船騒動のことである。以来、なぜか早苗を驚かせようとえ

らく御執心の小傘なのだが——その方法とは言えづらいめしやのワンパターンで、一向に成果は上がっていない。

すっかり顔見知りになってしまったお化け傘は、今日もばさばさと茄子色の傘を揺らし、片目を閉じてぺろっと小さな舌を見せ、精一杯声を張り上げる。

「ほらあ、驚きなさいってば!! おばけだぞー、うらめしや〜っ!!」

「裏、裏って、よっぼどウラものが好きなんですネ? 表じゃもう刺激が足りないんですか。ああいやらしい」

「ひ、ひどい言いがかりだっ!?!」

折角の頑張りをばっさり斬って捨てられ、叫ぶ小傘。

口をへの字にして頬を膨らませるお化け唐傘に、早苗はひらひらと手を振って見せた。

「よくこんな明るいうちから出てこれますね。また退治されたいなんて、さでずむとやらもご苦勞様です」

「そんなわけないじゃない。今日こそ頑張って人間を驚かせるのよ!!」

茄子紺色の傘をぶんと振りまわし、胸を張る小傘。

「無理だと思えますよ？　ぶっちゃけ才能ないですし、あなた」

「ひどっ!?　そこまで言われる筋合いはないと思うな!?　他の巫女とか魔法使いなら、もっと曖昧に『いるよりはいい方がマシ』とか『遺憾ながら鋭意努力に期待』とか言ってくれるのに?!」

そっちのがもつと酷いなと思いはしたが、そろそろ面倒なので指摘するのはやめにして、早苗は手に腰を当てて小傘に向き直る。

「だいたい、前から言おうと思ってましたけど……あなた人間をおどろかせたいんですよね？　なら、どうしていつもわざわざ——」

袖の中から御幣を取り出し、遙か眼下に大地を臨む周囲の空を示してから。早苗はその先端をびしっと小傘の鼻先に突き付ける。

「こんな空の上で待ってるんですか？」

「は!?　そう言えっ!?」

これまで考えもしていなかったのか、小傘はたった今気付いたとでも言うように大口を開けた。

「思ってた以上に間抜けなんですね……」

心の底からの同情だったのだが、小傘にはお気に召さなかったらしい。

「う、うるさいうるさいっ。こ、これはねっ、そう、そうよ！　あなたを待ち伏せしてたんだからっ！」

「……ま、どっちでもいいですけど。実害がなからうと人間に悪さしようとしている妖怪は見過ごせません。退治してあげます！」

「言ったな、やってみろーっ!!」

こんなやり取りももう慣れたものだ。妖怪と人間の間には、こうした交流は不可欠でもある。

「先手必勝！」

——傘符『パラソルスターシンフォニー』っ!!」

いきなり突っ込んできた小傘の先手で始まった、いつもの弾幕ごっこは、

……無論、わずか数回の攻防でけりがついた。

「ううーらーめーしーやあー……あ……」

撃ち落とされた小傘は、程よく焦げつつひるひると地面に落ちてゆく。ドップラー効果付きで退場してゆく彼女の姿を見ながら、早苗は小さく溜息をついた。

「そうなのよね。……やっぱり、人をおどろかせるには空の上はあんまり向いてないのは確かなんだ」

常識に囚われていてはいけない幻想郷ではあれど、そこに住む者たち全員が歩く代わりに空を飛んでいるわけではない。人里の大半のものは飛べないのだし、幻想郷にあっても空を飛ぶことは、一部の人間にしか叶わないことだ。

だから、人々の信仰を集め、空を飛ぶことのできる早苗は、不思議の満ちた幻想郷にあつてさえ『普通』よりも『特別』の側に属している。

でも――

それは、元居た世界での『特別』とは違うものだ。

「……………」

自分一人だけとなった薄暮の空の下、いつしかその

広大無辺な広さに押しつぶされそうな錯覚を覚え、早苗は小さく身震いする。

穏やかな夕風に巫女服の袖を揺らす早苗の表情は、それとは対照的に物思いに沈んでいた。



その日も、よく晴れていた。

水面を叩く滝の轟音が、森の木々に囲まれた青空高く響き渡る。

岩を削らんばかりの激しさで滝壺を打つ瀑布から、白い飛沫が珠と散り、うつすらと深溪に虹をかけている。落差一〇〇mをゆうに超える妖怪の山の大滝、波立つ滝壺を見下ろす崖上の岩に、早苗は静かに立っていた。

滝の水気が満ちる湖面の空気は湿って重い。それが陽光を浴びて温まり、流れ落ちる瀑布に沿って上昇気流となり吹き上げてくる。

「……よし」

精神を集中させ、肌のすべて、髪先から指先まで、全身でしっかりと風を感じながら、早苗は軽く頬を叩くと、意を決して地面を蹴った。

少女の身体は重力を支える地面から切り離されて、宙へと踊る。次の瞬間には、少女の身体は垂直落下の最中にあつた。

「……………」

下腹部を押し上げるような落下感がこみ上げてくるのに耐えながら、早苗はぐつと息を詰めた。

耳元を吹き荒れる風切り音を感じながら、きらきらと輝いて散る水飛沫の一滴一滴までを見極めるように、落下の加速度の中に身をゆだねる。

(……まだ……っ！)

崖上からの落下は、数秒にも満たない瞬間の出来事だ。

見る間に白く波立つ滝壺の水面が、眼前に壁のよう迫ってくる。

同時、宙に踊る身体が、左右に細かくぶれながら、不安定な上昇気流を捕えた。広げた手足が風を孕んで分厚い空気の層をつかむ。

「——っ!!」

限界まで吸った息吹を胎の底に込めるとともに、早苗は構えた御幣を、湖面に叩きつけるように振り下ろす。

瞬間。

どう、と滝の爆音よりもさらに強烈に、水面を割る飛沫が四方に散って、大きな水柱が立ち上がった。

視界が縦に一転し、強烈な加速度が白い袖を引きちぎらんばかりにはためかせる。水面を鋭く跳ねるように、直角を越えて反り返るような軌道をもつて、早苗の身体は上空へと反転していた。

降下から転じて、一気に滝の中ほどまで舞いあがった風祝の身体を、散った滝の飛沫がばらばらと濡らす。濡れた袖が肌に絡み付き、髪先がたちまち湿り気を帯びて重くなった。



「……………はあっ……………」

顎に張り付いた髪を払い、どこか浮かない顔で、早苗はゆっくりと、腹の底の息を吐きだした。

幻想郷の少女たちが空を飛ぶ方法は、千差万別である。魔法を使うもの、生来の羽根や能力を使うもの、道具を用いるもの。妖怪達はもちろん小さな妖精達までもが、思い思いに空を飛んでいる。

それは、幻想郷における意志決定手段、命名決闘法スベルカード・ルールにおける必要条件でもあった。

早苗の飛び方は、氣流を生み、風を捕まえてそれに乗るものだ。乾と坤を司る神様二人の信仰を礎に、風と雨をもって神を言祝ことほぐ早苗は、大気を揺らし風を操って人の身でありながら自在に空を飛ぶことができる。が、しかし。

「上手くないなあ……………」

風を操るゆえに、早苗が飛ぶときには氣流の乱れを生んでしまうことを避けられなかった。

乱れた風は音や氣配を生み、己の場所を知らせてし

まう。それが、早苗にとって弾幕勝負の勝敗を左右する一因となっていた。

（これじゃ、勝てない……………）

心の奥にちくりと感じる、小さな棘のような感覚を飲みこんで、早苗は再度、滝の上へと飛び戻る。

早苗が今朝から行っているのは、自分なりに考えた空の飛び方の練習法だった。風をつかみ氣流を操る感覚を高めるために、滝の上から今日だけでも両手の指にも余るくらいロープなしバンジーを繰り返している。

……………けれど、何度繰り返しても、度胸はつけども上達の実感にはさっぱり繋がらなかった。

無駄な事をしているのかもしれないという想像が、ふと頭をかすめる。

「……………だめだめ、そんな弱気じゃ!」

ぐっと拳を握り、天を振り仰いで。早苗は落ち込みかけた氣分を振り払う。

もっと速く。もっと静かに。より正確に、より緻密

に。

ただ空を飛ぶだけでは届かない、さらなる高みを目指すために。早苗はいっそう巧みな空の飛び方を身につける必要に迫られていた。

……だが、風祝にはその方法が分からない。なにしろ空の飛び方なんて、これまで早苗自身考えもしなかったことだ。

外の世界においては、早苗の周囲には数多くの常識があった。

お化けなんていない。

宇宙人なんかいない。

——人間は、空を飛んだりしない。

そこでは異能をふるうことは、ただそれだけで異質なのだ。巷にあふれた『普通』と違うものは、周囲から孤立し、異質な『別のなにか』へと線引きされてしまう。

そして、幼い頃から神様を見、話すことを当たり前にしてきた早苗は、物心つく前から『特別』だった。

風の扱い方も空の飛び方も、口伝による秘術の継承も、奇跡の起こし方でさえも。早苗にしてみればただなんとなくできたというだけのことでしかない。

だから、早苗はこれまで空の飛びかたに上手下手があるなんて考えたこともなかったのだ。

(……らしくないなあ、こんなことでムキになって)

こんなにも自分が負けず嫌いだったなんて、思わなかった。

早苗は自分が勤勉だと思ったことはないし、真面目だと思ったこともない。成績だって中の上だし、運動だって取り立てて得意だというわけでもない。

神社のお務めにしても、昔から決められた通りのことを、言われるままにこなしてきただけだ。

学業の合間に神様に仕える日々は、クラスメイトから見ると厳格で窮屈そうに映っていたらしいが——それでも人並みに飽きっぽくて、人並みに現代っ子で、

面倒くさがりだと思っていたのに。

この幻想郷で慌ただしい毎日を送っているうち、いつしか暇を見ては、新しい弾幕のパターンを考え、空を飛ぶ練習を欠かさなくなっている自分がいた。

いつでも、どこでも、ふとした瞬間に心のどこかでその事を考えてしまう。

——まるで、恋しているみたいに。

(……恋、か)

違うけれど、でも似たようなものかもしれない。胸の奥の小さな痛みを感じながら、早苗は静かに苦笑し

「……あれ？」

と、我に返った。とりとめもない思考を巡らせているうちに、いつのまにか集中が疎かになっていたらしい。

気づけば、早苗の身体は再び滝上からの自由落下の最中にあり、ごうごうと荒れ狂う滝壺の水面がいまや鼻先まで迫っていた。

「つい!？」

目を剥く早苗の頬を吹き荒ぶ風が打つ。落差一〇〇mを超えて叩き付けられる激流が、その冷たさを感じさせるほどの間近、鼻先にまでに迫っていた。

ほとんど無意識のうちに、早苗は身を捻ると同時、片手を前に突き出していた。風祝の奇跡が眼前の恐怖から己の身を守るため、爆発的な突風を引き起こす。どう、と大気を歪ませ、爆音が轟く。

反射的な防衛行動は、能力の暴発となって現れた。ねじれ、渦巻き、天に昇る龍のごとく。

滝壺から噴き上がった竜巻が滝の水河を呑みこんで水柱となり、空へと屹立する。衝撃波によって流れ落ちる大瀑布が押し止められていた。

大滝を囲む森は猛烈な風に押し倒され、樹齢数百年を楽に超えそうな木々が、次々と傾いてはみしみしと太い幹を軋ませた。

制御も越えて暴走し、急激に高まる風圧の余波に、枝葉が次々と千切れては天高く舞い上げられてゆく。

「きゃあああああつ!?」

その竜巻の中心で、早苗自身も自分の生み出した乱気流の中に巻き込まれていた。暴走する風の中、雖もみのように身体がバランスを失い、大気の大渦の中に飲み込まれてしまう。

悲鳴もかき消す爆風の中、上下左右も分からないまま、早苗は背を丸め、必死に己の身体を抱きしめる。

「——っ!?」

空高く宙を躍った瀑布が再び滝壺を打った頃には、大きく吹き飛ばされた早苗の身体は、はるか離れた森の奥へと突っ込んでいた。



「ん？」

幾重にも重なる巨木の枝が空を遮り、昼とは思えない薄暗さをつくる森の奥。しっとりとした湿り気を帯びて沈むひそやかな気配の中、茸の採集に夢中になつてい

た魔理沙は、突然の頭上からの物音に顔を上げた。

「……なんだ？」

朝からの収穫を放り込んだ籠を背負い、眉をひそめたその時。

ずぎっずぎ、ばきばきと派手にあたりの梢をなぎ倒して、真上から降ってくる人影が一つ。

「うわあ!」

「ひゃああああ!!」

飛びのいた魔理沙の目の前で、べしーん、と派手に土煙が巻き起こる。分厚い苔の生えた古木を吹き飛ばし、転がり落ちてきたのは、見慣れた青と白の巫女服。

「はう……」

収穫を詰め込んだ籠を下敷きにして目を回している早苗の姿に、魔理沙はしばし呆然となる。

「……親方。空から巫女が降って来たぜ」

思わず誰もいないところへ報告してから、魔理沙はようやく早苗の傍へと歩み寄った。

「いや、晴れ時々巫女か？ 今日のお占いにや出てなか

ったけどな。……おい、早苗、生きてるかー？」

「うう……」

ぺちぺちと頬を叩いてやると、風祝はわずかに呻きを漏らし、眼を開ける。

落下の直前、集めた風をクッションにして衝撃を緩和したのだろう。全身ずぶ濡れの上、髪や手足に枝や葉っぱをひっかけて、あちこち薄汚れてはいたが目立った怪我はないようだった。

「あ……魔理沙、さん？」

まだ半分目を回しながらぶるぶると頭を振る早苗の顔を上下さかさまに覗きこんで、魔理沙は呆れ顔で問う。

「なにをやってんだ、こんな所で」

「その、ええと……くしゅっ」

言いかけて。早苗は小さなくしゃみと共に、ひやりと脚を撫でる風に気付く。

どこかで岩にでも引っ付けたか、巫女服には腿の上まで大きく裂け目ができており、やたらと風通しの良

くなった袴が大きく膝上までめくれあがってしまっていた。

「きゃああ!？」

重力にひっぱられ、さらにずるりと捲れそうになる袴を、悲鳴と共に押さえて。早苗は真っ赤になって魔理沙を睨みつけた。

「……………っ!!」

見ました？ 見ましたよね!？ と恨みがましく目元に涙を浮かべる巫女に、魔理沙は頬を掻きつつ、忠告する。

「……あー、なんだ、そのな。飛んではるときは真下から見えっぱなしだから、そういう下着は向いてないぜ？」

「分かってますっ!!」

まじめな顔で言ってくる魔理沙に、早苗は思い切り御幣を振り回して答えた。



……パンツじゃないから恥ずかしいもん。

と、誰かが言ったかどうかは知らないが、幻想郷の乙女たちの下着が主にドロワーズな理由は、おおむねいつ始まってもおかしくない弾幕ごっこに備えてという実情を踏まえてのことであるという。

少なくとも魔理沙はそう思っているようだった。

実際に激しい運動をするうえで、活動的な服装が要求されることは確かなのだろう。その割には誰も彼もが動きにくそうな格好をしているものだと、早苗は自分のことを棚に上げて考える。

「うー……」

涙目になりながら袴の前を押さえて、早苗がようやく落ち着いてきたところで、魔理沙が訊ねてくる。

「いったい何やってたんだ？ 最近じゃ空から巫女が落っこちてくるのが流行なのか？」

「……………えっと、その……。飛ぶ、練習です」

誤魔化してしまおうかという考えが一瞬、頭をよぎ

ったものの、結局早苗は素直に白状した。

経緯はどうあれ、派手に墜落して恥をさらしたことには違いはないし、あのまま一人思い悩んでいても進展が見られそうな気もしなかったからだ。

それに――

「どうすれば、もっとうまく飛べるようになるのかって」

「飛ぶ練習ねえ」

空の飛び方という問題には、なによりも魔理沙が一番話しやすい相手にも思えたからだだった。

魔法使いを名乗る彼女だが、早苗が人里や宴会などで聞いた話を総合するに、魔理沙は生来、当たり前のように飛べていた種類の人間ではないらしい。

ならば、少なくとも彼女は本心から早苗のことを馬鹿にするようなことはないだろうし、何かのヒントを得られるかもしれない。

案の定、魔理沙は笑うでもなく、黒いとんがり帽子のつばをいじるようにして、言ってくる。

「みたとこ十分だとおもうけどな、早苗は。ここの連中にもそう引けはとらないぜ?」

「でも、上手になっておくに越したことはないですよね?」

「……まあな。何だって下手で困ることはあっても、上手くて困ることはないもんだ」

口元に歯を覗かせて、魔理沙は言う。

あるいは、早苗の心中を汲んでくれたのかもしれない。

いつも大雑把に、傍若無人に振る舞ってはいるが、この自称・普通の魔法使いがその第一印象よりもずっと繊細な乙女で、何よりも努力と修練を重んじているというのは、早苗も理解していた。

「けど、なんでまた今になって練習なんだ?」

「その、それは……」

核心に踏み込まれ、思わず早苗は口籠ってしまふ。

話の流れとして黙っておくのは不自然だが、その理由はやはり素直に口ににくいことでもあった。

気恥かしさに魔理沙のほうを向いていることができなくなつて、早苗はつい視線をそらしてしまう。

「どした? どっか調子でも悪いのか?」

「違うんです」

案じる声に、早苗は小さく首を振る。

「……そのですね。こっちに來てから結構経つて、幻想郷でのやりかたには馴染んだつもりだったんですよ、私なりに。……でも今回、霊……魔理沙さん達と一緒に初めて異変の解決に挑んでみて、やっぱり色々と思うところがあつたもので」

「……?」

(前言撤回……)

なおも不思議そうな顔をする鈍感な魔理沙に、早苗は顔をあげ、半ば自棄気味になつて声をはり上げる。

「ですから!! あんなに大変だとは思わなかったんです。空を飛ぶのが!!」

ムキになつて叫んだ早苗に、魔理沙はしばし、きよんととしていたが――

やがて早苗の言っていることが飲み込めてきたのか、小さく俯いて、肩を震わせはじめた。

「わ、笑い事じゃないでしょう!？」

「……いや、だってなあ? 現人神だなんだとあんなに大きな口叩いてたお前さんがねえ? ……あー、わかつたぜ。分かりすぎるほどよく分かつたぜ?」

「うるさいですねっ! 妖怪退治が楽しすぎるのがいけないんですっ!!」

赤面しながら、早苗は肩を怒らせる。

思えば、『知らないどこか』を目指して飛ぶなんて、早苗にはこれが初めての経験だったのだ。

外の世界にいる時は、早苗の行動範囲のほとんどは神社と学校、駅前を中心にした数キロ程度のものであった。もし迷ったときだって、地図でも携帯でも、調べる方法はいくらでもあった。

神様二人と共に幻想郷にやって来た時も、地底の怨霊騒ぎの時も。早苗は自陣ともいえる山の上の神社で、来訪者を待ち構え、迎え討つ側だった。

けれど、今回。

空飛ぶ船を追いかけて神社を飛び出し、道すがらに妖怪を退治して、不可思議アイテムを集めながら、果ては魔界まで突き進み――

はじめての異変解決の主人公を務めてみて、早苗はその経験の差を思い知ったのだ。

最初からゴールの見えているマラソンや遠足とは違う。異変の中心地がどこなのかは、飛び始めた時には分からないのだ。

どこまで飛べば、いつまで飛べばいいのかも分からない中で異変を追いかけて、出くわす相手と次々に弾幕ごっこを繰り返すのは、早苗の想像していた以上に大変なことだった。

神様二人の加護という、誰に比べても十分すぎるほどの助力を得ていながら、なお足りず。

東風谷早苗のはじめての異変解決は、騒動の中心地に辿り着いた時点で余力のほとんどを使い果たし、拳句には帰り道まで見失うという無様な結果に終わって



しまったのだった。

悔しくないわけが、ない。

「……正直に言えば、昔から神奈子様や諏訪子様と、私の空の飛び方が違うって言うのは分かってたんです。でもそれは、単に神様と私の在り方が違うからで、当り前のことだと思ってました」

それが、違つてゐるのではなく、劣つてゐるのだと——氣づかされたのは。

空を飛ぶ樂園の巫女との勝負で、逆立ちをしても追いつけないような実力差を見せつけられてからだ。

「なるほどな、それで飛ぶ練習か」

「……いけませんか？」

「そう拗ねるなつて。悪かつたぜ、笑つたりして」

「うー……」

まだ幾分、真摯さに欠けてはいたが。ひとまず謝罪があつたので良しとすることにして、早苗は膨らませていた頬を元に戻す。

「……まあ、正直あれは色々反則だろとか思わなくも

ないぜ。言いたいことはよく分かる。やる気のない時は万事適當なくせに、ここ一番じゃまず絶対に負けな  
いからな、あいつは」

早苗よりもずっと長い間、あの紅白の巫女を見てきたであらう魔理沙の言葉は、より深く実感がこもつて  
いるように聞こえた。

いまだに早苗も、あれをどう表現していいのかわ  
からない。

……あえて言葉にするならば、弾を避けるというよ  
りも、彼女のいる場所を弾幕が避けて通るかのよう。  
布陣を敷き隊列を組んで指揮される策謀の弾幕も、  
怒涛のようにうねり押し寄せる物量の弾幕も。

あの紅白の巫女は、ただふわふわと浮かびながら、  
ほんの半歩、身体を左右にずらすだけで事も無げに攻  
略してしまふ。

——その半歩で、まるで弾幕ごつこの規則の外側へ  
踏み出しているんじゃないかと思いたくなるほどに。  
同じ巫女で、同じ人間であるはずなのに。

ただ空を飛ぶ、それだけで——  
彼女はあんなにも、強い。

なんとなく沈みかけた思考を、かぶりを振って振り払い、早苗はごしごしと頬をぬぐう。

「はあ。もういいです。……赤っ恥ついでに魔理沙さんにも質問、いいですか？」

「ん？ なんだ？」

近くで採った茸と睨めっこをしていた魔理沙が、ふと顔を上げる。

「魔理沙さんは、どうして箒なんですか？」

「こいつか？」

魔理沙が脇に抱える箒を指差し、早苗は頷いた。

「別にそれがなくちゃ飛べないってわけじゃないんですよね？ なのに、どうして箒で飛んでるのかなって」

普通に考えて、一本の柄の上に身体を預けるのは、身一つで空を飛ぶよりもあれこれと不自由があること

は想像できる。それなのに、あえて魔理沙が箒を選んでいる理由が知りたかったのだ。

「前から気になってたんですけど、いい機会ですし。よかったら聞かせてもらえませんか？」

「……あー」

「？ なにか、答えにくいことでも？」

早苗は単に、興味から聞いてみたただけだったのだが。魔理沙はまるでなにかの凶星を突かれたように、茸をぽいと放り投げて言い淀む。

やけに答えにくそうにしている魔理沙に、早苗が首をかしげたとき。

「ふむ、それは私も興味がありますね」

ひゅう、と静かな風のひと吹きと共に、まったく違うところから、聞き覚えのある声が割り込んできた。



「ご無沙汰します。魔理沙さん、早苗さん」

樹齡百年を超えるであろう巨木の梢をがさりと揺らし、枝に足をひっかけて上下さかさまの体勢で、伝統の幻想ブン屋、射命丸文が顔を覗かせる。

「……盗み聞きは感心しないぜ？」

「いえいえ。これも取材の一環ですよ」

どういう具合か、文はその姿勢でもスカートだけは最終防衛線をきわどいところでしっかり死守しており、早苗としては非常にその天狗驚異のメカニズムが気になっていたのでが……文は意に介さぬままに胸を反らして『取材中』と記された袖の腕章を示してみせた。

「最近、あちらこちらと新顔が増えてきましたからね、また特集でも組ませていただこうかと思ひ、こうして下準備にいそしんでいるわけですが」

「わざわざ好き好んで追い払われに行くのか？ 物好きだぜ」

「失敬な。私はいつでもどこでも好感度No. 1の人氣者ですよ。このとおり、清く正しい射命丸。記者は好かれてなんぼの商売ですからね。決して18位とか

そんなことはないんですよ。ええ断じて18位なんてことがあるのですか！」

やけに順位を強調して言うのと、文は腹筋だけでくると上半身を持ち上げた。鮮やかな身のこなしで着地するなり、文は素早く魔理沙との間に割り込むようにして早苗の手を握る。

「そんなことよりも。偶然なことに先程から聞かせていただきましたが、どうやら空の飛び方でお悩みのようですね？ 早苗さん」

「はあ……まあ、一応は」

妖怪の山のご近所づきあい顔は良く合わせるが、早苗もいまだにこの天狗とは距離をつかみかねている。風祝が困惑している間にも、文は好奇心いっぱい表情を浮かべ、素早く手帳とペンを取り出して詰め寄ってきた。

「それで、どれくらいスランプなんでしょう？ もう二度と飛ばないくらいに？」

「あ、いえ、そこまでは」

「……なんだ。つまらない」

早苗がそう答えると、文は露骨に落胆の表情を見せ、大きく溜息をついて手帳をしまい込む。

その手のひら返しつぷりときたら見事なもので、早苗は怒るのも通り越して呆れてしまうほどだった。

「あのな。ややこしくなるから出てくるな、お前は」

こちらと同じような気分なのか、魔理沙も面倒そうに視線を陰しくしていた。

「む。これは心外ですね。早苗さんがお悩みのようです。ここはひとつ幻想郷最速にして人生経験も豊富な私から、直々に空の飛び方についてレクチャーして差し上げようというのに」

「誰も頼んでないぜ？ 裏かかないような顔して言われてもな」

「そんな。新聞に表も裏もあるのですか。これは純然たる好意ですよ？ それがそんな悪しざまに言われるなんて……ひどい！ あんまりじゃないですか！」

よよよ、と泣き崩れてみせる文に、魔理沙はあくま

で冷静な顔。

「普段の言動改めてから言うといいぜ？」

「あ、バレてました？」

しゃあしゃあと立ち上がり、文は片目だけを細めて口元を緩める。人を食った表情でペンの尻先をびつと早苗に向け、

「……とはいえ、お隣さんのよしみです。助言はやぶさかではありませんが？」

「……ええと……」

思わぬ方向に転がり始めた展開についていけず、早苗が答えに窮していると、魔理沙がうんざりとした口調で忠告してくる。

「やめとけ早苗。どうせロクなことにならないぜ」

「……おやおや魔理沙さん。今日は随分とご機嫌斜めですね？ なにか虫の居所でも？」

「趣味が悪いって言うてるんだぜ。天狗の飛び方が参考になるもんか」

「あやや。嫌われたもんですねえ」

文はあくまでも笑みを崩さない。

恐らくは、この白黒魔法使いが速さにおいて天狗をひとつの目標にしているであろうことを、陰でそのために多くの努力を積み上げているだろうことを、すべて承知の上で。

千年以上を生きているという天狗は、くすりと口元をほころばせたままに、決定打となる一言を打ち込んでくる。

「でも、霊夢さんなら文句も言わず見事に使いこなしてみせましたよ？」

そんな事を言われて。

黙っていられるほど、早苗は無欲でも、謙虚な子でもなかったのである。



「つまり、先日<sup>オプシヨシ</sup>の地霊騒ぎのときの後方支援の応用ですね。あの時は通信珠を使って調整しましたが、今回

は直接私の妖力を早苗さんと同調させることになりました。

……まあ、早苗さんは天狗の信仰も集める山の神社の風祝なわけですから、そこまで細かい調整をしなくとも扱えるでしょう」

少し場所を移し、頭上の開いた苔生す大岩の上で、早苗は緊張の面持ちを浮かべていた。背中にはびつたりと文が寄り添い、腰には片手が回されている。

もともとの身長差と下駄の高さもあり、ちょうど背中から腰抱きにされているような格好だ。わけもなく緊張に鼓動が早まり、頬が熱くなる。

「では、いきますよ？」

「……………はい」

愛をささやかれているように見えなくてもない体勢に、何だろこの状況、と我に返りかけるのを押さえ込み、早苗は呼吸を整えて意識を集中させた。

流されるままに訪れた事態ではあるが、最速を誇る天狗の速さ、というものに興味があったのも事実であ

る。

瞬間。

「ひゃんっ!？」

耳元でくすぐったいほどに近い文の声と共に、握られた手のひらから、ぞわぞわと背中が逆立つような力が流れ込んでくる。

「……ふふ。そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ。そんなに力たくならず、もっと力を抜いてリラックスしてください?」

「……わ、わざと言ってますよね、それっ」

にんまりと微笑む文に怒鳴り返そうとするも、耐えようのないむず痒さに、早苗の声は震えるばかりだ。幽かな森の香りと共に、静電気を薄めて引き伸ばしたようなくすぐったさが、風祝の服の下を這い上がり、背中の左右、肩甲骨の下あたりに集まってゆく。

「っ……」

「あ、いい表情ですねぇ。一枚いただきますよ?」

「ま、真面目にやってくださいっ」

「失敬な。いたって真面目ですよ?」

文の指は、いったい何を食べていればこんなにしなやかで細くなるのかと思えるほどに瑞々しくて、けれど同じ女性とは思えないほどに逞しく力強い。早苗がかなり本気で力を入れてみても、びくともしないほどだ。

「……んっ……!」

くすぐったいの振りに振るほどくこともできないまま、自由を奪われ、早苗は身体の中に流れ込んでくる妖力を懸命に制御下に置こうと息継ぎを繰り返す。

「おい。大丈夫か、早苗?」

魔理沙の声もどこか遠い。

いつしか、早苗の周囲には高速で渦を巻く風が圧縮されていた。周囲の気圧すら変化させる高密度の風を、事もなげに操りながら、文はそっと早苗の顔を覗き込んでくる。

その顔がまたものすごく近いせいで、早苗は思わずああ綺麗な睫毛だなあ、羨ましいかも、などと余計な

事を考えてしまふのだった。

「もしもし、早苗さん？　そろそろ制御をお渡ししますが、宜しいですか？」

「え!?　あ、ああ、はいっ」

慌てて首を振り、神妙な面持ちで、早苗は小さく息をのんだ。文がコントロールを預けてきた風の渦に、精神を集中させながらそっと手を伸ばしてゆく。

圧縮された風を掴んだ瞬間。全身が一瞬、突風のようなもので激しく煽られる。

「……………っ!?」

音のない風の塊が、身体の中で膨れ上がる。

そっと閉じかけていた目を開けてみれば、早苗は自分の身体を高密度の風の塊が取り囲んでいるのを理解した。足元からふくらはぎ、腿、腰、お腹、胸を経て頭の先まで。らせん状に渦を巻く風の流れが、ざわざわと揺らめき、うなじを逆立てる。

特に力を強く感じるのは肩甲骨のあたりで、そこに力強くはばたこうと力を蓄える見えない翼のようなもの

のを感じる。

(……凄い……!!)

いまにも天高く飛翔せんばかりに、強大で荒々しい力が全身に漲り、早苗は思わず身震いした。

「——、——!?」

岩の下では、魔理沙が何事かを叫んでいた。

気圧差のせいか、彼女が必死に口を動かしているのはわかるのだが、その声はまるきり聞こえない。耳鳴りのような騒音が、聴覚を塞いでしまっているようだった。

『さて、準備完了ですね』

すぐ後ろから、文の声。

早苗は硬い唾を飲み込み、自分のものではないように力を滾らせる手足を意識する。

『それでは——どうぞ、飛んでみてください』

「……はい」

答え、首肯して早苗は、軽く地面を蹴り——全身を取り巻く風の渦に干渉する。

が。……さっきまで余計な事ばかり気にしていた、集中が疎かになつていたのが良くなかったのか。

限界まで引き絞られ、圧縮されていた風は空を撃つ力強い翼となることはなく、早苗の意図とは全く逆の方向に、瞬間的に解き放たれていた。

「きや……………!?」

奇跡の神風など、比べ物にもならない。

空気の塊が、思い切り早苗の身体を真上に跳ねあげる。一点に集中していた風は、発条が弾けるように猛烈な勢いでそのすべてを開放し、渦を巻き波打ちながら、森の木々を薙ぎ払って風祝をはるか空まで撃ち上げていた。

視界から一瞬で森がフレアムアウトし、意識すらも置き去りにして、少女の身体は蒼空の彼方へと吹き飛んでゆく。

「っ、あああああー……………!?」

悲鳴の余韻だけを後に残し。白い水蒸気の尾を引いて。

青白の巫女の姿は、まさに流星アマツキツネのように空の一角の小さな点へととなつて、きらりと輝きを残して消える。

「うわあ……」

「あややや……」

緩やかに吹き抜ける風の余波の中。

その場に取り残された魔理沙と文は、早苗の消えていった方角を見上げながら、ぽかんとした顔をするばかりだった。



橙と紫を混じり合わせながら、山の端に沈みゆく夕日の中を、ふよふよと漂うように飛ぶ風祝の姿があった。

「……今日は厄日ね……」

飛ぶというよりは浮かんでいるというほうが正しいだろうか。ポロポロの巫女装束を引きずって、早苗はすっかり暗くなった空をゆく。



手足は鉛のように重く、疲労がずっしりと肩にのしかかる。疲れ切った身体では浮かぶのが精いっぱい、向かい風が吹いてくればそのままどこかに飛ばされてしまいそうだ。

天狗の起こす風の暴れ度合いと言ったら、およそ早苗の理解をはるか超えていた。魔法の森から大結界の端までをほとんど一瞬で吹き飛ばされ、そのまま沼に突っ込んでようやく止まるほど。

泥まみれの身体はできるだけ洗い流したが、湿った服はまだ生乾きで、身体に張り付いて冷たく自由を奪う。土の匂いの残る髪も不快で、ますます疲労を倍加させるようだ。

どうも早苗が操る風と、文の使う風の質は、似ているようでいて本質的にはまったく異なるものであるらしい。あんなものを持ちこなすなんて流石は天狗、<sup>アークキネ</sup>天狗、と言うべきなのかもしれないが。

「あーあ……」

砂が混じってばさばさに乱れた髪を掻き、泥に汚れ

て破れた袖と、応急処置に端を結んだ袴を見て、早苗は大きくため息をつく。本当にくたびれ儲けの一日だった。

（魔理沙さんの言うとおりだったなあ……）

天狗という妖怪の速さは、たとえてしまいうならジェット機やレーシングマシンに近いだろう。速さのために様々な工夫を凝らし、余計な機能を削ぎ落して、そもそも種族として生まれながらに人間とは異なる。

最速を誇る彼女達は、ただあるがままに速く、やはり自分たちの飛び方など些細なことで、気にも留めていないのだ。

「……ちよつと、凹むなあ」

才能とか、天稟とか。ちよつとやそつとでは埋めようのない差、というものを立て続けに見せられて、いささか早苗も挫け気味だった。

「はあ……」

胸の奥のどこかにある、元気を貯めておく袋が破れて、中身がこぼれおちていくかのよう。

低下するテンションそのままに、ゆるゆると高度が落ちてゆく。みるみる近づく地面に、いけないとは思いますが、思いうように身体に力が入らない。

(……あ、やば……)

このまま落ちてしまえば、もう飛び上がれないかもしれない。

ぼんやりとかすむ思考の中、他人事のようにそう思った早苗の腕を、強く引っ張り上げる力があつた。

「やっと見つけたぜ」

「……魔理沙さん？」

失速しかけた早苗を支えるように、箒にまたがった白黒の魔法使いは速度をゆるめて、宙空に静止する。

「探して……くれてたんですか？」

「……成り行き上な。お前んとこの神様も心配してたぜ」

大丈夫か？ と眉を寄せている魔理沙に、早苗は安堵を隠しきれなかった。

身体を支えられるみつともない格好のまま、それで

もせいっぱい、笑顔をつくって答える。

「それなりに酷い目に遭いましたけどね」

「そうか」

それ以上、何も聞いてこない魔理沙に、早苗は彼女がまた、霊夢とは違った意味で幻想郷の中心なのだという事を理解していた。

(ああ、もうっ……)

思わず涙ぐみそうになって、早苗は慌ててごしごと両の頬をこする。

そんな早苗の胸中を知ってか知らずか、魔理沙は早苗を支えたまま、ゆつくりと移動を始める。さりげなく負担にならないような速度を保ってくれているのが、早苗にも良く分かった。

「それにな、さっきの答えがまだだっただろ」

「答え？」

「私が、どうして箒こしを使ってるかって話だ」

地平線にかかるほど傾いた西日のせいで、魔理沙の表情はうかがい知ることではできなかった。まぶしさに

目を細め、早苗は箒を操る魔法使いの横顔のシルエツトを見つめる。

「空の飛び方だけは、誰かの真似をしたくなかったんだ。……だからだぜ」

いくつものスペルを模倣し、魔道書を、呪物を蒐集する魔法使いは。そっぽを向いたまま、けれどどこか気恥かしそうに言い切った。

それは、つまり。

普通の魔法使い霧雨魔理沙の、矜持。

ありとあらゆるものを飛び越えてゆく、空を飛ぶ程度の能力をもつ楽園の巫女に、並び追いつくために。ごくごく普通の少女が立てた誓いなのだ。

そして。その言葉に、早苗もまたもう一つの光景を見ていた。

ずっと、ずっと昔。

幼い頃に見た、東風谷早苗の『特別』のはじまりを。

「どうだ、参考になったか？」

「……そうですね。少しは」

「おいおい、それだけか？ 酷いぜ。せっかくとっておきの秘密だったのに」

いつしか、早苗は随分と心の中が和らいでいるのに気付く。くすくすと微笑み交わす二人の視界に、遠く色鮮やかな影ふたつ。

「ほれ、お出迎えだぜ」

「早苗——っ!!」

ずっと探し回っていたのだろうか。血相を変えた諏訪子が、声を上げながらまっすぐに飛んでくる。

がばつと早苗に飛びついて、守矢神社の小さな神様はいまにも泣きだしそうに動揺していた。

「心配したんだよ？ 天狗に騙されて酷い目に遭ったって!! いくら興味があるからってホイホイについてっちゃダメじゃないか!!」

「ちょ、諏訪子様、苦し……」

ぎゅうと首に飛びつかれてもがく早苗だが、夢中の神様は全く気付いていない。

「もう、本当に心配したんだから……って、どうした

のその格好!？」

「え？」

言われて、改めて見下ろしてみれば。早苗の格好は惨憺たるもの。袖は泥染みとともに汚れ、袴も裾が破け、鉤裂きがいたるところに見受けられる。

背中には墜落した時の土埃を残し、目元も涙の跡に赤く、髪も乱れ放題。そりゃまあ、神様も誤解しようというもので。

「っ!! 嫁入り前の女の子になんてことをっ!!? それも天狗にやられたんだね!! もう頭に來たっ!!」

「あー、おい、諏訪子？」

「ううん、何も言わなくていいよ早苗!! 怖かったね。でももう大丈夫だ、二度とこんな気が起きないように、あいつら徹底的に思い知らせてやるっ!!」

言うなり、どす黒いオーラが諏訪子の周囲を巡り始める。近付くだけで寒気さえ覚えさせる穢れの渦が、土着神の頂点である神様を中心に鎌首をもたげていっ

た。

「目標、妖怪の山っ!! 距離良し、方角良しっ!! 最大出力!! 祟りなら任せろー!!」

「やめてー!？」

バリバリと禍々しいオーラを発し始めた諏訪子に、慌てて止めに入る風祝。しかし諏訪子は聞く耳持たず、大きく腕を振り上げ――

「落ち着け諏訪子」

「あうっ!？」

守矢神社の祟り神様が、編み上げた呪詛を打ち放たんとしたまさにその瞬間。神奈子が思い切りその頭をひっぱたく。

ずれた帽子に視界を塞がれ、暴れる諏訪子を、あきれ顔で守矢の軍神は抱きよせた。

「なにをするのさ神奈子っ!？」

「こっちの台詞だ。過保護もいい加減にしろ。祟るのまでやめろとは言わんが、幻想郷に来てからこっち、早苗がなんのためにあれこれ走り回ったと思ってる。

そんなもののぶつ放して全部台無しにするつもりか？」

「……………」

ずいと鼻先を突き付けられての正論に、冷静さを取り戻した諏訪子が言葉を失う。

まったく、と神奈子は腕組みをして、諏訪子と早苗を交互に見て溜息をついた。

「思い込みの激しさは先祖譲りだな」

「……苦労してそうだな？」

「まあね。こんなのが面倒でこっちに來たっていうのに、気苦労が増えるばかりだ。早苗も平氣かい？」

「は、はい……けほっ」

早苗はまだ喉を押さえて苦しそうにしていた。神奈子はそれをよしよしと撫でてやり、諏訪子の帽子をポンと押さえながら、魔理沙のほうに向きなおる。

「いろいろ世話を焼かせて済まなかったね」

「いんや。行き掛かり上だぜ」

「そうかい。……暇があったらまた神社まで來るといい。博麗の所よりはいいもてなしをしてやるぞ」

「そうだな。期待しとくぜ」

魔理沙はそう言うと、箒の先端を切って方向を変える。

「さて。そろそろ良い子は歸る時間だな。じゃあな、早苗、神奈子に諏訪子も」

「ああ」

手を振る魔理沙に神奈子がこたえ、早苗と諏訪子も慌てて頭を下げる。それを肩越しに振り返って、白黒の魔法使いは遠く魔法の森へと飛んで行く。

「……………」

きらきらと、星の軌跡を残して飛びゆくその背中が見えなくなるまで、早苗は魔理沙を見送っていた。

やがて、静かに顔を上げた早苗に向けて、神奈子は諏訪子と共にそつと手を差し伸べる。

「さあ、帰ろうか」

「……………」

沈む夕日を背中にする二柱の神様の姿を見て。早苗は静かに、大きな深呼吸をひとつ。

重苦しい胸の中の澱みを全部追い出して、この幻想郷の風をいっぱい吸いに吸い込むように。

「どうした？ 早苗」

「……ちよつと、思いだしちゃいました」

「早苗？」

また不安そうな顔をする諏訪子に微笑むと、早苗は神様二人に飛びつくように、その腕を取った。

「む」

「わあっ!？」

ぎゅつと抱きつかれ、神様たちがわあつと声を上げる。

——そうだ。

東風谷早苗が、人でありながら神として、祀られる存在となったのは。

危ないと叫ぶ背中からの声を振り切つて、この幻想に満ちた空を目指したのは。

きつと、きつとこんな風になったかったからだ。

今この瞬間、こうして同じ空にいて。手を取り、触

れ合い、その温もりを感じることできるように。大好きな神様たちを、いっぱい独り占めできるように。

「私は、神様と一緒に空を飛びたかったんだなって！」



季節は巡り、夏。

「じゃあ神奈子様、諏訪子様、行ってきますっ」

蒸し暑い夜の帳の中、灯りにも虫がちらほらと集まっている。玄関でとんとんと片足立ちになつて靴を履きながら、早苗は手早く身支度を整える。

「暗いから気をつけるようにね」

「あんまり遅くならないうちに戻つてきなよ、早苗」

「はいっ」

玄関まで見送りに来ていた神奈子と諏訪子にこたえと、早苗は玄関を開け放ち、たんつと鋭く地面を蹴った。

風をつかみ地を蹴って、半分だけの月とまばらな星の瞬く、うつすらとした曇りの夜空へ。風祝の身体はふわりと舞い上がる。

「……………」

みるみる小さくなるその背中を見上げ、諏訪子はまだ落ち着かない様子だった。帽子の目玉と一緒に、眉尻を下げ、ぽつりとこぼす。

「すっかり夜遊び癖がついちゃって。悪い付き合いとかしてなきやいいけどなあ……」

こういう具合に吹っ切れたものか、早苗はあれ以来、積極的に幻想郷のあちこちを回るようになっていた。

先日も夜中に突然、探検に行ってきたと言いだして出かけ、やけに可愛らしいエイリアンとやらを連れ帰ってきてひと騒動あったばかりだ。

「今日だって、こんな遅くに出かけなくてもいいのに」

「心配性だねえあんたは」

呆れた表情の神奈子に、諏訪子は口を尖らせる。

「……いいじゃないか別に。神奈子は心配じゃない

の？」

「そんなのは、私達が一番よく分かっていることだろう？ お前も最近は稽古付けてやってるんだろうに」

自信たっぷりに、守矢神社の主神は微笑んだ。

「神様が二人も揃ってお墨付きをあげてるんだ。うちの自慢の子が、ちつとやさそとでこたえるようなことはないさ」



山頂の神社からも程よく離れ、溪流の涼やかな流れを聞く夜空の上。月が緩やかな半弧を描き、森の梢に陰影を落とす中を、梅雨明けの湿った風が吹き抜けてゆく。

「お待ちしました、文さん」

「あややや。……これは一体？」

陽射しの暖かさをわずかに残した宵の空、対峙するのはふたつの影。

かたや、守矢神社への潜入突撃取材を敢行しようとした文。かたやそれを迎え撃つべく待ち構えていた早苗だ。

守矢神社の風祝は、威風堂々と天狗の前に立ち塞がって、御幣を手に、巫女服の袖をはためかせて微笑む。首元には、しゃらりと音を響かせる真新しい翡翠の首飾り。

「毎日こんな夜分遅くまでお仕事ご苦労様です。聞いてますよ？ 霊夢さんのところでは大分苦戦されたそうですね？」

「これはまた随分とお耳の早いことで」

言いながら、文はこっそりとまだ脚に張り付いていた『新聞勧誘お断り！ します』特製符（スエール）の切れ端を剥がして放り捨てた。

「先日は大変にお世話になりました。ぜひお礼をしようと思っていたんですよ」

「……………いや、その」

「遠慮なさらずにどうぞどうぞ、さあ」

満面の笑顔の風祝に、妙な気配を感じ取ったか、文はカメラを手にしたままわずかに後退る。

「……………ふむ。今日はどうも日が悪いようですね。また後日改めて——」

不穏な気配を嗅ぎつけ、素早く踵を返そうとした文が言い終わるよりも早く、一陣の風が駆け抜ける。

天狗の行く手を阻むように鼻先をかすめる風の一閃は、以前よりも恐ろしくキレを増していた。

「……………」

風祝の思わぬ反撃に、文は思わず押し黙る。

気付けば天には黒雲がにわかに巻き起こり、轟々と猛烈な嵐が吹き荒れ始める。異国からの侵略軍ひしめく大海をも薙ぎ払わんばかりのその風の名は、

「——奇跡『弘安の神風』」

軍神の加護篤き神風を操り、退路を断つてみせた早苗に、さしもの文も気圧されていた。

「ほほう……………これはこれは」

それでもここで退いては天狗の名折れと思ったか、



しつかりとカメラを構え直し不敵に笑う幻想ブン屋の前に、早苗もさらに幾枚かのスベルカードを示す。

「前回の経験を生かして、私なりに空の飛び方を考えてみました。まずは妖怪退治から始めてみようと思います」

「なかなかの自信、じつに結構ですが——」

叩き付けるように襲い来る奇跡の神風に対し、文は持ち前の機動力を駆使しての突破を試みる。

手加減の様子はない。背中から烏天狗の証である黒い翼を広げ、文は音速に迫る速度で立て続けに押し寄せる雨風を潜り抜けてゆく。

「この程度の風では、まだまだですよっ？」

「——いえ。ご心配なく」

一気に分厚い黒雲を突っ切り、渦巻く嵐を引き裂いて。撃破の手応えに笑みを浮かべた文を、ふいに別の影が取り巻く。

「前回のことでコツは掴めました。今度はちゃんと文さんの風、使わせていただきますので」

「……はい？」

文が怪訝な表情を浮かべたその時だ。早苗は悠々と次のスベルカードを掲げ、宣言する。

「——妖怪退治『妖力スポイラー』」

「……くあっ……!?」

ずしん、と猛烈な重圧のようなものが文を襲った。

視界が傾き、広げた天狗の黒翼からみるみるうちに力が抜けてゆく。軽い眩暈に襲われて頭を振る文を前に、早苗はスベルを展開していた。

「これは……っ!?」

文は驚愕に目を見張る。がくりと体勢を崩しかけた烏天狗の翼から、手足から、全身から妖気が流れ出していた。早苗が風を通じて文の妖力に巧みに同調し、それを吸い上げているのだ。

「なにぶんまだ不慣れなもので、文さんみたいに力が強すぎる妖怪が相手だと、制御が上手くいかないかも

しませんけど——恨まないでくださいね？」

にこり。極上の笑顔を見せた早苗の制御によつて吸い上げられ、蓄えられた文の妖力は、そのまま鋭い風を象つて、雪崩を打つて文自身へと襲いかかった。

「あやや……」

文の頬をつう、と細い汗が伝うのを満足げに見つめながら、早苗は夜空に身を躍らせる。

「さあ、次の勝負です!!」

何人もの少女たちが、華麗な弾幕と機動をもつて、遊び踊るその空へ。神様二人と、信仰と、なによりも自身の奇跡と共に。

(了)

## おおぞらをとぶ

初出:コミックマーケット 78(2010/8/14)

早苗さんが自機になるにあたり、外の世界からやってきた風祝は空を飛ぶことをどう考えていたのかという部分について着目したお話。タイトルはDQ 3のラーミアのテーマから。

1面から6面を飛び続けて異変の元凶を探るってそんなに簡単なことじゃないよみたいな持論。

こうして並べてみると。幻想郷に慣れ親しんでいく過程の早苗さんの様子が見えて面白いです。あと恐らく自作品では一番古いあやさなですね。

## 神様のつくりかた

深緑の木々を揺らす心地よい山の風が、衣から覗く素肌を撫でてゆく。幻想郷を眼下に望む妖怪の山、その山頂に構えられた社殿には、初夏の暑さもいまだ遠い。

守矢神社の境内には、そこに祀られる二柱の凸凹神様と、白黒の魔法使い、そして紅白の巫女の姿があった。

「というわけでご飯を奢ってもらいに来たわ」

「来たぜ」

「帰れ」

胸を張って飯をたかるといふ高等技術を披露する二人に、神様二人は声を揃えて言い返す。

「なんだよケチ臭いなあ。見ろ、霊夢なんかもう二日も白湯しか飲んでないんだぞ」

「えへん」

「そこで何故誇らしげなのかさっぱり分からないんだけど」

悪びれる様子もない霊夢に、諏訪子はげんなりとした表情でつぶやいた。神奈子もまったくだと頷き、魔理沙の方に視線だけを向ける。

「……そちの魔法使いは今に始まったことじゃないが」

「おいおい、酷い扱いだな？」

「あー。ともかく！ 巫女が自分とこの神社ほっぽり出して何をしてるんだ」

「だって、ここに来ると黙っててもご飯が出てくるんだもの。おまけに涼しいし」

巫女としてどうなのかと思われる実に現金な台詞に、魔理沙までもがうんうんと深く頷く始末。

神奈子は顔を覆って天を仰いだ。

「つくづく世も末だな」

「だって、神様へのお供え物を私が食べちゃう訳には

いかないでしょう」

「そこへ行くと、ここには名目通り神様が手足口と揃ってましますからな、ご相伴に預かるには丁度いいわけだ」

「……私達の食い扶持にたかるのはいいってわけ？」

「余所は余所、うちはうちよ」

半眼の諏訪子にきつぱりと答える霊夢。後ろめたさの一つも感じさせない言動に、博霊の巫女の底知れなさを改めて思い知る二柱だった。

「やめとけ諏訪子、こりゃもう何言っても通じそうにない」

「……そだね」

神奈子が首を振り、諏訪子もがつくりと肩を落とす。

「よし、許可が出たな」

「そうね」

魔理沙と霊夢はいえー、と笑顔で手を打ち合わせる。と、ぽいぽいと靴を脱ぎ捨て、縁側にあがりこんだ。

慣れた手つきでお茶の用意を始める二人に、神様二人

顔を見合わせは揃って重く深い溜息を吐く。

「まったく、神にたかるとは実に傲岸不遜な」

「何言ってるの。神様なんだからお願いの一つや二つ気前よく叶えなさいよ」

「で、今日の晩飯は何だ？」

冷えた麦茶を揃って飲み干し、軒下の日陰の中に素足を伸ばし、すっかりくつろいだ様子の子の二人。

「……あーうー。暑いからさつぱりと、素麺にでもしようとか言った覚えがあるけど」

「えー？ もう少し脂気の強いものもいいわね」

「晩飯たかりに来た分際でその図々しさはある意味羨ましい」

「ふむ。そういえば早苗はどこだ？」

こんなときにはまず割って入ってくるだろう守矢神社の風祝の姿を探す魔理沙。

「朝早くから出かけていったよ。今日も里の方に用事があるんだそうだ」

「最近帰日も遅いよねえ。熱心に信仰を集めてるみた

「いだし」

「どこかの巫女にはぜひ見習つて貰いたいものだな」

博霊神社に加え、命運寺と言う強力な対抗馬が現れる中、守矢神社も積極的に信仰獲得に乗り出している。妖怪の山の山頂という立地に加え、社殿に括られているためどうしても行動に自由の利かない二柱の代わりに、人里の信仰の多くは早苗が中心となつて集めていた。

そこここに分社を建て、教えを説き、妖怪退治に東奔西走。一陣の風とともに颯爽と現れ、異変を解決したり解決しなかったり、時には騒動をいっそう混乱させたりして疾風のように去つてゆく守矢神社の風祝は、もはや幻想郷の風物詩であつた。

「このところ、良いことがあつたみたいでなんだかやけに機嫌が良かったようだ——」

「……また？　なんだか嫌な予感があるわね」

「心外だねえ。まるで私達が何か企んでるみたいじゃないか」

「みたいじゃなくてそうなのよ」

不満げに口を尖らせる諏訪子に、霊夢がぼそりと釘を刺す。ここ最近の騒動の、割と大半が守矢神社のせいであるのは良く知られている話だ。

「早苗も随分馴染んだもんだな。こっちに來てからも結構経つから、当たり前っちゃそうなんだろうが」

「少しばかり馴染み過ぎじゃないかと思うがな」  
神奈子は腰に手を当て、眉間の皺を深くする。

「人里での覚えが良くなるのは分からんでもないが、袴の丈も短くするし、髪も弄るし。装飾品まであれこれと。巫女としていかんだろう、あれは」

「いいじゃないさ。女の子なんだから、少しくらいお酒落したつて」

外見のことなんてお互い言える格好じゃないんだしさ、と諏訪子。

「いや。こういうのは最初が肝心なんだ。悪い虫でも付いたらどうする？　大体だな……」

巫女の在り方についてあれこれと言ひ争いを始めた

二柱を見、靈夢と魔理沙はお茶受けの水羊羹を口へと運ぶ。

「あむ。……ああいうのも親馬鹿って言うのかしらね」

「ま、信仰が増えるのは悪いことじゃないんだろ」

「……そこでなんでこっち見るのよ」

「いやあ。他意はないぜ？」

「……………」

半目の靈夢が無言でちゃきつと匙を手にすると、魔理沙も水羊羹を庇うように立ち上がる。こちらでは実に意地汚い争いが始まるうとしていた。

そんないつもの夏の日常が繰り広げられる境内の中、爽やかな風が軒先の風鈴をちりんと揺らす。

「ただ今戻りましたっ」

中庭に落ちた声に皆が顔を上げれば、そこには渦中の人となった早苗の姿があった。

守矢の風祝は白青の巫女装束を靡かせ、涼やかな風を纏いながら庭へと着地する。

こちらに來たばかりの頃は、ひと飛びするたびに

轟々と旋風を吹き散らし、危なっかしいばかりだったが一——いまでは風を手足のように操り、すっかりこちらの流儀にも慣れているようだった。

幻想郷での暮らしは、風祝の名に恥じぬだけの實力を身につけさせているらしい。

「よ、邪魔してるぜ」

「あ。靈夢さん、魔理沙さん。こんにちわ」

「お帰り早苗。今日も御苦労さま」

鷹揚に迎える神奈子は、早苗がその胸元に抱いた小さな布包みに目をとめ、眉を跳ねさせる。

「……あれ？」

傍にてつと走り寄った諏訪子も目を丸くしていた。

早苗がその胸に抱きかかえていたのは、まだ生まればかりと見える赤ん坊だった。艶やかな碧髪をした赤子は白い布にくるまれ、すやすやと寢息を立てている。

「早苗、どうしたのその子？」

「どこかで預かってきたのか？」

揃って赤ん坊の顔を覗きこむ守矢神社の神様たちに、早苗は満面の笑みで答える。

「そうなんです！ 聞いてくださいい神奈子様、諏訪子様っ!! 赤ちゃんができました!!」

「早苗エー……っ!?」  
風祝のご乱心に、二柱の絶叫が境内に響き渡った。



「さ、さな、さなっ」

「サナトリウム？」

胸に我が子（自称）を抱いたまま、こくと可愛らしく首を傾げる早苗に、いやいやいやと二柱は揃って手を振る。

「さ、ささささささ早苗？ その、どういうことかな？ いやあ、最近めつきり耳が遠くなっていけないねえ!? そ、その子がなんだって？」

「はいっ、赤ちゃんです!!」

「……誰の？」

「わたしのです!!」

はつきり、きっぱり、爽やかな笑顔で言い切られて。

「……げフッ」

「ああっ、神奈子っ!?」

なにか神々しい液体を吐きつつ、八坂の軍神はその場にぶつ倒れた。慌ててその身体を抱え起こし、諏訪子は恐る恐る早苗の方を振り向く。

「え、えっと——早苗、冗談だよね？」

「いいえ？」

何言ってるんですかとばかりに、早苗は胸に抱いた赤子のふくよかな頬をそつと指でつつき、愛おしげにその額に頬を寄せた。整った顔立ち、陽に透ける美しい碧の髪。赤ん坊には確かにはつきりと早苗の面影がある。

何度もその顔を見比べ、諏訪子はぐくりと唾を飲み込んだ。

「ちょ、ちょっと待ってくださいいな早苗さん？ 赤ち



「やんってそんな簡単に言うけど——ち、父親は？」

「いませんよ？」

「がフツ!?」

さらにと強烈な事を言われ、倒れ込んだままの神奈子の身体がびくんとけ反った。

「ああ!? しつかりしろ神奈子、傷は浅いぞっ!?」

「いや……らめえ……さ……っ、早苗は、そんなこと言わない……っ、言っちゃらめなのお……」

錯乱する神奈子の肩を掴んで、思い切り揺さぶる諏訪子。しかしそんな二柱に追い打ちをかけるように、早苗はぱあっと明るい笑顔で、

「ずうっと頑張ってたんです！ お二人をびっくりさせようって思ってた！」

「あばばばっばばば……」

「うわ、神奈子っ!? おい、帰ってこいつ、行くな、逝っちゃだめだ、こら、神奈子——っ!?」

威厳もへったくれもなく痙攣し、人語すら発せぬままに泡を吹き始める八坂の軍神。たとえ敬虔な信徒と

て、百年の信仰も一目で根こそぎ吹っ飛びそうな有様だった。

そのまましばらくもがいていた神奈子だが、やがてふつりと糸が切れたように動かなくなる。

「きゅう……」

やけに乙女チックな倒れ方をする相方の顔を覗きこみ、諏訪子は肩を竦めた。

「……あーうー。神奈子にやちよつと刺激が強すぎたか……。こんな姿形なしといっておぼこいからねえ、この子は……」

倒れ込んだ神奈子を膝上に寝かせ、諏訪子はそっとその額に濡れた手拭いを載せてやった。

「……本当っばいわね」

「みたいだな」

一連のやり取りを蚊帳の外から眺めていた霊夢と魔理沙も、顔を見合せて囁き合う。

——と、周りが騒がしくなったからか、不意に早苗の胸に抱えられた赤子が目を覚ました。

「ふええええ……！」

「あらあら、ごめんね、起こしちゃったわね」

元気の良い声で泣き始めた赤ん坊を、早苗はすっかり母性に溢れる仕草でよしよしとあやす。邪気など根こそぎ浄化されそうな、慈母の笑顔だった。

「……んー、お腹すいちゃったのかな？」

赤ん坊の顔を覗きこんで、早苗はふいと顔を上げ、

「諏訪子さま」

「な、なんでしょうか早苗さん」

いきなり話を振られて思わず敬語になる神様。早苗はよいしょ、と赤ん坊を胸に抱いたまま立ち上がり、

「私、この子の世話がありますから、少し失礼しますね」

「……う、うん」

「ありがとうございます。……はいはい、すぐにごはんにしましょうね」

にこにこと赤ん坊に話しかけながら、早苗は襖の奥へと消えてゆく。黙ってそれを見送っていた一同は、

閉じた襖の前で一斉に息を吐いた。

「……な、なんか無駄に緊張したぜ」

「あーうー……」

倒れたままの神奈子を膝の上に、こちらもだいぶ気疲れした様子の諏訪子。やれやれと汗を拭い、魔理沙は二柱の元へ歩み寄る。

「……で、どうするんだ、あれ」

「どうするって、産まれちゃったものはどうしようもないんじゃない？」

「そりゃそうだが」

あまり動じた様子のない霊夢の隣で、魔理沙は巫女がそれでいいのかと眉をしかめる。

「でも、確かに気になるわね。……誰なのかしら、父親」

霊夢の疑問はまことに当然のものだったが、その言葉に一同の間には気まずい沈黙が流れる。

「本当に心当たりとかないの？ あんたたちのところの巫女でしょう」

「そんな事言われても……うーん、ここにはそんな相手もないはずだしねえ。来るのは妖怪ばっかりだし、何かあつたらいくらなんでも気づくよ。あるとすれば里のほうだけ……」

お使いなどの用事で早苗が人里に出かけることはないつもの事だが、流石に考えにくいというのが正直なところだった。神社の外で神様も知らない人間関係を持つてゐることはありえないとは言ひ切れないが、早苗の性格からして、まず何か報告があつてしかるべきだと、諏訪子は思うところを述べる。

「確かに里の方におつかいは頼んでたけど、……無断外泊があつたとかそういうのはなかったし……」

「やることやるだけなら一刻もあれば十分でしょ」

「あばばばばば」

「……だからこれ以上話をややこしくするな」

さらにと言う霊夢に、魔理沙はやや赤くなつた顔でツツコミを入れる。

「でも、まさか早苗だつてそういうの知らない訳じゃ

ないでしょうに」

「……あーうー……」

「まあなあ……里じゃ珍しくもないことだしな」

よほど事情でもなければ、年頃の少女が誰かと添い遂げ、母となることはまあある話だ。早苗の年齢であれば、すでに二児の母と言う例もないではない。

「けど、……いくらなんでもこんな事を秘密にしてるなんてのはねえ……」

「言い出せなかつたんじゃないの？」

「んう……」

「あ、神奈子、起きた？」

膝の上で呻いた神奈子に、諏訪子が大丈夫？ と顔を寄せる。

「だ……」

「だ？」

「騙されてるに決まつてる……っ!!」  
がぼつと跳ね起きた神奈子の額から、ひゅんと手拭いが飛んで諏訪子の顔を直撃した。

「そ、そうだ、きつと不埒な輩に弱味を握られて、断りきれずに無理やり……っ!!」 どの馬の骨か知らないが、よくも早苗をそんな十八歳未満お断りの薄い本的展開に!

——ゆ、許さんっ、絶対に許さんぞーっ!!」

握り拳を固めわなわなと震えだした八坂の軍神は、歯を軋らせて膝立ちになる。

空は一転にわかにかき曇り、稲光耀く黒雲が沸き起こる。大気が震え、神社を取り囲むように嵐が吹き荒れはじめた。

「ウチの早苗に手を出すとは、身の程知らずにも程があるッ! 不届千万、神罰覲面! その罪万死に値するッ!」

上げっぱなしのテンションに直結した空は、竜巻と見紛うばかりの嵐に包まれ、畏怖と驚嘆に満ち満ちた山の神への信仰は、いざ人里へと狙いを定める。

「賛符『御射山御狩神事——』」

「落ち着け」

「へぶっ!」

注連縄に御柱を纏い、臨戦態勢になった神様の顔面に、飛んできた濡れ手拭いがぺちんと張り付く。

「少し頭冷やしなつての、ばかなこ!」

手拭いを放り投げた諏訪子が、濡れた顔を袖で拭いながら叫ぶ。出鼻を挫かれ、天に沸き起こった神意は霧散してゆく。再び平静を取り戻す空と共に、ようやく八坂の軍神は我に返ったようだった。

「しっかりしてよ、本当に」

「ん——ああ。すまん。取り乱した」

まだわずかに腕が震えてはいたが、神奈子は深呼吸と共に咳払いをひとつ。

「し、しかし、流石にこれはまずいだろう……これまでもあれこれ厄介なことはあったが、今回はその中でもとびきりだぞ。もし天狗にでも嗅ぎ付けられたら——」

と、そこまで言って。神奈子ははたと動作を止め、視線を陰しくする。

「神奈子！」

「――外かつ！」

諏訪子の意図を察した神奈子は、縁側から庭へと飛び出した。諏訪子もすぐ後に続き、おもむろに拍手を打ち合わせる。

ばあん、と澄んだ空に響き渡る清涼な音と主に、近くの森の中で土砂の爆発が巻き起こった。

「きゃああーっ!?」

飛び散る土煙の中、可愛らしい悲鳴が響く。

「そこか!!」

神奈子が渾身の力で振りかぶった巨大な御柱が、ずどんと轟音を立て、妖怪の山を串刺しにせんばかりの勢いで山肌に叩きつけられてゆく。

舞い上がる土埃の中から、転がり出してくる翼が二つ。

そのひとつが、地面を転がって突っ伏す。

「……手遅れだったか」

携帯型カメラを握りしめたまま目を回している姫海

棠はたての姿を見、神奈子は深刻な表情で呻いた。

そして二柱が空に転じた視線の先。黒い羽根を散らし、もう一人の鴉天狗がふわりと舞い降りる。

「あやや。毎度どうも。ご愛顧を感謝いたします」

「やつぱりいたねパパラッチ天狗」

「ふふふ。事件あるところ射命丸あり。スクープと聞けばたとえ火の中の水の中。清く正しい射命丸、射命丸でございます」

「いくらなんでも早すぎやしないかお前」

選挙公報みたいな名乗りを上げる文に、魔理沙が突っ込む。

「お褒めに預かり光栄ですね。『文々。新聞』は日夜いち早く最新の情報をお届けするため、おはようからおやすみまで皆様を見守っているのですよ」

「平たく言ってストーリーカードだね」

悪びれた様子もない文に、神様たちは苦い顔。

「この前早苗に追っ払われたくせに、良くまた顔出せたもんだ。そんなんだから部下にも嫌われるんだよ」

「やれやれ。真実を伝える報道の崇高な理念が理解されないのはいつものことですが——いかな障害があるうとも、断固としてそんな圧力には屈しませんよ?」

にまりと笑みを浮かべる文。この鴉天狗の一番のうっとうしさは、一度や二度追い払ったくらいでまるで改めるということを知らない点だ。滅多に折れないほどの頑丈な鼻っ柱を持っているからこそ、人間に最も近い天狗などという位置を保っていられるのだろう。

「いやはや、ここ数日張りこんでいた甲斐がありました。早苗さんの事ですからそろそろなにかしらしでかすだろうと思っていました、予想以上の大スクープですよ。守矢神社の巫女さんに隠し子発見!! これは今季下半期の特別賞も夢ではありませんね!! ——では、号外をお楽しみに!!」

「逃がすかつ!!」

言うが早い、まさに疾風となつて空へと舞い上がった文に向け、飛び交う御柱に鉄の輪が普段の弾幕ごつこの数倍の容赦のなさで追いつがった。

しかし文は幻想郷最速の機動力に物を言わせ、それをひらりひらりと見事にかわしてゆく。

「ちょ……待ちなさい、文っ」

「しまった、こっちもか!!」

文に気を取られている間に、はたても目を覚ましていた。諏訪子がすかさず鉄輪を投げ打ち、その自由を奪う。

「ちよっ……や、め、何よ一体!?!」

「待て!! ブン屋、こいつがどうなつても——」

「はたて!! あなたの犠牲は忘れませんっ」

「早いよ!!」

半秒も保たずに見捨てられる対抗新聞。<sup>スボイラー</sup>

「く、ダメか、追いつけないっ」

文を追いつ天へと奔る八坂の軍神だが、元よりスピード勝負で天狗にかなうはずもない。みるみるうちに小さくなる文の姿に、神奈子は歯噛みする。

音すら置き去りにして空を征く天狗——もはや彼女を止める手立てはないかに思われた、その時。

突如眼前を塞ぐ『新聞勧誘お断り』の特大の符に、文はきよとんと瞬きをしていた。

「――あや？」

一瞬の間を挟み、空に盛大な弾幕が花開く。

「……一応、貸しにしておいてあげるわ」

鴉天狗の撃墜音の中、霊夢ははあ、と溜息をついて麦茶を啜った。



かくして。

天狗の墜落で大穴のあいた境内には、簀巻きになった天狗が二人並んで転がされることとなった。無論、カメラは取り上げられ、フィルムとネガは念入りに処分されている。

「うう……こんな話乗るんじゃないかったわ」

「まったく、役に立ちませんねえ、はたては」

涙を流すはたてとは対照的に、文は不敵な表情のま

まだ。

「なによ！ 珍しく一人じゃ手が足りないから共同取材なんて言うから付き合っただけなのに、いざとなったら見捨てる気だったんじゃないの！」

「あんな出鱈目信じてたんですか？ 駄目ですねえ。折角のスクープを念写で横取りされたら面倒だってだけです？ その点、近くに居れば最悪身代わりにもなりますし」

「酷っ!? わ、分かってたけどねあなたの性格くらい!!」

「……仲間割れはあとでやってくれるかね？」

二人の前に仁王立ちになり、神奈子は腰に手を当てて天狗達を見下ろす。『あの守矢の巫女に隠し子発覚――か!?』――明日の紙面を飾るであろう、煽情的で偏見に満ちた文のネタ帳を開いてその鼻先に突きつけ、「さて、このピンク記事に対して釈明はあるかい？」

「まったくひどい誤解ですよ。これはあくまで、年若い巫女さんと、そのお子さんの交流を描いた記事であ

りまして。心温まる微笑ましいひと時を伝えるためのものです。断じてそのような邪な意図はありません」

「……本音は？」

「早苗さんの貴重な授乳シーンと聞いて飛んでまいりました」

「見せるか!!」

「でも早苗の授乳ならちよつと見てみたいかも……あ痛っ」

宙を舞った御柱が、カラス二人をまとめて叩き伏せる。

「はあ……予想以上に最悪だ」

「じよ、冗談よ! わたしはそんなつもりはないってば!!」

文の隣ではたてが身の潔白を訴えるが、二柱の視線は険しくなるばかり。天狗の新聞には山ほど前例のあることなので、信用がないのも仕方のないことだろう。

「大体ね、神様だって人気商売なんだ。そんな風聞立てられたらたまったもんじゃないよ」

「事実じゃないですか」

「ぐ……ま、まだ確証はないだろう!」

「いやあ、最近の早苗さんの行状を見るに割と時間の問題だったんではないかと——」

「やかましいよ!!」

苛立ち紛れに放たれる鉄の輪を、両手両足縛られたまま文はひよいと避けて見せる。

「さて、それはそれとしましてそろそろ核心に迫りたいのですが、守矢神社の巫女を見事娶ったのはいったいどちらの御方ですか?」

「——あー」

「それは……」

不意を突かれ思わず視線をそらす二柱に、霊夢が脇から口を挟む。

「いないそうよ」

「あ、こら!」

「ほう!?! と、いうことは未婚の母というのでしょうか!? これはがぜんスキャンダラスな方向で



すね!？」

「面白がるなッ!! こつちは頭抱えてるんだ!!」

「神奈子、肯定してどうすんのさ」

「ふむ、これは良いですね。人里でも人氣急上昇中、いまや里の若者たちの憧れの守矢の巫女が、まさかの火遊び!? おお、えろいえろい」

縛られたままぐねぐねと身を揺すり、テンションを上げっぱなしの文に、容赦なく弾幕が飛ぶ。

「……ねえ、早苗ってそんなに人氣なの？」

「そうらしいな」

「へえ。中身知らないって大変ね」

しみじみと頷く靈夢。その横で文が眼を輝かせ、

「ふむ。……しかしそうしますと——」

穏やかな、けれどどこか物淋しい夕暮れの中。

手を引かれた幼子が、ねえ、と口を開いた。

「おかーさん」

幼子が見上げるのは、母と呼ぶには、まだ年若い――

――少女とも呼べるような年齢の娘だった。ともすれば姉妹にも見えるような二人を、けれどあどけない声は確かに母と呼ぶ。

「ねえ、おかーさん、どうしてわたしにはおとーさんがいないの？」

幼子の無邪気な問いかけだった。

けれどその問いに、母は哀しそうに表情を撓ませるばかり。母のただならぬ様子に、聞いた娘も顔を曇らせる。

「おかーさん、どこかいたいの？」

案ずるような娘の声に。母はきつく、涙をこらえて我が子を抱きしめた。

「……ううん。違うわ。……あなたのお父さんはね、

神様よ」

「かみさま？」

きょとんと眼を瞬かせる娘に、母はもう一度繰り返す。

「……そうよ。神様よ」

この子は私の子だ。

——何よりもただ、そのことだけを伝えたくて、小さな温もりを抱きしめる手に力を籠める。

夕日だけが、二人を見下ろしていた——

——というような路線はどうでしょうか！」

「捏造もここまで来ると感心するよ!? あとそつち

の天狗も『イける!』みたいな顔してメモ取るなっ!?!」

こりずに鼻息荒く目を輝かせる天狗に、諏訪子は肩を怒らせて叫んだ。息も荒く、ずれかけた帽子の下から文を覗む。

「大体ね、そう言うならお前だって十分容疑者だぞ?」

天狗

「へ?」

私ですか? と文が呆けた表情を浮かべる。まさか自分に矛先が向かうとは思っていなかったらしい。

「ど、どうしてそうなるんですか!? 仮にも報道に携わるものが取材対象に手を出すなんて、言語道断で

すよ!? 馬鹿馬鹿しい。第一、私はこれでもれっきとした女性ですよ!?!」

「そんなものは何とでもなるだろう」

「……なるのか?」

「それなりにね」

割と興味深々な魔理沙に、霊夢は答えてお茶を啜った。

「……やけに慌ててるね?」

歩み寄った諏訪子は、文の抗弁を遮りねめつけた。どろりと濁った瞳の奥に、土着神の頂点の迫力を見せ付けられ、さしもの文もたじろぐばかり。

「ち、違いますっ、断じてそんなことはありませんよ!? 以前宴会で一緒にしたときに、いろいろとお話をさせて頂いた程度で……」

「え、そうなの? 前に人間にしてはよくやるとか、結構可愛いとか言ってたじゃない。この間だってプレゼントがどうとかって——」

「はたて——!?」

「ほう」

挙動不審に陥った文を、ゆらありと神奈子が見下ろす。

「貴様かー!! 貴様が早苗をキズものにー?」

「あや×さな……アリね!」

「こらはたて!」

四面楚歌の文を、諏訪子と神奈子はじつと見下ろし、

「どうしよう。埋めようか?」

「そうだな」

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ!? しよ、証拠

は? 証拠はどこにあるんですかつ!」

「お前ね、たまには鏡見た方がいいんじゃないか?

……大体、天狗なんて神代の昔から助平と相場が決ま

ってるんだ」

「ふ、風評被害反対——!!」

「二「お前が言うな」」

一同の突っ込みはこれ以上ないくらいにハモってたという。



午後の風が風鈴を揺らす。ゆつくりと傾き始めた陽の下、蟬の声は幾分強さを増していた。手の泥と額に浮いた汗を拭い、神奈子はふうむと腕組みをひとつ。

「……こうしてもしょうがない。兎にも角にも、早苗に確認しないことには始まらないな」

「そうだね」

「せめて埋め終わる前に気付いて欲しかったところですね」

「……なんで私まで……」

首から下を地面に埋められた天狗たちが目の幅涙を溢れさせる中、奥からふええ、と赤ん坊の泣き声が響く。

皆が思わず言葉を飲み込む中、渦中の早苗がぐずる赤子を胸に抱き、襖の奥から姿を見せる。

「なんだか騒がしいですね。せっかくこの子も寝付い

たところなんですから、静かにしてください。……あら？」

庭の惨状を見回し、早苗は瞬きをつつ。

「どうしたんです？ 文さんもそんな愉快な格好で」

「いえその、色々と深い事情がありまして」

埋められたまま、しどろもどろの文。霊夢と魔理沙

はちゃっかり距離を取り、野次馬を決め込んでいた。

必然的に矢面に立たされた神奈子と諏訪子は、お互

いに肘をつつき合う。

（ほら神奈子、早く聞いてよ）

（え、……いや、こう言うのはお前の方がいいんじゃないか？）

（私に押し付ける気!?）

顔に疑問符を浮かべる早苗に、とうとう辛抱しきれ

なくなつた神奈子は、諏訪子の背中に戻つて小さな身

体をずいとい前に押し出した。

（諏訪子、まかせたつ）

（ちよ、卑怯者っ!?）

貧乏くじを押し付けられ、諏訪子は思わず悲鳴を上げる。

「……？ どうしました？」

「え、ええと……」

（頑張れ、応援は任せろー!!）

（あーもう、こいつらは……）

後ろから無責任な応援と視線を送る神奈子と野次馬

たちを、後で見てろとばかりにぎろつとひと睨み。

すうはあと深呼吸をひとつ挟み、固い唾を飲み込んで、諏訪子は早苗に向き直る。

「あーうー……。その……そろそろ話してくれないか

な？ その子の……その、父親のこと」

腫れ物に触るような態度で訊ねた諏訪子に、早苗は

不思議そうに首をかしげる。

「……？ 前にお話しませんでしたか？ いらないって」

「うん。……その、話にくい事なのは解るよ。早苗

も辛いことだと思う。でも、いつまでもそのままだ

いけないと思うんだ。こういうのは曖昧にしておく

後で良くない。その、早苗にも辛い事なのかも知れないけど——」

諏訪子はわずかに焦りをにじませつつ言うが、当の早苗は誰も認めてくれないことにいささか気分を害したようで、眉を逆立てて声を上げる。

「そう言う言い方はどうかと思います。前にも言った通り、父親なんかないません。この子は正真正銘、私の赤ちゃんです！」

「いや、だから早苗——」

意固地になるのは解るけど——と、汗をかきつつ応対する諏訪子に、早苗はもうつ、と口を尖らせて立ち上がった。

「信じてくだらないなら仕方ありませんね、いまから実際にやってみせますから」

「は？」

「見ててください、神奈子様、諏訪子様っ」

突然の早苗の豹変に、埋められたまま身を乗り出す天狗。

「やめてー!?」

「早苗落ち着け、早まるなーっ!!」

制止のため飛び出しかける二柱だが、早苗のほうはずっと早かった。守矢の風祝は静かに目を閉じ、胸元に手を伸ばす。

そうして彼女が行ったのは、二つの動作。

1. おもむろに髪飾りはずす。
2. 地面にほうり捨てる。

——以上。

ぼん、と音を立てて、地面に落ちた髪飾りが煙に包まれ、そこから可愛らしい笑い声があがる。現れたのは一番目の子と同じように、早苗そっくりの碧の髪をした赤ん坊だった。

「誓約!?」

予想外の展開に顎を落としかけている皆の中、なぜだか早苗は自慢げな表情。

「どうですかお二人とも!!」

褒めてもいいんですよ? と言わんばかりに胸を張って、あたりを見回す。しかし皆が言葉を失っているのが不満だったか早苗はむうと眉を立て、

「むー。なんだか素っ気ない反応ですね。それじゃあもう二、三人行ってみましようか」

「やめー!」

守矢の風祝に、二人目のお子さんが誕生した瞬間であった。



そんな訳で、およそ半刻ほど過ぎた夕暮の境内では二柱の神様がそれぞれ生まれたばかりの双子を抱きかかえるという構図が出来上がっていた。

「あーうー」

「だうー」

二柱の胸の中で、赤ん坊は小さく声を上げ、つぶら

な瞳をまっすぐに向けてくる。腕にかかる小さな重さを感じ、諏訪子はその愛くるしさに目を細めた。

「おー。よしよし。可愛いねえ」

赤子を抱き、あやす姿も堂に入ったものだ。かつて人の親となった経験があるという噂がある神様だけに、見た目にそぐわず母の貫録たっぷりだった。

「いやはや……心底驚いたな」

一方、神奈子も、腕の中におっかなびつくり、翠髪をした赤子を抱いていた。こちらは軍神ゆえにこうした経験は少ないのか、諏訪子に比べると余裕が足りないようだった。

「赤ちゃんってあれで産まれるんだな……初めて見た」  
「そうだね、神様やつてもう長いけど、正直吃驚したよ」

「おいその神様」

いいのかそれだと突っ込む魔理沙。

「……子持ち巫女かぁ。ジャンル的にはニッチだよねえ多分」

「顧客獲得が課題だな」

「そこで真剣に検討されても微妙なんだが」

「いや、重要なことだよ？」

人里の信仰の——控え目に言って何割かは、守矢神社の巫女さんへのものだ。年頃の見目良い少女がいれば衆目を集めないわけがない。特に、博麗の方に比べると主に若い男を中心に人気があるのだと文が補足する。

「相変わらずあんたんとこの巫女は全力で間違った方向に信仰されるわよね」

「……言わないで」

それなりに苦勞のあるらしい二柱は、霊夢の一言に目頭を押さえて熱い涙を流す。

「……そうだ。諏訪子、大事な事を忘れてたぞ」

「何？」

「この子達の名前だ！……どうしよう？」

「あー。そっか。一応どっちも早苗なんだよね」

赤ん坊に高い高いしながら、その顔を覗きこみ、諏

訪子はむうと唇をへの字に結ぶ。

「あの髪飾りを核に、早苗の霊力が、この子たちの形を取ってるんだ。……すぐく変則的だけど、現人神としての早苗の分霊わけみたまみたいなものかな」

「いわゆる処女懐胎か。奇跡もここまで来たとはな」  
「……他人事みたいに言ってるけど、聞いてる限りじや半分は諏訪子と神奈子が孕ませたみたいなものじゃない？」

「あー、霊夢お前も言葉選べ？」

こほん、と魔理沙は咳払い。

「それは解ったが、それだけじゃ赤ん坊の格好してる説明がつかない気がするぜ？」

「神格として産まれたばかりって言うのもあるんだろうけど、早苗自身の意識が強いんだろうね。……多分、そういうカタチを早苗が望んだんだ」

「……念のため改めて聞くが、やっぱり早苗ってそのへん知らんわけじゃない、よな？」

「いまどきの子だからねえ……そんなわけないと思う

けど」

信仰の枯れ果てた外の世界で、何十年目かに生まれた、稀代の力を持つ神子として生まれた——守矢の風祝、東風谷早苗。そうした来歴ゆえ、神奈子のほうはやたらに箱入りにしたがることもあったが、概ね問題なく人並みに成長してきたはずだと諏訪子と思う。

「恋のひとつやふたつはしていたと思うよ。……成就したかどうかまでは言わずにしておくけどさ」

それにね、と土着神の頂点にある神様は吐息。

「……外の世界じゃあの子の力は忌み嫌われるものだった。その事を大っぴらにできないくらいにはね。あの子の家族の中で一番、過去の伝承や力を扱う事に長けていた祖母でも、早苗の才能には遠く及ばなかったよ」

でも、と諏訪子は言葉を切り、

「あんな方法で子供作れるなんて、よっぽど神格の高い神様くらいだよ？ 私や神奈子は言うに及ばず、独り身で神産みをしたなんて、記紀神話でもイザナギや

らアマテラスの格になる。多くの神は普通に番いになって子を産んでるんだ。神とても、それが自然の理にかなったことだったってことさ。

……そりゃ早苗は人間としてはずば抜けた霊力を持つてるけど、いくらなんでもそんな簡単に。ねえ？」  
「早苗の神徳がこれ以上ないくらいに高まつてることだろう。最近信仰集めにいろいろ頑張つてたみたいだからな」

「うー？」

あれこれと頭を悩ませる二柱の顔を、胸に抱かれた小さな命が丸こい指を伸ばしてぺたぺたと触れる。

あどけない笑顔を見せる小さな生命は、二柱の緊張をほどくには十分だった。

「……えへへ」

「……おー、よしよし。あばばば……」

威厳や戸惑いもどこへやら。その笑顔に、守矢の二柱の表情はでれでれと崩れてしまう。

「うーん……この子は目元が早苗似かな？」



「耳が早苗にそっくりだね。可愛いもんだ」

「えー？ 私の子のほうが可愛いってば」

「はっはっは。張り合うもんじゃないぞ諏訪子。一番は決まってるだろう」

「……へえ、じゃあ確かめてみる？」

「ふん、面白い」

に、と不敵に笑う神奈子に、挑むように微笑む諏訪子。

ぶつかり合う視線と共に火花が散る。たちまちあたりには不穏な気配が満ち、吹き始めた風にざわざわと梢が波打ち、大地が鳴動を始める。

「なにをやってるんですか!!」

おとなげない理由で諏訪大戦の再戦を始めようとする二人だが——戦端が開かれるよりも先に、それを制する一喝が、境内に響き渡った。

走り寄る早苗に我に返り、二柱は慌てて胸元に抱いた赤ちゃんの様子を窺う。

——が。

大の男でも裸足で逃げ出すであろう軍神の呼び起こす疾風や、崇り神の招く呪詛の顕現を目の当たりにしても、赤子たちは怯えるでもなく、きやつきやと嬉しそうにご機嫌だった

「……元氣だな」

「大したもんだわ。流石の血筋ね」

「そりやそうさ。なんたつて早苗の子だからねえ」

「そこでお前さんまで誇らしげなのがよくわからんが」  
胸を張る諏訪子に、魔理沙はずれかけた帽子の下で呻く。

「そうですよ。……もう。お二人とも危ないことをしないでください!!」

「……はい」

「ごめんなさい」

しゅんと俯き、肩を落として風祝に叱られる神様二人。

「母は強しだな」

「……そういうものかしらねえ」

いまいちよく分からないといった体で、靈夢は縁側に腰を下ろしてお茶を啜った。



「お先にお風呂、頂きました」

夜も更ける時刻。濡れた髪を乾かしながら、寝間着姿の早苗が居間に声をかける。正装を解いてひとり、手酌で盃を重ねていた神奈子は、顔を上げてああと頷いた。

「神奈子さま。お休みになられないんですか？」

「……少し、そういう気分じゃなくてね」

「何かお持ちしましょうか」

返答も待たずに神饌しんせんの用意を始めてしまいそうな様子の早苗を、神奈子はしっかりと制する。

「気にしないでおくれ。今日は色々あって疲れただろう、三人ともゆっくりお休み」

早苗はまだ何か言いたそうな様子だったが、神奈子

はそれを寝間のほうへと追いついて立てる。

「それじゃあ、先にお休みさせていただきます」

「ああ、おやすみ」

申し訳なさそうな様子の早苗を見送り、神奈子は居間に戻って再度盃に手を伸ばす。白磁の盃に満ちた強い酒精が喉を焼く味に、そっと目を細めた。

程なくして、障子の向こうから声がかかる。

「……神奈子、起きてる？」

「お前じゃあるまいし。冬眠にや早すぎるだろう」

障子を押して開けた諏訪子は、いつになく真剣な表情。

「茶化さないで。大事な話だよ」

「早苗のことか」

「他に何かあるのさ」

諏訪子は吐息をひとつ挟んで、神奈子と背中合わせに腰を下ろした。とん、と小さな身体が背中を預けてくる。

「流石に今日のは驚いたよ。早苗のする事はもう大概慣れたつもりだったけど、まさかいきなり母親になっ

ちやうなんてね」

「まったくだ。普通、もう少し戸惑うもんだろうになあ。順応性が高いのはいいことなのかもしれないが」

「神奈子はほんとに、早苗に甘いよねえ」

自分はそんなに酔っ払ってゐるくせにさ、と諏訪子は口を尖らせる。

「……どう思う？」

「私に聞くのは、ちよいと卑怯じゃないか？」

「そうだね。……言いたい事があるのは私の方だ」

そう言う、諏訪子は神奈子の手から盃を取り上げて、くいと飲み干した。

ほんのりと染まった唇が幽かな吐息をこぼし、夜闇

に鳴く虫の声がわずかな沈黙を埋める。

「素直に言つて、今の早苗の在り方は良くないと思う」

ぽつりと。

諏訪子はそう切り出した。

「……早苗が、望んだ事だろう？」

「それでも、だよ」

崇られる神様は、共に祀られる軍神を見る。

「神奈子。私は、早苗を神になんてしたくないよ。神（神格化する）つてのは人が望むから在るものだ。私達（神様）が人に願いを押し付けちゃいけない。……神を産むのは、人なんだよ」

「……………」

「早苗が人として、子の親になりたいっていうなら構わないさ。でも、あれは違う。どういう姿形をしていても、あの子たちは早苗だ。神としての早苗の側面だ。

神奈子、あの子たちがどうして赤ん坊の格好で生まれてきたのか、分からないわけじゃないよね」

「……ああ」

そう。昼間諏訪子が言葉を濁したように、ただ、分霊というのであれば、赤子の姿を採る必要はないのだ。にもかかわらず、早苗の分霊が赤子として生まれたのは、早苗自身がそうありたいと願ったからに他ならない。

つまり——家族。人としての絆。

「あの子は風祝で、女の子だからね。私達と家族になるために、一番自然で、問題のない形を選んだつもりなんだろう。流石に意図的なものじゃないとは思うけど」

神様であることと、血の繋がった家族であること。

その二つを同時に満たそうとするがために、今回の騒動が起きた。恐らくそういうことなのだ。

「……早苗は確かに、風祝として稀代の力を持っている。幻想郷の水士は、早苗によく馴染んだんだろうね。もともと失われようとしていた信仰に根ざす力だ。失われた幻想の行き付く先こそが、あの子にとって相応しい世界だったのかもしれない」

そう考えるのは少し寂しいけれどね、と付け加えて。諏訪子は軽く肩をすくめてみせた。

諦めたつもりだった。枯れ果てた信仰と共に、忘却の彼方に失われる事を受け入れたつもりだった。

けれど、神を見、神と話し、神と共に笑う風祝の少女と共にいるうちに、それを忘れていたのだと、諏訪

子と言う。

「あの子が人である限り、いつか私達との離別がある。私は、神のくせにそのことを恐れていたのかもしれない」

自分は喪われてもいいと言いながら、それはただの独りよがりだ。己の血筋が、生まれながらに、子孫の生き方を縛っていたのではないか——

帽子の目玉と共にしよげ返る諏訪子の背中へ、そう語っていた。

そんな相手——ともに祀られるもう一人の神の見せる不安に、神奈子はふ、と息をこぼす。

「そんな事で悩んでいたのか」

「そんな事って——」

「それを言うなら、人のままでいて欲しいと願うのも、共にあって欲しいと願うのも、どちらも神の領分を超えたことじゃないのか？」

「……………」

「お前の言う通り。神は、人の夢と同じものでできて

いる。

故に儂く、故に絶大であり、常に人と共にあり、そして同時に人から最も遠いものだ。

だからこそ、そんな私達が早苗の事を信じてやらなくてどうするんだ？ 自身の信仰と共に、この幻想郷まで共に付いてきてくれた、あの子を」

「神奈子……」

「心配するな。諏訪子」

ぼん、と諏訪子の頭に手を乗せて、神奈子はくすりと微笑む。

「早苗の願いは、早苗自身が決めるのだろうさ。それゆえの現人神だ。きつと、私達の想像もつかないことをしてくれる。それを信じておこうじゃないか。

案外、今回のことも残機が増えたぐらいにしか考えてないかもしれないぞ」

「……それは流石にどうかなあ」

納得いかなそうな様子の諏訪子に、神奈子はひらひらと手を振って見せた。真面目な話なのに、と諏訪子

は口を尖らせる。

「あーあ。神奈子は生まれながらに神様だから、そのへんデリカシーないよねえ」

「……好き放題言ってくれるな？」

「そういう擦れてないところが好きだって言ってるの。言わせんな恥ずかしい」

諏訪子は頬を膨らませて視線をそらす。

「ま、そうだね。……ここの主神は神奈子だから、神奈子の判断に任せるよ」

「……無責任な」

「そういう約束だろう？ 神奈子が看板、私は裏方。ずっと昔にそう決めたじゃないか」

はあ、と諏訪子はもう一杯、盃を空にする。

「でもね、やっぱりちよつと心配なんだ。早苗が今、風祝を超えた力を持っているのは、信仰あつてのことだ。でもそれはこれまでの早苗を知る者たちが集めている信仰なわけさ。その早苗本人が変わってしまったとして、同じように信仰が集まるものかな？ ことに

よったら——」

「いまのあの子たちを生み出している神徳も、失ってしまうかもしれない？」

「そういうこと」

もしそうだったとしたら——たぶん、早苗は悲しむだろう。どんな言い訳をするにせよ、あの赤ん坊たちは早苗の子であり、早苗自身でもあるのだから。

「それなら話は簡単だろう」

「へ？」

呆氣にとられる諏訪子に、神奈子は自信たつぷりに笑みを覗かせ、腕組みを一つ。

「私にいい考えがある」

「神奈子がそう言いだして上手くいった記憶がないんだけど」

微妙な顔をする諏訪子に、神奈子は苦笑い。

「いいから聞け。単純なことなんだ。神は信仰によって存在できる。言い換えれば、忘却が神を殺すわけだ。……だとするなら、あの二人が新しく神様として祀っ

てもらえば万事解決だろう？」

「……ああ、成程」

諏訪子もぼん、と手を叩く。神奈子はいっと歯を見せて、大きく腕を広げた。

「そして、幸いにしてこは、新しいものを受け入れてもらうためのルールがある。何も隠す事はないんだ。大々的にお披露目といこうじゃないか。もちろん今度は早苗たちにも秘密って訳にはいかないだろうがね。……なんなら天狗に話を付けてもいい。ちょうど貸しもあるところだしな」

「……また、博麗のところに五月蠅いこと言われそうだねえ」

「そういうものだろう、異変つてのは」

言って。神奈子と諏訪子は顔を見合わせ、やがてくすくす笑いあつた。

「よし。目出度くまとまったことだし折角だ、一杯いこうか」

「前祝いねえ……皮算用にならなきゃいいけど」

「氣に入らんないぞ? 一人で呑む」

「……そんな事言つてないじゃんさ」

取り出した盃に、徳利の底に残っていた冷酒を半分に分け。守矢の二柱は、前祝いに乾杯の盃を打ち鳴らした。



鳥のさえずりが、眠りの浅くなった耳をくすぐる。

朝陽差し込む寝室の中、寢床で寝返りをうった諏訪子は、その二の腕に柔らかいものを感じて身を起こした。

「んー……かなこ……?」

昨日は少し、飲みすぎたような覚えがあった。何年ぶりの二人酒に、つい夜半まで盃を傾けたせい、軽い鈍痛が頭の芯に残っている。

重い瞼を擦りながら、隣に目をやれば。

「……………っ!?」

寢床で丸まっていた小さな赤子と目が合った。

「だーうー」

「……………」

自分そっくりの、秋の稲穂のような髪の色。あどけない笑顔でこちらを見上げてくる小さな生命に、諏訪子の頬を無数の汗が流れ落ちてゆく。

「……いや、いやいやいやいや」

まるで身に覚えがない。いや、ないわけではないが最後にそうした行為に至ったのはもう千年以上も昔、いわゆる神代のことで――

「諏訪子っ!!」

「ひあ!?」

いきなり襖をふっ飛ばさんばかりに駆け込んできたもう一柱に、諏訪子は血の氣も引く思いで振り向く。

するとそこには今にも泣き出さんばかりに青ざめた神奈子。

そして――その胸には、やはり見覚えのある、蒼髪（あはだ）の小さな姿があった。

「す、諏訪子、どうしよう!! どうしようっ……こ、子供が、子供ができちゃった……」

「……お前もかブルータス」

諏訪子は呻いて天を仰ぐ。

「……そ、そんな覚えのないのに……っ」

ミレニアム乙女の神奈子には、諏訪子以上に驚愕の出来事であつたらしい。昨夜の威厳も貫禄もどこへやら、神格崩壊の体で泣き出す始末。

そんな親の不安を敏感に感じ取ったか、抱きかかえられた赤子の泣き声が響きはじめる。

——どうやら、守矢神社の御利益に安産祈願と子孫繁栄が掲げられるようになるのはそう遠くなさそうであつた。



### 神様のつくりかた

初出：大⑨州東方祭 4(2011/7/24)

守矢神社には三人の神様がいますという記述から、早苗さんは人ではなく神様になっていくのだなあということを実感し、じゃあこれくらい普通にやるだろという思い切りによって出来上がりました。

ちなみにこのお話のエピローグの後、それぞれのこども神様たちはそのまま守矢神社に祀られている設定です。

## 比翼連理のクウィルペン

秋も深まる妖怪の山。鮮やかな紅葉に彩られた山裾を見下ろす、風の社・守矢神社。秋の日差しが注ぐ縁側に腰をおろし、射命丸文は背中から振り出した翼の羽繕いに耽っていた。

妖怪の山において最も里に近い天狗——そう標榜する彼女が、山頂に現れた外来の神への監視という名目で、ここ守矢神社に出入りするようになってかなりの時間が過ぎた。はじめは義務だったはずの週に一度の来訪が、習慣になり、週に三度四度と頻度を増していったのはいつからか。

気付けば、社務所の食卓には文専用の茶碗や箸が備えられ、客用の布団はすっかり肌に馴染んだものとなっている。本来、客間だったはずの離れの一室には、文々。新聞の制作に用いられる機材や過去のバックナ

ンバーまでもが揃っていた。

今はまるで第二の我が家。いや、仕事にかまけて散らかり放題の自宅よりも、清潔な布団に温かいごはん、むしろ居心地は上かもしれない。

「~~~~~♪」

……だからこそ、つつい鼻歌なども出ようと言うもので。

すっかりくつろいで羽根先に丁寧なブラシをかけ、翼墨をつける一連の動作に没頭していた文は、ふと脇からの視線に気付いて、顔を上げた。

「……………」

飲みかけのお茶が冷めるのも気にせず、興味深げに頬杖を突き、じいっとこちらを見つめる少女——ここ守矢神社の風祝、東風谷早苗の視線が、ちくちくと文の背中をつつく。

「……こほん」

つつい、ここがどこかも忘れてくつろぎ過ぎていたことに気付き、軽く頬を紅潮させた文は、わざとら

しく咳払いを挟んで身体の向きを変え、翼を早苗の視線から隠した。しかし早苗は遠慮なくちゃぶ台の上に身を乗り出して、文の手元を覗き込もうとするのをやめない。

眉をしかめ、再度身をよじってみる文だが結果は同じ。しばし、無言の攻防が続いた。

「……………」

きらきらと輝く瞳で——本人に言わせればそんな物欲しげな顔は断じてしていいと言いつ張るだろうが——好奇心いっぱい視線を向け、なんとしても覗いてやらんとする早苗。とうとう文はたまりかねて立ち上がり、道具と共に縁側の反対側に移動する。

が、やはり結果は同じ。それどころか、早苗はずっと座布団を引きずって、文の隣に身を寄せてこようとする始末であった。

「あのですね、早苗さ——」

「文さんっ」

彼女を制しようとした矢先、食い気味に早苗が距離

を詰めてくる。躊躇なく顔を寄せてくる風祝の笑顔に、文は思わず言葉を失った。

出会ったはじめのころは初々しさは一体どこへ行つてしまったのか、緊張に身を強張らせて幻想郷の流儀に慣れようとあれこれ無茶をして暴走していた少女は、今ではすっかり周りを振り回す側だ。

一体何を言い出すのかと内心わずかに怯える文をよそに、早苗は目を輝かせたまま、すいと手を伸ばして文の手を握る。

「羽根ペンってありますよね！」

「却下です」

一秒すらなく即断。考慮の余地もない案件だった。わくわくと目を輝かせていた早苗が一転、不満げに眉を寄せて、えーっと口を尖らせる。

「まだ何も言ってますええ！」

「言わなくても分かります」

というよりも、既に公言しているに等しい。文は、背中の翼を早苗から庇うように遠ざけ、彼女に向き直

るように座り直す。

「そんなあ。いいじゃないですか、一本くらい」

「いいわけないでしょう」

「むー……。えいつ」

まったく納得した様子もなく、背中の方へと手を伸ばしてくる早苗の指先から、文は慌てて羽根を引き寄せた。

そのままじっと、視線に力を込めて早苗を見つめる。

「……ダメです」

「文さんのけちんぼ」

「ケチでもなんでも結構。とにかくダメです」

「えー、どうしてですかー？」

なおも不満げに、ぷうっと頬を膨らませる早苗。自分が何を口にしていいのか分かっていないのだろうが——文は額に手を当て、大きく吐息した。守矢神社の風祝が、一度決めたらまず退かないというのは、これまで何度も思い知らされてきた。

「天狗はですね……まあ、天狗に限らず妖怪全般に言

えますが、羽根や耳や、尻尾をややすと他人に触らせるようなことはしないんです。そもそも人間だって、いきなり出会い頭に抱きついたりはいしないでしょう？ 早苗さんだって女の子なんですから」

「ですから、わたしと文さんの中じゃありませんか！」

「親しき仲にも礼儀あり、ですよ。そもそもそこまで親しくなった覚えもありませんが」

言い聞かせている間にも、文の隙を狙ってぱっと手を伸ばしてくる早苗。じろりと睨んでやるが、懲りた様子は全く見えない。文は大きな溜息と共に、翼を背中引つ込めた。羽繕いは一からやり直しになるが、仕方がない。

しゅるんと背中に消える文の黒翼を見送り、早苗がああーっと残念そうな声を上げる。

「うー。文さんが意地悪します……」

「人聞きの悪い事言わないでください。他の鴉天狗相手だったらこの程度じゃ済みませんよ？」

まだ不満そうな早苗は、手持ち無沙汰にぴんと跳ね

る自分の髪をつまみ、

「ああいうのって憧れてたんですよ。ハリポタとか読んで。ほら、なんかこう、魔法使いっぽくてカッコいいじゃないですか」

「魔理沙さんに弟子入りでもすればいいんじゃないですかね。使ったことはありませんが、羽根ペンは結構指が疲れますよ。羽根の軸って細いですから。インクも保ちませんし、使い勝手も書きやすさも万年筆の方がはるかに上です」

「もう、夢がないですよ文さんは！」

「……大体ですね、早苗さん」

一度、きっぱり言ってやらねばなるまい——そう思った文は、居住まいを正し、ずいっと早苗に向き直る。

「早苗さんは単に珍しいから言ってるだけなんでしょうが、羽根は私にとって身体の一部です。……早苗さんだっていきなり髪を切らせてください、お守りにしますみたいな事を言われてどう思います？ いい気分じゃないでしょう」

「あ！ そうだ、文さん。私この前里の髪結いさんに行って来たんですよ。最近、外界の髪型って流行ってるらしくて、その練習で格安にやってくれるそうなんですけど、文さんもイメチェンとかしてみませんか？」

「……聞いてますか、人の話」

「はいっ」

返事は底抜けに明るい。話が脱線したという自覚すらないようだった。守矢の風祝は、会話すらも風のようになまならない。文は再度溜息をついて、自由極まりない巫女に釘を刺す。霊夢といい早苗といい、巫女というのはこんな生き物ばかりなのだろうか。

「ともかく。そういうのはダメです」

いくら挑発しても手ごたえのない博麗の巫女とは違って、早苗はこうと決めたなら留める事ができない風だ。それは本来、天駆ける風の供として、天狗こそが評されるべき形容なのだけれど。

「念のため忠告しておきますが、さっきみたいな物言いは天狗にとって無礼なことでもありますから、控え

てくださいね。早苗さんも守矢神社の一柱として、御山では無視できない立場なんですから」

子供に言い含めるように繰り返し、文は腰を上げる。

「あれ、お出かけですか？」

「ちよつと、用事を思い出しました。しばらく空けますから、今日の夕ご飯はいりません」

きょとんと瞬きする早苗を後に、文は手早く荷物をまとめ、足早に神社を後にする。

「……………」

一陣のつむじ風を残し、みるみる小さくなる文の背中を見送り、所在なく手を振って、思案に首を傾げる風祝。

たまたま庭を通りかかった諏訪子がそれを見つけ、声をかける。

「どうしたの？ 早苗」

「いえ……」

問われながらも——曖昧に答え、早苗は首を振るばかりだった。



それから数日。

「つて、事があつたんですけど！」

クリームと杏のシロップ漬けを乗せたワッフルをつつきながら、フォークを握る手にぐっと力を込めて力説する早苗。その向かいで、姫海棠はたてはげんなりと匙を啜っていた。

「ちよつと酷いと思いませんか！ 別に、無理に筆つたわけでもないのに！」

「……そうね」

何度繰り返したか分からない相槌はすっかりぞんざいなものになっていたが、早苗は気にした風もなくですよねそうですよねと頷いていた。

人里の茶屋で人気の新作スイーツの取材に来てみたところを、同じく買い出しに来ていた守矢の風祝に誘われ、席を一緒にしたのが運の尽き。

はたてはかれこれ一刻ばかり早苗の愚痴を聞かされ続けていた。

（愚痴と言うか、惚気よね）

要は、早苗は文について喋れば他はどうでもいいのだ。その証拠に、はたてがやる気なげな相槌と共に携帯カメラを開いて次の記事に使う写真の吟味を始めても早苗はまったく気にした様子もない。そのくせ、本人に自覚がないらしいのがまた面倒でもあった。

（こんなんだったら大人しく家でゲームでもしてれば良かったなあ）

一人将棋は空しいが、不毛な惚気に付き合わされるよりはまだマシにも思える。早苗はぷりぷりと怒りながら二皿のワッフルを平らげ、さらにお代わりを注文する。あとで体重計に乗って後悔するがいい、とはたては心の中でつぶやいた。

「そりゃあ、文さんが羽根を大事にしてるってのは分かりですけど、ちよっと聞いてみただけなのに、あんな言い方ってないと思うんですよ！」

「あのね、早苗」

「はい？」

どうせ犬も食わない話、無視しようと決めた矢先だではあったが――やはり無理だ。はたては弄っていた携帯カメラを閉じて吐息する。

手を止め、きょとんと首を傾げる早苗に、さてどこから話せばいいのかとはたてはひとしきり思考を巡らせた。

「あなたの話、いくつか誤解があるんだけど……まず、最初に聞いておきたいんだけどさ」

はたてはツインテールに括った自分の髪をつまんで示す。

「これ、どう思う？」

「……はたてさんの髪ですか？ 綺麗ですよ。お手入れどうしてるんですか？ やっぱり天狗の方ってそのへんメンテナンスフリーだったりするんですか？ いいなあ。私ももう少し伸ばしたいんですけど、神奈子様は信仰の無駄遣いだって言うんですよー。どう

「思います？」

早苗の反応に溜息を挟み、はたては次に軽く身を揺すり、背中から片翼だけを振りだした。文のものに比べて、やや紫がかった羽根の先端を小さく振って見せる。

「こっちは？」

「羽根ですか？ えーと、今気付きましたけどはたてさんの羽根って、文さんのより一枚一枚が細かいんですね。お手入れ方法とか違うんですか？ あ、それともいつも思うんですけど、天狗の人って別に羽根なくても飛べるみたいですけど、どうして生えてるんですか？」

「……そうよね。そうなるわよね」

これまた大体予想通りの反応に、はたては再度、深く吐息した。こりや文も苦勞するわね、と内心で付け足して、

「私が代表みたいな顔して話すの気が引けるんだけど……鴉天狗ってね、カラスそのものの妖怪じゃないけ

ど、やっぱりそれなりに鴉なのよ。御山のとっぺんで天狗でございって大きな顔してるけど、妖怪の習性って簡単に抜けるもんじゃなくてさ。光りモノ集めたり、お風呂は苦手だったり、そういうのがあるのよね」  
鴉の行水——と言うほどではないけれど、鴉天狗があまり長風呂を好まないのは事実だ。

「私達に限ったことじゃなくて、樫たちの白狼鎮台だって、群れをつくってリーダーの指示で動く狼の習性が大元だし。鼻高天狗や山伏天狗も同じ。天狗になる前の本性にどうしても引つ張られるところがあるのよ。でね、そういうのって、あんまり表に出したくないわけ。みっともないからさ」

「ほほう」

芝居めいた相槌で、ずずいと身を乗り出してくる早苗に、はたては本当に分かっているのかと不安になりつつも咳払い。

「で、次に……にとりって知ってるわよね？」

河城にとり。九天の滝添いの集落に住む、河童の少



女だ。

「はい、いつもお世話になってますよ。この前冷蔵庫と洗濯機の修理をしてもらって、すっごく助かりました。どっちも毎日きゆうりが出てくる機能が付いたのは正直邪魔ですけど」

「あの子、あなたから見て可愛いって思う？」

「うーん、そうですねえ。里では結構人気ありますよね。このまえの宗教戦争の時とかで有名になって、ファンも増えたって聞きます。確かに最近ちょっとお洒落になったかなーって思いますねえ。前はお肌もそのままでしたし、いつも作業着で真っ黒でしたから」

「そこよ」

携帯カメラの先で早苗をびしと指差すはたて。早苗は、え、どこですか？ などと定番のボケをかましていた。

「あの子ね、同族の……河童のなかだと、別段可愛いつてことはないの。率直に言っちゃえば、むしろ不器量な部類」

「ひっどーい！ はたてさん、なんてこと言うんですか、女の子に！」

「……落ち着いて」

ガタンと椅子を蹴って立ち上がる早苗を、はたては慌てて押し留める。正直に言って、これでもだいぶ穏当な表現を選んでいるつもりだった。

「にとりさん、可愛いじゃありませんか！」

「人間の基準でいえばそうなんでしょうね。でも、河童の中だと違うのよ」

人間の美醜の基準というのは、たとえば顔の造作であつたり、体格やプロポーションであつたりする。無論、性格だつて加味されるだろう。言い換えれば、いかに人間として優れているか、だ。

それは河童も同じである。いかに河童として優れているかが、その客観的な評価となる。つまり人間と似た姿をしているからといって、彼等の仲間内での評価基準が人間と同じであるとは限らないのだ。

「河童の外見って、頭のお皿や甲羅の大きさや色で決

まるのよ。そりゃあ、顔つきとかスタイルだつて気にしない訳じゃないんでしょうけど」

「……お皿？」

首を傾げ、べたんと自分の頭に手のひらを乗せる早苗。

「にとりのお皿つて、だいぶ小さくて目立たないらしいから……私も直接見たんじゃないけどさ。河童の間だと、それって魅力がないとか、成長の足りてない子供ってことになるみたい。本人は気にしてないみたいだけどさ」

この評価は、はたての耳に届くくらいのものであるが、その一方で他の古参の河童を押しつけて、河城の大工房の主任を任されていることが僻みややつかみとなつてゐる点は否定できないだろう。

「あの子が人里で商売始めて、受けが良くなつたのは、あなたが教えたお化粧の影響もあると思うんだけどね。人間達からすると垢抜けて、見目良くなつたのかもしないけれど、河童からするとその正反對つてことにな

るのよ。早苗だつてさ、お前は人間じゃない、化け物そっくりだつて言われていい気はしないでしょう？」

「そんな……」

河童らしさ。つまり水草の匂いやぬめる肌、濁った淀んだ眼。それらを失つた河童は、同族から忌み嫌われることもあると言う。本人は良かれと思つてやったことだけに、早苗の落胆は大きなものであつた。

「あの子の場合、人間に近いのが煙たがられる理由は他にもあるんだけど……それは置いといて。鴉天狗だつて同じようなところがあるの。私達にとって外見の一番の要素は、羽根になるのよ。文を見れば分かると思うけど、羽根の手入れは念入りにするし、簡単に人には触らせない。あなただつて、いきなり裸見られたら嫌でしょう？」

「そりゃあ、まあ……」

今更のように、腕をまわして巫女服の脇を隠す早苗。あんな格好しておいて羞恥心については人並みなのかとはたてはどうでもいいことに感心する。

「人間との距離が近くなるとこのへんも変わってくるんだけどさ。大結界ができて、環境も変わってきたし。でも、いまの御山の中央は、まだまだ頭の固い連中が多いからね」

文はああ見えてかなりの古参であるし、長らく山の中核を担ってきた。むしろその経歴から見れば例外的なほど、天狗以外の価値観を知る天狗であると言っている。

「だから、簡単に羽根を欲しいなんて言われれば腹も立つし、嫌がって当然なのよ。その場で怒り出さなかったのが驚きね」

「そうなんですか……」

しゅんとうつむく早苗。さっきまで元気よく跳ねていた髪まで一緒にしおれている。ようやく分かってくれたかとはたては携帯カメラを開き、

「それと、もうひとつ」

「まだあるんですか？」

問い返す早苗に、はたては重々しく頷く。

「私達、鴉天狗は、新聞……っていうか報道を生業にしているのは知ってるわよね。よっぽど変わり者じゃない限り、例外はないんだけどさ」

ひきこもり同然の自分ですら、花果子念報を発行し続けていたのだ。報道に携わらない鴉天狗と言うのは、まず考えられない。

元は、速さ自慢の鴉天狗を御山の各地に配置し、即座に情報伝達を行う仕組みを設けたのがはじまりという。彼等が余暇や任務の合間に、本来のお役目とは別に現地の出来事や噂を伝えたのが、後の天狗社会の新聞のはじまりであった。

新聞という形態の成立には、外界の人間達の活動も少なからず関与しているともいう。いまはカメラと画像技術の発達と共に写真が主流だが、かつては絵版画や文字のみで遠隔地の報せを伝えていた。

「……まあ、そんな経緯だから、私達にとって文字を書いたりするのは不可分のことなの」

鴉天狗が、天狗の順列による坊名の他に、文筆に関

わる文字を名乗るのはそのあらわれである。文は無論はたてもその名の由来は『羽立』——携帯可能なペン筆と墨壺のセットを元にした名前なのだ。どうもかっこ悪いので、余程の正式な名乗り以外ではひらがなで通しているが。

そして、はたては背中中の羽根の先端、並んだ風切り羽根を示す。

「それでね、羽根ペンっていうのはこの……一番先の風切り羽根を使うじゃない?」

「そうなんですか?」

「そうなのよ」

重々しく頷いて見せるはたて。別に天狗に限ったものではないが、羽ペンにおいては特に、利用者の利き腕の反対側の羽根が、曲がり具合として最適なものとなる。

風切り羽根は、文字通り空を切って飛ぶのに最も重要な、翼のコントロールをする部位だ。一枚でも欠けていたら、翼の役割は大きく失われてしまう。

「だから、鴉天狗にとって風切り羽根のペンっていうのはそれだけ重要な意味があるのよ」

風切り羽根を失うことで、鴉天狗は生来のアイデンティティとも呼べる、風よりも速い飛翔速度を失ってしまう。

そしてまた、ペンは文筆——報道の象徴である。

つまり。鴉天狗にとって自身の最も大事な翼を犠牲にして、作ったペンを相手に預けるという行為は、あなたと共に添い遂げるといふ宣言に他ならない。

淡々と説明するはたてに、早苗もようやく事態が飲み込めてきたようだった。

「え……え? えっと、それって、婚約指輪をくださって言ってる感じですか……?」

「もうちょっと重いと思うわ。家財一式ついてくる感じ……かなあ」

「わ……」

今更のように自覚したか、赤くなった頬に手を当てて言葉を失う早苗。

「ま、知らなかったってことなんだから、文もそこま  
で気にしてないかもしれないわ。だいぶ古臭い習慣だ  
し」

すっかりぬるまっってしまった紅茶を口に運び、はた  
ては指の中できると閉じた携帯を回した。

「あいつも大した面の皮だけどさ、それなりに気にし  
てると思うから、今度会ったら謝った方がいいと思う  
わね」

そう付け加え、はたては紅茶のお代りを注文する。  
どうせこの支払いは惚気を聞かされたお代として早  
苗に押し付けるつもりだったので、一番高い茶葉を選  
んだ。



「こんにちは。だいぶ冷え込んできましたねえ」

「こ、こんにちは」

ひゅうと吹くつむじ風を纏い、口元のマフラーをな

びかせて――数日ぶりに守矢神社を訪れた文は、ぎこ  
ちない挨拶を交わす早苗に眉を跳ねさせた。箒を手  
に境内を掃いているが、気もそぞろで手つきも怪しく、  
散った落ち葉は散らかるばかりである。

「どうしました？ やけに神妙な顔してますけど」

「……そ、そうですか？ 気のせいだと思いますよ！」

「はあ。……まあ、なんでもないのなら良いんですが」  
声を裏返らせる早苗に、文は眉をしかめながらも表  
情で胸のポケットを探り、紺の手巾に包んだものを取  
り出した。包みを解いた中から見えたものに、早苗が  
全身を硬直させる。

「あ、あの、それって……、もしかして……?!」

「ええ。先日のです。早苗さんのご希望のものです  
よ」

左の初列風切羽根を用い、段刻の目立つシルエット。  
見事な濡羽に羽軸が白い彩りを際立たせ、調和を保ち  
ながら筆記具としても十分な用をたすように加工がな  
されていた。羽柄を削ったペン先には、軸先を馴染ま

せるために浸したインク痕がある。

「まあ、いろいろと急ごしらえですが、ちよつとしたものになったと自負していますよ。いいですか、くれぐれも繰り返しますが、こんな我儘は今後控えて欲しいものです。私だから良かったようなものの——」

文が取り出して見せた羽根ペンに、早苗は面白いくらい取り乱した。

「あ、文さん!? そんな、ダメです、いけませんっ」

「あやや? どうしたんですか。欲しいって言ったのは早苗さんでしょう。折角用意してきたのに——ひゃんっ!?」

「文さんっ!!」

一緒に手渡された揃いのインク壺を投げ出して、早苗は慌てた様子で文の背中に飛びついた。

無遠慮に背中をまさぐられ、文は思わず悲鳴を上げた。肩甲骨の上をなぞる指に身を震わせ、身体をよじって逃れようとする。が、風祝は構わず襟首から文の背中に手を突っ込んできた。

「ちよ、ちよつと!! なにをするんですかつ」

「それはこつちの台詞です! 文さんのほか! 知らなかったからって、わたしのために飛べなくなるなんて——!!」

「な、なにを……ひゃうっ!? ちよ、ちよつと、早苗さんッ、どこ触って……ッ、あ、ね、根元はダメ……!!」

「いいから、見せてくださいっ!!」

執拗な刺激に、たまらずの文の背中から翼が飛び出す。その黒く艶やかな翼をわし掴みにした早苗は、無理矢理に羽根の先端をまさぐった。

「っ……ひぁ……ッ」

大きく伸ばした翼を震わせ、へたり込んで突っ伏した文の背中に馬乗りとなり、風祝はぐいっとな顔を近づけて彼女の黒い羽根を検め——

「……あれ?」

文の左右どちらの黒い翼にも、風切り羽根が綺麗に生え揃っているのを確認して、早苗は思い切り首を傾げた。

「は、離して……お願い……ですからあつ」

押し倒されて涙目になっている文と、夢中で握りしめた彼女の翼と、渡された黒羽のペンを交互に眺め、

「あれれ？」

もう一度首を傾げる早苗であつた。



「……酷い目に遭いました」

「だから、ごめんなさいって言ってるじゃないですかあ……」

「謝って済む問題じゃないんですよ。分かってるんですか早苗さん。あんなに乱暴なことされたのは、生まれて初めてですよ？ それも、こんな昼日中から有無を言わさずに、無理矢理！」

「ううう……」

流石に反省したか、背中を丸めて縮こまる早苗に、文は自業自得ですと顔を背ける。

「そもそも誰に聞いたんですか、その与太話は」

「……はたてさんに」

「だろうと思いましたが。適当なことばかり言って、彼女にも困ったものですね」

「……あのー、文さん、じゃあ鴉天狗の人達にとって羽根ペンを送るのが結婚の証だって言うのは……」

「デタラメに決まってるじゃありませんか」

「そんなあ……」

この世の終わりにみたいな表情を浮かべる早苗に、文は思い切り肩をすくめて天を仰いだ。守矢神社の天井しか見えないが。

「大昔はそんな話もあつたようですが、とつくに廃れた風習です。早苗さんが知らないのをいいことにデタラメを吹きこんだんです。おおかた、記事にでもするつもりだったんでしょねえ。忘れちゃいけませんよ、彼女だって立派な鴉天狗の記者ですからね」

文は机の上の羽根ペンを取り上げて示し、  
「これは換羽の時の羽根で作ったものです。まだ生え

たままの羽根を抜くのとて凄く痛いんですからね。わざわざそんなことしませんよ」

無理やり齒を抜くのに近いかもしれませんねえと付け加え、文は羽根ペンを手巾に包み直してちゃぶ台に戻す。

「第一、飛べなくなったら私はどうやってここまで来たんですか？」

「それは、そうなんですけど……」

しよげかえる早苗に、文はこほんと咳払い。

「まあ、ちよつと誤解もあったようですが。たしかに私達にとつての羽根と言うのは、人間で言えば髪や爪のようなものです。そういう用途がないことは否定しませんが、くれと言われても困りますし、あまり大っぴらに使われるのも良い気分ではないのは確かですね」

「はあい……」

「言いふらされるのもいい気分ではないですし、できるだけ丁寧に扱って欲しいところです」

「わかりました。大事にしますね」

しつかり頷く早苗に、文は満足げによろしいと頷いた。が、手巾に手を掛けたところで、早苗はこくんと首を傾げ、

「あれ？」

「どうしました？」

「天狗の人も羽根が抜け変わる時期って、春ですよ？　なんで今、羽根ペンにできるくらい余つて——」

「失敬、ちよつと用事を思い出しましたではまた」

「あ、ちよつと!?　文さんっ!?」

立ち上がりかけた早苗を吹き飛ばし、風の渦と共に天狗は神社を飛び出してゆく。

慌ててそれを追いかけて空を舞う風祝。

紅葉が絨毯のように広がる妖怪の山。秋晴れの空の上で程なく二人は向き直り——しばし、何事かを言い合った後で、お互いにスperlカードを抜いた。

「平和だねえ……」

たちまち空に花開く弾幕の花火を見上げ、諏訪子は神社裏手の清払の池の上、ケロケロと満足げに笑うの



だ  
っ  
た。

(了)

### 比翼連理のクウィルペン

初出:第百二十九季 文々。新聞友の会(2014/11/2)

当日折本として行きの新幹線と現地の宿で書き上げたものです。ツイッターはじめて以降の影響で明瞭にあやさなカップリングを意識してから書いたお話であり、両者の距離感が明らかに以前とは変わってきておりますね。なお、クウィルペンとは羽ペンのこと。

ちなみに作中の羽ペンを贈る鴉天狗の風習は、古風で廃れつつありますがちゃんとそういった意味も持っているという設定です。

## 森の魔法使いと山の河童と、 時間を停めた星の琥珀

ホモイは玉を取りあげて見ました。玉は赤や黄の焰ほのおをあげて、せわしくせわしく燃もえているように見えますが、実はやはり冷たく美しく澄すんでいるのです。

目にあてて空にすかして見ると、もう焰ほのおはなく、天の川が奇麗きれいにすきとおっています。

目からはなすと、またちらりちらり美しい火が燃もえだします。

——宮沢賢治 「貝の火」



——「図書館ではお静かに。」

本棚の隅にピンで留められた注意書きはすっかり色褪せて、毎日の闖入者が日常になったことを知らせていた。

湖畔に佇む悪魔の館の、地下に位置する大図書館。書籍の大峡谷といった様に見えるほどに巨大な本棚の傍ら、10人掛けのテーブルには今日も賑やかに少女たちの姿があつた。

この書窟の主である七曜の魔女、司書を務める使い魔、自称、普通の白黒魔法使い——と、ここまではいつもの顔ぶれだが、館の主である吸血鬼姉妹の姿までがここにあるのは珍しい。

「……待てパチュリー、そこは少し異論があるぜ？」

「どうかしら。貴方の説よりは合理的だと思っわ」

机の上に山と積まれた本を所狭しと広げ、熱心にペ

ージを捲つては議論を交わす魔女たちの宴。そんな中、悪魔の妹・フランドール・スカレットは現在一番のご執心である森の魔法使い、霧雨魔理沙の隣の席で、読書会の様子を眺めていた。

「……………」

ちゃっかり魔理沙のところが帽子を被り、いっぱしの魔女気取りなのが微笑ましい。

時折、体裁を気にするレミリアが妹の不作法を窘めるが、上機嫌のフランドールは魔理沙の傍を離れようとしな。畸形の翼をばたばたと振っては、魔理沙の椅子の背もたれに飛び乗って、本に埋め尽くされたテーブルを睥睨する。

「……あれ？」

二人の魔女が舌峰をぶつけ合わせる中、ひょこんと魔理沙の肩上からその手元を覗きこみ、フランは声を上げた。

いつもならこの図書館で読書会があるとき、魔理沙達の広げている本には、頁一杯に難解きわまりない文

字がびっしりと並んでいるのが常なのだが、今日の机の上はやや趣が異なる。

古びた装丁の頁の上を占めているのは、牙や鱗を持ち、碧色の肌をした巨軀を描いた絵姿だったのだ。

「ねーねー、魔理沙。これなに？」

魔理沙の膝の上に身体を預け、本を広げる腕の間からにきつと顔を出して、フランドールはその珍妙な生物を指さした。

「“恐竜”<sup>Dinosaur</sup>よ」

机の向かいで、やはり同じような図鑑を広げていたパチュリーが小さな咳と共に顔を上げる。

何事にも動じず感情の起伏を見せないのが常の魔女は、珍しく眼鏡の向こうにある紫の瞳を珍しく興味に色づかせていた。

「だいのさうりあ？」

「ええ。ずっと昔、この地上に栄えていた四足鱗の生物のことね。これはその復元図を集めたものよ」

「昔って？ 私が生まれたくらい？ ……でも、見た

ことないわ、こんなヘンなの」

「いんや。フランが見るには今の二十万倍くらい長生きしてないとな。何億年も昔のことだ」

「……………」

億、と言われてもいまいちピンとこなかったのか、フランはむむむ、と眉をよじる。

「お姉さま、知ってる？」

「まあ、名前くらいはね」

悠然と紅茶のカップを傾け、答えるレミリア。

「……ほんとに？」

「もちろんよ。昔にぶちのめしたこともあるわ。フランは小さかったから覚えていないかもしれないけど」

明らかに信憑性に欠ける姉の言葉に、フランは怪訝な顔をするが、レミリアは気にせずふふんと羽根を揺らして尊大に腕を組んでみせる。恐らく妹の手前、知らないとは言えないのだろう。

紅魔の館の主は口元を歪め、図鑑に見開きで描かれたイラストを紅い爪でつついた。

「しかし、魔女が雁首揃えてこんなもの眺めて、全体何が楽しいんだ？ どれも骸骨スケルトンばかりじゃないか。アンデッドでも作るなら墓暴きでもしてた方が幾分建設的だろうよ」

「それは骨格標本よ。実物はこれ」

パチュリーはこほ、と小さな咳をしながら、やや乱暴に図鑑を手にとった。鼻に尖った角をもつ、碧鱗の四足恐竜を載せたページを開いてレミリアの眼前に突き付ける。

「『イグアナイグアナの歯』？ どうにも締まらん名前だな」

「レミィの趣味には合わないかもしれないわね」

「……なあパチエ、言いたいことははっきり言ったらどうだ？」

図鑑を鬱陶しげに払いのけ、不機嫌に喉の奥で唸り声をあげる館の主。

そんな友人の態度に、パチュリーはこれだからと言いたげに一言転送の呪文を呟いて、レミリアの放り捨てた手元に図鑑を引き寄せる。

「夜貴が聞いてあきれるわ。とんだ狹量。流石死人の親玉の吸血鬼<sup>ヴァンパイア</sup>死に損<sup>シ</sup>いのことしか考えられないのね」  
 「塚人や屍解仙<sup>リキツチン</sup>と一緒にしないで欲しいもんだねパチエ。このツエベシエの名に連なる不死<sup>スプレタート</sup>なる紅き夜の王を」

お互い譲らず引かず、とうとう言い合いを始めるパチユリーとレミリアの二人。

「……また始まったか。飽きないもんだな」

「ほっときましよ、魔理沙。それよりこれの事、もつと教えてちょうだい？」

呆れる魔理沙の膝の上に、フランがぴよんと飛び乗る。

「ん。そうするか」

「わーいっ♪」

図鑑のページをめくり、赤や緑の鱗をもつ巨大な生物を見つけては、これは？ これは、と名前を聞くフランドールの様子は、まるで無邪気な子供のよう。

パチユリーに袖にされた格好の魔理沙も、気分転換

にそれに付き合うことにする。

そんな微笑ましい光景の隣で、五百歳の吸血鬼と百年を遥かに超えて生きる魔女の大人げない言い合いはなおも続いていた。

「……はん。大層な名前を付けてるが、要は馬鹿でかいトカゲだろう。そんなに有難がるものでもないさ」  
 「いえ、馬鹿にしたものではないわレミィ。これほとても興味深い資料なのよ。吸血鬼を信じなくなった外の世界でも、この『恐竜<sup>Dinosaur</sup>』の实在は歴史的な事実として残っているということなんだから。」

考えてみて。何千万年という期間を経てなお、この古代生物はその存在を伝えられ、創世記の解釈にすら影響を及ぼしているのよ？ そういった意味では、吸血鬼<sup>ヴァンパイア</sup>より不死に近い存在と言えるわね」

「……竜<sup>ドラゴン</sup>相手なら、多少譲歩も考えてやってもいいだろうがね」

熱弁を振るうパチユリーに、レミリアはますます不機嫌になる。

そんな友人の胸の内を知ってか知らずか、七耀の魔女は机上に爪や骨片といった化石標本を並べ出した。

「その在り方の違い、生態系の多様さ。これも特筆すべきものだけれど、なによりも目を引くのはその巨大さね。神話や伝承にある龍や巨人とは全く別の存在であるにも関わらず、生物分類として外の世界にもこんな体格をした生物が実在していたというのは驚愕の事実よ。」

挙句、現在まで生存している種までいるらしいから、さらに驚きね。……そういえば、レミイのご執心だったモケーレだかもこの恐竜の生き残りという説が濃厚らしいわ」

「パチエ、やっぱり喧嘩を売ってるのか?」

牙を覗かせるレミリアだが、パチュリーは眼鏡のレンズを興奮に薄く曇らせて、ばん、と広げた図鑑の一面を示す。

見開きのページの上では、頭のとっぺんに鼻の穴を開けた珍妙な四足の巨軀が、尻尾を振り上げ首を振り

かざして大地を踏みしめていた。

「これを見て。この、プロントザウルス雷竜という種——種名から

推察するに雷精の性質を備えていたのだと思うけれど——この種ですら体長30m余。アンフィコエリ阿斯・フラグリムス種に至っては脊椎のサイズだけで2m。全長では60mを超えるのよ」

「ろくじゅうメートルって、どれくらい?」

「そうだな、大体」

ひよい、と魔理沙は膝上のフランを抱えて椅子を立ち、そのまま背中に肩車をした。わ、と顔をほころばせるフランドールを見上げて、

「この……30倍くらいか? 高さで言うなら二十階建てだな」

「じゃあ、紅魔館より大きいんだ!」

中から見回せばそれこそ巨人でも暮らせるような吸血鬼の館ではあるが、それは何事も完璧な従者が距離や時間を少々いじっているからこそのもので、敷地面積はさほど広大というわけではない。

館で一番高い時計塔の屋根でも、地上からは十階そこそこの高さだろう。天井を見上げるようにして、フランドールはきらきら目を輝かせる。

「すごいね、魔理沙っ」

「フランも気に入ったのか？」

魔理沙の問いに、悪魔の妹はうんつ、と笑顔でうなずいて、

「とつても壊し甲斐ありそうだもん!!」

「あー、フラン、その辺なんか違うもんなのか？」

そう言えば隕石も一発だったな、と思い出しつつ、そもそも物事の凄さの基準をそれで図るのもどうかと思う魔理沙。だが、あえて上機嫌をまぜつかえすこともないか、とそれ以上の口出しは胸の中に留めておく。そもそもこの恐竜たちが弾幕ごっこに付き合ってくれるもののかは激しく疑問だったが。

「パチュリー様、新しい入荷分です」

また新しい本と、こまごました化石標本を山と積んだ台車を押し、司書の小悪魔がテーブルにやってくる。

動かない大図書館はそれを見、さっそく数冊をいそいそとテーブルの上に広げ始めた。

「一応こちらで選別してありますけれど、分類の確認はお願います」

「ええ、有難う」

「まったく、下らないものばかりに興味を持つね、うちの知識人は。……咲夜」

レミリアも興味無い風を装いながらも、羽根をばたばたとさせながら、ちゃっかりと図鑑の一冊を確保していた。暴君電<sup>T・レックス</sup>と三角竜<sup>トリケラトプス</sup>の激突を描いた表紙のそれを膝の上に広げると、呼び出しに答えて現れたメイド長におやつと紅茶のお代わりを命じる。

結局。永遠に幼き吸血鬼も、恐竜にご執心なことに変わりはなく、しばらくはここに居座るつもりらしい。

酷く穏やかな、魔法使いと吸血鬼たちの読書会。しかし、

「……………」

そんな中、魔理沙がふと手を止めたまま、広げた図

鑑のページをじっと見つめて難しい顔をしているのに、フランドールは気付く。

「どうしたの、魔理沙？」

「いや、なんでもないぜ」

フランドールがなんとなく気になってその顔を覗き込むと、魔理沙はすぐにいつもの笑顔を戻す。

「……………」

だが、フランドールはどこか、その態度に釈然としないものを感じていた。



枝を固く竦ませて、春を待つ参道の木々が、一月終りの風に震える。

いつもは長閑な神社の境内も、普段よりも賑々しく沸いていた。風を切って簾から飛び降りた魔理沙は、縁側に集った人妖神様、有象無象を見てつぶやく。

「なんだ、こっちでもか」

「ああ、魔理沙さんこんにち。……いやはや今や空前の恐竜ブーム。これはいつぞやのサッカー以来の大流行ですよ？」

手帖片手に応えるのは、天狗の幻想ブン屋、射命丸文。どうやらここでも、一番の注目は恐竜にまつわる話題らしい。この混雑の理由も、文の持ってきた特ダネによるものようだった。

「なに、あんたも来たの？」

「来ちゃ悪いかな？」

のんびりとお茶を啜る霊夢の他にも、早苗に諏訪子、萃香といった面々が新聞を前にあれこれ言い合っている。

「どこもかしこも恐竜だな」

こんなにも天狗の新聞が読まれているなんて、それこそ異変じゃないのかと魔理沙は言いたくなった。

車座の一同の背中越しに、貰うぜ、と盆の上から手つかずの饅頭をつまみあげ、ひよいと口に放り込む魔理沙。



「あー、私のっ!？」

「むぐ、早いもん勝ちだぜ」

抗議に飛び上がる萃香の額を押さえている魔理沙に、文はすかさず早刷りの新聞を押し付けてくる。

「あ、魔理沙さんもこれどうぞ。号外ですよ!」

まだインクも生乾きの紙面を手に魔理沙が苦笑いしている、騒ぎからは少し離れた位置で頬杖をついた霊夢が小さく吐息を挟む。

「今日はゴシップよりそっちが優先かしら？」

「これだけ有名になると取り上げないわけにはいきませんしねえ。あ、ちゃんと先日の密着スクープも掲載予定ですのでご心配なく」

「……その前に口封じしといった方がよさそうなカラスがいるわねえ」

「……あやや」

お茶を啜りながら微妙に物騒なことを言い出す霊夢から、文はさりげなく距離をとった。

そんな様子を尻目に、魔理沙も新聞を広げてみる。

幻想郷でなによりも早いニュースを謳う一面には、永遠亭主催で白亜幻想展なる催し物が決定されたというニュースがでかでかと踊っていた。

「えっと、なにに? ……『蓬萊山輝夜氏の一存で開催が決定されたこの展示会には、月の頭脳、八意永琳氏の持つ技術によつて復元・蘇生された“生きた”恐竜が公開を予定されており、来月の開催を前に今から盛況が予想される見通し……』」

「あんのお姫様は……。面倒なことにならなきゃいいんだけど。不老不死の恐竜とか作らせたりしてないでしょうね」

あとで釘刺しておいた方がいいかしら、と呟く霊夢。かと思えば、その隣では、

「うわあ。すごいですよ諏訪子さま、本物ですよ?? 本物の恐竜!! それも生きて動いてるなんてこれはもう、幻想郷ならではですよ! ……ああ、本当に幻想郷に来てよかったです!」

もう絶対に見れないって思ってたのに——ゴジラと

かキングギドラとかはいないんでしょうか!？」

「早苗、それ怪獣」

いつもの通り、やや妙な具合にテンションあがりっぱなしの早苗に、諏訪子がどうどう、と突っ込みを入れている。

蛇に蛙にと祀る神様二柱にそれぞれに鱗やら目玉やらの象徴があるせい、守矢神社の風祝は怪獣にまで御執心らしかった。

「ん〜。すっごく楽しみです。早く見に行きたいですね諏訪子さまっ」

「……いろいろ大変だな」

「まあねえ」

満面の笑顔で幸せを噛み締めている早苗には聞こえないよう、魔理沙はこっそりと諏訪子に囁いた。すっかり慣れた風に肩をすくめる神様。

「……それにしても、こんなに馬鹿でかい生き物なんて本当にいたのかしらね。龍神様じゃないんでしょう?」

「何を言うんですか霊夢さん!? 当たり前です!

外の世界では常識でしたよ?」

「あなたが常識常識言い出すと、とたんに信用なくすんだけど」

「心外です! 最近ちゃんと幻想郷でも化石が見つかるじゃありませんか!」

「だけど石でしょ、あれ。骨だっていうけど端っこしか見つかってないし。誰かがこっそり埋めたりしてるんじゃないの?」

「だ、誰が捏造ゴットハンドですか!? ですから化石ですってば!! 大体ですね、恐竜ですよ恐竜!」

巫女としてこう、思うところはないんですか!？」

「ないでしょ普通」

かましい二色の巫女が温度差のままに言い合いを始める。あまり興味のない様子の霊夢に業を煮やしたか、早苗はぐつと拳を握りしめて立ち上がる。

「もう、埒が明きません。霊夢さん、説明してあげますからいまから永遠亭さんまで行きましょう!」

諏訪子さまもっ!」

「だから早苗はもう少し落ち着きなつてば」

付き合いきれん、と新聞に視線を落とした諏訪子だが、記事の一部に目を止めて眉をひそめる。

「……ん。んん？　ちょ、ちよつと待つて、なにこれ!？」

『——本誌記者の熱意ある取材によつて判明した事実であるが、件の恐竜の再現技術は、木の樹液から生じた琥珀に封じ込められていた、およそ一億年前の蟲の腹部に残った血を用いたもので、欠損した部分の復元には蛙の遺伝子が用いられており……』っ!?　また蛙を実験材料かなんかに使つてゐるのか!？」

「あああ——っ!？」

やおら立ち上がり、新聞をぐしゃぐしゃと丸めて地面に叩き付ける諏訪子。その横暴に天狗が悲鳴を上げるが、怒り心頭の神様はまったく気にする様子もない。「これだから宇宙人はっ!？」　まさに神をも恐れぬ所業だね！　大体蛙の遺伝子って、ジュラシックパークまんまじゃないかっ!？　これ、絶つて対恐竜が暴れ

出すよ。デブでピザが大好物そんな技術者が裏切つたりするんだよ!？　うん。保証するつ。間違いなくっ!」

「んー、落ち着きなつて、神様?」

ばんばんと縁側で足踏みをして叫びだした諏訪子の劍幕を諫めようと、萃香が酒氣混じりの吐息をこぼし言うが、

「これが落ちついてられるかーっ!？　行くよ早苗っ!」

「はいっ!!」

元氣の良い返事と共に、神様一人と風祝は一陣の神風を起こして飛び去つてゆく。たちまち空の向こうに消えたその後ろ姿を見送り、萃香は再度杯を傾けて、呑気に笑う。

「……なんだかんだ言つてご先祖様だねえ」

飛び去つた二人の背中をカメラに収めている文を横目に、魔理沙は空いた縁側に腰を下ろした。

「あつちの巫女は随分世俗的だな。……霊夢はそんなでもないのか?」

「まあねえ。夢中になったところで益になるものじゃないし。お賽銭も信仰も増えないし、お腹も膨れないし」

博麗神社の巫女はやけに現実的な視点をつけ足して、「やっぱりちよっと信じられないからね、この新聞も」

「失敬な。私の記事に間違いなどありませんよ！」

「どの口が言うのかしらね」

頬を膨らませる文に、霊夢は目蓋を引き下げて湯呑を空にする。本人がどう言おうとも、少なくとも天狗の新聞に故意の誇張表現と、敢えて誤解を招くことを目的にした偏見があるのは事実だ。

「一億年か。……ねえ、あんたなら見たことあるんじゃないの？」

と、霊夢が唐突に誰もいない場所を見て声をかけると。

まるで図ったかのようなタイミングで、ずるり、と何もない空中に裂け目が開き、そこから顔を出す境界の賢者がひとり。

スキマ妖怪八雲紫はいつも通りの胡散臭い仕草で肩をすくめ、半分だけ広げた扇で軽く笑みの口元を隠す。

「淑女に軽々しく歳を訊ねるのはどうかと思いますわ」

「二万歳が一万年サバ読んで意味あるのかしら」

半眼の霊夢に、紫はこほんと小さく咳払い。

「んんっ。一万と二千年前からこの幻想郷を愛する心は変わりませんけれど——」

そこまで言って言葉を切り、紫は大妖怪の妖艶な微笑みを消し、やる気なげにひらひらと扇を揺らす。

「一億年も前になるとさすがにね。過去は見に行つたことがないわけじゃないけれど」

「確か、永遠亭の薬屋もそれくらい生きてたわよね」

「ですが、私の取材によるとですね、およそ千と二百年ほど前にこちらに来る以前、八意氏は元々月に居た筈ですから、やはり見ていたかどうかは確証はないと思いますよ？　なにしろここは彼らの嫌う『穢れた地上』ですのぞ」

文花帖を広げそんなことを言い出す文。

それに微笑んで、すい、と霊夢の隣に身体を寄せた紫は、扇の先で霊夢の胸を示して、早苗たちの飛び去った方を見上げる。

「で、霊夢。ほっといいのかしら？ あの子たち」

「……そうねえ」

気は進まないけど、と言いつつも霊夢は腰を上げる。あの様子では恐らく、永遠亭であれこれと揉めていることだろう。

地下の核融合の件、巨大ロボの件と前科は枚挙に暇がないため、霊夢も無視はしかねているらしい。

「なんかあんたの言うとおりに動くのは癪だけど。様子だけは見に行くか……」

「あ、お供しますっ」

手早くネタの気配を感じ取る文が、多少の打算を交えて応じれば、

「んじゃ、私も行こうかねえ」

腹筋で跳ね起きた萃香も瓢箪を担いでそれに続く。最初に焚きつけた紫はいえはひらひらと手を振って

見送る気配だ。

「あ、そうだ」

この際賑やかなほうが紙面映えがすると思ったか、文は振り向いて魔理沙に話を振ってきた。

「魔理沙さんも一緒にどうですか？ 一足先に生きても恐竜、見られるかもしれませんよ？」

「あー、……遠慮するぜ」

いちどあつけに取られた魔理沙だったが、すぐに帽子を押さえ、ふいと視線をそらす。

「少々、気が進まんしな」

そう口早に言うのと、魔理沙は皆に背中を向けた。そんな彼女に、これまた振り向きもせず霊夢が言う。

「珍しいわね」

「ちよつと用事が出来てな」

「そ。まあいいけど」

「……？」

意味深な二人のやり取りに文が首を傾げる。

が、魔理沙は答えず、目深にかぶった帽子の下に視

線を隠したまま、靈夢たちとは正反對の方向へと筈を舞い上がらせていた。



締め切ったカーテンの中に籠った空気は、茸の育成に程よい湿り気を帯び、蜂蜜、香草、膏藥に練成中の丹、インクと古書に香辛料と、雑多な品の入り混じった、馥郁たる魔女の香りを漂わせている。

派手に散らかった室内では、ミニ八卦炉が小さく炎を上げて暖を巡らせ、魔理沙はキャミソールにドロワーズだけというだらしない格好で椅子の後ろ脚に体重を預け、羽根ペンを鼻の下に挟んでいた。

「……………」

胸元にひと抱えもある黒革の装丁の魔道書を抱え、ぺらり、またぺらりと難しい顔でページを捲る。

いつだったかの報酬で手に入れた、とっておきの稀観本の一冊。そのレア度に比例するようにびっしりと

紙面を埋め尽くす難解な文面は、少しでも気を抜くと理解できないまま先へと読み進めてしまいくようになる。著者の趣味か、やたらに複雑な回りくどい言い回しは、当時の口語表現に通じていないと、一度の通読ではまるで意味を成さないようだ。

かれこれ3時間余り、辛抱強くその解説に取り組んでいた魔理沙だが、とうとう音を上げて天井を振り仰ぐ。

「……………はー、やめだやめ。今日は身が入らん」

煙の出そうな頭をかきむしり、さっぱり頭に入らない読みかけの魔術書を放り投げると、魔理沙はベッドの上に寝転がった。

「……寝るか」

明かりを消して訪れた薄暗い闇の中、ごろん、とうつ伏せになって枕に顔を押し付ける。

わけもなく毛布を引き寄せ、抱きつくように腕を回す。

が。時刻はすでに深夜に差し掛かり、疲れも十分に

あるというのに、目を閉じてみても一向に眠気がやってこない。

「……………」

しばらくそうして横になっていた魔理沙だが、何度か寝返りをうってから、やおらがばと身を起こした。

「……………」

カーテンを薄く開け、丸い月の浮かぶ窓の外を見上げて、一度は決心したようにベッドから腰を浮かしかけるが――

が、そこまで。

すぐにまた、身体は脱力してぼすん、とベッドに倒れ込む。眉をよじり、口をむぐむぐと嚙ませて、魔理沙は言いたい言葉を飲み込むように息を吐く。

（……あ……）

少女の心の中で、もやもやとわだかまる想いが、行き場をなくして渦を巻いていた。疲れているはずなのに、熱っぽい頭は落ち着かず、軽く腫れぼったい瞼を無視して意識ばかりが冴えてゆく。

「……………っっ」

言葉にならない隔靴搔痒の感で、魔理沙は四方八方に跳ねた金髪をぐしゃぐしゃと掻き回した。

「……………くそ」

小さな罵倒は、らしからぬ己への叱咤だ。煮え切らない自分と割り切れない気持ちだが、少女の困惑をなお深めていた。

……それからなおも、一時間近くの逡巡の後。

やがて、魔理沙はゆっくりと起き上がり、もそもそと着替えを終えると、姿見の前に立った。

鏡に映るしょぼくれた表情の魔女に、ぱん、と軽く頬を叩いて気合を入れる。

「よし」

ひりひりと痛む頬に、少しは見れるようになったかと頷いて。

帽子とコートを羽織っていつもの白黒の装いを整えた魔理沙は、施錠もそこそこに箒に飛び乗って夜の散歩へ飛び出していった。



早春の溪流は雪解けの冷たさに音を立て、夜ともなればびやりと冬の残り香を纏わせている。このまま沢沿いに登って行けば山に入る前に残雪も見つかるだろう。

そんな河原の畔で、こんな夜半にも関わらず、熱心に望遠鏡を覗きこむ河童、河城にとりの姿がある。

手元には化学薬品のランタンが灯り、少女はその明りであちこちの螺子を調整しながら、しきりにメモを取っていた。傍目にはきちんと動いているようにも見えるのだが、技術者の視点では満足の出来というわけではないらしい。

コートを羽織った魔理沙は、そんなにとりの隣でじつとその様子を観察し続けていた。

「河童って、冬場は山に籠るもんじゃないのか？」

「そういうのも居るにやいるよ。私は生まれも育ちも

水の中だけだ。んで、私に用事かい、魔理沙？」

「……まあな」

言いはするが、先は続かない。明らかに言いたいことがあるのに、それを口に出せない雰囲気。魔理沙。いつもの彼女とはかけ離れたしおらしい様子に、身を起こしたにとりは、宇宙を望むレンズから顔を離す。

「……調子狂うなあ」

具合良くコンロの上のポットが蓋を鳴らしているのを見、にとりはそれを背中から伸ばした多機能アームで掴み下ろした。手際よくドリップメーカーに濾紙を引き、リュックの中から缶に入った珈琲豆を取り出し、手早く挽き入れて熱湯を注ぐ。

程無く、香り良い焦げた匂いが溪流の上に広がった。

「眠れないなら、飲むかい？」

「遠慮はしないぜ」

河童がコーヒーを嗜む、というのは魔理沙も最近まで知らない事だった。にとりに限ったことなのかもしれないが。



差し出されたカップを受け取った魔理沙だが、深く黒く凝った液体をちらりと見下ろして小さく硬直する。「……ミルクとかないのか?」

「眠気覚ましだからねえ」

事もなげにブラツクのままの珈琲に口をつけるにとりを見、魔理沙も恐る恐るカップの縁で湯気を立てる濃い褐色の液体にそっと唇を触れさせる。

直後、魔理沙はちろ、と舌を出して顔をしかめていた。

「……熱っ」

「『悪魔のように黒く、地獄のように熱く、天使のように純で、まるで恋のように甘い』」

「前の三つはともかく、最後のは違う気がするな」

「つれないよ盟友?」

言って、にとりは熱そうに焦げ茶の液体をすする。堂に入った飲みっぷりに、魔理沙は苦笑しつつも黙ってにとりに倣い、珈琲に再度口をつけた。

「うえ。やっぱ私は酒のがいいなあ」

「それも一理あるけど、酔っ払つてると出来なくなることはあるからねえ」

くるくるとペンを回し、メモを閉じて耳に挟んで言うにとり。

「んで、そろそろ話す気になってくれたかい、魔理沙」

「……そうだな」

あんまり苦いから、舌が馬鹿になったぜ、と呟き、魔理沙はポケットに押し込んでいた図鑑の一冊を引っ張り出した。明らかにポケットのサイズに収まりきらないサイズの表紙を見て、にとりは訊ねる。

「いつも思うけどそれ、どうやって仕舞ってるのさ?」

「二重底の無限のバックグ<sup>パルクレス・ウエイトレス・バック</sup>。企業秘密だぜ」

「……泥棒の?」

「霧雨魔法店の、だ」

訂正しつつ、魔理沙は平らな石をテーブル代わりに、カラフルな巨大生物が所狭しと群れる図鑑のページを広げてみせた。

「なあにとり、こいつをどう思う?」

「なんだ。例の恐竜の話か。生き物は専門外だよ？」  
「学問的な話だぜ」

「そうかい。魔理沙はこういうのが好きそうに思えたけどね。『恐ろしく巨大な蜥蜴』なんて、いかにもパワ―満載そうじゃないか」

「酷いな。これでも私は乙女だぜ？」

「ちょんちょん、とエプロンドレスの胸元を指で示しつつ、魔理沙はそっと夜空に視線を放る。

「なんて言うかな、こういうのが流行るのは一向に構わないんだが」

「がりがりと、うまく言葉を見つけれないままに魔理沙は髪をかき上げる。

新しいものの流行、それ自体は魔理沙だつて歓迎だ。むしろ率先して飛びつく側でもある。だが。

「……全員が全員揃って、これを信じてるってのが、気になりだしたらどうもな」

「何がまずいのさ？」

魔理沙はしばし瞑目し、近くにあった河原の小石を

拾い上げる。

「たとえばだ。これが月の石だつて言つて、にとりは信じるか？」

突然な切り出しに、しかしにとりは馬鹿にするでも呆れるでもなく、きちんと考えて、首を横に振る。

「……ううん」

「そうか。でも、私には今はそんな風に見えてしょうがないんだ。この、河原に転がつてそんな石が、さも当たり前に月の石でございって値札張られて飾られてる。

……いや、実際そうだつていう研究があるのは分かっているつもりだぜ？ 月にはロケットが飛んだし、宇宙人だつてちゃんと居る。けどな、それを誰も贋作だつて疑つてないのは、やっぱりおかしくないか？」

もう一度カップに口をつけ、珈琲の苦さに顔をしかめて、魔理沙はぼつりと言葉を続けた。

「……何億年も昔のものなんて、誰も見たことがないのにな」

熱いカップの中、魔法使いは揺れる黒褐色の水面に視線を落とす。コンロの音は変わらず、溪流のなかに響いていた。

「……ふうん。魔理沙は、そのへんが気に入らないわけだ？」

「自分の目で見たものしか信じられないとか、そんな狭量なことが言いたいわけじゃない。天の邪鬼だって自分でも思ってるけどな。」

……けどな、でも、やっぱり違うんだ。私が見たいのは、私が好きなのは、これじゃない」

胸の中のわだかまりを、言葉にすることで形にするように。魔理沙はゆっくりと息を吐く。

「まだ知らないものを知りたい、見たことのないものを見たいっていう、その気持ちの答えは、誰かに教わるものじゃない気がするんだ」

「……………」

魔理沙は、星空に向けて手を伸ばす。

届かない場所へ、辿り着けない場所へ。けれど心惹

かれ渴望するその気持ちは、普通の魔法使い霧雨魔理沙には、決して止めることのできないものなのだ。

「あの図鑑も、永琳が作ったっていう怪獣も。たぶん私が見たい『本物』じゃない。」

だって大きさも、色も、習性も、全部想像じゃないか。歯の化石一本だけで全身の骨格作るなんて無茶だぜ。それがどれだけ正しいって言われても。……やっぱり、私は納得できない」

「成る程ね」

にとりは、頷いて珈琲のお代わりをカップに注ぐ。

「……昔、教わったことなんだけどな」

誰から——とは、魔理沙は口にしなかった。

「魔法ってのは、『秘す』力なんだそうだ。言葉にできなくて、形にもできない。はるか昔にあつて、今はその大半が失われた『大いなる秘儀』。それが魔法の根源だ。」

だから、魔法使いは自分の研究を簡単に明らかにしないし、魔術書や呪文は誰にも解らないようにする。

誰かに教えよう、伝えようとすればするほど、その魔法の力は弱まるって寸法だ」

「それで魔理沙が図書館から追い出されるわけだ？」

「……まあな。そんなだから、読むのが難しい百年前の魔道書よりも、誰も読めない千年前の古文書の方がより強く、より根源に届く魔法の基になるんだぜ」

『神秘』を扱うがゆえに、それをより良く『教え』ようとすることは、皮肉にも魔法から魔法使いを遠ざけてしまう。

だから魔理沙は、自分の心に従って、自分だけの魔法を作る。見様見真似でスペルを蒐集し、模倣を繰り返し、茸を使って実験をして、落書きと想像と試行錯誤だらけのノートグリモワールを綴る。

先達たる魔女たちから見ればどれもこれも稚拙なものでしかないのかもしれないが、それは同時に誰のものでもない、魔理沙自身の、彼女だけの魔法だ。

まだ見ぬ未知の理知を求め、日々研鑽を積み上げる、ごくごく普通の魔法使い、霧雨魔理沙。

(……そっか。)

一人、にとりは思う。

そんな彼女であるからこそ、地底の騒ぎのときに、人見知りのはずの自分がわざわざ協力相手に選ばうと思ったのかもしれない、と。

「たぶん、私が好きなのは『本物』の恐竜なんだ。

一億年だかの昔に、生きて、動いて、歩いてた——その『本物』が見たいんだろうな。まあ、……そう簡単にや無理だってわかつちやいるんだが」

自嘲気味にそう呟くと、魔理沙は帽子のつばの下から、そっとにとりの顔を見上げ、

「……あー。何言ってるんだか良くわからんな自分でも。でもな、なんとなく、お前なら解ってくれるんじゃないかって思ったんだ」

「ん。……光栄だね、盟友」

「…………ま、まあ、そんなとこだぜ」

ようやく喋りすぎに気が付き、魔理沙はコーヒーのカップを抱え込んだまま気恥ずかしそうにふ

い、と顔をそむける。

そんな盟友の姿を見て、にとりは小さく微笑み、膝の上に手を載せ、頬杖をついた。

「……まあ、どうしてもって言うならやつぱり、スキマの賢者様にでも頼むのが一番じゃないかねえ」

「ありや駄目だ。胡散臭すぎて何見せられても信用する気になれん」

「そうかい」

間に、溪流のせせらぎと珈琲を啜る音だけが響く。

しばしの無言の後、にとりはふうむ、と顎に手を添えて口を開いた。

「可能性の話はわきに置いておくとして、何億年も昔のことを見る方法、ひとつも無いわけでもないよ？」

「お？」

「……ちよつと長い話になるけど。まず、音には速さがある。知ってるかい？」

「ああ。たまにぶつかるからな」

音の壁、というものがある。物体が音の速さを超え

ようとすると、その行く手に立ち塞がる壁のことだ。

音の速さは魔理沙自身も筈の最高速度を計測する等加速度実験で身をもって知っている部分だ。天狗なんかは楽勝で突破することもあるらしいが、さすがにそれは眉唾だろうと考えている。

「おんなじように、光にも速さがあるんだ。音なんかよりも全然、桁違いに速いけど」

にとりは蒼い灯をとまずコンロの炎を示し、その指先を自分の目へと動かしした。

「私たちの目は、ふつう物が発したり反射したりする光を見て物の形とかどういいう色をしてるかを認識するんだ。だから、光がなくなればそれは見えなくなる」

「ルーミアとか、夜雀のあれか？」

「そだね。闇妖が操る闇は物が反射したり発する光を閉じ込めちゃうから、取り囲まれたやつは周りの物が見えなくなる。夜雀は逆に、歌声で目のほうの機能をおかしくして、周りの光を認識できなくさせてるってことさ。だから――」

と、にとりは袖元のワッペンをくいと引つ張った。

とたん、かすかな機械の起動音と、わずかに物を焦がしたような匂いが漂い、六角形のタイル状に現れた光学迷彩が、彼女の周囲を包みこんだ。

ほどなく、彼女の姿は溪流の風景の中に溶け込んで見えなくなった。しかし、姿形は消え失せても、変わらずそこから河童の声は続く。

「こうやって光の進み方を捻じ曲げてやれば、たとえ目の前にいても見えなくなるってことだね。この場合、私が居ることで遮られる背後の光を、魔理沙の目に入るようにしてやってみることになるけど」

「なるほどな。あれだろ、忍者がたまにやる隠れ身の術」

「……一緒にされるとなんか微妙な気分だけど、言いたいことはわかる」

ぶん、と光学迷彩を解除し、再び姿を見せるにとり。

「で、それがどう関係するんだ？」

「ひょっとすると魔理沙にはもうわかってることかも

だけど。さっきも言ったとおり、光にだって速さがあるんだ。もちろんよっぽど離れてないと分からないことだけどさ。

たとえば月の光は、地上に届くまで1秒ちよいかかる。私たちの目に見えてるのは一秒前の月ってこと。これ、見てくれるかい？」

にとりは傍らの望遠鏡を操作し空の一点に焦点を合わせ、場所を譲った。促されるままに、魔理沙は望遠鏡のレンズを覗く。

レンズの向こう、数十倍に拡大された無辺の宇宙に、鮮やかな星空が映る。

「知ってるぜ。天狼星は8・6年前の光なんだよな」  
大狗座おおいぬざの一角のマイナス1・5等星を見、言う魔理沙。

星の配置に見立てられ、天に祭り上げられた数多くの神話。それらが織りなす物語は、魔法にとっても大事な要素だ。

けれどそれらの星々は、ここから見える形のように

寄り集まっているわけではない。北斗の柄杓もオリオンの三つ子星も、紅い目玉の蠍の鉢も。地上から見ればすぐ隣り合う星であつたとしても、本当ははるか離れた場所にあるのだ。

「そういうこと。いまこの瞬間にシリウスが無くなつたとしても、それが私たちに見えるのは8年7カ月ちよい後つてことだよ」

にとりは地面に枝の先で星との距離を書き込み、その先に矢印を引き伸ばしてゆく。

地上を示す小さな丸から、ずっとずっと遠くへ延びてゆく矢印の先に、小さな印を刻み、枝を突き立てた。

「恐竜がいたのが大体一億年から数千万年前だとすれば、その時に地上から出発した光は、いまも遠い遠い星々の果て、宇宙の彼方を飛んでるはずなんだ。

だから、何億年前の地上の光景だつて、確かに宇宙のどこかで見ることはできるはずさ。それを追っかけて先回りすれば、そのずっとずっと昔の光を——何億年前に確かにあつた光景を見ることができるかもしれない

ない」

「なるほどな」

聞いているだけでも与太話とわかる、絵空事。しかしそんな途方もないにとりの話を、魔理沙は笑うことなく真剣に聞いていた。

「けど、その先回りする方法つてのがどうにもならないんだよね。……詳しい説明は省くけど、光より速いものは、普通ないからさ」

速度が光へと近付くにつれ、移動する物体の重さは無限大に近付く。つまり、光の速さで移動するものは無限大の重さを持ち、動くことができなくなってしまう。それは矛盾だ。

「光の先回りをするには、結局胡散臭いことの手を借りなきゃいけないってことだな」

「だねえ」

お手上げだよと肩をすくめて見せるにとり。魔理沙とふたり顔を見合わせ、そろって溜め息をつく。

「やれやれだ。結局元通りだぜ」

幾分和らいだ雰囲気の中、魔理沙は河原の上のごろんと仰向けになる。

そう言えばもうだいたいぶ遅いけれど、もしかしてこのまま泊っていくつもりなのだろうか、と思い至り、にとりはわけもなく熱くなった頬をごしごしと擦った。

「も、もう一杯、飲むかい？」

「……ん。眠れなくなるからやめとくぜ」

「そうかい」

そうして、夜は更けてゆく。

魔理沙は、結局それから夜明けまで、にとりのねぐらに居座って、ずっと星空を眺めていた。



くしゅ、と可愛らしくしゃみを一つ。いくら赤くなった鼻先を擦り、普通の魔法使いは顔をしかめる。

夜更かしをしたせいで引いてしまった鼻風邪は、まだ治らずにいた。風を切る箒の上、すん、と鼻を鳴ら

し、ケープの前をかき寄せて冷たい風を防ぐ。

「……結局、一週間探し回って収穫なしか」

傾いた夕焼けの中、帰り道に寄ったヤツメウナギの焼き串を囓りつつ、魔理沙はぼやく。

光の速さに挑む、といういつそ無謀な挑戦は、全くと言っていいほど進展していなかった。

魔法の研究でも八方塞がりなんてことはよくあるものだが、そもそも光の速度を超えるという目的はあっても、そのための手段が一切分からない状況では何の手がかりもあつたものでもない。

紅魔館の大図書館にも連日を顔を出しているが、もともと魔術書、オカルトに偏つたあの書庫の蔵書では、この類の内容についてはまるきり明るくないようだった。箒の加速度を上げる方法はいくつか発見したものの、それ以上の進展はない。

「……パチュリーにまで精が出るわねなんて皮肉言われるとは思わなかったぜ」

不慣れた分野で数少ない資料を見つけ出していても、



その大半は意味のわからない数式と記号の羅列。いっ  
そ理解させる気がないのかというほどに、解読しよう  
としても、式ならぬ魔法使いの魔理沙には呪文以上に  
わけのわからないものだった。

読んでいるだけで目がちかちか、頭がくらくらと限  
界を訴えるほどの内容と一週間、ぶっ続けで格闘して。  
分かったことと言えば、光の速さというものがどれ  
だけ絶対的なものであるかということくらい。  
一石翁という著者などは、信仰と言えくらゐに光  
の速度を永遠不滅恒久のものと祀り上げていたりもし  
た。

(……仮にだ。ややこしいことは抜きにして、もし光  
の速度で動けたとしても、そもそもにとりの言うよう  
な宇宙の果てまで飛んでいくなんてのも現実的じゃな  
いし、第一どうやれば何億光年も離れた星の表面なん  
かを観察できる?)

月までは光の速度で1秒かかると言うが、その月の  
表面の山谷を見るのだって肉眼では不可能だ。魔理沙

も視力にはそれなりに自信がある方だが、他の恒星な  
んかは、望遠鏡でもなければ輪郭さえ見えない。外の  
世界には星辰の果てを覗き見る巨大な天文台もあるそ  
うだが――

「だいたい、千里眼があったところで光の先回りをし  
なきや意味がないしな」

住吉計画の神様ロケットですら月まで辿り着くの  
に1週間以上の時間を必要とした。光を追いかけるの  
にはその何倍の速度が必要なのか。

(光の2倍の速度が出せたとしたって、単純計算で一  
億年前の光に追いつくまでに、また一億年かかるわけ  
だしな。……婆さんになる程度じゃ済まないぜ)

物思いにふけりながら、魔理沙は試みに箒のスロッ  
トルを開け、速度を上げてみる。

今は本格的な速度計測使用に調整していないので、  
癪ではあるが精々が天狗の3分の1。それでも風を感  
じる頬がしびれる程度に痛む。

ここ数年の研究で、魔理沙の箒の最高速度は年々記

録更新を続けている。けれどそれでも、形振り構わずただそれだけに特化して、ぎりぎり音の速さの尻尾にも手が届くかどうか。

溜息とともに、魔理沙はすとむ、と地面に降りた。こわばった背中をほぐすように伸びを一つ。

結局、誰も当てにはならない。

「仕方ない、また香霖とこでも行つて探してみるか……」

確か、月ロケットの時にも、一番役に立ったのは外の世界の文献だった。恐竜ブーム以来、香霖堂の品揃えも偏っているのだが、背に腹はかえられない。つぶやいた魔理沙がふと足を踏み出した瞬間。

「ぶっ!？」

べちん、と音がして、視界に火花が散る。

何か硬いものに顔をしたたかにぶつけ、その衝撃に魔理沙は顔を压さえてうずくまった。

「おおおお……!？」

痛む鼻先をさすって、涙を滲ませながら顔を上げれ

ば、目の前にはさつきまでなかったはずの木の幹が屹立していた。

「よしっ、大成功!! 逃げるわよルナ、スターっ」

魔理沙が赤くなつた額を压さえていると、近くの茂みをがさがさと揺らし、見覚えのある小さな姿がちょこんと顔を出す。

姦しい声と共に、ばーっと走り出す悪戯三妖精たちの声に、魔理沙はすべてを理解した。

「あんにやろお……」

光の屈折を利用して、眼の前の木の幹を見えなくさせていたのだ。古典的にして初歩の初歩、里の村人でもまず引つかからないような他愛もないイタズラだ。

よりによってこんな悪戯に引つかかるといのは、いくら考え事に熱中していたにしてもお粗末に過ぎる。

魔理沙は怒りと共に箒をつかみ、逃げる三妖精の後を追おうとするが――

そのとき、まるで稲妻のように、魔理沙の脳裏を衝撃が走った。

（光の、屈折？）

その原理は魔理沙も知っている。ガラスや蜃気楼でも見られる現象で、プリズムや虹として魔法にも応用されている。つまり、屈折率の違うものを光が通り抜けるときに、その差によって光が曲がるということである――

「っ、そうか!？」

天啓のように閃いたその発想は、魔理沙の鼓動を跳ね上げる。

改めて箒にまたがった魔理沙は、服が風の抵抗で暴れるのにも拘らず、全速力で森を突き抜けた。

みるみるうちに、先を行く悪戯三妖精たちの小さな背中が見えてくる。

「ひあ、もう来たっ!？」

後ろを振り向いて悲鳴を上げるのは、やや遅れているルナチャイルド。こういうとき、きちんと隠れていればいいものをそうしないのが、いかにも目の前のことにしか頭が回らない妖精らしかった。

「ちよつとサニー、早く逃げなきゃっ」

「わわっ！ 引つ張らないでっ!？ ルナこそ邪魔しないでよ!!」

「お、囃作戦よっ!」

いつの間にか仲間割れまで始めている。混乱に乗じてスターファイアがちゃっかり姿を消しており、残っているのは二人だけだ。

「お前達っ!!」

三妖精たちがもたついている間に、魔理沙はさらに箒の出力を上げ、一気に追いついた。

「っ!？」

「きゃーっ!？」

観念したかのようにサニーミルクたちは頭を抱えてしゃがみこむ。が。

「感謝するぜ!!」

魔理沙は満面の笑顔で、それだけ言い残し、一陣の突風とともに彼女達を追いついてゆく。

箒が巻き上げた砂ぼこりにまみれて、置いてきぼり

にされたサニーミルクとルナチャイルドは、けほ、と  
咳き込みながら、きよとんと魔理沙の背中を見送って  
いた。

「……打ち所、悪かったのかしら？」

「さあ」

わけもわからず礼だけ言われ、残された妖精たちは、  
呆気にとられて、なんだったんだろう、と顔を見合わ  
せるばかりだった。



「にとり、いるか!？」

山へと続く溪流の河原に、爆音が響く。まるで砲弾  
のように河面を吹き飛ばし、彗星さながらに着地した  
魔理沙は、自分の巻き起こした水蒸気の煙の中、握り  
締めた古い紙束を振って叫ぶ。

「分かったんだ!! 光より速く動けないんなら、光  
のほうを遅くしてやればいいんだ!!」

叫ぶ魔理沙の先で、霧がゆっくりと晴れ——  
硬直しているにとりの姿が覗く。

ちようど水浴びでもしているところだったのだろう、  
にとりは一糸纏わぬ姿でちようど身体を岸边に上げた  
その状態、生まれたままの姿で——帽子だけ被り、濡  
れた白い肌を見せている。

「え……?」

「にとり、ほら、これだっ」

あまりの唐突な事態についていけず硬直しているに  
とりなどお構いなしに、魔理沙はその肩を掴む。

跳ね散らかす水でブーツが水浸しになるが、大発見  
に夢中の魔理沙はまったく気にも留めないままだ。

「そうだぜ。良く考えたらお前んとこの光学迷彩も同  
じだよな。光の速度とか角度を捻じ曲げてるんだから。  
ちくしょー、なんでもっと早く思いつかなかったんだ  
ろうなこんな単純なことっ」

「あ、あう、あ、ま、まり」

「ちゃんと裏づけもあるんだぜ? これだ、ここにも

書いてある。えらくボロい文献だがな、多分これならいけるぜ。スロウグラスって言うらしいんだが――」

「あ、いや、あの」

顔を真つ赤に、少女の思考はオーバーフロー。舌も回らず、逃れようにも魔理沙に詰め寄られ、さらに肩まで掴まれていて離れられもしない。

その一方で、大発見に夢中の魔理沙はにとりの様子を気付いていないのだ。

「って聞いているか、にとり――」

魔理沙の視線が、両腕をはつきりつかまれて無防備な肌へと落ち――

「ひゅい!？」

ついに臨界点を突破した河童の頭からぼむと蒸気が噴き出す。

同時。

「ッ、『お化けキューカンバー』ッッ!!」

至近距離で炸裂したスペルカード宣言と共に、したたかにほったを引っぱたかれ、真横に吹き飛ばされ

た魔理沙は、紙束を撒き散らしながら、溪流の上を水切りの小石のように4回跳ねた後、はるか上流の滝つぼに沈んでいった。



「いや、だから悪かったって」  
「ううー……」

所移してにとりのねぐら。

濡れネズミの身体をタオルで隠し、魔理沙は部屋の手元座り込む。吊るした服からはまだ雫が滴り、その下でミニ八卦炉が炎を上げている。

部屋の反対側では、これまたタオル姿の真つ赤な顔のにとりが、物陰から頬を膨らませたままちらちらと様子を窺っていた。

魔理沙のほったには大きな赤い手形の痕。思い切りにとりのスペルカードに被弾した痕跡である。

「……まあ、うん。私も短慮だったとは思うぜ? し

かし、流石に女同士でここまでされる筋合いもないと思ふんだがな」

「うー。盟友だと思つてた相手にあんなことされたんだからっ!! 確かにあつちこつちで色々噂されてるけど、魔理沙はあんなことしないって信じてたのに……心の傷はおつきいんだからね!？」

ばんばんと近くの壁を手で叩き、力説するにとり。しかし、魔理沙の頭の中は他のことで一杯のようだった。すまん、と軽く手をあげると、まだ湿っている紙束を広げ、にとりを呼ぶ。

「それより見てくれ。これだ。光に追いつく方法を見つけたんだ。……たぶん計算は合つてると思ふんだが、私だけじゃ解らないところがある。にとりの知恵が借りたんだ」

「……はあつ」

他に言うことはないのか——という言葉を読み込んで、にとりは肩を落とした。

「しょうがないな、魔理沙は」

熱意に溢れた魔理沙の視線に負けて、にとりはタオルを押さえたまま慎重に物陰を出た。

それなりに気にして近づく間も、魔理沙は床に広げた古い紙束に夢中になっている。にとりは再度、深く深く溜息をついた。

「……どれだい?」

「ほら、これだ。このスロウグラスつてのが、光が通過するのに何百年も時間のかかる鉱物らしい」

「見せて。……ふむふむ」

時間を停めた硝子。その文献にはそう名前があつた。その結晶構造の中に螺旋状の回路を持ち、一方から入った光を捉え、長い長い迷路の中に閉じ込める天然鉱石なのだという。

そうして、光が通り抜けるのには長い時間を要する。

文献によれば、数センチの厚さで十年以上、昔の光景を見ることが可能とされていた。スロウグラスは非常に希少で高価なもので、現在の時刻との時差がなければないほどその価値は上がる——とされているが、こ

れはこの際関係ないだろう。むしろ重要なのは、

「屈折率が違うってことは、光の進む速さが違うって事だ。サファイアだかの中では、光の速度は半分近くになるんだろ？」

「……もっと遅い物質を探せばいいってことか。冴えてるね魔理沙。これなら確かに、見えるかもしれない」  
理論上はね、と心の中で付け加え、にとりは応じる。

「光を閉じ込めた鉱物——さしずめ星の琥珀だね」

「星琥珀か。ぴったりだぜ。後はこれを探せばいい。なあにとり、手伝ってくれるよな？」

まるで、断られることなんて予想もしていないといった雰囲気で、手を掴んで来る魔理沙に、

にとりは、なんとも言えない実に微妙な気分に応じていたのだった。



「ここだな、間違いない」

空の一点で静止して、くりん、とロッドの曲がりを確認し、ナズーリンはそう結論づける。

眼下には深い森が広がり、その下に渓谷を覆い隠していた。妖怪の山の反対側、人も妖怪もほとんど立ち入ることのない樹海は幻想郷における未開の地でもある。

「この子とこの子が現物を見てきたようだね。……推定30m幅の星琥珀<sup>スロウラズ</sup>の結晶。そちらの指定どおりのものはずだよ」

あるかどうか分からない、未知の鉱物。だがその探索は思いのほか順調に進んだ。命運寺の寅丸星とナズーリン。財宝が集まる程度の能力と、探し物を探し当てる程度の能力。ふたつのコンボは、あっさりと幻想郷で一番大きな星琥珀の鉱脈を発見していたのだ。

ダウザーの小さな大將は、派遣していた子ネズミ達から偵察の結果を確認し、順にその頭を撫でては彼らをバスケットの中に迎え入れてゆく。

「ご主人様にも確認はしてあるが、ざっと地下100

mといったところかな。この子達は這入りこめたようだけれど、君たちの体格では無理だろうね。この付近は風穴も多い。天然の地下迷宮だ。迂闊に潜ると生き埋めになるよ?」

「洞窟探検か。調べるとなると準備が要るな」

「そうだねえ」

帽子の下に手をかざし、多機能ゴーグルを掛けて眼下を覗き込むにとり。ゴーグルに接続された装置で樹下の地形を確認し、計算尺を弾いてゆく。

「地盤も柔らかさうだし水気も多い。まだ知らない妖怪が住んでる可能性もあるね。飛びながら調べるのは難しいかもしれないよ、魔理沙」

「モンスター・サブライズドユーだな。こりや十フィート棒でも用意するか? 迂闊に飛び込んで岩の中じやたまらんしな」

「まさか、君たち二人でやるつもりかい?」

「優秀な相棒がいるからな。6人も隊列は要らないぜ」  
「ひゅい!」

ナズーリンの皮肉にも、魔理沙はばん、とにとりの肩を叩いて笑う。

目を丸くしている相棒にはまったく目もくれず、興味津々で地下の様子を覗き見ている魔理沙に、ナズーリンはご苦労なことだ、と呟いた。

「ありがとな。ほれ、こいつが約束の報酬だぜ」

魔理沙から渡されたものを見、ナズーリンはまた渋い顔をする。

「……つくづく安い報酬でこき使われたものだよ。チーズなんかは好まないと言っているだろうに」

そう言いながらも、ナズーリンは千切ったチーズのかけらをバスケットに投げ入れ、自分もまんざらでもなさそうに残るチーズの塊にかぶりついていた。

「むぐ。……ともあれ依頼は完了だ。探査屋の出番はここまで、地図屋も斥候も、野伏も私の本業ではないからね。」

……言っておくが私は頼まれた条件に合致したものを採したまだからね、掘り出した後で話が違うと言



われても困るよ?」

「ああ、だったらまた頼むだけだからな」

「……やれやれ、厄介な相手に絡まれたものだ。魔法使いというのはもう少し知性派だと思っていたがね。  
トシゴト アミユレツト

狂王の護符でも見つけ出す気かい?」

「魔法使い、穴蔵があつたら入りたい、だぜ」

「……妖精は信用するな、竜には手を出すな。か。ご主人様が気乗りしなかった理由が分かるね」

早速、明日からの計画をあれこれと相談し始める二人を尻目に、ナズーリンは肩をすくめ、ちらりと眼下の深い樹海を見下ろしてから、その場を後にした。



「見えてるか、にとり?」

『ぼっち。感度良好だよ』

水滴と泥が滴る風穴の一つを、白黒の影がゆつくりと滑り下りてゆく。傍らには地底の怨霊騒動の時に使

った通信珠が浮かび、地上でバックアップに回るとりとリアルタイムで交信を続けていた。

『どうだい、入れそうかい?』

「ああ、なんとか行けそうだな」

水滴除けのコートを羽織り、防塵マスク、防水ブーツに二重の手袋。中身をいっぱい詰めたリュックを背負い、発光量を改良したヒカリゴケのランタンを下げた探索用の重装備で、魔理沙はゆつくりと縦穴を下降してゆく。

風穴の中は箒で飛ぶには狭すぎて不自由が多いため、移動は身体を支える魔法のロープとにとりが設置したウインチを併用したラペリングだ。

ロープを操作しながら、壁を蹴って降下を続けた魔理沙は、ほどなくブーツの靴底で孔の底に硬い感触をとらえた。

「……底についたぜ。この下か?」

『そのはずだよ』

「行き止まりだぜ?」

『ありや？……埋まっちゃったのかな。孔壁が崩れたのかも。この前地震があったし』

「おいおい。ぞっとしないな。生き埋めは御免だぜ？」

呟いて、魔理沙はランタンをかざし、縦穴の突き当たりを照らす。

『……いったん引き上げようか？』

「いや。待て、にとり。これなら……」

白いランタンの明かりに照らされた穴の底には、土に埋もれたかすかな亀裂が見て取れた。魔理沙はロープで慎重に身体を固定すると、岩盤にブーツの靴底を押し当て、力を込める。

「よ、この、っ、ていつ!!」

思い切りよく地面を蹴ると、ブーツの爪先が土の中にめり込む。それを何度か繰り返すと、ふいに足元が軽くなり、次の瞬間には苔の積もった底が抜け落ちて、穴の底にはばかりと大きな口が開いた。

永い間閉ざされていた空間から、籠った苔の匂いが溢れてくる。

「よし、空いたぜ」

『どうだい、魔理沙!？』

「ん。……空気はあるみたいだな」

千切った燐寸を放りこみ、その火が消えないのを確認してから、魔理沙は再度下降を始める。

縦穴を抜けると、一気に周囲の空気が重くなった。

大きな空洞に出たのだ。粘つくような深い闇が、魔理沙を取り囲むように押し寄せてくる。

「……おお？」

空洞はかなり大きいらしく、ぼつりと呟いた声が、わんわんと反響する。良く耳を澄ませば小さな水の流れるも聞こえてきた。

『魔理沙?』

「……大丈夫だ。見つけたぜ」

魔理沙はロープを手繰って、地下推定100mの地下空洞の底へと降りる。神社が丸ごと入ってしまいそうに大きな空間には、ブーツの底が踝までめり込むほどの分厚い泥と苔の絨毯が一面に広がっていた。

重苦しいほどの闇の圧力が、ランタンのちっぽけな明かりなど押し潰さんばかりにあたり一帯を埋め尽くしている。

「……おー。まさに秘境だな。こりゃカメラの後に入らってわけにやいかなそうだ」

一步を踏むたび、目を持たない小さな虫が、灯りから逃れるように一斉に四方に散ってゆく。

風穴はかなり広い空間になっているらしく、頬にはゆつくりと風の流れも感じる事ができた。遠くにかすかに聞こえる滝の音は、さらに地下の地底湖にでもつながっているのだろうか。

湿度は高く、しかし気温はかなり低い。泥と雫のついたゴーグルを拭い、手袋の指に息を吹きかけ、魔理沙は額に汗が湿るのを感じる。

『これが？』

「星琥珀、だな。探查屋<sup>ダウザー</sup>の言葉を信じれば、だが」

『……組成は、間違っていないと思う。ここから見た限りだけ』

通信珠を通じて、にとりの緊張が伝わってくる。

魔理沙が掲げたランタンの明かりに照らされ、ひんやりとした洞窟の奥に突き立つ、見上げるほど巨大な鉱物の柱が明らかにになる。

よく見ればうつすらと光を放つ深い黒色の柱は、見えるだけでも高さにして楽に十数メートル、幅も奥行きもそれに近い。見えている分だけで下手をすれば家一軒のサイズほどもあった。

「……よ、っと」

不安定な足元を慎重に進み、魔理沙は鉱柱の傍に歩み寄ると、腰の十フィート棒を組み立てて黒々とわたかまるその表面を叩く。きいんと澄んだ硬い音が洞窟の中に反響し、思わず魔理沙は耳を塞いだ。

「ん……いやはや、ここまで完璧に人跡未踏だとは思わなかったぜ」

『……少なくともここ数百年くらいは、誰も出入りしてなさそうだね』

事によれば未知の妖怪との遭遇、戦闘もあり得るこ

とを想定しての重裝備だったが、この分ではその心配は無用のようだった。

無人の気配と共に、ただただ無機質な闇は、立ち入る不埒者を隙あらば押し潰さんとするかのように濃密さを増していた。

「しかし、覚悟はしてたがこれじゃな……削らんと見えないか？」

ランタンに照らされる埃まみれの黒い鉦石柱の表面は、無残なほどに歪な凹凸にへこみ、ヒビだらけになっていた。柱の表面にたっぷり積もった泥を拭い、魔理沙はその中を覗きこむ。

スロウグラスの中では、光が何百倍、何千倍の遅さとなるという。それは逆に、スロウグラスの中を透過する光は、グラスの表面のほんのわずかな凹凸の差で何年も位相がずれてしまうことを意味していた。

厚さが均一でなければ、表面に浮かぶ像は意味を成さず、乱反射した光がぼんやりと燐光を放つだけだ。魔理沙たちの望む何億年前の光景など、映るわけもな

い。

『どうなんだろうね。この中に光が閉じ込められてるとしたら、下手に形を減らすのは避けたほうがいいかもしれないよ、魔理沙。』

資料読んでる限り、一回取り込まれた光は単純にグラスの中を直進してるわけじゃないみたいだし、この中のどこにそのときの光が閉じ込められてるのか分からない。応急処置だとしても、表面を樹脂で埋めて平面化したほうがいいんじゃないかな』

あくまで慎重に意見を述べるにとりだが、魔理沙は会心の笑みを浮かべる。

「……いや、これなら大丈夫だ」

拭った泥の下から、ぼんやりと朱い輝きが覗き始めるのを見て、魔理沙はばちん、とランタンの窓を閉じた。ヒカリゴケの灯りがふっと消えた闇の中に、じわじわと薄赤い光が満ちてゆく。

『そうか……』

にとりも考え違いに気付く。これは黒色の鉦石柱で

はなかったのだ。スロウグラスはもともと、膨大な時差はあっても光を透過させる物質であり、無色透明だ。この鉾柱は、はじめからずっと夜の闇の光景を映し出していたのだ。

「時差にして8時間。……感度良好だ」

魔理沙はシヨールの下から懐中時計を引きずり出し、蓋を広げて確認する。幅数十メートルの鉾柱が、ぼんやりと輝きを放ちながら屹立するさまは、およそ地上にあるどんなものよりも、神秘的にすら映る。

そう。光も射さないはずの地下の底に、びっしりと苔が生えていた理由が、これだ。

長い長い時を隔て、琥珀の中から溢れる光——まるで昼間のように、陽の差し込まない地下に、鮮やかな光が満ちてゆく。一秒ごとに変化する色合いは、薄明から朱に変わり、鉾柱全体に広がってゆく。

やがて、壁一面に広大で肥沃な大地が姿を現す。

蒸し暑さを感じさせる色濃い空。薄赤い朝焼けの下には、原生種を思わせるシダや苔が茂り、太い蔦と木々

が枝を絡めあったジャングルのような樹々は、時折うねるように蠢いている。

見る者の魂を奪ってゆきそうな、原色の光景を映し出した星琥珀の表面を叩き、魔理沙は言う。

「これが、一億年前の日の出だぜ」

ゴーグルを外した魔理沙は、手の届きそうな場所に広がる、鮮やかな一億年前の風景を前に、ぐっとこぶしを握りしめた。

「よっし。じゃあ早速準備開始だ」

『準備?』

にとりの声にああ、と頷いて、魔理沙は背負っていたバックパックの中身を広げ始める。出てくるのは簡易天幕、毛布、おやつ、水筒、ランタン、暇つぶし用の魔道書が数冊。

続々と取り出されるそれらを見て、にとりは思わず声を上げる。音量調整が間に合わず、通信珠がハウリングを起こした。

『って魔理沙、このままここで張り込むつもり!?』

「そりやそうだ。見逃すわけにいかないぜ。いつ恐竜が見えるか分からないしな。折角ここまで来たんだ。戻るのが手間だろう?」

『その大荷物ってそのためだったのかい!? 武装とかはどうしたのさ?』

「半分は持つてきてるぜ。もう半分は置いてきた」

さらりと返され、にとりは絶句してしまう。

洞窟の安全もまだ確認できていないし、観測するにも他に方法はあるというのに、魔理沙はあろうことか一番原始的な方法を選ぶつもりらしい。

『や、でも魔理沙、私もほかに仕事とかあるし、ずっとここに居続けなくていいぜ!』

「ん、そうか? なら無理しなくていいぜ? あとは黙って待つだけだからな!」

罪悪感を胸に切り出したにとりにあつさりとそう答え、魔理沙は鼻歌交じりに準備を始めるのだった。



◆ 二月九日

観察二日目。変化なし。昨日に続き新聞屋と見物人あり。三時間ほどで帰る。

◆ 二月十一日

観察四日目。変化なし。自宅まで往復。不用心だとアリスに釘を刺される。

◆ 二月十四日

変化なし。琥珀の精密計測を行う。キャンプ近くに亀裂を発見。念のため足場の補強を行う。右脚に軽い打撲。手持ちの薬で応急処置を行う。

◆ 二月十七日

変化なし。自宅まで三往復。食料・資材を運びこむ。整理で時間が潰れそうだ。

◆二月十九日

変化なし。荷物の整理が完了。明け方に微震。大事には至らず。

◆二月二十二日

変化なし。通りすがりの妖怪をからかって遊ぶ。

◆二月二十三日

自宅まで往復。途中で雨に降られる。持ち出した本数冊に被害。変化なし。明け方に発熱。

◆二月二十五日

変化なし。熱がようやく引く。

◆二月二十七日

変化なし。嗜好品の類が乏しい。もう少し持つてくべきだったか。

◆三月一日

変化なし。にとりが来る。軽い片頭痛。夜半に回復。

◆三月四日

変化なし。



それから一月が過ぎた。

補強をほどこされ、換気を整えられた地下空洞の一角、天幕の傍にはかまどに寝袋、洗濯物まで干され、すっかりワイルドな生活感にあふれていた。

傍らではミニ八卦炉が小さな炎をともして灯りと暖を供給している。

「まりさー？」

空洞の入り口でもある換気口からひよこんと顔を出したにとりに、魔理沙は寝そべったまま顔を上げ、鼻上の眼鏡を押し上げる。

「お、にとり。一週間ぶりだな」

「また風邪ひくよ、そんな恰好で」

リュックから延びる多機能アームに捕まって空洞の底に降りたにとりは、魔理沙の傍に腰を下ろす。

何に熱中していたのだろう、と思ったにとりが覗いてみれば、枕元に広げられたノートには几帳面にびっしりと観察記録が残されていた。

毛布にくるまり、簡易テントの下でじっと星琥珀の前に陣取っている魔理沙を気遣うように、にとりは荷物を広げる。

「まだ起きてたのかい？ もう夜だよ」

「さんきゅな。穴倉生活だと時間が分からなくて困る」  
んーっ、と伸びを一つ。こきこきと肩を鳴らし、魔理沙は少し赤い瞳の目頭を押さえる。いくらか日焼けも抜け、肌色も白くなっているようにも見える魔理沙に、にとりは心配そうに告げる。

「もう一ヶ月もでしょ？ みんなも心配してたよ」

「たまには一応帰ってるぜ。三日に1回ぐらいだけど

な」

すっかり別宅と化した様子の洞窟に寝そべる魔理沙。風の入りかたなども工夫され、居心地はさほど悪くはないのだろう。

だとしても、少女の表情に拭いきれない疲労が滲み出ているのは明らかで、にとりの胸中は穏やかではない。

「それくらいで騒ぐやつはいないぜ。現に、だれも見にこないからな」

「……そうだねえ」

にとりは曖昧な表情で頷いた。

森の白黒魔法使いがまた妙なことを始めた、一度は噂になったものの、それも最初だけ。色々と冷やかに着ていた連中の足もすっかり遠のき、いまでは土蜘蛛が地下トンネルの巡回ついでに顔を出すか、時々新聞屋が様子を見ていく程度だ。

それどころか、いつのまにか幻想郷からは「恐竜」というものの目新しさも忘れ去られつつあった。



『すべてを受け入れる』幻想郷においては、新参者が異邦人として扱われるのもほんのわずかの間のことでしかない。その参入の騒動や、価値観の違いからもたらされた多くの異変は幻想郷の歴史に取り込まれ、やがてはそれがあつたことすら、多くの者にとっては曖昧になる。

「……薄情なもんだな、実際」

魔理沙の独白は、自分に対してのものか、それとも恐竜に対してのものだろうか。いたたまれなくなつて、にとりでは思わず口にしていた。

「ん。……一緒にどうだって、みんな誘つたんだだけどねえ。霊夢にまで面倒だつて断られちゃつてさ」

「あー。あいつは来ないな絶対に」

あつさりそう言つて、魔理沙は苦笑する。

神社で声を掛けたときにも『やめとくわ』のひとつとで、ほとんど反応らしい反応もなかった霊夢の態度に、いくらなんでも友人に対して素つ気無さ過ぎるだろうとにとりでは内心憤つていたのだが——何のこと

はない、一番古い付き合いらしい白黒魔法使いは、一番巫女のことを良く知っているようだった。

「これは私のわがままで、私が勝手に意地張つてるところとだからな。霊夢は来ないさ」

それは。

むしろ、彼女のことを信頼しているような口ぶりです。にとりでは少し、そのことが妬ましかった。

取り繕うように俯いてにとりは荷物を探り、そこからコーヒーマシンのドリッパセットを取り出す。

「……。魔理沙、飲むかい？」

「さんきゅな。もちろん貰うぜ。そろそろ悪魔のように黒くて、地獄のように熱くて、天使のように純なところが欲しかったからな」

コンロに火が灯り、程なくドリッパ仕立ての珈琲ができあがる。

金属のカップをかつん、とぶつけ、魔理沙にとりでは芳醇な香りと苦味を飲み込んでゆく。

「……ん。うまいぜ」

「そうかな。……良かった」

そうして、二人の会話が途切れると、広大な地下空洞には恐ろしいほどの静寂が満ちた。

一億年前の蒼空を移す星琥珀も、音を伝えることはない。かすかに聞こえる流水の音や、小さな生き物が息づく気配はあるものの、それらをまとめて塗り潰すほどの無辺の静けさだけが、背後の闇の中に迫ってくる。

おそらくは、この地の底の中で何千万、何億という時が飲み込まれてきたであろう深い闇が、かすかなミミ二八卦炉の明かりの境界のすぐ傍まで押し寄せてくる。まるで自分の鼓動だけしか聞こえないような錯覚を覚え、ふと不安になったにとり顔が上げれば、魔理沙はじっと、目の前の星琥珀を見つめていた。

「……すごいね、魔理沙は」

心からの感嘆を込めて、にとり言う。

「正直、私はこんなところで、一カ月も頑張つてられないと思うよ。……あんな風に、言われながらさ」

言葉の最後には、小さな痛みを飲み込んだ。

確かに、幻想郷じゅうを探し回って、魔理沙は一億年前の世界を覗く方法を見つけた。けれど、この地の底の幅数十メートルのスロウグラスの中に、魔理沙の见たい光景が映っているのかを確かめる術はないのだ。

いや、そもそも。ここに映っている光景が、真実一億年前のものなのかすら解らない。いま、魔理沙が注力していることは、全てがあまりにも不安定な足場の上に築かれているもので、少し噛み合わせがズレれば、全てが徒労に終わるのだ。そんなことは魔理沙も、口にはせずとも先刻承知のはずだった。

「どうなんだろうな。……意固地になつてただけかも知な。案外」

ふいに身を起こした魔理沙は、星琥珀の傍まで歩み寄ると、べし、と軽くその上を叩いた。甲高い音を響かせて星琥珀の表面が震え、その奥に覗かせる太古の光景を揺らめかせる。

「でもな、そこで魔理沙さんはこう思うわけだ。

こいつはここで、誰にも見られないまま、ずうっとこうやって、一億年も前の世界を延々と映し続けてたつてことだぜ? ……じゃあ、やっぱり私が見てやらなきゃならんだろ、つてな」

地の底の、遙か過去の蒼空を振り仰ぎ。白黒の魔法使いは不敵に微笑んでみせる。

「無理かどうかは、私が決めることだからな。そうでなきゃ魔法使いなんて因果な商売やつてられないぜ。

……ま、何かが見えるまでは張り込むさ。我慢じゃないがそこまで辛抱強くないしな、何十年もここで物乞いやってるわけにもいかないだろうが」

一息。

「やってる限りは手は抜きたくないからな」

「……魔理沙らしいなあ」

月行きロケットの時も。地底の核融合の時も。魔理沙は今と同じ顔をしていた。

もう戻れない、遙か昔の時間。今と切り離された『過

去』の追憶の中に、魔理沙は誰かの背中を見ているのかもしれないと、にとりは思う。

誰よりも真っ直ぐに——前を、前を見て飛ぶ魔理沙は、後ろを振り返ることを由としない。その背中を見守ってくれている誰かを信じているからこそ、魔理沙は、かつて教わった方法ではなく、自分の力で積み上げた魔法で、自分の願いを叶えようとしているのだ。

「一応やることはやってるんだぜ? ほれ、願い事の叶う魔法。くじ引きで使えば吉が出やすくなる魔法とか」

「運頼み?」

「ぼーっと待つてるよりはいくらか前向きだろ?」

「だねえ」

悪戯っぽい笑顔で色とりどりのキャンディを広げてみせる魔理沙に、にとりも思わず、くす、と笑みをこぼす。

そうしてひとしきり一緒に笑い、心の中のわだかまりを笑顔に変えたにとりは、魔理沙の隣へと腰をおろ

した。

「——今日から私も一緒にするよ」

「いいのか？」

「見たいからね、私も」

「そうか」

じつと星琥珀を見詰めたまま、そっけなく答えて、黙り込む魔理沙。

「……………」

「……………」

けれどその気配が、幾分か和らいだ気がするの、きつとただの気のせいではない。にとりはそう思うことにした。



二人が共に洞窟に籠るようになってから、さらに三日が過ぎた夜。……夜と言っても、星琥珀の光が途切れる時間なので、実際の朝昼とは8時間の時差がある

が——とにかく、地下空洞に訪れた暗闇の中。

何の前触れもなく、ずん、と真下から突き上げるような激しい衝撃が、地下空洞を揺るがした。

寝袋ごと地面から30センチも吹き飛ばされた魔理沙は、地面に叩きつけられた激痛に跳ね起きる。

腕の痛みに目を見開けば、ランタンの灯りに照らされた天井の岩盤に、轟音を上げて大きなひび割れが走ってゆくところだった。

巨大な地下空洞が生き物の臓腑のように激しく揺れうねり、施した補強資材をたやすく押し潰して、四方の岩盤が崩れ出していた。

「っ、なんだ!？」

「地震!？」

同じく飛び起きたにとりが、寝間着のままリュックからアームを操作して、崩れ落ちる岩盤を受け止めた。

なおも激しく揺れ動く地面は、立っているのが不可能なほど波打ち、地の底からの脈動に岩が、砂礫が、軋む音を立てて砕ける。

そんな中では、むろん星琥珀も無事では済まなかった。光のない闇夜を映し出していた巨大な鉱石の柱に、無惨にも斜めに大きな亀裂が走り、澄んだ硬質の破砕音を響かせる。

「しまった……!!」

振り向いた先にそれを見て、魔理沙は叫んでいた。不安定な地下洞窟が、たびたび小さな揺れを起こしているのは、探索の準備を始めた頃から、これまでも何度か確認していた。

当初はそれに対して慎重に対応していたものの、ここ2、3週間そうした異常はなく、地震とその崩落の可能性は、すっかり魔理沙たちの頭から抜け落ちてしまっていたのだ。

「油断したぜ……!」

舌打ちとともに自分の迂闊さをのしる魔理沙。そうしている間にも、星琥珀の柱は斜めに傾いで、割れ砕ける岩の奥へと飲み込まれようとしている。

「くそ、星琥珀が……っ」

「魔理沙、危ない、こっち!!」

「っ」

地の底へ消えようとしている星琥珀へ思わず伸ばしかけた手を、にとりのアームが掴んで制する。

踏み出しかけた魔理沙の鼻先を、大きな瓦礫が霞めて地面に激突する。ごとと巻き起る砂煙が、視界をさらに狭くする。

「魔理沙!!」

ほとんど絶叫のように、にとりが叫ぶ。

魔理沙はそれでも諦めきれず、崩れ落ちる洞窟の奥を凝視していた。けれど少女の視線の先、もはや庇うもののない星琥珀はその形を失い、粉々の破片になって地の底へと沈んでゆく。

——瞬間。

まるで爆発するように、凄まじい閃光が地下の中に炸裂した。

「——っ!?」

「っ!?」

星琥珀の螺旋回路に閉じ込められていた、何千万年、何億年分の光が、ガラスの結晶組織構造の崩壊とともに一気に解き放たれたのだ。

まるで圧力を持つほどの、膨大な量の光が、一瞬で地下のあらゆる闇を駆逐し、白一色に視界を塗り潰す。

まともに見れば失明は免れなかったかもしれない。

咄嗟に閉じた瞼の上からでも灼きつくほどに、鋭く激しく鮮烈な光が——魔理沙の身体を飲み込んでいた。

「……………!!」

しかし、それも一瞬のこと。吹き荒れた光が行き過ぎると、洞窟には深い闇が戻ってくる。

地震は緩やかにおさまり、後にはただ、荒廃したキヤンプの痕が残るのみ。顔を覆っていたにとりが恐る恐る目をあげると、そこには茫然と立ち尽くしている魔理沙の姿があった。

「ま、魔理沙、平気!?」

「……………っ」

「魔理沙? ねえ、魔理沙?」

意志を亡くしたように棒立ちの魔理沙の肩を掴み、にとりは声を荒げる。が、魔理沙はやおらその手を振り払い、亀裂に飲まれかけていた箒を掴んだ。

「今のは——っ」

「ちょっ!? 魔理沙、どこいくんだいっ!! 危ないってばっ」

にとりの制止も構わず、箒に跨った魔理沙は、ありったけの速度で洞窟の奥へと飛び出していった。

地震は緩やかに終息し、大きな揺れこそ収まっていたが、まだ天井からはばらばらと細かい瓦礫が零れ落ちてくる。洞窟の壁や天井には無数の亀裂も走り、いつまた崩れ出してもおかしくない状況だ。

「……………っ!」

だが、魔理沙は速度を緩めない。

激しく高鳴る胸の鼓動が、言い知れない衝動が、少女の身体を衝き動かしていた。

目まぐるしく流れ過ぎた、数千万年の時の奔流。わずかに一瞬で過ぎ去った膨大な光の洪水の中に、魔理沙は確かに見ていたのだ。

燃えるように朱い空。煙たなびく山にかかる分厚い雲。それを引き裂いて天より墜ちる、巨大な彗星。

それは、遙か昔にあったひとつの時代の終焉。

そして——その光を、まるで崇めるように、心奪われるように群れ集い見上げている、何千何百という巨きな、大きな、旧き時代のいきものたち——

魔理沙はほとんど勘と無意識のままに、箒を操った。狭くくねった洞窟を駆け抜け、地下水脈の流れ落ちる滝をくぐり、邪魔する木の根を引きちぎり、突き立つ鍾乳石の林に服をボロボロにして——ひたすらに、ただひたすらに。前へ。

前へ。

前へ。

……前へ！



どこをどう飛んだのか。数時間もそうしていたようにも思うが、実際にはほんの数分のことだったのかもしれない。

「……………」

魔理沙は、たどり着いたその先——洞窟の終着点となった行き止まりで、言葉を失い立ち尽くしていた。

先ほどの地震の影響か、洞窟の天井には大きな裂け目ができ、そこからは柔らかな陽が帯のように差し込んでいる。

その陽光が照らす洞窟の壁、そこにあったものを見つめ、呆然となった魔理沙の手から箒が落ち、からんと地面を転がる。

「やっと見つけたっ。魔理沙、一体どうしたん——」  
ようやく追いついてきたにとりも、息を切らせて声

を上げ——そのまま同じように、言葉を失った。

二人の目の前、見上げるほどに切り立った、巨大な岩壁に、巨大な生物の骨がはめ込まれていた。

雄々しく首を振り上げ、地面を踏み締めて、天に向けて吼え猛る姿。

『彼』は、かつて地上を支配し、繁栄を誇っていたことを誇示するかのよう、巨大なその身体を深々と岩壁に刻みつけている。

「……………ははっ」

思わず、笑いすらこみ上げてくる。

荘厳な姿の全身骨格。その巨大な骨の全てが、余すところなく、燃える炎のように、揺らめく波のように、美しく光を浴びて彩七色に輝いていた。

まるで、天を彩る星の煌き。

閃光、髪飾り、猫眼、絵文字、調色板、蔓斑、点火、穀殻、斑模様。

踊り遊ぶ色鮮やかな輝きは、かつてその骨の持ち主が、広大なる太古の大地を支配していたことを思わせ

るかのようなように、神々しく光を放つ。

「いや、いやいやいやつ。あり得ないよっ!？」

乾いたにとりの声が、洞窟に響く。

「こ、これ、本当に？ ……そんな、だって、化石が全身一揃い、まるまる見つかるんだって滅多にないことなのにつ」

驚愕から歓喜へと変わるにとりの声をそつと隣で聞きながら、魔理沙は帽子を取り、胸に添えて敬意を示しながら、『彼』に静かに頭を下げる。

億千万の夜を超え、命のように輝き燃え揺れる虹色彩の炎が、きらきらと踊る。

その身をすべて貴蛋白石化させた、一体の巨大な恐竜の全身骨格化石は、王の威厳を備えた偉大な姿で確かにそこにあり。

何億年もの時を超え、遙けき古代に『彼』が生きた証を、確かに刻んでいた。





今日も変わらず、穏やかな博麗神社。桜の蕾もすっかり膨らみ、日毎春めく弥生月。この分では境内が花見に賑わうのもそう遠いことではないだろう。

ざわめく春の気配は、間もなく控えた例大祭も、例年になく盛大なものになることを窺わせる。

前祝いとばかり縁側に寝そべって杯をあおる萃香の顔は、すでにほんのりと朱い。その視線の先では、幾分興奮気味の文が、煎餅を齧る霊夢に熱弁を奮っていた。

「いやはや、今回はすっかり脱帽ですよ。いつ諦めるか賭けをしていたくらいなのに、あんなものを見つけれられては考えを改めざるを得ませんでしたね」

「……そうなの？」

「ええ。霊夢さんも一度見に行くべきですよ。あれは本当にいいものです！」

文の言葉は聞き流しながら、霊夢は薄い茶をゆつくりと啜る。その霊夢の隣ではさらに、ぺらりと新聞を

広げた紫が、珍しく表情を緩めていた。

「星の命。貝の火ね」

「貝？ それは一体!？」

耳ざとくその独白を聞き付け、文は素早く手帳を開くと、紫の傍に駆け寄る。突き飛ばされた拍子に霊夢がお茶を被ったりしたが、それも気にする様子もない。「――『これは有名な貝の火という宝物だ。これは大変な玉だぞ。これをこのまま一生満足に持っている事のできたものは今までに鳥に二人魚に一人あつただけだ』という話だ」

どこかの物語の一説を諳んじた紫は、ぱら、と開いた扇で口元を隠し、

「貝の火……虹色石は生物の身体から生じる石。言わば生命の火が、永い歳月に石の中に封じ込められて幻炎の形を成したもののね。」

赤、黄、青、緑。七に七を掛けた色彩に遊ぶように踊るその火は、遙か昔の生命が姿を変えて生じている。その輝きはとても繊細で、焰のように年月によつ

て擦り減ってしまう。中でもとりわけ所有者の心には敏感でね、驕りや慢心、悪意を持てばすぐに濁り消えて砕けてしまうそうよ」

「ふむ。つまり魔理沙さんは、その宝珠を持つに相応しかった、と？」

「さあ。それはどうですかしらね？ 因果は巡るもの。

吉客凶悔きりくきゆうかいは世の常ですもの。見物はこれからかもしれ  
ませんわよ？」

「……悪趣味なこと言ってるんじゃないわよ」

「あん。霊夢ってば酷いわ」

くすくす笑う紫の額にべしりと符を飛ばし、霊夢は小さく溜息をついて淹れ直したお茶を口に運ぶ。

「そろそろ、宴会の用意でもしないといけないわね」

ほころび始めた桜の花の上、晴れやかな青空を笑顔で飛んでゆく春告精はるこけいを見上げ、霊夢はわずかに口元を緩めた。

本日の、文々。新聞の一面トップ。

珍しく学術趣味に偏った紙面の写真には、鮮やかな七色の輝きを波打たせる、巨大な巨大な化石と——それを前に、河童と二人、肩を組んでVサインをつくり、誇らしげに胸を張る魔法使いの姿があった。

## 森の魔法使いと山の河童と、 時間を停めた星の琥珀

初出:博麗神社例大祭 7(2010/3/14)

サークル活動一周年を記念し、(それまでに比べれば)ずっと長いお話を書いてみようと思い立った作品。サークルカット応募当時、星の琥珀について具体的なイメージがないままに見切り発車してしまいましたが、ボブ＝ショウの名作SF「去りにし日々、いまひとたびの幻」より光の透過をとでも遅くする物質、スロウグラスの存在を知ってお話の通りの題となりました。恐竜の姿を見る方法については「光の大社員」2巻の巻末漫画に着想を得ています。

にとりの人間への懐っこさや、魔理沙のひたむきさを表現したかったお話。作中で名前が登場する恐竜たちは皆、のちの研究によって実在していなかったことがわかっている種類であり、幻想入りしてそうな部分にだいぶ気を払っていたことがうかがえます。

## 星屑カヴンの箒乗り

3人の魔法使いと

1人の魔法少女と

1人の大魔法使いがいます。

さて、この中で仲間外れは誰でしょう？

### ▼博麗神社、縁側における巫女との日常

雁来たる高い秋晴れの空の下、人里には実る稲穂が金色に照り映え、木々は風と共に赤橙黄の落葉を散らす。訪れた静寂と収穫の季節に、今年も秋の神様は揃って精を出しているらしい。

「お茶にしようかな」

境内に散り敷かれる紅葉を見渡して溜息一つ。霊夢は石畳を掃く手を止めてつぶやく。

日が傾き始めればそろそろ肌寒い秋風の中、掃除用具を片付け、袖を重ねて少女が裏庭に回れば、

「よー、霊夢、邪魔してるぜー」

縁側には既に大の字に横たわる白黒魔法使いの姿があった。

季節に先駆けて早々と衣代えを済ませた厚袖ブラウスの端をわずかに煤けさせているところを見るに、ど

こかで一戦やらかした後らしい。足元には本日の収穫  
と思しき本が数冊、革ベルトのブックホルダーに納ま  
っていた。

「疲れたから茶でもくれー」

「……自分で淹れなさい」

呆れた表情を隠すこともせず、霊夢は居間になが  
てちゃぶ台に腰を下ろす。魔理沙はやれやれ面倒だぜ  
とぼやきながらも、勝手に戸棚を漁って手際よく煎餅  
とお茶を用意して戻ってきた。

やや湿気味の煎餅をばきりとかじり、霊夢は頰杖  
をついて魔理沙を見る。

「毎度良くやるわね」

「元はと言えばお前の尻拭いしてやってるんだぞ？」  
わかってんのか、と魔理沙は視線の温度を下げる。

紅霧異変の折に悪魔の妹を館の外に出すきっかけを  
作ったのは博麗の巫女のはずなのだが、今では大図書館  
に通い詰めるのはすっかり魔理沙の役割だ。

「こっちはこっちで姉につきまとわれて面倒なのよ」

「会うたび命懸けの弾幕ごっこよりはなんぼかマシだ  
と思うけどな」

「……最近、スキがあれば咬んで来ようとするのよね、  
あいつ」

「蚊取り線香でも焚いとけ」

レミリア本人はスキンシップと言い張っているが、  
咬まれる側の食料としてはいろいろと切実な問題であ  
る。

とは言え、魔理沙もフランドールの遊び相手を務め  
ることで、紅魔館への出入りを黙認されている節もあ  
るため、一概に霊夢が非難されるいわれはないのだっ  
た。

それでもわざわざ、魔理沙は正規の貸し出し手続き  
を取らずに本を持ち出しているという。いつだったか  
新聞屋があれこれと喋っていたことを、霊夢が思い出  
すともなしに思い返していると、魔理沙は空の湯呑み  
を隣にごろりと仰向けになる。

「で、今日の夕飯はなんだ？」

「ごく潰しに食べさせるつもりはないわよ。それでなくとも今月厳しいんだから」

「厳しいのはいつもだろーおうっ」

余計なひと言に、ほぼ無動作で霊夢の符が飛ぶ。すばあんと景気の良い音を響かせて額に一撃食らった魔理沙は、衝撃に仰け反って、どしんと縁側から庭へ転げ落ちる。

いてて、と呻きながら、ペリペリと額に張り付いた符を剥がして庭に身を起こし、魔理沙は口を尖らせた。

「……うー、不意打ちは卑怯だぜ」

「避けられないのが悪いんでしょ」

「最近、お前の符がハリセンと大差なくなってきたる気がするんだが」

妖怪じゃないんだから対処を変えろよなとぼやき、

魔理沙は大きく伸びをして肩を鳴らす。

いつもならばじゃあひと勝負だぜ、と続く言葉が無いことに、霊夢は少々拍子抜けした。

良く見れば、魔理沙の表情には色濃い疲れが滲んで

いた。

またぞろ新スペルの開発にでも夢中になって夜更かしでもしていたのだろう。珍しく素直なもの、神社に寄ったのが本当にただの休憩なのだったとしたら頷けるところだった。

「……なんだか今日は気分が乗らないし、帰るかね」

「賢明ね。そもそもさっきのであந்தの残機-1でしょ」

「あー、もうそれでいいぜ。んじゃな」

ややくたびれた声でひらひらと手を振り、魔理沙は脇に放っていた帽子を掴み、箒を手にはちあがった。

手際よく爪先だけでブーツを探り当て、庭に降りて地面を蹴る。スカートのフリルを揺らしひらりと箒の上へ飛び乗って――

「うげっ!?!」

そのまま思い切り、鼻から地面に突っ伏した。

飛び上った反動で思い切り顔から庭の植木に突っ込み、少女は涙目で赤くなった鼻をさする。

「痛てて……」

「……何やってるの？」

「ああ、いや……おかしいな……？」

呆れる霊夢に、魔理沙は髪に絡んだ落ち葉を払い、  
箒を手に首を捻る。矯めつ眇めつ柄の具合を確かめ、  
穂を調べ、重心を取るように握り、今度は慎重に座る  
位置を調整して箒を跨ぐ。

「……………」

じっと目を閉じ、何事か呟いてしばし集中を凝らす  
ことしばし。しかし、いつもならわずかの間も挟まず  
ふわりと空へ舞い上がるはずの魔法使いの足は、いつ  
まで経っても地面を離れない。

「よ……このっ、くぬっ、ていつ」

箒に跨ったまま、ぴょんぴょんと地面を跳ね——庭  
を駆けまわってひとしきり。

魔理沙は軽く息を荒げて、霊夢の方を振り向いて。

「なあ、なんか飛べなくなっただけだぜ？」

そう呟いた。

## ▼魔法の森 工房における魔法使いの独白

## 結局。

霊夢のところまで夕飯をたかり、魔法の森まで戻ったころにはすっかり夜も更けていた。じじ、と燃えるランプの灯りの下でランタンの火を消し、魔理沙は汗で汚れた額をぬぐう。普段なら味噌汁が冷めない神社までの距離は、歩けば二刻もかかる道のりだった。

灯りにと借りた提灯をたたみ、魔理沙は工房<sup>アトリエ</sup>として使っている奥の部屋へと向かう。

「うーむ……」

森の奥で茸の探索を終えてから、紅魔館まで往復しての弾幕ごっこの連戦。充実した一日には違いなかったが、それらの影響か、流石に全身はかなりの疲労を訴えている。手足は重く、できればこのままベッドに倒れ込みたい気分だった。

だが今はそれよりも先に確認すべき事がある。収穫物をベッドの上に放り投げて、汗に濡れた服を脱ぎ散らかし、シャワーを浴びて身体を丹念に清める。濡れた髪を拭くのもそこそこに、魔理沙は下着のまま工房の机に向かった。

山と積まれた本や実験器具を脇に押しのけ、引き出しから取り出したのは数枚の紙片。

魔法の森の茸から抽出した成分を染み込ませた試験紙に、ナイフで指先を突いて滲んだ血と唾液を垂らす。

乙女の血を吸った試験紙は、数秒ほどをかけて緑から青へと鮮やかに色を変えた。

「……ふむ」

魔法使いの力というものは、単純な技量以外に多くの外的要因の影響を受ける。健康状態、精神状態、月齢に星辰、季節、信仰、地脈気脈、人間関係。千差万別の条件の中で定まらない魔力を保ち、いかに普段と同じ力を行使するか。魔法使いの命題の一つでもある。魔法が使えない、という状況が生じた時、まず一番



最初に疑うべき最悪のケースは、魔力そのものの枯渇だ。

過去、偉大な魔法使いが一夜にしてその魔力を失ったという例は、少なくともあるが確かに実在している。それゆえまず最初に魔理沙はそれを恐れたのだが――

「マイナス二・六。誤差範囲だな」

試験紙での簡易検査のほかに、いくつか他の方法も試してみても結果は同じ。魔力自体に異常は見当たらない。

「ってことはだ」

呟いて、魔理沙は棚上の瓶から取り出した星型の丸薬をいくつか取り出した。そのうちの一つを口に含み、ぽりぽりと齧りながら、残りの星弾触媒を指先で弾く。少女の手のひらから、たちまち光が溢れ出した。星弾はミルクを溶かしたような七色の星光を描いてくると室内を巡り、次々と群れをなして渦を描くようにあたりを飛び回る。

天井にぶつかり、ぱあんと小さな破裂音を残して消

えた星弾を見上げ、魔理沙はようやく納得したように眉間の皺を緩めた。

「特に、魔力に異常がある訳じゃなさそうだな。……となると」

魔理沙はベッド横に立てかけていた箒を取り上げる。もう何年も乗り慣れた、魔女の箒――質素ながら丁寧に編まれた穂先と磨き抜かれた柄。銀星蓬葉竹の箒は、別段いつもと違う様子があるでもない。

重さや手触り、穂の流れも形もいつも通り。長年使い込まれ、しつかり手に馴染んだ愛用のものだ。

だが、

「どう考えてもこいつが原因だよなあ」

濡れた髪をかきあげて、魔理沙は独白する。

魔理沙の愛用している箒は、特段、専門のマジックアイテムというわけではない。

簡単に傷んでしまつては困るため、丈夫でしなやかな竹を材料に用いたり、操作しやすいように柄の具合を改良したり、長距離・長時間の飛行時にはクツシヨ

ンを仕込んだり、風を掴みやすいように穂先を加工し、刻んだりと、さまざまな改造はしているが、基本的には、そこいらのご家庭で使われているものと同じ、ただの箒である。これ自体に飛ぶための魔法などなどは籠められていないのだ。

魔理沙が箒で空を飛ぶためには、箒が箒であることが重要である。空力強化や魔力の伝達などを気にしはじめてしまったら、それはもう箒ではなく飛行魔法の専門収束具である。

箒として使えない箒では、ロクに空も飛べるはずがない。

「……フランのところで穂でも引っかけたか？」

ランプの明かりを大きくして、箒を丹念に検めてみるものの、裂け目も焦げ跡も、欠けた部分も見当たらない。

気付かない程度の変化はあるのかもしれないが、そもそもこの箒は長年魔理沙の相棒として共に窮地を潜り抜け、過酷な戦場を駆け抜けてきた古強者である。

もっと激しい弾幕ごっこで被弾して、大きな損傷を受けた事も少なくない。

それでも機能を損なう事がなかったはずの箒が、見えないほどのわずかな損傷だけであっさりと動かなくなるのは説明がつかなかった。

「ふーむ」

前例のないことに、しばらく難しい顔をして箒を眺めていた魔理沙だが、やがて近くの本の山へと向かい、積み上げられた魔道書の山を引っ掻きまわし始める。

下着姿のまま腕をさすり、ガウン一枚だけを肩にかけた格好で冷えた髪に背を震わせ、くしゅ、と赤くした鼻を擦りながら。

魔法の森の一角にある家の明かりは、夜が白み始めるまで、消えることはなかった。

▼紅魔館、大図書館における魔女二人の会話・1

「——それじゃあ、あなたの所にも来たの？ パチュリー」

「ええ」

少女の声は、高い天井に静かに響いた。

紅魔大図書館。広大な敷地に巨大な本棚の群れが峡谷のように立ち並び、無尽蔵に増え続ける蔵書を蓄える、幻想郷随一にして最大の書庫だ。

本棚と本棚の隙間に設けられたテーブルの片端で、パチュリー・ノーレッジは珈琲を片手に、向かいに座るアリスの顔をちらりとのぞき見る。

「そんなに憤るような事かしら」

静かな——しかし決して聞き逃すことのない喋り方は、彼女の魔法使いとしての技量を端的に示すものだ。五声と六律の口訣を巧みに操る舌先は、咳を交えなが

らも明瞭に言葉を紡ぐ。

こほ、と小さく喉を震わせて、パチュリーは手元の本へと視線を落とし、頁を捲る。その超然とした態度は、相対するアリスにはあまり熱心な態度には思われなかったようだった。

「あまり褒められたことじゃないでしょう。どう控えめに表現しても。……飛べなくなっただなんて、自分が窮地に陥るかもしれないことをあつさり暴露して、あまつさえ魔法使い（魔法師）に解決法を相談しようなんて」

「魔理沙らしいと思うけど。必要なものを欲しがるのには手段を選ばないでしょう？」

「それは盗賊（シフ）のやり方であって、魔法使い（ウィザードリイ）じゃないわ」魔法使いにとつて、工房とそれを取り巻く地下迷宮は自らが拠点として築き隠れ潜む場所であり、間違ってもお宝を求めて潜りこむ場所ではない。

「大体、魔理沙は本業の魔法にだって脇目を振ってばかりじゃない。他の様式に興味を持つのは悪いことじゃないけど、魔法を学ぶのであれば、まずは理論と

実践を修めてからでも遅くないと思うのよ」

「模倣は上達の第一歩ではないかしら？」

「……自分の設計した呪文式をあんなに稚拙に真似られてはいるの？ 許容できるなんて大人なのね」

「魔法なんて他者に披露した時点で公開術式よ、模倣は起こりうるわ。解析だけならあなたもしているでしょう、アリス？」

術式を丸写しさせるような甘いことはしていないつもりだし、魔理沙も矜持にかけてそんな真似はしないでしようしね。ひとつひとつ模倣して似たものを作り上げていくなら、それはオリジナルよ」

「魔法使いとしてそれはどうなのかしら、と言っているのよ」

アリスは眉間にしわを寄せ、紅茶のカップを傾けた。卓上にあるクッキーをひとかけら、口へと運ぶ。食を捨ててかなり経つはずの彼女だが、こうして無意識のうちに味を楽しもうとする癖は抜けていないらしい。パチュリーにはそれが少し羨ましくもあった。

先程からの棘のある態度を含めて考えるに、アリスと魔理沙は些細なことで喧嘩でもしたのだろう。

箒の直し方を求めて、魔理沙はここに来るよりも先に彼女の元を訪れていたのだろうし、魔法使いがその方向性の違いで仲互いをするのは、日常茶飯事だ。

「……見返りなしに、自分の不利を晒すなんて。あまりにも軽率すぎるわ」

「信用されていると考えたら？」

「それが軽率だと言っているのよ。仮にも魔法使いを名乗るなら、相手に手の内を見せないのは最低限の儀礼じゃないの」

「……魔法使いは孤高であれ、ね」

魔法とはつまるところ、魔法使い自身の根源に根差す秘密の力であり、多くの魔法とは「秘す」ことをその力の源とする。誰も彼もと自分たちの魔法を伝え広めるのは、魔法の根源の力を薄めさせてしまうことに他ならないとする考え方があった。

これはそのまま魔法使い同士の対立を意味し、故に

多くの魔法使いは、広く交流を持たず、孤高を愛して迷宮や塔、工房といった自分の領地の中に籠ることになる。

アリスの考え方は魔法使いとしてまったく正しいもので、いつそ理想的とすら言えた。

魔理沙だってそんな風潮があること自体が分かっているくらい子供ではないだろう。それなのに、時々彼女はびっくりするくらいあっさりと、自分のことを曝け出す。

アリスにはそれがどうしても納得いかないことであるらしい。

「……それで、貴方はどうしたの？ パチュリー」

「様式違いの箒の直し方なんて、分かるわけがないからお引き取り願ったけど——何冊か参考書を持ち出したみたいね。それで修復できるとは思えないけど」

「当たり前よ。箒が触媒カタリストや法具アーティファクトだというなら分らないではないけど」

箒で空を飛ぶ魔法は、魔女術ウィック様式などを中心に広く

みられるものだ。妖人花や狂茄子マンドラゴラダチュラを原料とした活性霊的原質——アルカロイドその他の幻覚・覚醒作用を含んだ軟膏を全身に塗って、箒を跨いで局部を刺激する。その性的な高揚感を浮揚の魔法へとつなげるのである。

箒自体にさほど意味はなく、他の物でも代用は利くだろう。もともと魔法的な仕組みを一切持っていないのだから、魔法的な手段で修理などできるはずがない。「でも、そこまで言う貴方なら相談に乗ってあげるくらいはできたんじゃないかしら、パチュリー？」

「単純にそうとも言えないわ。既存の様式なら、ある程度は知識があるけど」

ヴワル魔法図書館という巨大な大法典コーデックスを持つパチュリーは、知識という形であれば他の魔術様式についても知ることができる。が、蔵書があまりにも膨大すぎて、検索性に難があることから即時性にまったく欠けるのが致命的な欠点であった。

パチュリーの見立てでは、魔理沙の魔法は独自性の強い癖のあるものだ。大鍋、蟬燭、箒と、象徴には新

興の様式である魔女術を取り入れているが、丹葉を練り、草木を煮詰めて魔法を作る一面はそれよりも遙かに古い垣根の魔女を思わせる。

そしてそのどちらも、魔理沙の魔法様式の本質ではないとパチュリーは推測していた。

「伝聞になるけれど、あの河童の子、いたでしょう？」

河童にとりの名前は知っていたが、わざと口には出さずにパチュリーは言った。

山に住む河童たちは、妖怪の中にあつて高度な科学技術をもつことで知られている。閉鎖的な性質とされている河童の少女が、地底からの怨霊騒ぎの時に魔理沙に協力を申し出たことは、少なからずパチュリーやアリスを驚かせた。

「魔理沙は、あの子と道具屋の店主と3人で、箒に化石燃料やエンジンを積んで改造していた事があるのよ。ちようどレミイが月に行くの行かないのって騒いでた頃かしらね。

……結局、かなりの推力は出たらしいけどその分重

量が増えたのと、飛ぶのに必要な燃料を積んだら全然飛ぶ役には立たなくて、元に戻したみたいだけど」

テーブルの上に、内燃機関で動く外界の乗り物の資料を広げるパチュリー。

色刷りの丁寧な資料ではあるが、三面図や寸法幅も出鱈目なそれは、およそ設計などの役に立つとも思えなかった。この写真一枚からその機械の設計を起こし、組み立てて実際に動かして見せたというのなら、驚嘆に値する事実だ。

「これを、魔理沙が？」

「少なくとも、相方に作業を任せきりって事はなかったようね」

「……………」

資料を前に、アリスは眉間に皺を寄せ、じっと考え込む。人形師としての彼女はいたくプライドを刺激されたらしい。

「これは極端な例かもしれないわ。でも、魔理沙は個別の様式に拘っていないことは確かかしら。実践者と

して必須の夜会や秘儀参入にも固執していない。以前に強い導師精霊の教えを受けていた形跡はあ  
るけれど、その割に独自色が強いわ。まるで――」

「……無理やり、様式を変えたみたいに？」

言葉を切ろうとしたその先をアリスに続けられ、パ  
チュリーは小さく息を飲んだ。自分しか気付いていな  
いだろうという推測に、目の前の人形遣いは至ってい  
たらしい。

そう言えばアリスと彼女は古馴染みのはずだな、と  
思い返し、図書館の魔女は内心の動揺を隠して舌を動  
かす。

「そうね。意図的に、別の様式を覚えようと――いえ、  
それまで身につけた魔術様式を使うまいとしている節  
があるわ。魔女術の影響が濃いのに、わざわざスペル  
カードに星を象徴としてしているのも、考えてみればい  
ろいろ不自然よ」

三精――世界を象る日、月、星の三要素のうちのひ  
とつ。それを魔法の原型に選んでいるということとは、

より大きな力への渴望を示している。それを、ただの  
未熟な少女の、拙い憧れで片づけてしまつて本当にい  
いのだろうか

普通の魔法使い、霧雨魔理沙。彼女に対する思いは  
アリスも同じであつたらしい。二人の魔法使いは揃つ  
て吐息した。

「――で、その魔理沙は今、どうしてるのかしら」

「ああ、それなら……」

▼紅魔館、地下室における吸血鬼との逢瀬

「魔理沙ー!!」

「うお!?!」

地下室の重い扉を開けるなり、フランドールはぱあっと顔を輝かせ、広げていた本を放り出して、魔理沙に飛びついてきた。勢いのまま絨毯の上に押し倒された魔法使いの鼻先に、あどけない少女吸血鬼の顔が迫る。

数百年を生きているはずの不死の王たる気高さ、妖艶さ、恐ろしさは消えさり、フランドールの表情は大好きな友人の来訪を喜ぶ無邪気な少女のそれになっていた。

目の前の人間がほんの指先のひと弾きで消えてしまうことを理解しているのか、フランはまるで猫のように魔理沙に身体を擦りつけてくる。

「今日は何して遊ぶの!? 私、いっぱい新しいスペル考えてきたんだから!」

きらきらと瞳を輝かせるフランを、魔理沙は抱きかかえるように身体の上から下ろす。

「残念ながら本日の霧雨魔法店は品切れだ。よって弾幕ごっこはお預けだぜ」

「えー?!」

楽しみにしてたのに、と不満そうに口を尖らせるフランドール。魔理沙はそれをなだめて軽く手を開き、「ま、たまにや女の子のしらしくのんびりするのでもいいだろ。いつも弾幕ごっこばかりで、落ち着いてお茶も話もしてないしな」

「うー……いいけど、ちゃんと遊んでくれなきゃだよ」

「そりゃ勿論だぜ」

先程までフランの寝そべっていたソファに腰掛け、魔理沙は落ちていた本を拾い上げ、埃を払う

「何読んでたんだ?」



「良くわかんないけど難しい本。お姉さまが持つてこさせるの。淑女になるには教養が必要だから、もつと読みなさいって」

「レミリアも大概過保護だな。……なにに？」

かさかさと干からびた表紙には装飾の強い独逸語の文字列が並んでいた——『屍食教典儀』。

魔理沙は思い切り顔をしかめて、魔道書を元の場所に戻した。

「だったら魔理沙が教えてよ！ それ、魔法の本なんでしょ？」

「あー……魔法、ねえ……」

曖昧に言葉を濁し、魔理沙は中に視線をさまよわせる。魔法というよりは禁忌の類だが、いったいレミリアは何を思っこんな本を与えたのか、割と本気で頭を抱えなくなる。

「そういうのはパチュリーが教えてやるもんじゃないのか？」

「パチュリーの講義って回りくどいんだもん。お姉さ

まは意地っ張りだからいつも適当に分かった振りしてるけど。あの子ってお喋りは好きでも先生には向いてないと思うわ」

フランの評に、魔理沙はさもありなんと頷く。

「そうだな、勉強は面倒で結構だが、知りたい事は知りたいときに知っておくべきだな」

フランドールの知識は、五百に近いその年齢に比べてひどく歪なものだ。彼女の本質を示したような、畸形の翼は、生来の狂気を象徴している。そんな彼女は彼女なりに、自分に足りない知識を埋めようとしているのだろう。それがレミリアを過保護にさせる原因でもあるのだろうが。

「ねえ、魔理沙。なにかお話して」

「そうだな……この前の月の話でいいか？」

「うんっ」

星と月を装飾に刻んだ天蓋の下、魔理沙のはじめた月面侵略戦争の話に、フランドールは目を丸くして聞き入っていた。

館の外にも余り出たことのない彼女は、遙かな月に對しても他の吸血鬼が抱くのよりも純粹で素直な感情と憧れを持っていたらしい。

月の都でのレミリアの『活躍』にひとしきりおなかを抱えて笑い、話題はお互いの近況へと移る。

「じゃあ、魔理沙、飛べなくなっちゃったの？」

「ああ。……そんでパチュリーのところに忍び込んでみたが、ありや酷いもんだな。一番まともなのが司書の悪魔ってのは何の冗談だ？ 仮にも図書館なんだからもう少し来客のこと考えた方がいいぜ」

くすくすと笑い、フランドールはすい、と魔理沙に身体を寄せてくる。

「魔理沙は、飛べないと困るの？」

「そりゃな。不便さは半端ないぜ」

「ねえ、じゃあ私が魔理沙を飛べるようにしてあげようか？」

いつの間にか。必要以上にフランの顔が近付いてきていた。耳元でささやく悪魔の妹とともに、首筋に熱

い吐息がかかる。

小さな手がまるで鋼鉄の万力のよう腕を掴み、ベッドの上に魔理沙の身体を固定する。紅い唇がかばりと開き、桜色の舌が艶めかしく白いうなじを舐める。

「ね、まりさ？」

首筋にちくりと食い込む牙を感じ、魔理沙は努めていつもの調子を保ちながら、フランをやんわりと押しとどめた。

「――遠慮しとくぜ」

「えー」

不満そうな声を上げるフランドール。吸血の加減が良く解らずに、ついつい壊されてしまう哀れな犠牲者が日々増えていると聞いて、素直に身をゆだねる気分にはならない。

「うーん。魔理沙だったらうまくいきそうな気がするんだけどなあ」

ぱたぱたと、色鮮やかな畸形の羽根を揺らして、残念そうな顔の妹様。妖怪と人とは死の概念は別のも

のだが、吸血鬼にとつてはさらに話が違ふ。姉以外の家族をほとんど知らずに生きてきたフランドールに、  
つても、その価値観は根強い。

吸血鬼への〈転向〉が人としての死と同義であるとは、幼い吸血鬼には思いもよらないことの方だった。  
口を尖らせるフランドールに、魔理沙はぽんぽんと  
箸を示してみせる。

「私はこいつを直したいんであつて、飛びたいわけじゃないからな」

「？」

意味が分からないというように、フランドールはこ  
くんと首を傾げる。果たして理解してもらえら  
かと思ひながら、魔理沙は頭をかいて彼女を膝の上  
に招いた。

「……うん。フラン、もし今日から血が吸えなくな  
ると、能力が使えなくなるのと、どっちがいいか  
つて聞かれたらどうする？」

「どうって？」

「フランのものを壊す程度の能力つてのは、べつに吸  
血鬼の力つてわけじゃないだろ？ でも、その能力は  
フランだけの力だ。それがなくなつたお前と、吸血鬼  
じゃなくなつたお前は、どっちが元のままのフラン  
ドールだ？」

『ありとあらゆるものを壊す程度の能力』は、この  
気の触れた悪魔の妹の、もっと存在の根幹に結びつい  
た能力であると、魔理沙は思う。

「んー……」

フランはしばし、難しい顔をして首をひねり、やが  
てはあつと笑顔を見せた。

「えつとね、魔理沙」

フランはすい、と細く骨ばつた手を伸ばす。

部屋の隅に積み上げられていた趣味の悪い縫いぐる  
みの一つがふわりと宙を浮き――彼女がきゅつと手を  
握り締めると同時、ばちんと弾ける。

破裂というよりは、見えない腕に齧り取られたよう  
に。臓物<sup>内臓</sup>を撒き散らして地面に転がった縫いぐるみを

見て、フランはにこにここと笑う。

「そんな五月蠅いこと言う奴は邪魔だから壊しちゃう！」

「……成程な」

実に狂気溢れる答えに、魔理沙は逆に感心していた。

「お前さんは魔法使いでも魔女でも無くて、魔法少女なんだな」

「なにそれ？」

フランドールはきよとんと眼を瞬かせる。分からないなら分からないでいいぜ、と答える魔理沙に、悪魔の妹は少し不満そうに頬を膨らませた。魔理沙はそんな彼女の頭を撫で、

「残念ながら魔理沙さんはそうはいかなくてな。飛び方一つにも拘りつてもものがあるんだ。美しくなきやいけない。こう見えても玄人だからな」

「そういう無駄な事にばかり一生懸命なんだよね」

無邪気に鋭い言葉をぶつけてくるフラン。悪魔の妹は人間関係の破壊も得意である。が、今回ばかりは魔

理沙も素直に頷いていた。

「その拘りつてのが重要なさ。魔法使いの矜持つてやつだ」

「形振り構わなくても大差ないから、カッコつけようって事？」

「そんなもんだな」

手段を選ばなくとも、卑怯に徹しようとも、絶対に届かないと分かっているからこそ。自分らしいやり方でそこに辿り着きたいと願うのは、きつと無駄ではないと、魔理沙は思う。

「なあ。フランは彗星って見た事があるか？」

「うん。前に壊したことあるよ」

「そりゃダイナミックだな。」

……私が魔法使いになろうって思ったのは、まだずいぶん小さな頃だったんだが、彗星を見た年だったんだ。彗星の事をほうき星って言うんだって知ったのはずっと後だったけどな」

だから、魔法使いになる時に箒で飛ぶことにしたの

さ、と。

魔理沙は言う。

「ふうん……。でも、それくらいで飛べなくなっちゃうなんて、人間って不便なのね」

「ああ。面白いぜ？」

フランドールに答えて、魔理沙は白い歯を覗かせた。

---

▼紅魔館、大図書館における魔女二人の会話・2

「魔理沙なら今頃、妹様のお部屋で密会の最中ね」

「ああ、そう」

耳にするなり、アリスの不機嫌さが二割増しになったことに対する苦笑を、パチュリーは咳で誤魔化した。「吸血鬼と相談しても解決にはならないと思うけれど？」

「あら。妹様は優秀よ。嫉妬したくなるくらいに」

「……トレメールの氏族？ 串刺し公の末裔なんて眉唾だと思っていたわ」

パチュリーの言葉に、アリスは訝しげな顔をする。

確かにこの幻想郷で、吸血鬼に詳しい魔法使いはこの図書館の魔女を覗いてそういないだろう。

「レミイも同じようなものだけだね。吸血鬼の本質は、個体としての肉体ではなく、その身に受け継がれた血

脈なのよ。流れ打つ血脈は数千年を繋ぐ魔法そのもの。それが血族全ての意志を定めて、経験を共有する。……それが魔法にとってどれだけ有用か分かるでしょう？」

吸血鬼が尊大で傲慢なものそれが理由である。ひとりの吸血鬼が頭を下げるということは、その血族全てが同じことをしたのに等しく、彼等吸血鬼にとっての死とは、血族全ての破壊であるからだ。

「レミイと会ったのがあと百年早ければ、私も紅スカレットの血族に転向することを考えていたと思うわ」

「妹のためを思うなら、それも良かったんじゃないかしら」

眉唾だという表情のアリスに、パチュリーも小さく微笑む。

「妹様のご気性はあの通りだからね。……欠けた肉体はそれを埋めるための異能をもたらずものよ。吸血鬼の本質は肉体ではないのだから、答えは自ずと分かるはずね。」

……もつとも、魔理沙はそれをどこまで理解しているかどうか怪しいところだけだ」

畸形なのは、血そのもの。カマリリヤの最後の血族が産み落とした忌み子は、産まれながらの鮮血魔法の射手だったのだと、パチュリーは語る。

フランドールの魔法は、誰にも真似のできないものだ。彼女独自の精神世界——言葉飾るなら、常軌を逸し一線を踏み越えた場所にある。

「魔理沙だって、間違っても妹様の眷族になりたくはないでしょうしね」

「私にはそこまでして人間であることに拘る意味も良く分からないわ。……吸血鬼になれってことじゃないけど」

そんなのはいかにも非効率的だ、と言わんばかりに、アリスは卓上に視線を向ける。 unnecessaryなものを切り捨て、削り落とし、ただ魔法に邁進すべきという、如何にも魔法使らしい言論である。

自身の工房の外であるということからか、どうも警

戒が強いなどパチュリーは思う。魔理沙が同席している時はそんな様子も見られない筈だが——それともその時は自分も彼女の様子が眼中に入らないくらいに浮かれているのだろうかと思ふ。

「真似をしている時点で三流にもなれていないのよ。人間が魔法を使っているだけ」

根本的に、魔法使い同士は相容れない者たちである。繰り返しになるが、魔法とは己の根源に根差すものだ。自分がしたいこと、そうありたい姿の実現である。ゆえにパチュリーは動かない大図書館の書監として無数の魔道書に囲まれ、書を読み、管理し、自ら書をしたためる。アリスは第六階梯の人形遣いとして無数の人形達を作り、呼び、操る。

お互いの魔法の根本は、たとえ魔法使い同士と言えども理解不能であり、不可侵なものだ。突き詰めれば魔法使いは、自分以外の全てのものが不要であり、排除すべき異物であるとも言える。相互契約の上で歩み寄ることはあっても、心からの友人など作ることとは

許されない。

常々、スペルの模倣をやめようとしないう魔法理沙のやりかたは、アリスにとって我慢のならない事であるらしい。元人間というアリスの身の上が、殊更に魔法使いたらんと規範を求めているのかもしれないと、パチュリーは思う。

もともと彼女が胸の内の憤懣を、こうして形にする相手も少ないのだが。

「――アリス。あなたは魔法理沙に魔法使いになつて欲しいと考えているのかしら？」

「そうね」

問われ、珍しくアリスは何かを思案しているようだった。

「この環境じゃ工房を構えるのも儀式を行うのも一苦勞だし、研究も容易じゃないし。様式が異なるとしても、同志がいるのはお互いに理のあることじゃないかしら」

「あら。光栄ね」

「茶化さないで。それに、魔法を修めようと思ったら、魔法使いになるのは必然のことよ」

「……ふむ」

パチュリーはようやく、アリスの態度の理由に思い至る。

要するに、これまでの非難めいた言葉の真意は、魔法理沙に理想的な魔法使いであつてほしいという期待の裏返しなのだ。

幻想郷には魔法使いは多くはない。魔法書の入手先も豊富とは言えず、実験や研究に必要となる靈的活性原質の収集や精錬にも手間がかかる。そのたびにあちこちの勢力に頭を下げ、交渉し、取引して回るのは実に骨の折れる作業となる。パチュリーのようにパトロンを持ち、紅魔館の顧問魔術師としての立場があるのでなければ、さぞ苦勞していることだろう。

アリス自身、どうしても手の及ばない作業については、この大図書館の工房を借りているほどだ。魔法理沙の構える魔法の森の邸宅に、大規模な作業に耐えうる



だけの設備があるとはとても考えにくい。

円環を組むのも魔女会を開くのものにも苦勞する身としては、じれったい後輩にやきもきする気分は分らない。

魔法使いの大原則にしたがつて、孤高であることを選んでいるアリスには、それも彼女への不満の要因となつてゐるのだらう。

顧問魔術師としてはそれなりの苦勞——多くはパトロンであり友人でもある吸血鬼の我儘に付き合ねばならないということ——もあるのだが、それは余計な言葉だらう。

「正式な契約があるわけでもないのだしね」

「ん、何？」

「いいえ。独り言よ」

だが。そうして魔理沙のことを気にかけてゐるアリスも、同時に魔法使いとしてはまだまだだ、とパチュリーは思う。否、あるいは——この幻想郷という場所には、魔法使いにはあまり良い環境ではないのかもしれない。

ない。妖怪の賢者が治め、外界に存在を許されなくなつたものが幻想となつて流れつくこの理想郷で、秘儀も叡智もあつたものではない。

「成る程、レミイの言うこともあなたがち出鱈目ばかりでもないわけね」

魔法使いという生き物は、俗世を見下し、世界の真理を胸に抱え、それを知らずに平穩に生きる大多数の人間たちを衆愚と笑わなければ存在しえない、実に厄介な代物なのだらう。

「……貴方はどう思うの、パチュリー？」

「さあ、どうかしら」

曖昧に言葉を含ませ、パチュリーは傍らの本の山から一冊の書を抜き取り、頁を捲る。

「人から魔法使いになつた例は、他にもあるわ」

▼ 命蓮寺、僧坊における聖人の説法

命蓮寺。昨年ここに開かれた妖怪と人間の共存を掲げる奇矯な寺は、最初こそ奇異の目を集めたものの、今では多くの信徒と檀家を獲得するに至っている。

僧坊に設けられた十畳ほどの畳敷きの大広間で、魔理沙は座主の白蓮と向かい合っていた。里にも近いこの寺の境内は、今日も人妖で賑わっていたが、この離れまではその喧騒も遠い。

護法入道を連れた頭巾の尼僧がお茶を替えて退出し、障子が閉じられたのを見、魔理沙は軽く肩をすくめ、「……ってわけだ。あちこち回ってみたが、解決法どころか手掛かりもさっぱりだな」

「お察します」

本当に悲しそうに、表情を曇らせる白蓮。

他の妖怪相手なら皮肉か何かだろうと勘繰る所だが、

彼女に至ってそれはないだろうと思われた。

彼女との付き合いは深いとは言えないが、その人となりは一度でも話せば十分以上によくわかる。差別なく、区別なく、あらゆるものを救い助けようとする、心からの善意だ。

その普遍さはある意味、霊夢よりも分かりやすい。

「本来は筋違いかもしれないが、なにか参考になる事が聞ければと思つてな」

「いえ。仏の道にあるものが教えを求める者を拒んでどうして人が救えましょう。私の知ることによければ、どうぞお聞きください」

「ああ、正直に言つて、少しでも情報が欲しい。藁にもすがりたいって奴だ」

魔理沙は明け透けに、役がない事を含めて手札をさらけ出す。こうした一面がアリスを苛立たせる原因となっているのだが、本人は気付いてもない。

やや脱線しながらも続く魔理沙の説明を、白蓮は相槌を挟むことなくじっと聞き、静かに頷いていた。

「……って訳だ」

「……………」

話を聞き終え、白蓮は静かに瞑目した。

「では魔理沙さん、お聞きますが——本日、こちらへはどうやっていらっしゃいましたか？」

聞かれ、魔理沙はにやりと口元を歪めた。

「そりゃ、もちろん飛んできたさ」

——そう。

魔理沙は、決して筭でなければ空が飛べないわけではない。必要があれば他の方法で、いくらでも空を飛ぶことができる。

「そうですか」

その答えを予想していたかのように、白蓮の笑みもまた穏やかなものだった。

「だとするなら、やはり魔理沙さんの方に問題があるのではないかと思います」

大魔法使いは静かに言葉を繋ぐ。

「空を飛ぶという事に限らず、魔法とは、本来人間に

はできない事をするための法理——理と領分を超えた行いです。その本質は、人間をやめることに他なりません。仏門にもそうした法理を超える力を求める一面がないとは言いませんが、人として触れてはならない禁忌なのです」

「……流石、坊さんは言う事が違うな」

「そうした観点からみれば、人が魔法を行うために必要とする触媒や法具は、魔法には本来不要なもの。そのようなものを失くして、自在に法理を我がものとするのが魔法の真髄です。魔法の本質とは、魔法を使うことでも、魔法を覚えることでもなく、己自身が魔法と成ることなのですから。」

呪文や触媒を使って威力や精度を上げねばならないということは、それらの助けを借りなければ十分な威力や精度が保てないほど未熟である、ということですよ」「いやはや、耳が痛いぜ」

「……お気を悪くされたのなら申し訳ありません」

既に人間としてのパラメータを限界までぶっちぎっ

た白蓮だからこそ言える理屈なのだろう。口調こそ穏やかではあったが、その内容は魔理沙を侮辱している<sup>と取られかねないものだ。</sup>

「箒もそうしたものの一つです。私に魔理沙さんの魔法の仔細までは分かりませんが、たとえるなら松葉杖のようなもので、それがなければ飛ぶ事ができない人間が使うものでしょう。」

でも、健康な脚で松葉杖を使うのは、かえって歩き辛くなってしまう」

「……………」

「思うに、魔理沙さんの実力というのは、既に人間の域を超えつつあるのではないでしょうか。——少なくとも、飛ぶことに箒を必要としない程度には」

「持ち上げられても何も出ないぜ？」

肩を竦めておどけて見せる魔理沙。しかし白蓮は、あくまでも真摯な態度を崩さない。心から、目の前の年若い魔法使いを教え導こうとしているのだった。

「……恐らく、以前から自覚はあったものではありませ

んか？ 私と逢うしばらく前、魔理沙さんはあの魔砲を撃つ事を止めていたと聞きます。なぜ、そのような事を？ あの呪は、魔理沙さんを『普通の魔法使い』たらしめる大切な魔法だったはずです。それを使わなかったのは何故ですか？

まさか、撃ちたくても撃てなかったのではありませんか？」

「……ハンデだぜ、って言っても信用ないか？」

言葉を切った白蓮と、魔理沙の視線が静かに絡み合う。僧坊には穏やかな秋の午後に似つかわしくない静寂と共に緊張感が満ちてゆく。

「魔法という、世の理ことわりを超える行いを成すには、人間はあまりにも無駄が多すぎるのです。それ故に人は多くの触媒を、法具を、呪文を、儀式を用いて、魔法を使いやすくしようとする。これは神仏の力を借りるのにも同じことが言えます。神道であれば己を俗世から遠ざけ、穢れを避け、清らかに保つこと己を神の器とするわけです。いかに上手く魔法を使うかというこ

とは、自分をどれだけ魔法へと近づけられるかの手段  
と言い換えてもいいでしょう」

そして、その果てに。人間はより強い魔法を求めて、  
人間である事を止め、『魔法使い』に成るのだ。

「……厄介な話だな」

苦笑いと共に、魔理沙は呟いた。

それは魔法に魅入られた者たちの、業のようなもの  
かもしれない。

魔法使いに成る事は、昆虫の脱皮にもたとえられる。  
人間だった頃の自分を不完全な自分とし、魔法使いに  
成る事でやっと一人前になれたと喜ぶ。

魔法に憧れ、魔法を使うような連中は、人間である  
事を嘆くのだ。魔法使いとして自分がいかに未熟で不  
完全で、如何に出来損ないであるのかと。しかしそんな  
魔法使い見習いを見て、まともな人間は言うだろう。

——ああ、なんて気の毒に。

あんな事を言うなんて、あの子はきつと気が触れて

いるのに違いない。

「魔法使いとは魔法を使うための種族。魔法を使うも  
のが食と虫を捨てて魔法使いへと成るのは、必然なの  
です。魔理沙さんはその過渡期にあるということとし  
よう。このままですぐに致命的な弊害が出るという事  
はないでしょうが、いずれは心身に強い負担が生じる  
事も考えられます」

「……なんだか、余命宣告されてる気分になってきた  
ぜ？」

「それだけ大切な事なんです、魔理沙さん」

いまいち真面目に取り合う様子のない魔理沙に、忠  
告する白蓮の表情は真剣そのものだった。あるいは昔  
の自分自身を、魔理沙に重ねているのかもしれない。

「魔理沙さんは、いずれは魔法使いになることを考え  
ているとお聞きした覚えがあります。以前に魔界につ  
いても興味を持たれていましたよね」

「予定は未定だけだな」

「もしその気がありなら、渡界先のお世話くらいは出来るかと思いますが」

魔理沙はゆっくりと湯呑みを傾け、大きく息を吐いた。

ちょうど刻限になったのだろうか、境内の鐘を衝く音が間もなく夕方が近い事を知らせていた。

「――魔法使いつてのは難儀なもんだな。魔法を使ってるつもりが、いつのまにか魔法に使われるようになってる」

己を魔法へと近づけるということは、そう言うことだ。

人間をやめてすら実現したい願いのために、それを望んだはずの自分までもが、失われてゆく。

「魔法使いは、魔法使いにしか成れないが、それはちよつとまだご免被るな」

「危険を承知で、人のまま魔法を使うと？」

「……ああ。しばらくはそのつもりさ」

偉大な先達の忠告を無視してまで、真っ直ぐ答える

魔理沙の視線は、なによりも固い決意を秘めていた。

▼紅魔館、大図書館における魔女二人の会話・3

「……命運寺の彼女ね」

聖白蓮。幻想郷にやってきた大魔法使いの名を、アリスは陰鬱に呟く。

寺の落成とともに挨拶回りにやってきたときに一度顔を合わせた程度の関係だが、その時の印象は強く目に焼き付いていた。もとより幻想郷に現れた大魔法使いの動向は、同じ魔法使いとして無視できないが——妖怪と人間の共存を説く仏門の徒を肩書きに持つ魔法使いというのは、あまりにも風変わりだった。

「古今東西、救世なんて口にする人種は、本物の聖人が狂人か、でなければ詐欺師くらいしかないと思うわ」

アリスの言葉にパチュリーも同意する。詐欺師は自覚して嘘を吐くが、残りの二つは自分の妄言を心から

信じているという意味で概ね似たようなものだ。

つまり、揃いも揃ってろくでもない。

「延命と不老、肉体強化の拡大魔術。エンハンス・ブデリスト様式仏門を装っているけど、あれはむしろ、魔界の様式に近いものよ」

苦々しくアリスは言い放つ。

貧弱な土地、果てない荒野、けれど魔素だけは馬鹿みたいに溢れている世界それが魔界だ。たった一人の気紛れな神が、その人智を絶する力で生み出した世界の、歪で禍々しい魔法様式。呼吸するように奇跡を起こし、視線一つで命を産み出す。魔界にあって神の業とされたその様式は、その実、現世においては無尽蔵にあたりの魔素を食い散らかして、呪力圏を侵食し己の支配領域を広げてゆく、禁忌の様式である。

「汚染様式——いえ、専門化というよりも偏移ね。技量はいくつかのカテゴリを除いて素人同然。魔法も、体術も、未熟とも言える拙い技術を、限界振りしたパラメータで強引に補っているのよ。その上、本人はそれに不都合も感じたことはない」

硬い地面に穴を掘ろうとしたときに、多くの者は道具を必要とする。シャベルやスコップはその為に作られたものだ。手元に道具があるならば、わざわざ使い辛い木の枝で掘ろうとする事はないだろう。だが白蓮は簡単に素手で穴を掘ることができる。だから、道具を使うことの意味が理解できない。

「聖人は衆愚を導けるのか。哲学的な問いね」

「彼女の根源、彼女の魔法は、自分のために、自分が生きながらえて助かるためにあるものよ。それなのに彼女は人を救済しようとする。その志は宗教家としては実に立派でしようけれど、あまりに歪。少なからぬ弊害を生むわ」

白蓮は決して魔法使いとして恵まれた才能を持っていない。その才覚は凡人と比べても劣るかもしれない。そんな彼女は、死の足音に怯える老境に至ってから、恐るべき執念で常軌を逸する魔法を身に付けたという。それは狂信に近いエゴの塊だ。寺の盟主を失って嘆き迷う多くの信徒を投げ捨て、死にたくない、老いた

くないの一心で得た魔法が執着でなくてなんだというのか。

彼女の救いの手は、つまり、優れた者が惨めな相手へと見せる余裕。己を飾り立てるための優越感と顕示欲によるものなのだと、アリスは言う。

単純で、シンプルで、根源に近しいほど良いという魔法使いとしての正論は、そうではない生き物たちとも軋轢を生む。

木端妖怪にしろ妖精にしろ、知恵を付ければ本能のまま、自分の生まれのままに暴れることは控えるものだ。いつまでも好き放題を続けている事はできず、自分の首を絞める結果になる事が分かるから、虫の妖怪だって虫に世界を征服させるなどという主張を声高にする事は控える。

だが、魔法使いはその逆だ。力を付ければつけるほど、己の本質にのめり込む。そうすることがより大きな魔法を使い、自分だけの魔法へと近づく事になるのだから。



多くの魔法使いは、自分の生まれを悔いる。

あと百年早く生まれていれば、今は失われた残る多くの秘義、秘法、その残滓の一端でも、垣間見ることができたらうに、と。

基本的に、魔法使いという生き物は、多くの生命が見ているのとは逆を向いて生きているのだろう。妖怪の多くは力を得るに従ってその思考を、意義を、意識を停滞させてゆくものだが、魔法使いは、一方向にしか流れない時間の中で、過ぎ去ってゆく過去を求めている。

「……魔理沙は、魔法使いになるつもりかしら」

「魔法使いとして歩むのなら、避けられない事ね。結局は魔理沙がどうしたいのか、ということなのだけど」

「そんなの分かるはずもないじゃない」

「あら、魔理沙とは貴方の方が古いんじゃないの?」

「……少し、会ったことがあるだけよ」

古い思い出だ。実際の月日はともかく、もうずいぶんと昔のようにアリスには感じられる。魔界との封印

が緩んだ事に端を発する、あの異変。

あの頃の魔理沙は、今のように自分だけの魔法を使おうとはしていなかった。

博麗神社すら敵に回した強大で凶悪な悪霊の徒弟となり、まるで天賦の才を持つように、災厄を、災禍を己がものとし、自在にいくつもの魔法を生み、呼び起こしていた。

だからこそアリスは魔界異変の時、禁書までも持ちだしてなお魔理沙に勝てなかったのだ。

霊夢とも決して仲は良くなかったように思う。今でも喧嘩している姿は良く見るが、あの頃の魔理沙と彼女はライバルというよりは、まるで――

「……アリス?」

軽い頭痛を覚え、アリスは小さく首を振った。こちらを窺ってくるパチュリーに何でもないわと答え、半分冷めた苦い紅茶で無理矢理に唇を湿らせる。

いずれにしても。魔理沙はその事を、努めて忘れようとしているようにすら思える。かつて偉大な師に指

示していた事をなかったことにして、自分だけのたどたどしい魔法を使う。

その不合理、執着は、アリスには理解が及ばない領域だ。

「魔理沙の魔法は、はっきり言って拙いけれど、決して魔法使いとして不十分だとは思わない。それなのにどうしてわざわざ、あんな効率の悪い事を続けるのかしら。愛着ということなら分からなくもないのよ。でも、他に代替手段がある魔理沙があの手で拘るのが分からないわ」

魔理沙は別段、筈などなくても飛べるのだ。その事を別段、隠している様子もない。先日も妖精たちを相手しているときにその姿を披露していたはずだった。

「……あくまで私見だけど。あの子は魔法使いであることよりも、霧雨魔理沙であることを選んでいるのではないかしら」

「どういふこと？」  
意味が分からないと、アリスは怪訝な顔をする。

「そんなの、スベルカード・ルール弾幕ごっこにおいては有用かもしれないけど、それ以外のほとんどにおいて無為よ？ 魔法使いとしては致命的な欠点になるわ」

「それが魔理沙にとって優先すべきことなのではないね」

魔法使いとしての矜持よりも、ごくごく普通の人間であることよりも、霧雨魔理沙は自分であることに拘っているのだ。

「話が繋がらないわ。魔理沙は、魔法使いになりたくて家を出たんじゃなかったかしら」

「——他に目的ができた、ってことでしょね？」

少し疲れた様子で呟くパチュリー。アリスにもその続きは良く解った。魔理沙が拘る相手なんて、幻想郷に一人しかいない。

それに、とパチュリーは言葉を継ぐ。

「敢えて自惚れて言うけれど。魔理沙は、私達との関係を損ないたくないと思っているんじゃないかしら」  
「……………」

「この、私達、というのが、私と貴方だけを差していないのが実に厄介な話だけれど」

恐らく、「私だけ」ともう少し飾らない言い方も出来たのだろうが、パチュリーは自身の矜持にかけてその弁舌を拒んだようだった。

アリスも胸の中に形容のしがたい感情を抱え、口を噤む。

それを最後に、大図書館には奇妙な沈黙が舞い降りた。静謐な空間、紙とインクの匂いが満ちた広間に、時間を刻む大時計の振子の音だけが規則正しく響く。

このまま、二人の魔法使いの間に訪れた沈黙は永遠に続くかと思われたその時。派手に窓を破る音と共に、元気のよい少女の声が飛び込んできた。

「よー、パチュリー、アリス、邪魔するぜー」

図書館に反響する挨拶に、二人の魔法使いは顔を見合わせ、揃って苦笑した。

▼ 顛末・魔女は箒で空を飛ぶ

「魔理沙さん、空が飛べなくなったそうですね!? そのことについてお聞きしたい事が——って、ありや?」

大きな風呂敷包みに本日 of 収穫を詰め込んでぶら下げ、箒上の人となった魔理沙をカメラのフレームに納め、射命丸文はペンの尻でぼりぼりと頭をかく。

「飛んでるじゃないですか」

「意外そうに言われてもなあ。飛んでるぜ?」

文はきよろきよろと魔理沙の周囲を飛び回り、首を捻る。

「ピアノ線で吊つてるとか、そういうトリックでしょうか?」

「1、2の3で消えてやればいいのか?」

呆れた様子で答える魔理沙。結局、なんのオチもな

く普通に箒がまた飛べるようになったのだと説明する魔理沙に、文は残念そうな表情をみせた。

「なんだ。せっかくしょぼくれている魔理沙さんが見れると思っていたのですけどねえ」

「残念ながらお前さんの期待しているようなことは何にもなかったぜ?」

「ふうむ」

すぐにあっさりと態度を翻す鴉天狗。実際、彼女にとっては真実どうでもよい事だったのだろう。

「では、いったい何が原因だったんです?」

「それが分かればそもそも苦労もなかったんだけどな」

「原因も結果も因果も不明だなんて、謎ですらないじゃありませんか、やだー!!」

「だから、それを私に言われたって困るぜ」

と言いかけ、魔理沙ははたと言葉を止めた。

「ん、まあ、収穫がなかったわけでもないか」

「ほう?」

文がぴくんと片眉を跳ねさせる。魔理沙はくすりと

笑って、ぱんと箒の柄を叩いた。

「これが私にとって一番いいやり方だったのが分かった、ってことだぜ」

「……ふむ？」

いまいち納得いかない風で、文は首を傾げる。

結局。

魔法使いにとつての箒というのは相棒のような、伴侶のようなものです。長年使いこまれた道具が意志を持つように、倦怠期というものがあってもおかしくはないのだろう。

魔理沙の箒は、その房の中からびよこんと一本、青々とした若芽を伸ばして、私にも乗せる相手を選ぶ権利くらいある、と言いたげだった。

(了)

## 星屑カヴンの箒乗り

初出：東方紅楼夢 7(2011/10/16)

魔理沙にとって空を飛べることというのはどんな位置づけなのかを考えてみたお話。Feaheer's snowさんの「あなたはいつも共にあり」で、箒が壊れた魔理沙がアリスやパチュリーに相談しに行つてのやりとりが、自分の中でどうも違和感がぬぐえず自分なりに解釈し直して作ったお話。

最初にプロットを書いた時点では、魔理沙は自分の努力について人に覚られるのを嫌っており、空を飛べなくなったことを知られたら誰にも相手にしてもらえなくなると委縮して絶望するようなイメージでした。しかし、魔法が使えるが使えるまいが、魔理沙は魔理沙であり、彼女を魔理沙たらしめる要素は他にあるのではないかという解釈が強くなったため、作中のような展開に変更されております。

## くろがねの星乙女

ジヨバンニはばねのようにはね起きました。町はすっかりさっきの通りに下でたくさん灯を綴つづつてはいましたがその光はなんだかさっきよりは熱したという風でした。そしてたったいま夢であるいた天の川もやつぱりさっきの通りに白くぼんやりかきりまっ黒な南の地平線の上では殊ことにけむったようになってその右には蠍座さそりざの赤い星がうつくしくきらめき、それぞんたいの位置はそんなに変つてもいないようでした。

——宮沢賢治「銀河鉄道の夜」



撓しなむ木の枝から、どさりと雪の塊が落ちる。

草木萌動もくもくもどう。人里では春の兆ししるしが雪を割きつて顔を覗のぞかせる季節だが、森はいまだ深い冬の中だ。

白い静寂に沈む山裾の道、脛すねが埋まるほどの深さの雪をざくざくと踏みわけ進む、場違いなほどに黒い装いの少女の姿があった。

尖った三角帽子に乗った雪を払い落すと、蜂蜜のように色の濃い金髪が揺れる。口元を覆う襟巻を外すと、白い息がほうと塊のように噴き上がる。

普通の魔法使い、霧雨魔理沙。流星のように幻想郷の空を駆ける少女の姿はいま、雪に沈む森の中にあつた。

立ち止まった魔理沙は腰に吊るした水筒の中身を少しづつ口に含む。揺れて凍らずにいた茶は、氷よりも冷たく喉を滑り落ちていった。

「……ふう」

冷え切ったお茶も、雪の中を歩き続けて火照った身体には心地いい。じっとしていればものの数分で汗が冷えて、凍えてしまうだろうけれど。

懐炉代わりに動いている懐のミニ八卦炉を探り、魔理沙は息を整え、背の荷物を直して再び歩き始める。

幽かな清音の響きが歩みと共に近付いてくる。冬の装いを残す玄武の沢は、九天の滝より続く雪解けの水を孕んで、いつもよりも勢いを増していた。

「……到着、と」

「遅いよ、盟友」

待ち合わせの場所には既に相手の姿があった。

この沢を住まいにする河童、河城にとり。いつもの作業服の上から褐色の防寒着にくるまった姿はまるで熊のようだ。河原に座り込むその傍らでは瓦斯コンロが青い炎をあげ、アルミのポットがカタカタと音を立てていた。

「よう、もう来てたのか」

振り返るにとりに、魔理沙は白い息を見せて笑う。

「待たせておいて良く言うね」

「途中でちよつと掘り出し物が見つかったな」

魔理沙はごそごそとポケットを漁り、遅刻の原因となった寄り道の成果を示してみせる。

大粒の氷の鱗。氷の張った泉の水底で見つかるこの宝石は、真冬の伊吹が冷えて凝った冬の魔力の源である。この時期にしか手に入らない貴重な魔法の品だった。

「まったく。凍えちゃうかと思ったよ。これだからこの時期、陸の上は嫌いなんだ」

「そんなに寒いならお前も山で暮らしたらいいんじゃないか？」

「あんな軟弱な連中と一緒にしないで欲しいもんだね」  
山童と同じ扱いなんて心外だと口を尖らせるにとり、彼女に言わせれば、これで案外と水の中は暖かいのだと言う。氷が張る寒さに比べれば確かにそうかもしれない、魔理沙は一人納得した。

「おお、これか？」

にとりの座る岩から少し離れた場所に立つ、四角い粘土の柱を見つけて、魔理沙は声を上げた。

河原の石をどけて均した地面の上に立つそれは、小型の粘土炉であった。土台には煉瓦、上部には排気の為のブリキの煙突が取り付けられている。既に長く火が焚かれているとみえ、表面の粘土は乾き、煤に汚れている。

感心する魔理沙に、にとりは腰に手を当てて胸を張ってみせる。

「魔理沙が遅いから先に炉の方が完成しちゃったんだよ。……んで、そっちの準備は？」

「このとおり、細工は流々だぜ」

魔理沙は再度懐を探って、外套の下から一抱えもある袋を引っ張り出した。明らかに服の下には納まりきらないサイズだが、魔理沙のポケットは二重底の魔法のバッグの原理で小さな亜空間になっており、見た目とは無関係にものを収納しておけるように改造さ

れている。

魔理沙が袋を開くと、中には赤茶けた筒状の塊がぎっしりと詰まっていた。形状から狐の枕、あるいは見つかると地名をとって高師小僧などとも呼ばれる、褐色鉄の塊である。河原や水辺のある地域で古い地層から見つけることができ、太古の時代から鉱物資源として用いられてきた。

「御山の方ならいい砂鉄が取れるんだけど……っ、ずいぶん集めたんだね」

「甘く見て貰っちゃ困るな。菌糸の栽培は得意分野だぜ」

「え、これ拾ったんじゃないの?！」

「もちろんだぜ」

胸を張ってみせる魔理沙。にとりが勧めたのは河べりの崖などを歩いて、古い時代の地層から褐色鉄を集めることだったのだが、魔理沙はなんとこれを自作したらしい。

これらの鉄は水辺の稲や水草の茎を取り巻くように



して形成されることが知られている。円筒形をしているのはそのためだ。

魔理沙は魔法の森の湿地に自生する葦の根元に、<sup>レプトスリックス</sup> *Leptothrix* 属、<sup>ガリオネラ</sup> *Gallionella* 属の鉄バクテリアを繁殖させて、水中の鉄分を水酸化鉄にして褐鉄鉱を作り出したのである。

言葉にすれば単純だが、鉄バクテリアによる褐色鉄の生成には非常に厳密な条件が要求される。気温の低い冬季にそれをしてのけるのは生半な労力で出来るものではないだろう。

「なんたって私がつくるものだからな。磁石引きずって砂鉄集めるより、こっちのほうがらしいだろ」

「……そうだね」

胸を張ってみせる魔理沙に、にとりは歯を見せて頷いた。

「これなら、いい鉄が作れると思うよ」



「……鉄？ 鉄ってあの鉄だよね？ なんでもたそんなもん作りたいのさ？」

「できないのか？ 河童はそういうのが得意だって聞いたぜ」

いつも通り神社で開かれた十二回目の新年会。守矢の神様に挨拶に行った仲間たちと別れて境内をぶらついていたにとりは、いきなりやってきた魔理沙にそんな話を尋ねられ、面食らったように眉を寄せた。

「そりゃ、河城の大工房に製鉄炉はあるけどさ……」

材料を分けてくれってことかい？

「いや。私にその炉を使わせて欲しいんだ」

「……はあ？」

魔理沙の意図がつかめず、にとりはますます困惑を深くした。

技術に優れた河童は、製鉄にも深く通じ、集落の大工房には大きな鉄鉱炉を持っている。しかしそれは妖怪の山全体で運用計画が定められて厳重に管理されて

いる。作業にかかわる人員も一人や二人ではなく、にとりの一存で動かすことなどできないし、部外者を割り込ませるなどもつてのほかだ。

「なんとかならないか？」

「そんなこと言ったってねえ……」

いつになく真剣な魔理沙に、にとりも言葉に詰まっ  
てしまう。

魔理沙は魔法使いのくせに河童の技術に理解を示し、無縁塚から外界の道具を拾い集める変わり者だ。地底探検以来、意気投合して、にとりも何度となく一緒に実験をしたことがあった。

とは言え、今回はそう単純ではない。にとりはしばし腕組みをして考えを巡らせる。

「ううん……あのね魔理沙。製鉄炉は無理だけど、別の方法で鉄をつくることならできるよ。これならそんなに手間もかからない」

「本当か？」

「他ならぬ盟友の頼みだからね、任せといて。それで、

用意するものだけ……」

にとりが提案したのは、露天での粘土炉を使った製鉄であった。最初は野焼きで鉄なんか作れるのかと懐疑的だった魔理沙も、にとりの説明を聞くうちにその気になったのである。かくして一月ばかりの間ふたりは準備に奔走し、今日の運びとなったのであった。

「じゃあ、さっそく始めようか」

にとりは魔理沙を伴って河原で火を上げている粘土炉へと向かった。炉の口をあけ、竹炭をざらざらと流し込む。赤熱した炭がさらに炎の勢いを増した。

永遠亭を取り囲む竹林から作った竹炭は、夜雀の鰻屋でも愛用しているという逸品である。不死鳥の炎で不純物を飛ばした炭は、非常に強い火力と持続性を兼ね備えていた。

「随分熱いな……」

「摂氏一〇〇〇度くらい出てるからね。魔理沙、手伝うよ」

「おう」

にとりからブリキの缶を受け取った魔理沙は、褐色鉄をざらざらとそこに投げ入れ、粉挽きの要領で潰し始めた。培養途中で混じり込んだ余分な藻や苔を取り除き、薬研に移してさらに均一になるように丁寧に搗り潰してゆく。

程なく、一袋の褐色鉄は小山のような粉末となった。

「よし。これで全部かな」

「あ、ちよつと待ってくれ」

にとりが鉄粉を炉の中にくべようとしたところで、魔理沙がそれを制した。

首を傾げるにとりの前で、魔理沙は作業用の革手袋を外し、小さなナイフで親指の先に浅く傷を付けた。

指先にふつと浮かぶ赤い血の珠を数滴、鉄粉に振りかけて、普通の魔法使いははにと歯を見せる。

「魔法の隠し味をちょちょいと、だな」

「人間って、変な事するんだねえ」

「お前だって、作ったものに署名ぐらい入れないか？」

「そりゃそうだけどさ」

言い合いつつも二人して粉を丁寧なまとめ、火を上げる炉の中へと投げ入れる。

「よし。……あとは火だな」

にとりに領いて、魔理沙は懐のミニ八卦炉を取り出した。十日あまりかけて練った高密度連鎖燐核の丹薬を詰め込んで、粘土炉の底にセットする。

発火性の強いシャグマアミガサタケの他、数十種の茸や鉱石から成分を抽出して混ぜ合わせ、魔力を練り込んで作る燐核丹薬は、高速で燃焼することで高熱と強い閃光を吐き出す。魔理沙によるとこれは天を駆け、星の世界を行き来するロケットの吐く炎なのだという。魔理沙はこれに指向性を持たせて撃ち出すことで、マスタースパークの火力触媒としていた。

いまは持続性を優先して原料の配合を変え、長時間の火力を維持するように調整してある。程なくぐうぐうと炎を上げ始めた八卦炉が、粘土炉全体に火を回し、黒い煙を立ち昇らせ始めた。

煙突からの煙が徐々に色を薄くしていくのを確認し、

にとりは額に浮いた汗をぬぐってよしと頷く。

「この炉のサイズだと竹炭が五キロばかり要るんだけど、それがなくて済むのはありがたいね。炭素が減ればそれだけいい鉄ができるし」

「後は待つだけか？」

「そうだね、火加減をみるくらいかな。料理と同じだよ」

「任せろ、得意だぜ」

「……意外だね、魔理沙も料理なんかするんだ？」

「馬鹿にすんなよ。乙女には必須のスキルじゃないか」  
軽口を言いながら、二人は炉から少し離れた河原に腰を下ろした。とたんに押し寄せる川面の冷氣に、熱に炙られていた頬が心地よく撫でられていく。

気付けば時刻は夕刻。陽射しは山の向こうに隠れ、橙と紺の混じり合った油絵のような空が稜線を彩る。

「魔理沙、飲む？」

「ん、いたくぜ」

にとりがホーローのカップに淹れた珈琲を受け取り、

魔理沙は熱いそれをそっと掌にくるんだ。冷たい川面の上、挽いたばかりの珈琲の香りと熱が身体の中に染み入るようだ。

煙の残り香に鼻を擦り、吐息。雪解けの混じる川面のせせらぎ、瓦斯コンロの蒼い炎の灯りの下で、にとりはしばし、珈琲の苦みと香りを堪能してから、隣の魔理沙に問う。

「ねえ」

「あん？」

ふうふうとカップを吹いていた魔理沙が顔を上げた。  
「そろそろ教えてよ。魔理沙。どうして急に鉄なんか欲しいと思ったのさ。機械細工するには足りないし、修理なら私なりに頼めば済む話だよ。魔法かなんかに使うつもりだったの？」

「あ……」

魔理沙が軽く帽子のつばに手を添える。わずかに視線を隠すようなしぐさは、彼女がなにかしら話し辛いことを口にしようとしている時の癖だった。

しばし、言葉を探すような沈黙を挟み、普通の魔法使いは話始める。

「特段、なにが作りたいってわけじゃなかったんだ。

……まあ、鉄とか錫とか鉛とか、そのへんを使う魔法ってのがないわけじゃないが、私のはそういうんじゃない」

魔理沙はカップを傍らに置き、ごろんと仰向けに寝転がった。つられてにとりも空を見上げる。夕映えの空にはいつの間にか星の輝きが灯り、早々と天を彩っていた。

「前に、香霖とこの本で読んだんだ」

夕暮の空に燃える、蠟の紅い目玉。翼を広げた鷲仔犬の蒼い瞳。光の蛇のとぐろ。高く歌うオリオンから、小熊の額の上、空の星巡りの目当てとなる極星へ。幻想郷の冬の空の輝きを指でつなぎ、魔理沙はゆつくりと詞を紡ぐ。

「惑星を除けば、こんな風に沢山ある空の星は、みんな自分で光ってる星だ。あいつらは遠い空の果てで太

陽みたいに真っ白に燃えながら、いろんな元素を作ってるらしい。水素、酸素、ヘリウム、硼素、燐、硫黄……。何十億年、何百億年っていう時間をかけて、星は燃え続けて、最後に作るのが鉄なんだ。鉄は安定しててそれ以上燃えないから、重さに惹かれて星の中心に集まる。燃えるものが全部無くなった星は、鉄の重さに負けて圧縮されて、最後はどかん、だ。それが星の一生なんだとさ。

だから、鉄ってのは星の欠片なんだ。一生を終えた星が、歳以後の輝きのあとに残す骸だな。それをこの前ふつと思ひ出したんだ。それで、……私が星の一つも持てないのはちよつと格好悪いなと思ったんだぜ。流れ星は歳の百倍は見てるが、まだ隕石は拾ったことがないからな」

夜の帳が幾重にも重なり、空は闇を濃くしてゆく。ちかりと瞬く流れ星が、夜空を斜めに横切っていった。

「……そっか」

「ああ。……変か？」

「そんなことないさ、盟友」

魔法と鉄は相性が悪いという。けれど、星を好む魔理沙だからこそ、こうして鉄に特別な意味を見出したのかもしれない。それは、彼女だけの魔法といえるのだろうか、にとりは思う。

天を巡る星のくろがね。星<sup>アストライア</sup>乙女の穂先。成程、それは確かに、魔理沙の魔法の象徴なのだろう。

にとりは以前、一度だけ魔理沙の工房の地下にあるという、菌糸の培養室に入れて貰った事を思い出した。興味のあるものを積み上げる彼女の家の中で、そこだけは几帳面に掃除され、丁寧な温度・湿度管理をされていた。

いつも箒に空を走らせ、興味のままに幻想郷じゅうを駆け回る彼女は、きつとなによりも、日々の積み重ねを大切に行っているのだろう。誰のものでもない、自分だけの魔法を掴むために。

「……ありがとな」

顔をそむけて、ぼそりと一言。

敢えて聞こえないふりをして、にとりはまだ熱い珈琲を啜った。



二時間ばかりが過ぎて、あたりはすっかり闇に包まれていた。魔理沙の持ち込んだヒカリゴケのランタンの明かりの中、炉の炎の照り返しが紅く河原を染めている。

どんな作業であれ、明るいうちに済ませるに越したことはないが、今回は魔理沙の魔法のためでもある。星明かりの下でこそ相応しいと考えてのことだった。

にとりが火かき棒で粘土炉の下にある炉口を押し崩すと、そこからどろどろと凝った赤熱した金属が流れ出してくる。

「おお、これで完成か？」

「違うよ。これはノロって言って、……まあ、鉄に残ってた不純物みたいなものさ。これくらいの温度じゃ

鉄は溶けたりしないからね。いま炉の中に残ってるのが鉄の元になるのさ」

「けっこう無駄になるんだな……」

「だからたくさん必要になるって言ったんだよ。最終的に製鉄の原料……銑鉄になるのは全体の二割くらいあればいい方じゃないかな」

「おいおい、ずいぶん贅沢なんだな」

二キロの銑鉄を得るために、おおよそその五倍近い原料と、それと同じだけの炭が必要とされる。その上で実際に加工して鋼として使えるほど純度を保つのは、できた銑鉄のごく一部だ。

「だから、妖怪は鉄を嫌うんだよ。まあ、私は河童だからちよつと違うけどね」

妖怪の中には剥き出しの金気を嫌う者は多い。博麗の巫女が使う封魔針をはじめ、妖怪を退治する武器には鉄が用いられるのがほとんどだ。

鉄や金属の武器は人間の叡智の象徴である。生まれながらに牙や爪を持たない人間が、知識と技術で膨大

な手間を駆け、作り上げ、身に付けた武装こそが、昏き妖怪の棲む闇を斬り裂くものだからだ。

「なあ、にとり、お前ひょつとして、私に——」

「さ、魔理沙、もう少しだよ」

盟友の言葉を遮り、にとりは次の準備を始めた。

さらに一時間と少し。南の空に高らかにうたうオリオンが姿を見せ、炉を燃やし始めてから三時間ばかりが過ぎた。炉が上げる煙が黒から灰色、やがて白に変わったところで、にとりは腰を上げた。

「そろそろ良さそうだね」

背中のアームを操作し、ミニ八卦炉の火を止め慎重に炉を引きはがしてゆく。千度を超える炉内は赤熱し、竹炭が顔をあぶる熱を引き出した。

「まだ熱いから気を付けて。火傷じゃ済まないよ」

「任せとけ」

魔理沙もヒクイドリの羽根で編んだ耐火手袋を嵌めて手伝う。

粘土炉を押し崩すと、その炉の底には赤熱した鉄の

塊があった。不純物を燃やされてひとつに溜まった鉄鉄——「ケラ」である。

赤熱した片手に乗るほどの大きさのそれを、にとりはアームを使って慎重に川面ちかくまで運ぶ。新型アームの耐熱テストも兼ねていたが、予想通りアームのいくつかが不具合を起こしているようだった。

「よし、いいぜ」

あらかじめ河原に深く掘った穴に、引き入れた冷水が満ちたのである。そこに魔理沙が氷の鱗を投げ入れ、温度を低温に保っているのだ。流れることを止めた水面には薄く氷も張っていた。

「せー、のっ！」

タイミングを合わせ、赤熱した鋳を水の中に放り込む。涼やかな水面がじゅうと弾け、猛烈な水柱を上げた。

赤熱した鉄がぐらぐらと水面を沸き立たせてしばし。ようやく鎮まると——川床には黒々とした鉄鉱石が出来上がった。

にとりはふうと額の汗を拭いて身を起こす。

「……上手くいった、かな」

「ありがとな、にとり」

すっかり一仕事終わった気配で、頬についた煤を擦る魔理沙。けれどにとりはわかってないなあ、とアームの指を立てて左右に振ってみせた。

「何言ってるんだい、こんなの里の人間だってふつうにやってることさ。河童が手伝ってこの程度じゃ沽券にかかわるよ」

「あん？」

「魔理沙は本物の星の欠片が欲しいんだろ？ 今からそれを捕まえてくるのさ」

くすりと微笑み、にとりはできたばかりの鉄を拾い上げるとともに、背中のリュックから秘蔵の瓶を取り出してみせた。





「これでいいのか？」

「そうそう。重さの比は3対1だね。できるだけ均一に混ぜないといけないから、偏りが出ないように細かくして」

銑鉄を電動の工具で再び細かく削り、それを瓶の自身の銀色の粉と、重量比通りに攪拌する。言われるままに手伝う魔理沙の困惑が、少しばかり小気味いい。

河原の石をどけ、地面を掘って砂を敷き詰め、すり鉢状に形を整える。そこに小山ほどになった粉末を積み重ねた。慎重に周囲を確認し、火が燃え移るものがないかを検める。

「こりゃいったいなにが始まるんだ？」

「河童の科学は世界一ってね。魔理沙、はいこれ」

「なんだこりゃ。こんな夜に自分から鳥目になる趣味はないぜ？」

渡された黒眼鏡をつまんでおどけてみせる魔理沙に、にとりはもう一つ同じものを取り出し、自分で鼻の上に乗せる。

「対閃光防御用。まともに見ると目が灼けるよ。……もう星が見られなくなってもいいってんなら、止めないけどね」

「それは洒落にならんぜ」

慌てて黒眼鏡をかける魔理沙をみて、にとりはアームを繰り出し、最大限に距離を伸ばしてゆく。穴から十分に距離をとり、地面に身をかがめた。

「魔理沙、離れててね、いくよ？」

「お、おう」

にとりのただならぬ気配を感じ取ったのか、神妙に頷く魔理沙。にとりはアームの先端に摘まんだマグネシウムのリボンに火をつけた。しゅうしゅうと激しく火を上げるリボンを、穴の中へと放り込む。

刹那——

地面を叩き付けるような轟音と共に、弾けるように閃光が瞬いた。白い火柱が上がり、太陽がそこに現れたかのような輝きが閃く。砂の上を鉄火がはじけ火の尾を引いてくると踊り、次々に閃光をほとばしら

せた、

まるで、小さな火山が火を吹いているかのよう。

——あるいは魔理沙の言う、星の最後の輝きがここに落ちてきたのかもしれない。

呆然とそれを見つめる魔理沙を、万が一にも飛び出していないように押さえるにとり。

「近付くと危ないよ。温度がさっきの炉の比じゃないんだ。この反応ってガスが発生しないから熱が連鎖的に上がるのさ。きつと摂氏三〇〇〇度を超えてるはずだね。太陽半個分くらいかな」

「……おお」

少女の返事は上の空だ。斜光用の黒眼鏡の奥からじつと輝きを見つめ、一時も視線を離そうとしない。きつと新しい魔法に使えないかなどと考えていることだろう。

反応が収まったところで、にとりはゆっくり立ち上がり、川面に手を差し入れて水をはじいた。一抱えほどの塊になった冷水が見事穴に飛び込んで激しい蒸気

を吹き上げる。

「もういいよ」

「……なんだ、いまの」

「えーと、日本式製鉄法と違って言ったかな。前にうちの工房の親方が人間の技術者に教わったんだ。理屈は単純だよ。酸化還元反応を利用して、混ぜた金属アルミニウムが三価の鉄を単体に戻すわけさ。これで酸化鉄から純鉄を取り出せる」

数十年前、ふらりと外の世界から訪れたその男がもたらしたこの製法は、河童にとつて驚きのものだったが——すっかり憔悴した様子の彼が言うには、この方は欠陥だらけのものなのだということがわかった。製鉄法などとうたっているものの、戦車一台をつくるのに飛行機百機を溶かすようなもので、まるで費用に見合わない詐欺同然のものなのだとか。

外の世界ではこの夢の製鉄法という触れ込みに、たくさんの艦船や戦車を作って戦争をしたがついていた一部の政府高官が夢中になり、部下の止めるのも聞かず

にいくつもの大きな鉄鉾を潰してまで強行しようとして大問題となったのだという。この騒ぎでいくつもの会社が傾き、たくさんの役人の首が飛んだ。彼はその責任を負わされた一人であつたらしい。

その男がその後どうなつたかまでは定かではないが——河童の大工房にはこうして、幻になつたはずのその製鉄法がしっかりと伝えられた。

にとりは焼けた穴の底にアームを伸ばす。冷えた金属塊は持ちあげるとほろほろと崩れ、その中から鈍い銀色に輝く指先ほどの塊を覗かせた。

「これが純鉄。踏鞴を吹いたって手に入らない、混じりつけない純粋な鉄だよ。ちよつとやそつとじゃ錆びないし、酸にだつて溶けなくなる。普通の鉄じゃ考へられないくらい柔らかくて良く伸びるし、絶対零度近くでもそれが崩れないんだ。これが、魔理沙の欲しがつた星の欠片さ」

黒く煤けた破片の中から、銀色に丸まつた指先ほどの珠を拾い上げ、にとりは魔理沙の掌にそつと握らせ

た。

一見、大きな回り道のように思えても。無駄かもしれない努力を繰り返しても。星空を目指す普通の魔法使いの手にあるのは、きつとこんな形が相応しい。

満点の空の下、冷たい輝きを放つ星の欠片は。

まだいくらか太陽の輝きの熱を残し、魔法使いの手の上できらきらと輝いていた。

(了)

## 老いたる徴と風の分岐

「ねえ、メリー。知っている？ 博麗神社のこと」

「なあに？ これ。ずいぶんおんぼろな建物ね」

「大昔、結界を隔てる場所に建てられたっていう神社らしいのよ」

「へえ。……でも、そんなもの本当にあるのかしら？」

「本当にね。この時代に、そんなの眉唾よね」

——Greetings from the Edge of the Xanadu.



——もうおしまいだ！

なにがなんだか、わからない！

蟬の声も五月蠅いある夏の日のことだった。

神社の縁側で霊夢と一緒に溶けるように寝そべり、棒アイスを頬張っていたところへ汗だくになって駆け込んできたスキマ妖怪の式、八雲藍は、すっかり取り乱した様子でヒステリックにそう叫んだ。

それが、幻想郷崩壊のはじまりだった。

今更ながらに思い返してみれば、前兆みたいなものはかなり前からあったのかもしれない。あの、六十年に一度の結界騒ぎを最後に、もう長いこと異変らしい異変も起きていなかったし、新顔とも滅多に顔を合わ

せることもなかった。霊夢は相変わらずぐーたらで、パチュリーは喘息が治らないとこぼし、アリスは人形を弄り回してばかり。

図書館で借りた本を読み、たまに出かけ、森に茸を採りに行って、魔法の実験を繰り返して、夜には仲間を集めて宴会。喧嘩が起これば弾幕で白黒をつける。

私の日常は呆れるくらいいつも通りで、だからこそ私がそれを聞かされた時も、『ああ、そうなのか良かったな』と間拔けな顔をするくらいが精々だった。

たぶん、聡い何人かは気付いていて、それでも口には出さなかったのだろう。その頃には幻想郷の崩壊はもうどうしようもないくらいに進んでいて、解決どころか逃げる算段をするのも馬鹿馬鹿しいような状況だった。

騒動の発端となった——というよりは、既にもう手の尽くしようもないところまで進行していた事態を詳らかにしただけなのだから、発端というよりは最終告知みたいなものかもしれないけれど——藍も、ずっと

前からその聡い頭脳でそれを知っていたのだろうし、確信するよりもずっと昔から、兆候を覚っていたのだろう。

おそらく一人で直面し、それに耐え、悩み、解決のために奔走して、それでもなお全てが叶わないことを知り、ついにそんな暴挙に出てしまったに違いなかった。

それくらい、幻想郷の終焉は決定的で、絶対的で、無慈悲なまでに不可避のものだったのだ。

これが多分、妖怪の賢者八雲紫の消失だとか、楽園の巫女である霊夢の死（あいつはたとえどんな方法で殺したって死なないとは思うが、まあ言葉のアヤだ）衝撃的な事件から始まっていたのなら、この局面はもっと早いうちに発覚していたんだろうし、なにがしかの対処をすることも（覚悟を決めるとか、受け入れられずに泣き喚いて暴れるとか、自暴自棄になって諦めるとか）できただろう。

もしも。幻想郷の最後がこれまでに起きた数々の異

変や事件とは似ても似つかない、血腥く欲望に汚れ、寒々しい絶望に満ちたものだとして、少なくともそれが現実のものとなるまで、抗おうとする自由や時間は与えられていたんだろうと思う。

けれど私達にそんなものは全く残されていなかった。脈絡なく、理屈なく、理由もなく、ただ、幻想郷は終わっていったのだ。

幻想郷に訪れた終焉の正体とは、忘却だった。

表向きには何の異常もなく、ただある日、唐突に、最近誰かに会っていないなということに気付く。そして次にはそれがいつからなのか分からなくなっていることに、さらにはそいつがどんな奴だったのかも分からなくなっていることを思い出すのだ。

そして、それが一人だけじゃなく、ぞっとするほど大勢になっていることも。

後の紫の言葉を借りるなら、これは、永遠の幼年期の終わり。東の果ての楽園として作られた幻想郷が、もはや誰にも必要とされなくなつたために起きた事態

なのだそうだ。

幻想となつたものが流れ着く場所すら、外の世界は忘れ去ってしまった——ということらしい。

法則性があつたのかどうかは良く解らないが、私の場合、姿を消していったのは、それまで気にもかけていなかった者たちばかりだった。道で会つても挨拶どころか、そこにいたのかも分からないような——そんな連中から順番に、私の幻想郷は失われていった。

私がその事実気付いた時には、もうどうしようもないくらい、幻想郷はその姿を変えていた。

最初、私はそれを誰かの起こした異変だと考え（ごく自然な思考だ）、心当たりの在りそうな人妖を探して回ることにした。けれどそれはすべて徒労に終わり、結局、藍の言っていたことは正しかったのだと思ひ知ることになる。

もう、なにもかもおしまいだ、と。

この異常事態が明らかになった時。妖怪の賢者、八雲紫は早々に諸手を挙げ、幻想郷の終焉が近いこと、自分はそれに対抗するすべを持っていないこと、最後までただ傍観することを宣言した。

おそらくこの騒動に一番近しいはずの神隠しの主犯があつさりと関与を否定したことは、かえって周囲の疑念を招いた。最初に無実を主張する奴が真犯人なんて話はよくあることだし、仮にこの危機が事実であっても、おそらく八雲紫ならなにかの対策を取っているだろうという、半ば期待めいた願望もあつたことは否めない。かく言う私もその一人だった。

しかしそんな多くの連中も、やがて考えを改めざるを得なくなる。紫は自らの言葉通り、ついに最後まで何もせずに、終焉を受け入れていったからだ。

### 結局。

私達が何かできることなんて、在りはしなかったのだろう。忘れられてゆく者たちが、それを忘れようとしている者たちに声をかけることができるはずもなく、

幻想郷の崩壊は、どこまでも穏やかに、静かに、確実に進んでいった。

人里はあつさりと失われたが、阿求は案外しぶとく残っていた。誰にも読まれないかもしれないと自嘲しながら、幻想郷最後となる異変を天狗と一緒にまとめたりしていたのだから、案外と阿礼乙女が短命だなんてのは嘘っぱちかもしれない。

白玉楼の幽霊たちは、意外な事に失われることを恐れ、みっともないくらいに取り乱していた。死んでなお残るあいつらにとつて、未練というのがどれだけ大事なもののかを、私は知った。残念な事にその経験を生かす機会はない気がしたけれど。

聞いた話では、竹林の奥の永遠亭なんかはまだ、辛うじて形を保っているらしい。以前のそれとはまったく姿を変えているようだが、兎達は自分の住む居場所が残されていることに感謝しながら日々を送っているという。

やけに肝が座っていたのはレミリアたちで、消える

前に最後に会った時には、そろそろ引越そうと思っているなんて話をしてた。案外薄情なものだなと思いましたが、あいつらしいと言えそうなんだろう。

会えなくなる前にもう一度、一緒に呑もうぜと約束をして、結局その『次の機会』は一度もやってきていない。

そう言えば、霊夢もいつのまにか姿を消していた。

あいつのことだ、死んでいるとも思えないし、どうせどこかでのんびりとやっているんだろう。

前に、霊夢と今生の別れをすることになったら自分はどうするだろうと、いろいろ湿っぽいことを考えてみたことがあった(明日世界が減んだらどうなるとか、まあそんな感じの、夜、眠れないときなんかにしてみる乙女らしい想像だ)ものだが、いざ実際にそうなってみると案外、なんとも感情が浮かんてこない。

もう会うことはないのかもしれないが、仮に奇跡みたいなことが起きてそれが叶ったとして、たぶんいつものように挨拶をして、適当に駄弁って、お茶を飲んで

で、別れるのだろう。

どうも、自分で考えていたよりもずっと、あいつとの距離は特別だったらしい。

嘆く事もできないくらい、いつまで経ってもいつも通りなんて、なかなかない経験だろう。あいつは人との距離を測るのが致命的に下手くそで、信じられなくなるくらい上手かったから、たぶんどの時も同じように感じていたはずだった。

そして――私だ。

結局、失われたものがどうなっているのかよく解らないから、案外私もとくにどこかで失われてしまっていて、それに自分が気付いていないだけかもしれないし、そうでなくとも他の連中にしてみれば、失われているのは私のほうなのかもしれない。

けれどもまあ、とりあえず今日も朝は来るし、腹は減るくらいには今の私は平常運転だ。

箒の上から見下ろす幻想郷は、もう虫食いのようにぼろぼろで、在りし日の姿は窺うべくもない。辛うじ



が残っているのは人里と、おぼろげな地形くらいだ。気付けば箒の上から挨拶をする見知った顔もめつきり減って、出入りする図書館も、お茶に寄る同じ森の邸宅も失くして。

——ごっそりと消えてなくなった魔法の森からも追いついて、今、私は香霖のところに居付いている。

こんなご時世だつてのに相変わらず売れない道具屋を続けている盆暗な店主は、もともと客の来ない店からさらに客足が遠のいたとか、正気を疑われても仕方のないような冗談を言っていた。

けれど今は。

そんな、朴念仁なあいつの声を聞いていられるのが、少しばかり、ありがたく思えた。



朝の光、鳥の声。冷えた夜が陽射しに温まり、草木が梢を揺らして、吹き抜ける風を見送る。

僕の日々は呆れるくらいに穏やかで、それまでの日常とまるで変わっていない。

けれど、幻想郷がゆるやかな、そして決定的な終焉を迎えていることは間違いない、それを示すように来店する者たちの数も減っていた。

「……これで足りるかな」

「ええ。十分です」

肩上で揃えた髪を揺らし、ぺこりとお辞儀をして、阿求は注文の品——多くが紅茶、珈琲等の嗜好品だ——を受け取った。かつてこの店にこれらの品を求めるのは、人の身で広大な悪魔の館を一人で切り盛りする瀟洒な侍女長であつたはずだが、もはや湖の傍に放棄された紅い館にこれを求める者はいない。

一人で持つには少々多すぎるそれを、苦勞して持ち上げ、阿求はややおぼつかない足取りで椅子を立つ。難儀な事だねと労うと、彼女はわずかに微笑んだ。

「次はいつ来れるか分かりませんからね」  
はにかむようにもう一度礼を述べて、九代目の阿礼

乙女はよたよたと立ち上がる。いまや彼女は僕の店にとつての僅かな常連客の一人であり、幻想郷に残る少ない人間の一人である。

人里が機能しなくなつてなお、彼女は邸にひとり残り、日々出歩いては書をしたためているという。たまに彼女に随行する天狗の姿を見るので、まあ達者になっているのだらうなと思う。もう読む者もおらず、意味のない幻想郷縁起だが、その補填を書き綴ることに躊躇いはないようだ。

御阿礼の宿命か、義務感か、あるいは彼女自身が己に課した責務か。僕などはつい悲観的な想像をしてしまふのだが、彼女は存外そんな毎日を楽しんでいるようだった。案外と、彼女こそ自分の立つ場所に揺るがぬ価値を見出しているのかも知れない。

「そう言えば、あれはどうになりました？」

「またその話かい」

彼女の問いには苦い顔をするしかない。僕が随分前に書こうと思っていた本は、最初の数行を書き出した

ところで筆が止まつてしまっている。

ここを頻繁に訪れていた、紅白の巫女が姿を消して以来。

「新しく読める本も少なくなりましたしね。機会があればぜひ、目を通しておきたいのですよ」

「――善処しよう」

曖昧に口を濁した僕に、阿求はそれ以上を踏み込むこともなく微笑み、失礼しますとだけ告げて、店を出てゆく。

「――ん、誰か来てたのか、香霖？」

玄関で彼女を見送っていると、奥から、ぼさぼさの髪を揺らして魔理沙が顔を出す。

肌蹴た胸元に手を突っ込んでぼりぼりと搔き、大口開けての大欠伸。とろんと定まらぬ巨元を見るところ、また午睡でもしていたのだろう。服は袖と裾に大きく皺が寄っていた。僕が阿求の来訪を告げると、魔理沙はしかめっ面をして口をへの字に結ぶ。

「なんだ薄情な奴だな。挨拶くらいしてけばいいだろ

うに」

「彼女なりに氣を使つたんだろうさ」

實際、買物に來た店先ならともかくも、家の奥にまで上がり込んで寝ている相手を起こすまでの傍若無人は避けるものだろう。魔理沙基準ではそれが普通なのかもしれないが、それを彼女に要求するのは難しい。

「今更知らん中じゃないし、水臭いじゃないか」

「そんなに言うなら、君のほうから訪ねてやればいいんじゃないかな」

何気なく言つたつもりだったが、魔理沙は急に顔をしかめ、もごもごと口籠りながら、奥へ引つ込んでしまふ。

僕は何か拙いことを言つただろうかと首を捻るが、どうにも見当がつかなかった。



幻想郷の変貌と共に、多くの者達がその有り様を変

えていった中で、魔理沙もまた自分の居場所を変えていた。魔法の森が消え失せて、住まいを失つた彼女は、ほとんど着のみ着のままで僕の店に転がり込んできた。おそらく、いつもそんな調子なのだろうことを窺わせる強引さで店の裏手にあつた倉庫を占領し、僕の集めた商品をがらくたと言ひ張つて押しつけ、魔理沙は持ちこんだ布団と家具を並べ、自分の部屋にしてしまつた。

何度か出ていくように言つたが、聞き入れる様子もなかつたので、最終的に放置することに決めた。

「僕がこの店を持つにあたって、霧雨の親父さんから君を住まわせることはないようにと念を押されたのだけどね」

「へえ、親父も少しは見る目があつたんだな。ま、いままさら許可もへつたくれもないだろ。大人しく諦めろ、香霖」

魔理沙もそれを良いように解釈したらしい。

うちにきてしばらくは、店の一角に勝手に作り上げ

た自称工房で、茸を刻んだり煮詰めたり火を点けて火事を起こしかけたりと、忙しく日々を繰り返していたが——森がなくなつて以前のようになつてからは、八卦炉も卓の隅に埋もれて埃を被るばかりとなつてゐる。魔法の実験にも身が入らないと見えて、今では店の隅で日がな一日、ぼうつと空を見上げていることがほとんどだ。たまの来客があればいつも通りの様子であれこれと、年頃の少女らしいお喋りに花を咲かせるが——いまや魔理沙が訪ねていける先は、ほとんど残されてゐない。

彼女を相棒として空を自在に舞い飛んだ筈は、部屋の隅で蜘蛛の巣をかぶり、静かに朽ち始めていた。

トレードマークの三角帽と白黒の魔女服に袖を通す事もなくなり、今では人里に卸す予定だった若い娘向けの服を寝巻に愛用している。癖の強い金髪は和装とあまり相性が良くないようで、魔理沙は良くそれを嘆いていた。

「——またそんな恰好で、風邪をひくよ」  
「……………ん」

上の空で、窓の外を見上げる魔理沙の横顔は、かつての僕が知る普通の魔法使いのそれとは似ても似つかない。細かった手足がしなやかに伸び、襦袢の裾が乱れるのも気にしないその姿に、僕が誰かを重ねてしまつていたことに、たぶん、彼女も気付いてゐたのだろうと思う。

今にして思えば、一度、こうなる前に霧雨の親父さんのところには顔を出しておくべきだったのだろう。けれど、断りもなく魔理沙を居候させているという事実が、なんとなく僕の足を人里から遠ざけているうちに——いつしかそれも無理な話となつた。

恩人に別れを告げることもできなかった後悔の中で、僕は自分の不義理を恥じた。

疚しい気持ちがあつた訳ではないけれど、少なくとも心のどこかでは安堵してゐたことは確かだったから———そうか、親父が」

魔理沙はその報せを聞いても、特に取り乱す様子もなく、少なくとも表面上はいつも通りを貫いていた。

魔法の森に彼女が設けたあの古びた一軒家——魔理沙自身はよろず魔法事解決専門、霧雨魔法店と呼んで憚らないが——こそは、家を飛び出し魔法を修めることを誓った、霧雨魔理沙を形作る要素であつたはずだ。それが欠けた彼女は、かつての霧雨魔理沙ではない。霧雨家の令嬢として蝶よ花よと育てられていた彼女がもうどこにもいないように。普通の魔法使いだつた魔理沙も、もうこの幻想郷には居ないのかもしれない。

——否。

かもしれない、という曖昧な表現は避けねばならない。

僕の目は既に、霧雨魔理沙の『機能と用途』が、かつての普通の魔法使いだつた頃の彼女のものではなくなっていることを知っているのだ。

幻想郷は破綻した。

霧雨魔理沙は、弾幕に興じること、巫女に競つて

異変を解決することも、もうない。



梅雨に入つてすぐの、ある夜のことだつた。

空を分厚い雲が覆い、篠突く雨が窓を叩く中、不意に背中が物音がした。

立つのが億劫で、灯りを消したままの薄暗い部屋へ、押し開けられた裏口の戸から、雨交じりの冷たい風が吹き込んでくる。

籠っていた湿気が、雨の匂いに消されてゆく。

「魔理沙——」

傘も持たずに出かけていった彼女を案じて振り向こうとするよりも早く。

濡れた足音を響かせ、僕の背中にどすんと、小さな身体がぶつかってくる。

ばしやりと、水を吸つて型崩れした、余所行きのバッグが床に落ちる。背中にはじわりと広がる雨の感触。

「――神社、なくなつてたぜ」

「そうかい」

今さら驚くようなことではないだろう。主を欠き、結界の意味もなくし、あの神社が今もまだ形を保っていることのほうが、余程驚きだった。

「本当に、無くなつたんだな。店も、蔵も、親父の部屋も、爺様の離れも、」

小さく、緊張に息を強張らせる音が聞こえる。

濡れ鼠のまま、魔理沙は僕の背中から、腰に手をまわしてくる。

絶るように。乞うように。求める、ように。

「なあ、香霖」

雨に濡れた魔理沙の手は、酷く、熱を帯びていた。

「嫁さん、欲しくないか？」

それは長らく僕が考えたこともない問い掛けだった。半妖の自分にとって、伴侶を得るということは酷く非現実めいていて、まったく予想外の質問だったのだ。

昔、まだ自分が人と人でないものを区別できないくら

いに幼かった頃にはそんな願いを抱いたことがあったような気もする。

けれど、それはもう随分と前の事で、もうおぼろげな記憶にもなっていなかった。

「……………」

雨音が強まる。軒から滴る雫が雨甕を叩き、澄んだ音を響かせている。

開け放たれたままの裏戸から、雨はなお風と共に吹き込んで、提げたままの風鈴を五月蠅いほどに鳴らしていた。

僕が長いこと、返答に詰まっていると――やがて魔理沙はぐりぐりと背中に額を擦りつけてくる。少し力任せに握りしめられた指が、わずかに痛かった。

「――そうか、やっぱ、お前はそういう奴だよな」

どん、と。心持ち強めに、背中が叩かれる。

魔理沙の小さな拳が、何故だが強く、胸の芯に響いた。

僅かに震えた声を絞り出して、魔理沙はすぐに僕か

ら離れた。

「ちよつとした気の迷いだ、忘れてくれていいぜ」

照れ隠しのように笑っていたその目元が、何度も擦ったように赤くなっていたのが印象的だった。

それから、僕は濡れ鼠の魔理沙を風呂に押し込み、遅い夕食の用意を始めた。久々に腕を振るったつもりだったが、魔理沙は塩が多いだの、出汁の取り方が甘いだのと、散々に文句をつけた。

たぶん、僕は魔理沙を傷付けたのだろうけれど。

僕はそれに気付かないように振舞った。本心を偽るのは商売人の端くれとして慣れていたから、難しいことではなかった。



次の日から、魔理沙は急に忙しく動き始めた。

「よう、どうした香霖、遅いぜ」

まだ日も昇り切っていない時刻から、裏庭で物音が

するので覗いてみれば、久しぶりにあの、白黒の服に袖を通した魔理沙が、庭の隅に積み上げていた商品を――多く、ここを訪れた少女達はガラクタだと評したが――引っ掻き回していたのだ。

それは売り物だと僕が顔をしかめると、魔理沙は僅かに口元を緩め、スカートのポケットから何かを放り投げてみせる。

慌てて手にしたそれは、質の良い金の鉱石だった。

「売り物ならもう少し大事にしまっておけよ。このまま放つといて、私以外に買いに来るやつがいるのか？」  
取引成立だとはかり、魔理沙は再度作業に没頭し始める。

巾着一袋の鉱石では代金には少々不足していたが、僕はそれを黙っていることにした。

僕が魔理沙を傷付けたことは間違いなく、てつきり塞ぎこむと思っていただけに、拍子抜けしたことは否めない。魔理沙はそんな僕の驚きを敏感に覚ったらしい。

「乙女心は複雑なんだぜ。色々とな」

白い歯を覗かせる彼女を見て、僕はもう何も言うまいと決めていた。

——何事にも突然ではあるけれど、そうやって決心を決めた後の魔理沙の行動は早い。

かつて彼女が実家を飛び出し、魔法の森に棲みかを定めた時のように。

それまで毎日ごろごろと怠け、呆けていたのが嘘のように、魔理沙は寝る間を惜しんで作業に没頭し始めた。

とても一朝一夕で実行に移せるような類のものではなく、もうずっと前から——おそらく、僕の店に居付くよりも前から、思案し続けていたことに違いなかった。

魔理沙がまず目を留めたのが、雨曝しになっていた緑の屋根の乗用車だ。

僕が文献で読む蒸気自動車とは違い、ガソリンという揮発燃料を燃やして走る車だというのが——魔理

沙はそれを引っ張り出して、危なっかしい手つきで解体を始めたのだ。機械いじりのイロハは前に本で読んだというが、ボロボロのノートを傍らに、危なっかしく工具を握り導線を繋ぎ合せる様はどうにも心許ない。油で汚れた手袋で鼻を擦り、なんども導線を千切っては繋ぎ直し、真剣な顔で調整を繰り返す。何かが強く擦れるような音がするので様子を見に行けば、電線をショートさせて目を回している彼女の姿を見つけることも一度や二度ではなかった。

「夕飯、冷めてしまうよ」

「んー？ ああ、置いといてくれ。後で食う」

店を閉める僕にも、声だけでそう答えて、魔理沙は飽きることなく、作業を続けていた。深夜まで及ぶことなどざらで、二日三日続けるの徹夜も少なくない。

たまに顔を挙げたかと思えば、

「香霖、これからちよっと出かけてくるから、飯は要らんぜ。たぶん朝までには戻る」

雨が降っていいようが構わずに、言うなり店を飛び出



してゆく。店に住むようになってからは蜘蛛が巣をかけるくらいしか役に立っていなかった愛用の箒を引っ張り出し、曇天の空へ飛び立ち——そのまま次の日。夕焼けの空を背に、時には真夜中になるまで帰ってこないような事も増えた。

そういう時、彼女はきまつて大荷物を抱えていた。たまに疲れきった様子で手ぶらに戻り、倒れ込むように軒をかき始めることもあった。

恐らく心当たりのある場所へ、資材の調達に行っていたのだろう。それをした次の日から数日は朝から晩まで裏庭で油にまみれて機械いじりをするのがほとんどだった。

やがて、彼女の作業場所はいよいよ広い場所を占め、店の裏庭から表へと移り、そこに鉄骨と針金を組み合わせた奇矯な芸術作品を組み上げてゆくにいたった。

これでは客足が遠のくと言った僕に、

「嘘つけ、元々寂れ放題だったじゃないか」

魔理沙は悪びれもせずそう答えた。

水捌けの悪い雨の日は庭が水浸しになるので、古いビニールシートを出して屋根を作り、その上に魔法をかけたシダの葉を乗せて雨よけにする。

細い糸のような鋼線を背の高い木の間に張り巡らせ、絡めつけては巻き尺を広げて長さを、磁石で方角を確認し、伸ばした色とりどりのコードを機械に繋いでゆく。

危なっかしい手付きだったはんだ付けはそのうち堂に入ったものになり、手帳を見て頭を抱え込んだり、上手くないことに文句を並べることも少なくなってきた。

いなくなつた相手に愚痴をぶつけるよりも、彼女には試行錯誤をしている方が性に合っているのかもしれない。

魔理沙がしているこれは、彼女の魔法と同じものだ。ずっと魔理沙は一人で、こうして自分だけの魔法を積み上げてきたのだろう。それを全て放り捨て、けれど魔理沙はやはり魔理沙のままだった。霧雨魔理沙の

根っこは揺らぐものではなく、ずっとあの魔法の森に根付いていたのだ。

その様を、かつての彼女は決して外に見せようとはしなかった。誰よりも諦め悪く、足掻く様を見せることを由としていなかった。僕をその例外としてくれた理由は、形振り構っている余裕がないためか、今更取り繕っても仕方がないと思っているのか、あるいは――

いや、よそう。僕にそれを論じる資格は、もう無いのだ。

魔理沙は一度も僕に手伝えとは言わず、僕も一度も彼女を手伝おうとは言わずにいた。

それでも、朝夕の食事だけは、一緒に過ごした。



「――できた!!」

夏も近い、七月の初めの日。

久方ぶりの明るい声に、僕は見聞していた茶器を片づけ、店の裏口から外へ出る。

そこにはますます複雑に、巨大になった魔理沙謹製のがらくたがあつた。

金属と材木を組み合わせたフレームには、まるで帆のように大きく空に広げた白い布が縫い止められている。蛇のようなコードがそこらじゅうを埋め尽くし、むっとするほどの熱気を上げる。あちこちでは見たことのない計器が針を動かし、ちかちかとランプを点滅させていた。

低く獣が唸るような重低音が途切れることなく続き、菜種油を精製した燃料を燃やして黒い煙を上げる発電機が、うるさいほどに鳴り響いている。

本当は、僕には分かっていた。魔理沙が裏庭で何を始めたのか。何をしようとしていたのか、何を作ろうとしていたのか。勿論、彼女が弄り続けていたガラクタの山は、道具の体など成していなくて、機能などありはしなかったが。

だからその日は、全くの驚きだった。——偶然か、奇跡か、あるいは彼女の愚直なまでの努力の積み重ねが、ついに実を結んだのか。

僕の目にも分かるくらい明瞭に、魔理沙が裏庭に組み上げた『それ』がその用途を示したのを、僕は理解していた。

僕の様子に気づいて、魔理沙も笑った。煤けた顔を拭い、裏庭に組み上げられた、鉄骨と針金を組み合わせた基盤とコードの塊の中からずると黒い箱を引きずり出して、いくつものスイッチやダイヤルを弄りはじめる。

乗用車のスピーカーが、砂の擦れるようなノイズをあげ、きんきんと甲高い音を響かせる。五月蠅そうに耳を塞いだ魔理沙が乱暴に筐体を叩くと、雨音のように続いていた騒音が、一瞬だけ途切れ、ぷつ、と静音が聞こえる。

「……………」

一度だけ僕の方を見てから、魔理沙はマイクを手

に取る。固い唾を飲むと、彼女はいつもの調子でこう言った。



「ハロー、ハロー、こちら幻想郷。  
……まだ生きてるやつ、いるか？」

「——なんだ、  
そっ—toにいたのか。」

## くろがねの星乙女

初出: 東方紅樓夢 9.5 遠野物語  
夢の世紀 魅知の旅(2014/3/2)

草枕文庫さんに委託頒布させて頂いた一冊。開催地が遠野ということもあり、河童を絡めて書くこと、宮沢賢治の銀河鉄道の夜から星のイメージ、また宮沢賢治が土中から出土する植物バクテリア由来の褐鉄鉱（高師小僧）を収集していたというあたりを拾い上げて、純鉄を作るお話になりました。

作中でにとりが使っているのはテルミット反応ですが、実際にこれを使って製鉄をしようとした研究はあったそうです。コストの問題に着目されないまま設備が設計され大規模に実施されそうになり、大量に資源を無駄遣いするその直前で慌てて中止になったとか。

## 老いたる徴と風の分岐

初出: 恋のまほうは魔理沙におまかせ！ 4 (2012/7/1)

いわゆる幻想郷滅亡もの。花映塚&文花帖以降、3年ほど作品展開が止まり、風神録の発表と共に作品設定の一新が行われるのではないかと囁かれていたころ、自分が東方を知った頃にあったリセットに対する界限の動揺のような雰囲気を感じたお話です。

風神録において、守矢神社という新たな風によって広がりを見せることになった幻想郷と、それを見定めていたのが「風見」幽香ではなかったのかというのはいまも思うところであり、いずれまた形にしてみたい話でもあります。そのような経緯から総集編上巻のラストとしてみました。

【奥付】

「折葉坂三番地総集編  
折葉坂の幻燈館・上」

初版 平成27年8月14日 C88

オルハザカサンパンチ  
発行 折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

あかがねおりは  
著者: 銅 折葉

表紙: YT様(@YT\_)

pixiv\_id=2746649

印刷所: (株)ポプルス様

※本作は「上海アリス幻楽団」様の  
「東方 project」の二次創作です。





著：銅折葉／折葉坂三番地  
<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>

表紙：YT様 (@YT\_\_ )  
<http://www.pixiv.net/member.php?id=2746649>